

多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財調査報告書 第2集

今井三騎堂遺跡

— 旧石器時代編 —

2004

群 馬 県 企 業 局
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

今井三騎堂遺跡－旧石器時代編－正誤表

Ⅲ－1 黒曜石の産地分析(439～444頁)

誤	正	誤	正
第24図	第15図	第39図	第30図
第25図	第16図	第40図	第31図
第26図	第17図	第41図	第32図
第27図	第18図	第42図	第33図
第28図	第19図	第43図	第34図
第29図	第20図	第44図	第35図
第30図	第21図	第45図	第36図
第31図	第22図	第46図	第37図
第32図	第23図	第47図	第38図
第33図	第24図	第48図	第39図
第34図	第25図	第50図	第41図
第35図	第26図	第51図	第42図
第36図	第27図	第121図	第117図
第37図	第28図	第123図	第119図
第38図	第29図	第126図	第122図

多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財調査報告書 第2集

今井三騎堂遺跡

— 旧石器時代編 —

2004

群 馬 県 企 業 局
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



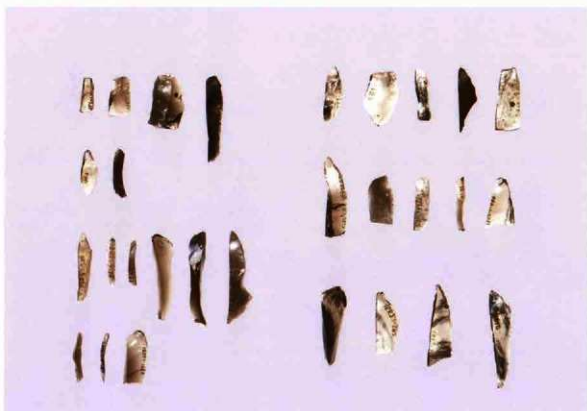
第II文化層 第1地点出土の石器 (1)



第II文化層 第1地点出土の石器 (2)



第II文化層 第1地点出土の石器 (3)



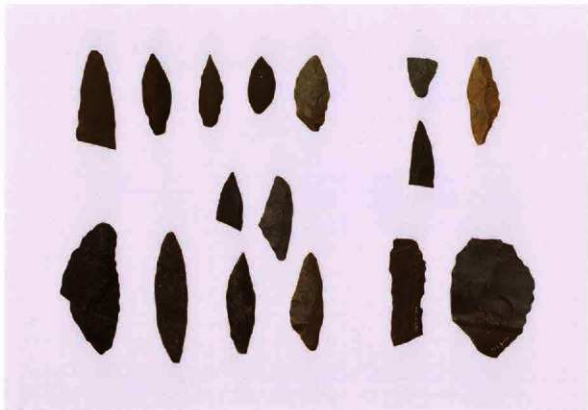
第II文化層 第1地点出土の石器 (4)



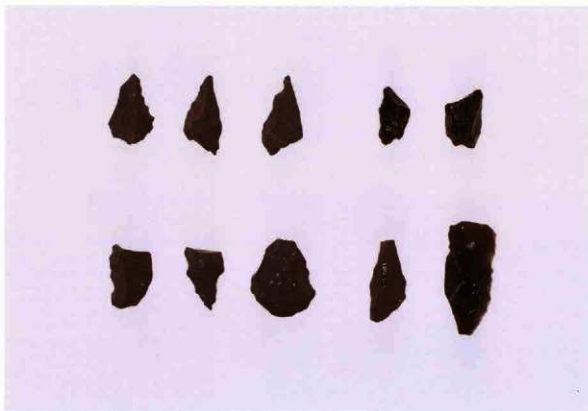
第II文化層 第1地点出土の石器 (5)



第II文化層 第1地点出土の接合資料



第II文化層 第2地点出土の石器



第III文化層出土の石器



第IV文化層出土の石器



第IV文化層 第29地点出土の接合資料



第IV文化層 A地点出土の石器



第IV文化層 C地点出土の石器

序

多田山遺跡群は、群馬県企業局による多田山丘陵開発事業に先立ち発掘調査されました。平成9年度から12年度にかけて当事業団により実施された発掘調査では、後期旧石器時代から江戸時代に至る各種遺構・遺物が累々と発見され、歴史的にも極めて重要な遺跡であることが判明しました。

旧石器時代の石器分布は多田山丘陵の全域に及びましたが、本書には県道前橋・今井線以北の今井三騎堂遺跡から出土したものに限りて報告しました。今井三騎堂遺跡では4期の旧石器文化層が発見され、7000点近い石器が出土しました。それぞれの旧石器文化層が貴重なものであったということはいうまでもないところですが、とりわけ第Ⅱ文化層として報告した石器群は本州の槍先形尖頭器文化期を代表する石器群となりました。

今井三騎堂遺跡の旧石器石器群は、遊動社会に生きた人々の生活ぶりを解明する上で貴重な資料となりましょう。

発掘調査から報告書作成に至るまで、群馬県企業局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、赤堀町教育委員会、地元関係者の方々には種々、ご指導、ご協力を賜りました。報告書の上梓に際し、関係者の皆様に心から感謝申し上げるとともに、併せて本書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い、序とします。

平成16年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は、多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した今井三騎堂遺跡（旧石器時代編）の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査では、調査対象地全域から旧石器時代石器群が出土している。本書では、このうち県道前橋一赤堀線より北側に出土した旧石器を報告する。調査に至る経緯・経過については、本事業報告書第1集「多田山古墳群 今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡」を参照されたい。
3. 遺跡の所在地は下記のとおりである。

今井三騎堂遺跡 群馬県前橋市東大室町ほか
群馬県佐波郡赤堀町今井ほか
4. 事業主体 群馬県企業局（経費については群馬県企業局と一部を群馬県土木部が負担した）
5. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 平成10年4月～平成11年10月
7. 調査組織 事務担当 小野宇三郎・菅野 清・赤山容造・住谷 進・渡辺 健・神保侑史・水田 稔・坂本敏夫・能登 健・真下高幸・右島和夫・西田健彦・小山建夫・笠原英樹・国定 均・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・岡嶋伸昌・宮崎忠司
調査担当 石坂 茂・斎藤和之・井上哲男・坂口 一・小野和之・大西雅広・須田正久・関 俊明・深沢敦仁・松原孝志・松島久仁治・石田 真・田中 雄・佐藤理重・小保方香里・原 真
8. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
9. 整理期間 平成12年4月～平成15年3月
10. 整理組織 事務担当 小野宇三郎・吉田 豊・神保侑史・赤山容造・萩原利通・住谷 進・水田 稔・能登 健・植原恒夫・真下高幸・右島和夫・西田健彦・小山建夫・笠原英樹・国定 均・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・田中健一・片岡徳雄
整理担当 岩崎泰一
吉原清乃・関 正江・神谷みや子・新平美津子・南雲富子・飯田和子・柳澤有里子・木暮芳枝
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一・土橋まり子・小材浩一・高橋切美
11. 本書の作成に際して、以下に分析・業務を委託した。

石器の石材同定……………飯島静男氏 黒曜石の原産地分析……………第四紀地質研究所
テフラ・植物珪酸体分析……………古環境研究所 石器トレース・分布図作成……………技研測量設計
12. 本書の作成に際しては、群馬県企業局・前橋市教育委員会・赤堀町教育委員会・地権者・地元関係者の方々の多大な協力及び支援をいただいた。また、調査に従事された発掘補助員の方々には酷暑・酷暑の中、大変ご苦労をいただいた。ここに記して感謝を申し上げます。
13. 調査資料は、一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡 例

- 本文中に使用した方位は、総て国家座標（2002.4改正前の日本測地系）の北を使用している。
- 本文中には、基本的に地点毎に全体図を掲載した。各地点の石器実測図・ブロック図については、本文の後に地点毎に掲載した。

全体図	1/100、1/200、1/250、1/500
炭化物集中部	1/80
石器平面分布図（ブロック）	1/80、1/100、1/150
石器垂直分布図（ブロック）	1/80、1/100
接合資料分布図	1/40、1/80、1/100、1/200、1/250、1/300
器種別分布図	1/200
石材別分布図	1/100、1/160、1/200、1/250
疎群	1/40、1/80
その他の分布図	1/250

- 石器実測図は以下の縮尺を基本に掲載した。なお、削片等の小形石器・接合資料については、その都度縮尺を変え掲載しているので、図版中のスケールを参照されたい。

旧石器時代・単独石器	4/5
旧石器時代・接合資料	1/2

- 旧石器時代の遺物分布図に使用したマークは、以下の器種を示している。

▲ 尖頭器	◆ ナイフ形石器	□ 削器	■ 搔器	* 加工痕ある削片
△ 角錐状石器	◇ 台形椽石器	▲ 彫器	◊ 削片	* 使用痕ある削片
▽ 縦長削片	▼ 石核	▪ 剥片	・ 砕片	• 局部磨製石斧
* 蔽石	○ 礫器			

- 遺物写真図版は、基本的に実測図の順に掲載した。実測図と対照できるように挿図番号を図版右下に付したので参照されたい。

目 次

序
例 言
凡 例
抄 録

I 遺跡と調査の概要

1. 遺跡の立地 3
2. 調査の方法 5
3. 基本土層 5
4. 周辺遺跡 7

II 調査の成果

1. 第I文化層 11
2. 第II文化層
(1) 第1地点 13
(2) 第2地点 27
(3) 第3地点 41
(4) 第4地点 42
(5) 第5地点 42
(6) 第6地点 46
(7) 炭化物集中地点 47
(8) その他の石器 48

3. 第III文化層

- (1) 第1地点 134
- (2) 第2地点 140
- (3) 第3地点 142
- (4) 第4地点 142
- (5) 第5地点 144

4. 第IV文化層

- (1) A地点 160
- (2) B地点 177
- (3) C地点 189
- (4) その他の地点 203

III 自然科学分析

1. 黒曜石の産地分析 436
2. 火山灰分析 456
3. 植物珪酸体分析 462

IV 小 結

- 黒曜石製石器群について 467

計測値一覧表

報告書抄録

ふりがな	いまいさんきどういせき
書名	今井三騎堂遺跡（旧石器時代編）
副書名	多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第2集
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第325集
編著者名	岩崎泰一
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-0061 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年	2004年2月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺 跡					
いまいさんきどう 今井三騎堂	まえばし、しりがひ、あかぬま 前橋市東大室 あかぬま、あかぬま 赤通町今井	10210 10461	00516	36°22'54"	139°12'30"	19980401 5 19991031	131,750m ²	団地造成

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
今井三騎堂	包蔵地	旧石器時代 第I文化層		削器1・縦長剥片1・剥片1	As-YP下
		旧石器時代 第II文化層	ブロック 16 礫群 15	尖頭器・ナイフ・彫器・搔器 ほか	As-SP 降下前後
		旧石器時代 第III文化層	ブロック 8 礫群 4	ナイフ・角錐・削器・石刃ほ か	As-BP下
		旧石器時代 第IV文化層	ブロック 74 礫群 1 配石 3	ナイフ・台形椽石器・削器・ 局部磨製石斧ほか	AT下

今井三騎堂遺跡



国土地理院5000分の1 (大胡)

I 調査と遺跡の概要

1. 遺跡の立地

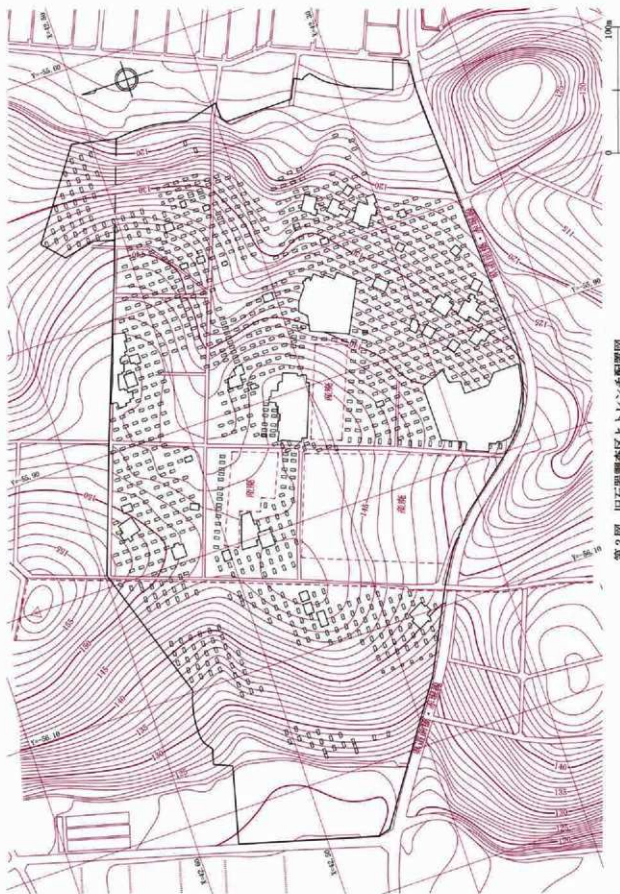
広大な裾野が広がる赤城山は、標高500m付近で地形が大きく変換、山岳地形から丘陵性の台地地形に移行する。山麓は大小の河川、及び、湧水が浸食し、深く狭い谷を形成している。山麓の北側や西側では広い丘陵性台地が、南側で「馬の背」状を呈する狭い丘陵性台地が展開している。

赤城火山の地形発達には3期に区分が可能で、活動の開始時期は40～50万年まえまで遡る。赤城特有の広大な裾野は、第2期（新期成層火山形成期、約20万年まえ）の火砕流に由来しており、この火砕流堆積物が山麓端部の「流れ山」を形成したのである。遺跡が立地する多田山丘陵はそうした「流れ山」のひとつであり、その存在は遠方からでも比較的容易に分かる。



第1図 遺跡と区の名義

I 調査と遺跡の概要



第2図 旧石器調査区とトレンチ配置図

南北に2kmほど続く多田山丘陵は起伏に富み、最も高い所で標高159mを、低い所で128mを測り、水田面とは20～40mの比高差を有する。丘陵傾斜は西側より東側で緩く、丘陵の奥深く浅い谷が入り込んでおり、複雑な地形観を呈している。

今回、報告する今井三騎堂遺跡の旧石器は、台地の中央部分については不明（産業廃棄物の廃棄で旧石器の有無については確認できない）だが、概して台地東側の斜面部に多く出土、台地西側の斜面には少ない、という傾向を示していた。

2. 調査の方法

県道を挟み所在する今井見切塚遺跡では、平成9年度の調査で丘陵性台地の頂部から多量の旧石器が出土、注目を集めた。同じ台地上に立地する本遺跡でも、当該期石器群の存在が予想され、その有無について確認する必要が生じた。試掘調査は上層の遺構調査を終了したのち行い、石器群を確認次第、拡張・本調査を実施する方法を採用した。試掘調査は4グリッドに1ヶ所（12.5%）の割合で2m×4mのトレンチを設定、台地の西側から東側へ（1区から2区……の順に、第1・2図を参照）確認作業を進めた。傾斜の急な台地の斜面部や埋没谷など試掘調査を省略した地点を除き、各地点で旧石器の出土を確認—最終的には50ヶ所を超えた—関係部局と調査工程・工事工程等の調整を行い、調査を進めた。出土した旧石器は6000点を超え、4期からなる文化層の存在が判明した。

出土した石器には地点毎に1から順に番号を与え取り上げ、調査区が広範な場合に限り、任意の集中地点に分け、各々に1から番号を与えた。予想以上に旧石器の出土地点が広がり、途中から光波測量に変えて対応した。当初、平板測量して取り上げた石器についても後日デジタル化を行い、整理作業に備えた。

3. 基本土層

調査区内には上層の遺構確認段階から1トンを超えるような巨大な礫が顔を見せていた。写真は調査終了後の掘削工事で姿を現した丘陵の断面だが、現地形とは大きく異なる基盤の様相が見て取れた。基盤が大きく窪む部分には厚くローム層が堆積、専門家の現地踏査の所見では10万年を前する時期のテフラが堆積していたということである。上述した巨礫は多田山丘陵の基盤を形成した火砕流に起源したものが、地形発達過程で転落、移動した可能性が強い。

多田山丘陵の地形発達の詳細は不明だが、丘陵の斜面部などではX層より上のローム層の堆積が全般的に不安定で、ローム層の部分的流出や攪拌を想定するべき状況を示していた。また、同じ地点でも、ロームの堆積状態（XII層が細分可能な地点と細分できない地点が存在。例えば、第IV文化層・C地点など）が異なるなど複雑な様相を呈していた。

第3図には、比較的平坦な3地点（第II文化層・第2地点東端、FQ-179G）、及び、東側丘陵斜面（第IV文化層・C地点西端、FF-141G）のローム層の堆積状況を図示した。

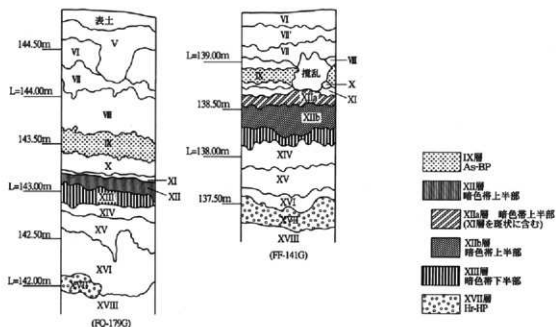
I層 表土層

V層 暗黄褐色土（風化・土壌化が進み、やや砂質。縄文包含層）



多田山丘陵の断面（下位の白く見えるのが火砕流堆積物）

I 調査と遺跡の概要



第3図 基本土層

- VI層 黄褐色硬質ローム層 (As-YP を含む)
- VII層 黄褐色硬質ローム層 (As-Ok1 を含む)
- VIII層 黄褐色硬質ローム層 (As-Ok1 を少し含む)
- IX層 黄褐色硬質ローム層 (As-BP を塊状に含む、パミスは攪拌状態を示す場合が多い)
- X層 褐色硬質ローム層 (パミスは含まない、10YR4/6)
- XI層 褐色軟質ローム層 (10YR4/6)
- XII層 暗灰褐色ローム層 (暗色帯上半部、下層に比べてやや明るく軟質、堆積が良好な地点では細分が可能—XI層を斑状に取り込む割合の差で細分—、10YR4/4)
- XIII層 黒灰褐色ローム層 (暗色帯下半部、より硬質、小礫を微量混入、10YR5/4)
- XIV層 暗黄褐色ローム層 (XIII層の漸移層、小礫を微量混入、10YR5/4)
- XV層 暗黄褐色ローム層 (XIV層より粘性が強い、小礫微量混入、10YR5/3)
- XVI層 暗黄褐色ローム層 (HP 混入の量比で2層に細分、10YR5/3)
- XVII層 Hr-HP (八崎軽石層)
- XVIII層 暗褐色ローム層 (粘性に富み、下層の礫を

多量に混入)

XIX層 礫層 (基礎)

現場では、専門家を呼び協議した上でローム層を分け、石器群の層位的な把握を試みた。赤城南麓の標準的なロームを念頭に分層したため、VII層とVIII層が分離できない地点が大部分を占めたこと、斜面部などではロームの堆積が不安定で標準的な堆積状態が見られないこと、などから現場では若干混乱したかもしれない。

VII層 (As-BP と Ok1 の間層) は、赤城南麓でも余程条件に恵まれない限り確認は難しいため、途中から無理には分離せずVII・VIII層と一括して捉えたようである。また、XI・XII層の分層、XII層の細分にも問題が生じている。具体的にはATの降灰層率認定に関する問題 (III火山灰分析を参照) だが、地点によりATのピークが異なる原因を見極める必要がある。

遺跡が広範に及び地形も複雑であるということ考えたなら、あくまでも考古的手法に従いローム層を分けた後に、比較検討すべきであったろう、と考えている。

4. 周辺遺跡

昭和40年代の前半、赤城山南麓は旧石器遺跡の密集地帯として全国的に著名であった。当時最新の研究成果を盛り込んだ『日本の考古学1 先土器時代』（昭和40年）には、群馬県下の旧石器遺跡47ヶ所を所収していた。巻末の旧石器遺跡は遺跡を厳選して掲載したのであろうから、これ以外にも相当数の旧石器遺跡が知られていたであろう。また、そこには旧石器保管者も記載しているが、県内発見の旧石器は東毛考古学研究所の所蔵となっており、研究者や大学の研究室・博物館が旧石器を保管していた他県の状況とは対照的であった。

長く停滞していた県内の旧石器研究は、昭和50年代後半以後、徐々に県内の埋蔵文化財調査の体制が整う中で復活した。図示した旧石器遺跡（第4図）も50年代後半以後の調査成果が多い。

赤城山南麓、特に、大規模開発の多い標高100m付近では、試掘して旧石器が当たらない遺跡はないというほど濃密に旧石器遺跡が分布している。網羅的に試掘を行うようになった柏川以西の上武道路（国道17号線バイパス）の発掘調査では大小さまざまな旧石器遺跡（24～33）の発見が相次いだ。平成11年からローム台地の発掘に着手した北関東自動車（12～14・16・18・29・30）でも旧石器遺跡の発見状況は同様で「縄文時代前期遺跡の発見状況と全く変わらない」というのが、この地域の旧石器調査を通じて得た実感である。遺跡立地についても同様で縄文前期の遺跡に重複・立地しており、そうした遺跡では旧石器を念頭に置いて調査する必要が生じている。以下、旧石器遺跡の立地と分布について、若干の私見を記していきたい。

赤城山南麓の地形は、3分して捉えることが可能である。1つは標高500m以上の山岳地形、1つは標高200m前後の丘陵地形、もう1つは標高100m以下の低平な台地地形であり、標高が下がるほど台地と谷の比高差は減少する。ここ20年来つづいた圃場整備事業や住宅団地の造成によって、南麓の地形も大

きく変わってしまい、地形図のみから微地形を復元・理解するのは困難になってきているが、南麓では沖積地を水田に、台地を畑地に利用するというのが一般的傾向である。南麓の遺跡分布は上述した地形観を前提に理解するのが妥当だが、旧石器遺跡の立地（第4図）を考えるうえでは、赤城山の地形発達一特に、10万年まえから現在に至る（第3期）一の詳細な理解が重要と考えている。

赤城山南麓に広がる新日ささまざまな規模の扇状地は、複雑に重なり独特な地形観（長大な裾野を形成）を呈している。この地域の扇状地地形は火砕砕が二次堆積したものだが、南西麓の「白川扇状地」や大胡付近の扇状地（大胡火砕砕、約5万年前）が典型的で、規模も大きい。上記扇状地は「更新世」の所産だが、南麓にはその形成時期が「完新世」に下る扇状地も存在している。柏川村「大前田」付近や前橋市の荒砥地区に広がる扇状地がそれである。厚く扇状地堆積物が堆積しているため扇状地形形成前の遺跡分布については不明とせざるを得ないが、旧石器遺跡の分布論的考察を行う際には地形的な制約事項として認識すべきだろう。宮城村大前田付近に広がる扇状地は「柏川扇状地」と呼ばれ、標高350m付近を扇頂部に上毛鉄沿線（標高180m）まで広がっている。扇状地堆積物は厚く、これまでの発掘調査で下層のローム層を確認したということがない。この柏川扇状地の形成年代については現在なお不明だが、これまでえられた遺跡の詳細分布や調査発掘成果を踏まえれば、縄文・中期より新しくなるということはない。前橋市荒砥地区の扇状地についても、その形成時期は縄文時代前期より新しくはならない。その供給河川は荒砥川だろうという話も聞いているが、個人的には東神沢川ではないかと考えている。

上述した南麓の地形発達は、自然環境が影響した点で火山災害や気候変動と同レベルで語られるべきものだが、遺跡分布を考える上では前提条件として認知すべきものである。群馬県内旧石器遺跡の動向についてはこれまで余り纏まったものではなく、補足的に集落規模と遺跡立地、遺跡と火山災害といった

1 調査と遺跡の概要

面から言及されることが多かったようである。具体的には、環状ブロック群は広い平坦台地に立地する、或は、浅間火山の活動で環境が悪化した結果、人口が南関東へ流出した等の見解である。これらとの問題については深く立ち入る余裕もなく、旧石器調査の地域間格差等の問題もあるので、ここでは時間的・空間的観点に絞り、旧石器遺跡の分布論的諸問題について若干指摘しておきたい。

遺跡を概観してまず第1に感じるのは、標高500mの地形変換点に近づくほど遺跡分布の実態が不明になる点である。特に、AT降下以前の遺跡分布が不明瞭で、旧石器調査に精力的に取り組んだ宮城村でもAT下の調査には至らず転石を含んだ暗色帯を確認した程度(市ノ関前田遺跡 68)で、暗色帯出土石器群について検討可能な状況にはない。これより標高の低い粕川村の状況も同様だが、粕川扇状地の両側には良好な丘陵性台地が展開しており、地形的には旧石器遺跡が存在した可能性が高い、と考えている。厚く堆積した扇状地堆積物からみて相当に低い旧地形が想定され、この扇状地堆積物の下に遺跡が埋没している可能性を考慮する必要があるだろう。比較的標高の高い長野県野尻湖周辺域でも大形獣を狙った遺跡が存在したことからみて、扇状地堆積物を取り除いた粕川村の深い谷にも、野尻湖と同様に大型獣が生息した可能性も否定できないだろうし、それらの動向を探る遺跡があったということも全く否定できないのではないだろうか。

第2の特徴は、広い台地に立地するからといって遺跡規模が大きいわけではない、ということである。北関東自動車道や上武道路の旧石器遺跡では、通常規模の遺跡もあれば、数点しか石器が出ない遺跡もあり、遺跡規模はさまざまであるということが判明している。同様に、湧水も遺跡立地の絶対的な条件にはならない、と考えている。水は居住地を構える際の重要な条件だが、南麓には河川や湧水が豊富で、上述した選地条件に合った居住適地にはことかかない。この点は武蔵野台地の立地条件とは大きく異なっている。武蔵野台地は多摩川起源の扇状地であ

り、下流域に比べて上流域は浸食が弱い。水場に接した場所に居住地を構えるということを前提に考えるなら、浸食の進んだ台地末端(下流域)には居住適地が豊富だが、上流域や中流域には居住適地が河川流域しかないということになる。したがって、重層遺跡は上・中流域に多く下流域には少ない、ということになるはずであり、また実際そうなっている。湧水を抱えた鈴木遺跡は膨大な量の石器と文化層が重複するので有名だが、居住適地が限られるということも、大きく原因しているであろう。

群馬県内で湧水を抱えた旧石器遺跡の調査例と言えば、北関東自動車道、及び、その関連事業で調査した舞台遺跡(13)や三和工業団地遺跡(12)が該当する。地形的には大間々扇状地のI面(桐原面、変流以前の渡良瀬川が形成)に立地する遺跡だが、扇状地は南麓に接していること、低平な台地に立地するなどしており、条件的には南麓末端に分布する旧石器遺跡と同一視してさしつかえない。上記遺跡は湧水(男井戸・掛合湧水)を抱えており、7地点(10~16)で旧石器を確認、AT下から細石刃石器群まで各期の石器群が出土している。整理上で詳細は不明だが、各期の石器群は大小さまざまであり、基本的に石器群は重複分布することなく出土しており、居住地選択の際には水場を優先したというような状況にはない。

各期の遺跡分布については、傾向といったものは現状では特に指摘できないが、近年グリーンランド水床コアの研究が進み、より詳細な地球規模の気候変動が明らかになり、更新世末の遺跡動向がシンボジウム等で積極的に取り上げられるようになった。利根川流域の「北方系細石刃石器群」がそれである。環境変動に伴って、サケ・マス資源を追い北から古利根川以北の関東地方に進出したというのが、その典型的な論旨である。新潟県荒屋遺跡では多量の焼土と激しく重複した壑穴遺構を確認しており、貯蔵を前提にしたサケ類の燻製作業を想定する研究者も多い。遺跡が河川(信濃川と魚野川)の合流点に立地するということも内陸漁業を支持する要因の1つ

となっている。この種の細石刃が利根川以北の関東地方に分布するという点については、単純な集団移動か季節的移動か、移動形態については不明だが、気候が寒冷化したに伴う北方集団の南下と捉えている。近年では、石器石材の運用状況を含む行動論的観点から解釈を試みる研究も多い。以上が北方系細石刃石器群に関する評価だが、関東地方の北方系「細石刃石器群」を出土する遺跡は水量の乏しい小河川を控えた台地に立地しており、河川規模は産卵地点より上流の河川と表現するしかない。使用石材や石器・石核の搬入形態・遺跡立地から推定する現在の仮説は、基本的には「再寒冷化」=サク・マスの南下という図式に立脚しているであろう。

更新世・終末期の気候変動が列島に与えた影響は少なくなかったろうが、県内遺跡の動向を議論する際には火山活動に伴う地域的・局地的な影響を考慮すべきだろう。具体的には浅間山の火山活動ということになるが、これに原因して北関東から南関東に人口が流出したのではないかという意見がある。県内旧石器遺跡に関して言えば「利根川以東に比べて、利根川以西の遺跡が減少する」ということらしい。以下には、この点について分布論的観点から検討を加えていきたい。

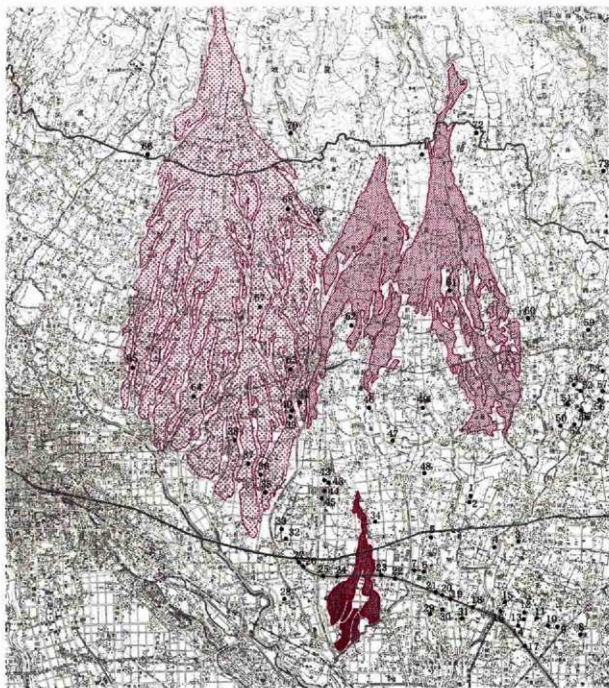
上信越道の発掘調査で確認した旧石器はAT下の石器群(6遺跡9地点)に比べて、AT上の石器群が少ないのは事実だが、吉井町多胡蛇遺跡や神保富士塚遺跡、富岡市野上塩之入遺跡、下鎌田遺跡、松井田町行田大道北遺跡その他の遺跡から尖頭器や細石刃核が出土しており、遺跡が小規模であることを除けば、遺跡の増減傾向については、赤城山麓と何ら変わることはない。特に、縄文中期の住居や土坑、古墳の周堀から多量の尖頭器が出土した下鎌田遺跡(富岡市遺跡調査会)の旧石器などをみると、少しオーバーだが新里村の武井遺跡に匹敵するような中核的遺跡の存在さえ想定が可能である。しかしながら、旧石器の調査は不十分このうえなく、なぜこの地点の試掘をしなかったのか理解に苦しむほど雑な調査となっている。縄文時代の住居や、その他

の遺構が激しく重複していた、というのが調査者の弁だが、詭弁としかいいようがない。調査時に構構覆土から石器が出土したということに気付いていながら、その地点を試掘しないというのでは、意識的に旧石器調査を避けているといわれても仕方がないだろう。報告書で見る限り、下鎌田の尖頭器製作は黒曜石に特化しているわけではなく、完形状態に近い破損資料も多く出土しており、黒曜石製尖頭器の中継基地というような、ある種の目的に特化した性格の遺跡ではない、と理解している。

利根川以西の地域に旧石器遺跡が少ないという理解は、旧石器遺跡の発見が赤城山麓に偏っているということが多分に影響、感覚的理解になっているからかもしれない。北陸新幹線関連で調査した榛名山山麓では6遺跡(5遺跡がAT下、1遺跡がAT上の石器群)で旧石器を確認した。AT上の石器群は少ないという先の指摘を裏付けるとも取れる結果だが、ここでは浅間起源のテフラの降下範囲・方向に留意すべきことを指摘しておきたい。いささか概念的だが、火山災害は局地的な場合が多く、テフラの降下軸から外れた地域ではそれほど大きく影響したわけではなく、テフラの降下範囲と降下段階を加味して榛名山麓の旧石器遺跡も分析する必要を感じている。

火山噴火に起因した「人口流出説」は、As-BP降下前後の県内旧石器遺跡の動向と、南関東地方の旧石器遺跡の動向を対比してえられた仮説である。この仮説については、調査頻度の差を考慮しているとは言えず、県内旧石器遺跡の動向や生態学的見地から考えて、遺跡や人口の減少(災害時に一時的に居住地を代えるなどする災害回避行為や、環境悪化に伴う人口支持力の低下)はあっても、人口流出を示す積極的根拠は見いだせないのではないか、と考えている。同様に、県北の武蔵山周辺域に産する黒色安山岩採取を意識した最寒冷化に伴う交通路の遮断というような考え方も赤城山麓に立地する旧石器遺跡の石材構成を見れば、改めて幻想であることが分かるだろう。

1 調査と遺跡の概要



- | | | | | | |
|------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 今井三郎堂遺跡 | 2 今井見切塚遺跡 | 3 市場遺跡 | 4 南原遺跡 | 5 石山遺跡 | 6 下触牛伏遺跡 |
| 7 吾妻遺跡 | 8 筋道下遺跡 | 9 大上遺跡 | 10 天ヶ屋遺跡 | 11 書上遺跡 | 12 三和工業団地遺跡 |
| 13 舞台遺跡 | 14 下植木宅丁田遺跡 | 15 光仙房遺跡 | 16 植木光仙房遺跡 | 17 書上木山遺跡 | 18 五日中南証遺跡 |
| 19 堀下八幡遺跡 | 20 波志江六反田遺跡 | 21 波志江天神山遺跡 | 22 飯土井二本松遺跡 | 23 飯土井中央遺跡 | 24 二之宮宮下遺跡 |
| 25 二之宮千足遺跡 | 26 二之宮各地遺跡 | 27 今井道上通下遺跡 | 28 今井道上上遺跡 | 29 波志江西帯遺跡 | 30 波志江中筋遺跡 |
| 31 五日牛新田遺跡 | 32 瓦紙北三木堂Ⅱ遺跡 | 33 瓦紙北原日遺跡 | 34 舞台遺跡 | 35 富田宮下遺跡 | 36 富田高石遺跡 |
| 37 富田橋田遺跡 | 38 萱野日遺跡 | 39 中川原小林遺跡 | 40 三ツ屋遺跡 | 41 上ノ山遺跡 | 42 柳久保遺跡群 |
| 43 関無遺跡 | 44 柳久保遺跡 | 45 下鶴谷遺跡 | 46 熊の穴遺跡 | 47 小幡河遺跡 | 48 内相遺跡 |
| 49 長岡遺跡 | 50 峰岸山古墳群 | 51 峰岸山遺跡 | 52 観音寺遺跡 | 53 十二社遺跡 | 54 内出遺跡 |
| 55 武井遺跡 | 56 北原遺跡 | 57 広間地遺跡 | 58 梨ノ木D遺跡 | 59 武井峰K遺跡 | 60 白藤古墳群 |
| 61 矢越遺跡 | 62 日光道東遺跡 | 63 矢神遺跡 | 64 萩窪南田遺跡 | 65 鳥取福蔵寺日遺跡 | 66 小暮東新地遺跡 |
| 67 船越二本松遺跡 | 68 市ノ間前田遺跡 | 69 市ノ間古ヶ沢遺跡 | 70 柏倉高合遺跡 | 71 樹形遺跡 | 72 清水沢遺跡 |
| | | | | | 73 高泉遺跡 |

第4図 周辺遺跡

II 調査の成果

II-1 第I文化層

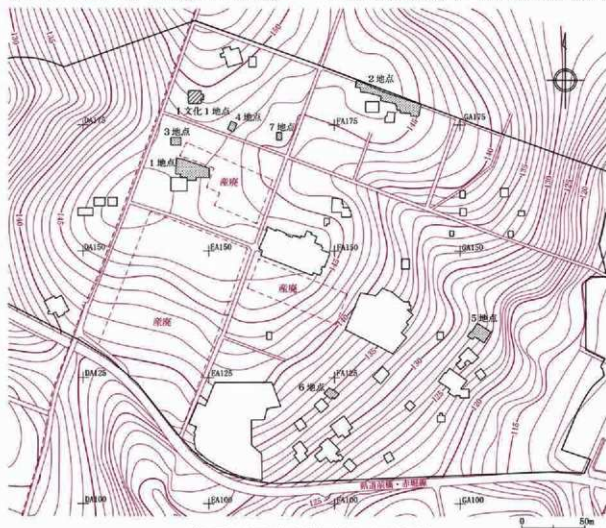
a. 概要

遺跡北端に近い丘陵の南側斜面（第5・6図を参照）に分布していた。文化層を構成する石器は、3点と少なく、削器1、剥片2（第7図）が出土したのみであり、特徴的の石器は見られない。出土した3点の石器は出土資料を見る限り、剝離痕跡が遺跡内には確認できない。石器の出土層位はAs-YPを多く含む黄褐色硬質ローム層（VI層）で、層位的に見れば旧石器時代終末期から縄文・草創期に属する石器群ということになる。この地点にはこの石器群に

重複してX層～XII層から15点の石器が出土している。下層の石器群は黒色安山岩を主体としており、構成石材も明確に異なることから、下層の石器群（第III文化層）とは分離して捉えた。

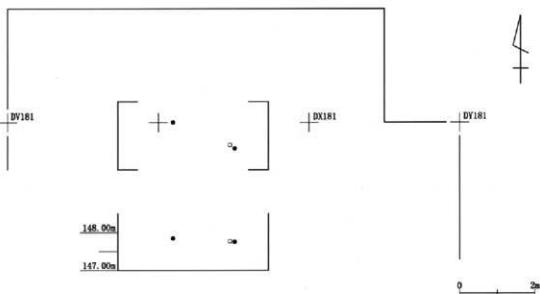
b. 出土石器

3点が出土した。第7図1は小形・縦長剥片の左側縁を粗く打ち欠き作出した削器。器体の上下両端を欠損するため器体の形状は不明だが、左側縁のみを加工している可能性が強い。左側縁の加工は刃部作出というより、形状作出の加工と捉えるべきかもしれない。黒色頁岩。2・3は上下両端を欠損する

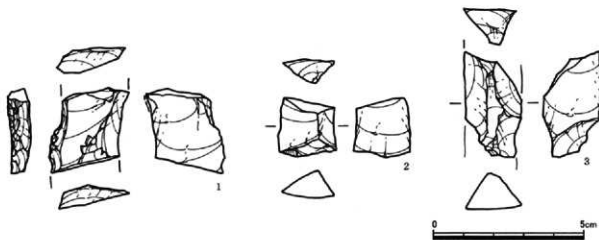


第5図 石器の出土地点（第I・II文化層）

II 調査の成果



第6図 石器の分布 (第I文化層)



第7図 出土石器 (第I文化層)

小形の縦長剥片。2点とも断面形状は厚く、三角形状を呈する。2は黑色頁岩、3は黑色安山岩。

c. 石器分布

石器群は丘陵の鞍部に近い南向き斜面部 (DW-180G) に分布していた。分布範囲は2m程であり、小規模である。出土石器は典型的な「管理的石器」とはいえないものだが、剥離痕跡が見られないことから、他の地点から石器を持ち込んでいる可能性が想定されよう。

当該期石器群については、調査区外・北側の丘陵部分に存在する可能性を残している。が、丘陵南側に隣接する見切塚遺跡でも断片的に出土している程度 (細石核を伴い50点の剥片類が出土) で、資料的には極めて乏しい、ということができよう。

II-2 第II文化層

当該期石器群は、6地点に分布（第5図を参照）していた。層位的にはVII～IX層に出土している石器群で、VII層下部～VIII層上部にピークを持つ石器群である。4ヶ所の石器群（第1～4地点）が丘陵鞍部や丘陵の平坦部に、2ヶ所の石器群（第5・6地点）が丘陵東側斜面に分布していた。比較的小規模な石器群が多く、地点間関係も不明だが、丘陵鞍部や平坦部に規模の大きな石器群（第1・2地点）が分布していた。特に、第2地点の石器群は調査区の北にも確実に分布が延びており、丘陵全域に分布が広がる可能性を指摘しておきたい。

(1) 第1地点

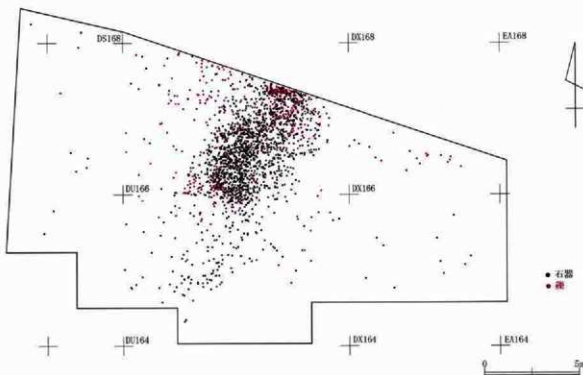
a. 概要

石器群が出土した周辺域は、産廃処理に伴う掘削

で遺物包含層が壊滅的打撃を受けていた。石器群が出土したこの地点にも掘削は及び、石器分布の1/4程度が攪乱を受けていた。旧石器包含層が残存していた地点でも攪乱はVII層まで達しており、遺構精査段階から多量の剥片や破片（黒曜石）が出土した。通常、旧石器調査は上層の遺構調査を終えてからということになるが、結果的には旧石器の分布域が広範囲には広がらないということが判明したため、包含層の乾燥等の条件悪化を避け、この地点のみ旧石器調査を先行した。

石器群は丘陵鞍部に近い、比較的平坦な地点—北側と東側に緩く傾斜—に分布（第5図を参照）していた。石器の分布範囲は約300㎡に及び、計1928点に及ぶ石器が多量の礫や礫片（462点）と混在して出土した。

石器群は、長径12m・短径6mの範囲に集中分布（DV-166G付近）していたほか、調査区全域に散漫に分布していた。感覚的には分布域を区切らず把



第8図 石器と礫の分布（第II文化層・第1地点）

II 調査の成果

掘りよきそうにも見えたが、本報告では、便宜的に調査区・南端に近い地点（DV-165G付近）にも散漫だがブロック（2号）を認めた。礫群は調査区・北側の地点と中央付近の2ヶ所でブロック（1号）に重複するよう分布していた。

石器の出土層位はVII層～IX層だが、VII層下部からVIII層上部に最も多量出土した。また、ほぼ同様なレベルから礫群も安定出土しており、石器の出土状態とも整合していた。

石器石材は黒曜石が1559点（80%、第1表を参照）と圧倒的多数を占めた反面、黒色安山岩や黒色頁岩など在地石材の使用頻度（両石材で2.2%）は低く、特異な石材構成を示していた。また、61例160点を確

認した接合資料も、接合率で見れば8%と極めて低い数字を示した。産廃処理に伴う掘削で分布域北側の実態は不明だが、石器・礫とも確実に分布が調査区の北側に延びている。このため石器分布や器種・石材構成の全貌は、攪乱規模が大きな分だけ断定できない要素を残している。出土資料を見る限り、石器群は加工具類（彫器や掻器など）を主体に組成、機能的に特化した遺跡（地点）であるという想定も可能な状況を呈していた。攪乱で器種構成や石材構成の全貌が不明瞭であるということも前提に考えるなら断定は避けるべきであるが、上述した想定も全く根拠がないということではないだろう。

第1表 器種・石材構成（II-1地点）

	尖頭器	掻器	削器	彫器	刮片	加工痕	使用痕	礫器	敲石	石核	鏟片	剥片	片断	礫	礫片	合計
黒安	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.4%
黒頁	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	12.5%	28.6%	4.7%	1.1%	0.0%	0.0%	1.3%
頁岩	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%
砂頁	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
黒曜石	5	8	9	57	229	9	16	0	0	25	3	64	1166	0	0	1559
	100%	100%	90.0%	87.7%	94.4%	89.2%	100%	0.0%	0.0%	25.0%	42.9%	33.5%	85.8%	0.0%	0.0%	65.2%
褐礫	0.0%	0.0%	0.0%	12.3%	3.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	28.6%	2.1%	2.2%	0.0%	0.0%	52
赤碧玉	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	0.3%	0.0%	0.9%	7
チャート	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	7.3%	1.7%	0.8%	31.5%	3.3%
珪頁	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.3%
珪燧	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	0.9%	1
燧岩	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.9%	1
ホルン	0.0%	0.0%	10.0%	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	12.5%	1.0%	41.4%	5.6%	0.8%	3.5%	6.9%	166
ファイ	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	2
砂岩	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%	0.0%	0.0%	0.0%	1.6%	0.3%	1.1%	9.0%	0.9%
溶礫	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.8%	0.9%	2.5%	7.2%	1.7%	40
粗安	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%	338	37	386
輝緑岩	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.6%	2	4.5%	0.3%
酸鉄岩	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%	1
合計	5	8	10	65	233	13	16	1	4	8	7	191	1359	359	111	2390
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

b. 出土石器

総計1928点の石器が出土している。砕片類が1359点(70%)と圧倒的多数を占めている。石器群を構成する代表的器種には、槍先形尖頭器(第15図1~4)や石刃播器(同図6~10)、彫器(第17~21図)、削片(第25~32図)が組成したほか、少量の大形剥片加工石器(第34図3・4)や礫器(第36図1)が加わる。黒曜石を用いた石器は、この地点では基本的に二次加工のみ行い石器を仕上げしており、石器類には運搬等に伴い生じる「スレ」や「キズ」が著しいという点が指摘されよう。

槍先形尖頭器(第15図1~4)

4点(このうち1例は接合資料)が出土している。出土した尖頭器は、やや肩の張る「東内野型尖頭器」と、面的加工を施す尖頭器(やや左右が非対称)に大別されよう。

第15図1は、片面加工を施した尖頭器。下端部を欠損するため不明だが、残存部分の形状からみて小形・幅広のタイプの尖頭器に見える。石器形状は非対称で、左側縁の先端付近が直線的であるのに対し、右側縁の先端付近は外湾している。左側縁・先端付近には器体長軸方向の剥離痕が見られ、技術的には「東内野型尖頭器」に近い。調整加工は丁寧だが、左側縁の加工は右側縁の加工に比べてやや厚い。石器裏面の表面にはスレが著しい。縦長の幅広削片を用いている。黒曜石。2は両面加工を施した尖頭器。石器下端を欠損する。残存部分の形状からみて小形・幅広タイプの尖頭器に見える。石器形状は非対称で、やや細身であるという点を除けば側縁形状は1の尖頭器に類似している。黒曜石。3は、左側縁先端部から槌状剥離を施した尖頭器。4と同様に肩が強く張る尖頭器で、破損した2点の尖頭器が接合(接合資料-11)している。機能部(刃部)作出時に破損した可能性が高く、破損後に刃部裏面の加工を試みている。破損の最大の原因は槌状剥離面・右端の球頭で、この部分から剥離方向が変換して破損した可能性が高い、と考えている。破損後、上端側・

尖頭器の側縁に剥離を加えているのは不可解だが、器体を斜断した破損面を刃部(槌状剥離面)に見立てたためかもしれない。なお、左側縁・中央の「槌状剥離」様の剥離面は一瞥しただけではなかなか理解できない剥離である。この部分にも小剥離痕が見られるからで、槌状剥離とも取れるなんとも微妙な剥離である。この剥離痕については剥離面の延長上に位置する球頭を部分的に壊しており、側縁加工に伴う衝撃剥離と考えている。なお、小剥離痕が生じていることから分かる通り、石器の二次利用については否定するものではなく、寧ろ肯定的に捉えておきたい。黒曜石。4は、先端部から槌状剥離を施した尖頭器。強く肩の張る尖頭器で、石器先端の加工は微細だが、鋭利な尖頭部の作出を意図しているようには見えない。調整加工は丁寧で典型的な東内野型尖頭器と評価できよう。裏面側の周辺加工を除いた大きな剥離面には顕著なスレが見られ、素材を遺跡に持ち込み、この地点で加工した尖頭器と考えている。黒曜石。

播器(第15図5~9、第16図1・2)

8点(このうち3点は接合資料)が出土している。第15図5・6、第16図1は、石刃端部に機能部を有する典型的な播器である。5は、中央付近から破損した石刃の一方(第23図を参照、接-6)を播器としたもの。6(接-20)の刃部角は浅く、貧弱である。第16図1は刃部に砕片1点が接合したもの(接-15)で、加工部分を除きスレが著しい。黒曜石。第15図7・8、第16図2は、やや幅広の削片を用いている。何度か刃部の再生を受けているようで、刃部幅に比べて石器長は短い。3点とも加工部を除いて石器表面に著しいスレが見られる。黒曜石。第15図9は、大形の幅広削片を用いた播器の刃部破片か。裏面には剥離段階のバルバスカーが残り、この部分から連続剥離を加え機能部を作出している。折れ面の状況からみて、製作段階で破損・放棄している可能性が高い。黒曜石。

II 調査の成果

削器 (第16図3~10、第17図1・2)

10点(2例の接合資料を含む)が出土している。比較的形の整う石刃に近い剥片や幅広剥片など、多様な形の剥片を用いている。剥片形状を大きく変えるような加工を行う例は少なく、石器形状を整える程度の加工を施す事例が多い。第16図3・4は比較的加工量の多い削器、6・10は粗く刃部を作出した削器、8・9は形状を整える程度の剥離を施す例、第17図1・2は微細な剥離を連続的に施す例である。ホルンフェルス製の1点(第16図6)を除いて、総て黒曜石を用いる。

彫器 (第17図3~10、第18~21図)

65点が出土している。出土した彫器の形状は多様だが、

a類 両面加工石器や、端部加工した石刃の一端から種状剥離を施す一群

b類 平坦面(剥片の打面や礫面、折れ面など)から種状剥離を施す一群

c類 先端部に交叉するよう種状剥離を施す一群に大別して理解できよう。

a類の彫器は両面加工石器を用いるもの(a-1)、石刃を用いるもの(a-2)、その他の剥片類を用いるもの(a-3)などからなり、多様な形状の剥片を用いている。左側縁に刃部を作出する例(65%を占める)が圧倒的に多く、右側縁に刃部を作出する例は約6%と少ない。このほか、両側縁に刃部を作出するもの(第17図7、第18図9、第19図6)や、裏面に刃部を作出するもの(第19図7、第20図8、第21図2)など多様性に富んでいる。圧倒的多数を占めるa-2類は「細原型彫器」と見られ、ここでも「東内野型尖頭器」と共伴、組成していた。

第17図3は、右側縁に刃部を作出した彫器。礫面を大きく残す縦長剥片を用いている。刃部には微細な「刃こぼれ」が生じている。剥片表面のスレは見られない。4は、両面加工石器の左側縁に刃部を作出した彫器。刃部には微細な使用痕が生じている。石器先端の細部調整、及び、刃部を除く石器表面の

スレが著しい。5は、側縁調整部分から機能部を作出した彫器。刃部には微細な使用痕が生じているほか、石器裏面のスレが著しい。この資料は、本来的には種状剥離を施した「東内野型尖頭器」と見られ、破損後彫器に再生・利用した可能性が指摘されよう。6は、石刃端部を微細加工した打面から刃部を作出した彫器。左側縁下端をノッチ状に加工するほか、右側縁にも先端から連続的に微細剥離を施している。刃部の使用痕は明瞭ではない。7は、石器先端部分に調整加工を施し、やや厚い刃部を作出した彫器。石器下端を部分的に破損するため断定は困難だが、石器下端にも浅い調整加工が連続して見られ、ここから刃部を作出、使用している可能性が指摘されよう。刃部には微細な「刃こぼれ」が生じている。石器表面のスレは明瞭ではない。8は、幅広剥片の打面側に近い側縁に調整加工を施し、刃部を作出した彫器。石器刃部の使用痕「刃こぼれ」、及び、石器表面のスレは明瞭ではない。9は、礫面を大きく残す大形剥片の側縁に調整加工を加え、左側縁に刃部を作出した彫器。刃部に接する石器裏面には「刃こぼれ」が連続しており、激しく消耗している。石器裏面のスレが著しい。10は、右側縁に連続する調整加工を加え、左側縁に刃部を作出した彫器。石器の裏面側先端には「種状剥離」に似た、小剥離が2条あるほか、刃部の「刃こぼれ」が著しく、消耗が激しい。刃部、及び、側縁の調整加工部分を除いて石器表面の磨耗が著しい。

第18図1・2・5・7・11・14は石刃の右側縁に調整加工を加え、左側縁に刃部を作出した彫器。石器の刃部作出に伴う調整加工は面的で丁寧だが、11の先端加工は微細で、剥片の縁辺を潰す程度の加工に近い。5の刃部下半に連続する「刃こぼれ」が生じているほか、右側縁には微細な使用痕が連続的に見られ、多様な石器の使用状況が看取されよう。3は、幅広剥片の先端部分を加工して、左側縁に刃部を作出した彫器。先端破片でもあるため石器形状は不明だが、木葉形状に近い石器の形状が想定されよう。石器刃部に接する裏面には「刃こぼれ」が激し

く、また、石器裏面のスレも明瞭である。4は、石刃の右側縁に刃部を作出した彫器。先端部・左側には器体長軸と並行する剝離痕が2条あるほか、下端部・右の側縁にも同様の剝離痕が見られ、石器の上下両端で刃部を作り替えていた可能性が指摘されよう。木葉形状に近い石器形状を呈する。石器刃部には明確な使用痕が生じている。石器表面のスレは比較的明瞭である。6・8～10の4点は、幅広剥片の先端部分を打ち欠いた打面から刃部を左側縁に作出した彫器。剥片形状に応じて側縁加工は異なり、8・9の加工量は大きい。6・8の刃部は厚く裏面側に偏り、9は石器裏面に微細剝離を施し、左右両辺に浅い角度の刃部を作出している。10は、剥片形状を大きく変えることなく、剥片周辺に微細剝離を加えて左側縁に刃部を作出している。12は、刃部を剥片の打面側に作出した彫器。調整加工を施し打面部を除去した後に、左側縁に刃部を作出している。石器使用に伴う「刃こぼれ」が刃部より、右側縁や剥片先端部に著しい。13は稜付き石刃の先端部に加工を加え、刃部を作出した彫器。刃部は裏面側に偏る。明瞭な使用痕は見られない。15は、削片を転用して右側縁に刃部を作出した彫器。左右の側縁には「刃こぼれ」が見られ、特に、左側縁の使用痕が著しい。刃部作出段階の打点と削片作出段階の打点は基本的に一致しており、現状では前後関係は不明で、石器呼称等の検討を要するかもしれない。

第19図1～5・8は、石刃の先端部分を加工して、左側縁に刃部を作出した彫器。刃部角の浅い1の彫器を除いて刃部角の厚い彫器が主体を占めている。2は上下両端に刃部を、5は石器の表裏両面に刃部を有する。6・7・9は、幅広剥片の先端に刃部を作出した彫器。6は刃部作出に伴う槌状剝離が石器裏面まで及び、石器形状を大きく変えている可能性が高い。石器裏面の剝離は槌状剝離のだが、調整加工に伴う剝離の可能性も否定できない。背面・左の刃部には微細な「刃こぼれ」が生じている。褐色碧玉。7は石器裏面に刃部を、9は左側縁に90°に近い厚い刃部を作出している。7は初期の刃部を含めて

著しく石器が擦れており、この地点では刃部再生に関わる部分的剝離（上端の調整加工ノッチ状に加工一と刃部再生）のみ行われた可能性が高い。9の石器表面には、明瞭なスレは見られない。

10・11は、剥片先端部の平坦面を打面に刃部を作出した彫器。10は左側縁に、11は左右の側縁に刃部があり、2例とも90°に近い刃部角を有している。10は褐色碧玉。

第20図1・3・8は、平坦な礫面や剝離面に設定した打面から左側縁に刃部を作出した彫器。剥片の打面側に刃部を設定しており、剥片先端に刃部を設定するa類の彫器とは刃部設定の在り方が異なる。

3の刃部の「刃こぼれ」は微細だが、側縁の消耗は激しい。2・5は、左側縁に刃部を作出した彫器。

2の刃部は、器体軸に直交した狭い剝離面を打面に刃部を作出している。石器表面のスレは比較的明瞭である。5は、打面を欠損するため不明だが、残存部分には調整加工が見られないことから、b類の彫器と判断した。出土資料に限ればb類の彫器は剥片先端に刃部を作出する例が存在せず、分類が妥当か、課題を残した。4は、剥片先端から左側縁に刃部を作出した彫器。先端加工は微細でノッチ状を呈す。

右側縁に連続する小剝離痕は使用に伴う「刃こぼれ」であろう。刃部には明瞭な「刃こぼれ」が連続しており、また、石器表面のスレも著しい。6・9は、幅広剥片の「折れ面」から槌状剝離を施し作出した彫器。6の刃部は裏面側に偏り、左側縁には明瞭な「刃こぼれ」が生じている。石器刃部、及び、側縁加工を除く石器表面は著しく擦れている。7は、側縁の礫面から機能部を作出した彫器。刃部、及び、左側縁の剝離面を除き石器全体が擦れており、風化剥片を採取、加工している可能性が高い。刃部と捉えるにはやや不規則な剝離だが、刃部に明瞭な使用痕が見られ、ここでは彫器と認定した。10は、剥片先端の側縁に刃部を作出したc類の彫器。左側縁の刃部は90°に近い刃部角を有するのに対し、右側縁の刃部は裏面側に偏る。褐色碧玉。

第21図1・4は、石刃の打面側に刃部を有するc

II 調査の成果

類の彫器。1は、左側縁に刃部を作出した後に裏面にも刃部を作出した例である。石器下半を欠損する。石器表面のスレは明瞭ではない。4は、石器の上下両端とも左右の側縁に刃部を作出したもの。左側縁には明瞭な使用痕が見られ、激しく消耗している。刃部部分を除き、石器表面のスレは著しい。2は、左側縁に刃部を作出した彫器。刃部は裏面側に偏る。刃部を除く石器表面はスレが著しい。3は、左右の側縁に刃部を有する彫器。刃部作出は右側縁を先行させ、左側縁の刃部作出が続き、再び、右側縁に戻り刃部を作出している。刃部の使用痕は左側縁に明瞭で、右側縁には見られない。5は、左側縁に刃部を作出した彫器だが、右側縁にも「櫛状剝離」状の小剝離が見られ、c類の彫器に分類が可能かもしれない。石器下端には揮動的加工を施している。石器裏面のスレが著しい。6・7は、欠損で分類不能な彫器。2点ともやや厚い縦長剝片を用いており、基部(6)や側縁部分に器体の整形加工を施している。ここでは、この整形加工の在り方を重視して彫器に分類した。8は、削片を利用した彫器。第30図15と同様、刃部と削片の打点が一致しており、分類が妥当か、検討を要す。9は、石刃の打面側に刃部を作出した彫・掘器。右側縁に微細な調整加工を施し、刃部を左側縁に作出している。続いてこの刃部から表面側に浅い剝離を加えており、この剝離については器体整形に伴う調整と判断した。石器使用に伴う使用痕は彫器刃部に限らず左右両側縁に見られ、石器の多様な用い方を示唆している。調整加工、及び、刃部を除く石器の表裏両面にはスレが著しい。

第22～24図には彫器関連の接合資料を図示した。接合資料—25は、彫器と折断剝片からなる接合資料。彫器1は剝片裏面の疵品が原因して折れており、この「折れ面」から刃部を作出している。刃部角は90°に近く、厚い。石器刃部には微細な使用痕が生じている。なお、破損した一方の剝片端部には調整加工が施され、この剝離に続いて微細な使用痕が連続している。接合資料—4は、彫器と削片からなる接合資料。石刃の先端に調整加工を加え、左側縁に刃部

を作出している。削片は「セカンドスボール」で、刃部には明確な使用痕が残る。接合資料—24は掘器と彫器からなる接合資料。石刃は加工段階、或は、使用段階に破損した可能性が高い。彫器1は「折れ面」から刃部を作出、刃部には明瞭な使用痕が生じている。石器表面のスレは、それほど顕著ではない。接合資料—38は、彫器2と削片からなる接合資料。彫器は左側縁で刃部を作出後、石器裏面に刃部を作出している。明確な使用痕は見られない。褐色碧玉。接合資料—2は、彫器3と2点の削片1・2からなる接合資料。3は左右の側縁に櫛状剝離を施し、交叉型の刃部を作出している。左側縁に先行して右側縁の刃部を作出している。

接合資料—37は、彫・掘器2と削片からなる接合資料。接合状態からみて、彫器刃部の作出に先行して掘器刃部を作出している。彫器刃部の作出は少なくとも3度は確認され、削片1の接合状態から言えば、石器は1cm程度「長さ」を減じた、と推定されよう。削片の側縁には微細な「刃こぼれ」が連続している。褐色碧玉。接合資料—5は、掘・彫器2と掘器の刃部調整剝片からなる接合資料。最初期の彫器・刃部作出と最終的な刃部作出には、剝離面のスレ具合が異なり、ほぼ確実に剝離の時間差が想定できよう。調整剝片1の剝離も掘器の刃部再生と捉えるより、彫器的機能の確保に絡む加工と考えている。接合資料—36は、彫・掘器2と調整剝片からなる接合資料。調整剝片1を剝離したのちこの部分から刃部を作出。この剝離は掘器の刃部まで達している。褐色碧玉。接合資料—6は彫器と掘器からなる接合資料。折断剝片の上半で彫器を、下半で掘器を作出している。接合状態からみてやや幅広い縦長剝片を二分してそれぞれ石器を製作した可能性が想定されよう。掘器の裏面には、この見方を裏付けられるよう、石器裏面の加工を施している。接合資料—13は彫器と削片からなる接合資料。石器は側縁の剝離段階に破損したのち、彫器の刃部を作出している。

接合資料—9は、彫器と石刃からなる接合資料。彫器2は石刃先端から左側縁に刃部を作出してお

り、刃部には比較的明瞭な使用痕が生じている。接合資料-14は、彫器3と2点の削片からなる接合資料。彫器は交叉型刃部を有しており、左側縁の刃部で4枚以上の削片を、右側縁で3枚以上の削片を剝離している。石器表面のスレが著しい。

削片 (第24~32図)

総計233点の削片が出土している。削片は比較的認定が容易で、ここでは尖頭器や彫器の機能部作出に際し生じる、石器や剥片の裏面を部分的に取り込む小削片類を一括して削片と捉えた。出土した削片は多様だが、ここでは「右刃か左刃か」で大別、さらには剝離面構成の在り方や剝離角の相違を加味して細分した。

a類 石器先端から左側縁に向けて櫛状剝離を施した際に生じた左刃の削片で、1次削片を一括した。明確な側縁加工を残す削片をa-1類、側縁加工の見られない削片をa-2類と捉えた。

a-1・2類の削片は、素材を斜め（上からみて櫛状剝離面が充分に見える程度、30~75°程度）に載ち切る例だが、素材に直交するよう剝離した削片をa-3類と捉えた。

b類 石器先端から左側縁に向けて櫛状剝離を施した際に生じた左刃の削片で、これ以前にも削片を剝離しているもの。刃部角の修正や刃部再生が主な目的と見られ、a類の削片同様、明確な側縁加工を残す削片をb-1類、側縁加工の見られない削片をb-2類と、素材に直交するよう剝離した削片をb-3類と捉えた。

c類 a類の削片とは逆に、石器先端から右側縁に向けて櫛状剝離を施した際に生じた右刃の削片で、1次削片を一括した。明確な側縁加工を残す削片をc-1類、側縁加工の見られない削片をc-2類、また、素材に直交するよう剝離した削片をc-3類と捉えた。

d類 b類の削片とは逆に、石器先端から右側縁に向けて櫛状剝離を施した際に生じた右刃の削片で、これ以前にも削片を剝離しているもの。b類の

削片と同様に、刃部角の修正や刃部再生が主な目的と見られ、明確な側縁加工を残す削片をd-1類、側縁加工の見られない削片をd-2類、また、素材に直交するよう剝離した削片をd-3類と捉えた。

出土した削片は68点（29.2%）が完形資料で、残る165点（70.8%）が欠損していた。欠損資料は端部を欠損する削片が75点と最も多く、上下両端を欠損するもの41点、上半部を欠損するもの46点と続く。剝離段階の破損の典型例は、端部がヒンジ状に破損する例や打点付近で欠損する例などだが、剝離段階の破損は意外に少なく、破損原因は明確ではない。折れ面を観察する限り、上面側から加圧された削片と下面側から加圧された削片が拮抗して存在していることなど折り取り等も想定可能だが、削片の企画性・使用痕などからみて否定的にならざるを得ないため、それほど顕著には二次利用していたとはいえない、と考えている。

裏面の剝離方向からみた削片の刃部位置は、左刃の削片が177点と75%以上を占めている。その数は右刃の削片の3倍に達しており、尖頭器・彫器の刃部位置に強く結び付いている。a-1類やb-1類の削片は石器の素材に両面加工石器を想定したものが、この種の削片は3点（第26図1、第26図7、第32図2）と意外に少ない。面的加工を施す1類の削片は、刃部の作出直前に行う削片整形・調整加工を含む可能性が高い。

刃部角（剝離角）については計測精度の問題が解消できないうえ、刃部角（剝離角）も漸移的に変化するため、ここでは計測せず以下の通り4分して捉えた。1つは、刃部角が鋭角で、幅広・扁平な削片a。男女倉型尖頭器や東内野型尖頭器に特徴的な「櫛状剝離面」が想定できよう。もう1つは、器械に直交するよう櫛状剝離を施した削片cで、基本的に三角形の断面形状を示す。削片aと削片cの間隙ともいふべきものが削片bである。刃部角は30~75°程度だが、打点部分と末端では刃部角（剝離角）が大きく変化しており、一様ではない。このほか、裏面側に刃部を作出する例が少数だがあり、こ

II 調査の成果

ここでは裏面側に扱れたものを削片dと捉えた。量的には削片bが圧倒的に多く、153点を数える。以下、削片cの45点(約20%)、男女倉型尖頭器の存在を暗示する削片aは25点(10%)と続き、裏面側に扱れる削片dは6点と最も少ない。石器石材は、黒曜石が218点(95%)と圧倒的多数を占めている。その他の石材には赤碧玉1点や褐色碧玉7点、黒色頁岩や黒色安山岩が数点出土しているのにすぎない。

第25図1~12・14~17・19・21~24・27~35、第26図、第27図1、第28図5は、a-1類の削片。背面側の加工部分や裏面側の平坦面は擦れる例が多い。第25図31は調整剥片とも見られ、分類が妥当か検討を要す。第26図7は裏面側に面的な加工が見られ、両面加工石器より剥離した削片と考えている。第25図4・11・14、及び、第26図3・4の削片は熱で石器表面が変質。第26図15~19は比較的大形の削片を一括した。

第27図2~10・12~16は、a-2類の削片。熱で石器表面が変質した3点(3・14・15)を除く削片の半数以上に石器表面のスレを認めた。

第25図26、27図17・19・20・23・24は、a-3類の削片。側縁に残る調整加工は面的(17)ではなく、寧ろ、側縁整形に近く、その加工意図は刃部末端の整形ということだけでなく、適当な刃部を確保するため施す加工(20)ということができよう。20は受熱削片。

第25図12・13・18・20・25、第27図11、第28図1~4・6~8、10~16は、b-1類の削片を図示した。やや白濁した黒曜石を用いる例が多く、石器表面のスレは認定が難しい。9や16の削片には確実にスレが見られ、状況はa類の削片と変わらない。

第28図18~32、第29図、第30図1~13には、b-2類の削片を図示した。この種の削片には微細な小剥離痕(20・24・27・32)が見られ、削片剥離以前の「刃こぼれ」とも見える。第29図3や24、第30図3には古い桶状剥離面を切る微細剥離が右側縁に連続している。この種の微細剥離については刃部再生に伴う整形の一種と評価できよう。同種の微細加工を

施す第29図29については、先端部までこの微細剥離が続いていること、さらには、左側縁にも「刃こぼれ」が存在することなどから器種転用(ドリル?)している可能性も否定できない。

第27図18・21、第30図14・16~24、第31図1~3、第32図23・24は、b-3類の削片。断面四角形状を呈し、この種の削片についてはほぼ確実に二次削片と断定できよう。比較的大形の削片には彫器に転用した例(第31図3)が存在した。

第31図4~11・13~24、第32図1~3には、c-1類の削片を図示した。a類の削片と同様、加工量が多い削片を一括した。出土資料には両面加工石器を素材に用いる例は1点(第32図2)と少なく、大部分は側縁調整の一種と評価されよう。削片の形状は大小さまざまだが、比較的大形の削片(第32図1~3)の中には1例(3)のみ裏面側・平坦面の両側縁に「刃こぼれ」を確認している。

第32図4~8には、c-2類の削片を図示した。4・7の側縁調整は削片剥離以前に施したもので、8は器軸に直交するよう剥離した削片だが、結果的に削片は裏面側に扱れ剥離している。

第27図22、第30図15・25・26、第31図12、第32図9~12は、c-3類の削片。10は、やや裏面側に扱れて剥離した削片。残る3点の削片は台形状の断面形状を呈していることから二次削片と判断している。

第28図9、第32図13~17には、d-1類の削片を図示した。13・16の削片には側縁調整が見られないのに対して、14・15の削片には一次削片剥離前後に側縁調整を施している。17は裏面側に微細剥離を施す数少ない資料。表面側の小剥離痕は使用痕と認定可能かもしれない。

第28図17、第32図18~22・25・26には、d-2類の削片を図示した。右刃の二次削片で、20・26は裏面側に強く扱れて剥離している。

削片関係では9例の接合資料を確認している。彫器、及び、削片の接合資料については、既に前項で説明したので、ここではそれ以外の削片の接合資料

について説明する。

接合資料-7 (第24図) は、一次削片の剥離に続いて剥離した削片の接合例。1は裏面側に換えて剥離した削片。2は1の打点より1cmほど打点を後退して剥離している。現状の接合状態は、より後から剥離した削片2より、削片1の頭部・剥離面が低く、このため削片1には再加工を想定する必要があるが生じている。打点が5mm程さがればこの問題は解決するのだが、接合面が少なく断定できない。

接合資料-21 (第33図) は、器体長軸に直交するよう剥離した二次削片の接合例。比較的大形で連続的に削片を剥離している。削片2が少なくとも3枚目の削片ということになる。削片1の側縁には剥離後、ノッチ状の剥離を加えている。2点とも側縁に微細な「刃こぼれ」が連続している。表裏両面とも平坦面が著しく擦れている。

接合資料-34 (第33図) は、削片2と砕片1の接合例。接合状態からみて、2は二次削片、1は削片の剥離に伴い剥離した砕片と判断できよう。1・2とも熱で表面が変質している。

接合資料-8 (第33図) は、削片2と砕片1の接合例。1と2の剥離方向は180°異なることからみて、比較的大形の彫器が想定されよう。

加工痕ある削片 (第33・34図1~4)

13点が出土している。礫器状の2点を除く、11点は小石器類で、二次加工の製作に伴い生じる小片を選択・加工している。

第33図1は、横位折断した幅広削片の端部を粗く加工して、刃部を作出している。加工段階で縦位に破損している。黒曜石。2は、幅広削片の左側縁に連続剥離している。削片端部には種状剥離に似た剥離を何回か試みており、破損して不明だがこの剥離を重視するなら彫器に分類が妥当かもしれない。褐色碧玉。3は、横位に折断した幅広削片の右側縁を加工している。加工段階で横位に折断した可能性が高い。石器表面が熱で変質。黒曜石。4は、表裏両面を錯交的に加工している。上下両端とも折れてお

り詳細は不明だが、この錯交的剥離を切り、これとは直交する剥離が見られ、このことから判断して削片に分類が可能かもしれない。黒曜石。5は、二次削片の先端部分を加工している。先端部に加工が集中していることから、石器にはドリル的な使用が想定されよう。黒曜石。6は、右側縁に連続加工を施している。剥離面構成の在り方は削片的だが、石器の裏面側を部分的に取り込む剥離面が見られないことから、ここでは便宜的に分類した。赤碧玉。7は、左側縁下端から種状剥離に似た剥離を施している。彫器に分類可能だが、剥離面構成の在り方、及び、刃部の位置関係からみて、他の彫器とは異なるため、ここでは便宜的に分類した。石器裏面・上端の粗い加工は比較的新鮮で、調査時の欠損の可能性も否定できない。黒曜石。8は、削片端部を微細加工したものの。幅広削片の左側縁には「刃こぼれ」が生じている。黒曜石。

第34図1は、石器上端から左側縁を連続加工したものの。石器上端の稜面を除去するため軌効に剥離を加えており、端部は潰れている。黒曜石。2は、側縁を粗く加工したものの。破損して形状は不明だが、厚い角度の調整加工を施していることから、彫器的石器を想定している。黒曜石。3は、稜面を大きく残す大形削片を用いている。加工は比較的小丁寧で、円刃状の刃部を作出している。節理が発達する円礫を用いており、出土資料も鉄分の付着した節理から複雑に割れている。珪質頁岩。4は、稜面を大きく残した幅広削片を用いる。剥離段階で破損した削片を用いており、石器端部を粗く打ち欠き、刃部を作出している。ホルンフェルス。

使用痕ある削片 (第34図5~7、第35図)

16点が出土している。削片形状は多様だが、縦長削片は左右の側縁を、幅広削片は削片端部を刃部に使用する例が多い。この種の石器は代表的な便宜的石器だが、石器表面(第34図7、第35図6、11など)には著しいスレが見られ、普通なら捨てる削片も黒曜石に限れば捨てるというようなことがないよう

II 調査の成果

だ。

第35図3・6は、彫器に分類可能な石器である。打点部分の破損や打点部分の調整加工が不明であるため、ここでは仮に「使用痕ある剥片」と捉えた。黒曜石。

鏃 (第36図1)

1点が出土している。第36図1は、上下両面に鏃を持つ棒状鏃を用い、小口部分を粗く打ち欠き刃部を作出している。刃部形状は略円刃で、刃縁は潰れ気味である。重さ375gを測る。砂岩。

敲石 (第36図2・3)

4点が出土している。第36図2は、やや扁平な円鏃を用いた敲石。鏃の小口部分に集合打痕を残す。2/3以上を欠損している。重さ74gを測る。粗粒安山岩。3は、棒状鏃を用いた敲石。鏃の小口部分が衝撃で欠けており、小破片と接合（接合資料—42）している。敲石は現状で515gを測る。黒色頁岩。

石核 (第36図4～6)

8点が出土している。接合資料（接合資料—40・43・44・46）の中にも、石核を図化しているので参照されたい。

第36図4は、表裏両面で小形石刃を剥離した石核。右側の小口部分でも同様な石刃を剥離しており、石核消費の実態が見て取れる。黒曜石。5は、裏面に平坦な鏃面を残す板状石核。剥離は石核の小口部分でも積極的で、4と同様の石核を積極的に消費している。黒曜石。6は、鏃面を残す厚い板状石核。石核の表裏両面で小形の幅広剥片を剥離している。石核が剥離途中で破損した後も、破損面で小形剥片の剥離を試みている。ホルンフェルス。

剥片 (第37～40図)

191点（9.9%を占める）が出土している。黒曜石64点（33.5%）とホルンフェルスの79点（41.4%）が圧倒的多数を占める。そのほかでは溶結凝灰岩や

褐色碧玉が少数ある。当該期石器群で溶結凝灰岩を組成する例は今日までなく、極めて稀なケースと考えている。溶結凝灰岩は概して粒度が粗く石器製作にはむかない典型的な石材だが、出土資料に関しては、表現が妥当か疑問だが、溶結凝灰岩としては珪化（ガラス化）が進んでおり、結果的に剥離を容易にしたのではないかと考えている。黒色頁岩や黒色安山岩など在地石材の使用は、概して低調である。

出土した剥片は大小さまざまだが、黒曜石を石器石材に用いるものには比較的形の整った剥片が多い。第37図～40図の小形剥片は大部分が黒曜石で、少量の調整剥片（第37図12・14ほか）を含んでいる。このほか、黒色安山岩や褐色碧玉、黒色頁岩等の剥片（第37図10・15、第40図2・3）は搬入石器と見られ、6cm程度の中形剥片を含んでいる。第38・39図の下段（7～9、11～13）や第40図には、ホルンフェルス製の大形剥片を図示した。大形剥片が多く、搬入石器の多い黒曜石などは極めて対照的な在り方を示している。

接合資料 (第41～49図)

8%と接合率は低調だが剥片類を除けば接合率は約30%と、それほど悪い数字ではない。剥片類の接合が少ないこと、黒曜石などでは剥片類の接合が主体を占めるということなどは、寧ろ石器群の性格を示しているように理解すべきだろう。

接合資料—16（第49図）は、6点の剥片類からなる接合資料。平坦な剥離面打面より連続して、小形・縦長剥片を剥離している。黒曜石。

接合資料—10・28・29・32・33（第49図）、23・27（第42図）は、剥片類の接合資料。黒曜石。

接合資料—41（第42図）は、2点からなる剥片剥離の接合資料。上下両端の対向する打面から幅広剥片を剥離している。剥片形状からみて、接合資料は尖頭器の製作に伴う可能性が高い。黒色頁岩。

接合資料—47（第42図）は、3点からなる接合資料。剥離面構成からみて、上述の資料（接—41）と

同様のポイントフレイクに類似する可能性も否定できない。ただ、若干打面が厚く、また、バルブも発達していることから、断定は難しい。チャート。

接合資料—43 (第43図) は、石核1点と剥片2点からなる接合資料。やや扁平な棒状礫を用いて、主に背面側を剥離している。剥離は丁寧で小口部分の剥離は石斧の刃部作出にも酷似しており、剥離を側縁から小口部分の順に進めていること、小口部分の形状は直刃状を呈すること、珪質頁岩を用いた石斧も存在することから、石斧の機能を想定するべきかもしれない。刃部・裏面左端を最終的に剥離しており、続いて剥片1・2を剥離している。裏面左端の剥離で生じた階段状剥離を解消するため、剥離を試みた可能性が想定されよう。チャート。

接合資料—44 (第43図) は、剥片2、砕片1、石核2からなる接合資料。裏面側に大きく礫面を残す接合資料で、上下両端に対向した打面を有する。打面を石核下端に移し剥片2を剥離した段階で剥片1が節理で同時剥離、その後破損部分で小形剥片を剥離している。剥片3・4は石核消費の最終段階で剥離したものと捉えている。チャート。

接合資料—46 (第44図) は、4点からなる接合資料。拳大よりやや大きな円礫を用いる。原石を分割したのち、小形剥片を剥離している。石核1とは別に剥離を進めたもう一方の石核では、大形の幅広剥片(2~4)を剥離しているようだが、剥離の詳細は明確ではない。チャート。

接合資料—45 (第44図) は、2点からなる接合資料。石器表面に礫面を大きく残していることから、剥片剥離の初期に位置づく資料と判断している。節理が縦横に走る。チャート。

接合資料—51 (第45図) は、9点からなる接合資料。直径10cmを超える円礫を分割して石核素材に用いている。剥片端部に平坦面(分割面)を取り込む幅広剥片を剥離している。ホルンフェルス。

接合資料—54 (第46図) は、3点からなる接合資料。小形・幅広剥片を同一打面より連続して剥離している。ホルンフェルス。

接合資料—56 (第46図) は、2点からなる接合資料。剥片表面には礫面を大きく残しており、剥片剥離の初期段階を示している。ホルンフェルス。

接合資料—52・55・57 (第47図) は、90°に近い剥離角を有する剥片の接合資料。目的剥片の形状は不明だが、作業面を固定して上下両端に打面を有しており、縦長剥片を志向しているようにも見える。打面調整や頭部調整は見られない。ホルンフェルス。

接合資料—48 (第48図) は、4点からなる接合資料。石核素材に分割礫を用いる。石核の左側で幅広の剥片を剥離した後、打面上端に移し剥片1・2を剥離している。剥片3は下端の打面から、剥片4は上端の打面から剥離しており、頻りに打面転移している。ホルンフェルス。

接合資料—58 (第48図) は、剥離の衝撃で破損した剥片の接合資料。同じく、接合資料—60(第48図)は剥離段階で縦破損した折断剥片の接合資料。ホルンフェルス。

接合資料—59 (第49図) は剥片2からなる接合資料。剥片には礫面を大きく残しており、剥離初期の段階をしめしている。ホルンフェルス。

接合資料—40 (第49図) は、3点からなる接合資料。やや厚い扁平礫を石核素材に用いており、上端の小口部分で剥片剥離を行い比較的形状の整った剥片を剥離している。また、下端の小口部分には打痕が集中しており、敲石に転用している可能性も指摘されよう。黒色頁岩。

c. 石器と礫の分布

既に述べた通り、石器群の周辺域は産廃処理に伴う掘削で、包含層は壊滅的打撃を受けていた。試掘調査の結果からみて、南側には石器群は広がらないこと、これとは逆に北側には石器群が確実に広がり、別のブロックが存在した可能性さえ否定できない。

発掘調査の結果、この地点では2ヶ所の石器集地点と礫群を確認した。石器は密集出土しており、石器分布に明確な空白域が存在するわけではなく、直前までブロックに分離せず捉える方向で検討し

II 調査の成果

た。最終的には、多少なりとも石器分布の空白域が存在することから、本報告ではブロックを分離・報告しておく。

露群は比較的空白域が明瞭に分かるため、南北2群に大別して捉えた。南北2群の露群で95%を占めており、残る5%の露・露片が周辺域に分布していた。2例ある露群間の接合例は、編年レベルでは問題なく同時性を保障するものだが、使用レベルで連続性を保障しているとはいえない。露群内の高い接合率を見れば、南北2群に捉えた露群は別個に形成・遺存した可能性が指摘されよう。

1号ブロック (第50図)

位 置 丘陵鞍部に近い丘陵の平坦面 (DU~DW-165~167G)

規 模 長径(8.4)m・短径5.6m

分布状態 DV-166Gに集中分布するほか、DW-167G付近にも分布。調査区・北にも確実に延びる。

出土層位 VII層(1242点、80.2%)に最も多く出土。ブロック中央付近ではより下層まで出土する傾向を示している。

出土点数 1548点

器種構成 尖頭器5、搔器5、削器9、彫器51、削片189、加工痕10、使用痕11、礫器1、敲石2、石核6など(第2表を参照)

石材構成 黒曜石1244、ホルンフェルス131、チャート36、褐色碧玉47、溶結凝灰岩19、黒色頁岩25、黒色安山岩10、珪質頁岩6、赤碧玉4など(第3表を参照)

その他 上層の遺構精査段階で確認。擾乱でブロックの北側1/4を欠いているほか、石器分布域でも包含層を部分的(VII層の上位付近まで)に欠く。1・2号露群が重複して分布している。

2号ブロック (第50図)

位 置 丘陵鞍部に近い丘陵の平坦面 (DV-165G付近)

規 模 長径6.0m・短径3.5m

分布状態 DV-165G付近に比較的散漫に分布している。

出土層位 VII~VIII層に出土。

出土点数 80点

第2表 ブロック別器種構成 (II-1地点)

	尖頭器	搔器	削器	彫器	削片	加工痕	使用痕	礫器	敲石	石核	炭核	長	削片	砕片	礫	露片	合計
1号ブロック	5 0.3%	5 0.3%	6 0.6%	51 3.3%	189 12.2%	10 0.6%	11 0.7%	1 0.2%	2 1.0%	6 0.4%	2 0.4%	6 0.4%	143 9.2%	1110 71.7%	0 0.0%	0 0.0%	1548 100%
2号ブロック	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6 7.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 3.8%	71 88.8%	0 0.0%	0 0.0%	80 100%
ブロック外	0 0.0%	2 2.4%	1 1.2%	5 5.9%	11 12.9%	3 3.5%	2 2.4%	0 0.0%	2 2.4%	1 1.2%	1 1.2%	1 1.2%	16 18.8%	41 48.2%	0 0.0%	0 0.0%	85 100%
不明	0 0.0%	1 0.5%	0 0.0%	9 4.2%	27 12.6%	0 0.0%	3 1.4%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.5%	0 0.0%	0 0.0%	29 13.5%	137 63.7%	7 3.3%	7 3.3%	215 100%
合計	5 0.3%	8 0.4%	7 0.5%	65 3.4%	233 12.1%	13 0.7%	16 0.8%	1 0.1%	4 0.2%	8 0.4%	4 0.4%	8 0.4%	7 9.9%	191 70.5%	1399 0.4%	1 0.1%	1928 100%

第3表 ブロック別石材構成 (II-1地点)

	黒安	黒頁	頁岩	黒曜石	褐色	赤碧玉	チャート	珪質	珪岩	溶結	凝灰	岩	ホルン	フェ	ルス	ダイ	砂岩	溶	凝	粗	安	合	計
1号ブロック	10 0.6%	25 1.6%	2 0.1%	1244 80.4%	47 3.0%	4 0.3%	4 2.3%	36 0.4%	4 0.3%	3 0.2%	3 0.2%	131 8.5%	1 0.1%	7 0.5%	19 1.2%	9 0.6%	1548 100%						
2号ブロック	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	77 96.3%	0 0.0%	0 0.0%	2 2.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	80 100%						
ブロック外	0 0.0%	2 2.4%	1 1.2%	67 78.8%	0 0.0%	1 1.2%	0 0.0%	1 1.2%	0 0.0%	0 0.0%	8 9.4%	1 1.2%	1 1.2%	0 0.0%	2 2.4%	2 2.4%	85 100%						
不明	0 0.0%	5 2.3%	0 0.0%	171 79.5%	5 2.3%	1 0.5%	4 1.9%	1 0.5%	0 0.0%	0 0.0%	19 8.8%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.5%	2 0.9%	6 2.8%	215 100%						
合計	10 0.5%	32 1.7%	3 0.2%	1559 80.9%	52 2.7%	6 0.3%	42 2.2%	8 0.4%	4 0.2%	3 0.2%	159 8.2%	2 0.1%	8 0.4%	23 1.2%	17 0.9%	1928 100%							

第4表 石材構成(礫群、II-1地点)

	砂頁	赤碧玉	チャート	珪 変	変珪岩	ホルン	砂 岩	溶 凝	粗 安	輝緑岩	酸鉄岩	合 計
南 礫 群	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 2.2%	90 97.8%	0 0.0%	0 0.0%	92 100%
北 礫 群	7 2.0%	1 0.3%	37 10.8%	1 0.3%	1 0.3%	6 1.7%	13 3.8%	12 3.5%	258 75.0%	7 2.0%	1 0.3%	344 100%
礫群外1	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.3%	1 5.3%	2 10.5%	15 78.9%	0 0.0%	0 0.0%	19 100%
礫群外2	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 14.3%	6 85.7%	0 0.0%	0 0.0%	7 100%
合 計	7 1.5%	1 0.2%	37 8.6%	1 0.2%	1 0.2%	7 1.5%	14 3.0%	17 3.7%	369 79.9%	7 1.5%	1 0.2%	462 100%

器種構成 削片6、剥片3、碎片71

石材構成 黒曜石77、チャート2、ホルンフェルス1

その他 1号ブロックの南に隣接している。

礫群・北群(第57~59図)

位置 丘陵鞍部に近い丘陵の平坦面(DV・DW-167Gほか)

規模 長径8.0m・短径(4.8)m

分布状態 調査区・北(DW-167G)に集中・分布したほか、周辺域に散漫に分布していた。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。

出土点数 344点

石材構成 粗粒安山岩258、チャート37、砂岩13、溶結凝灰岩12、砂質頁岩7、輝緑岩7など(第4表を参照)

接合資料 51例123点を確認している。

その他 50g以下の礫が208点と最も多く、以下100g未満の礫(56点)、200g未満の礫(44点)と続く。完形礫は最大547g・最小177g(平均175g)を測る。欠損礫の平均は79gだが、1kgを超える大形礫2点が出土している。礫の集中地点より西へ1mほど離れて出土した大形礫(4500gを測る)は、礫群構成礫と捉えるには重過ぎるかもしれない。

礫群・南群(第57~59図)

位置 丘陵鞍部に近い丘陵の平坦面(DU・DV-166G)

規模 長径1.8m・短径0.9m

分布状態 北群とは明確な分布の空白域が見られ、比較的散漫な分布状態を示していた。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に多出している。

出土点数 92点

石材構成 粗粒安山岩90、溶結凝灰岩2

接合資料 15例45点を確認している。

その他 50g以下の礫が42点と最も多く、以下100g未満の礫(22点)、200g未満の礫(18点)と続く。完形礫は最大305g・最小177g(平均225g)を、欠損礫の平均は77gを測る。

d. 接合資料の分布

接合作業の結果、61例160点の接合資料を確認した。接合率は8%と低調だが、約70%を占める碎片を除けば、30%近い接合率は決して低い数字ではない。基本的に、接合資料はブロック内で完結しており、石材・器種・その他のレベルで差は指摘できない。そのため、ここでは主に接合点数の多い資料を取り上げ、その分布状況を説明していきたい。

接合資料-16(第53図)は、黒曜石を用いた剥片剥離した資料が少ない中で、ただひとつ遺跡内剥離を示す貴重な接合資料。1号礫群と2号礫群の中間付近に分布している。接合資料-44・46(第54図)は石核を含むチャートの接合資料で、2ヶ所の礫群に挟まれ分布する。2例とも石核はブロックの南半に分布することから、この地点に剥片剥離地点が推定されよう。

II 調査の成果

e. 石材分布

第3表に示した通り、出土資料は15種からなる石材構成を示していた。最も多い石材は黒曜石で1559点(81%)が出土、以下ホルンフェルス159点(8%)、褐色碧玉52点(2.7%)と続く。通常、周辺遺跡で使用頻度の高い在地石材(黒色頁岩32点、黒色安山岩10点)は極めて少ない。母岩分類が比較的容易と考えていた黒曜石についても、実際には分類が難しく大別程度の分類が限界で、今回の報告では分類を断念した。母岩レベルで見た分布は不明だが、仮に、母岩レベルで見ても著しく異なるということはないと考えている。

石材別分布図(第55・56図)を見ても分かる通り、ここでは異種石材間の分布に大きな差は見られないため、母岩分析に変えて石材別に見た分布状況を器種レベルの分布(第51・52図)を交えて提示しておきたい。

黒曜石の分布 2ヶ所の礫群間(DV-166G)に集中・分布したほか、南側のDV-165Gにも散漫に分布していた。器種別に見た石器の分布状況も、南側の地点(2号ブロック)で破片が主体を占める点で特徴的だが、北側の集中部には各器種が満遍なく分布しており、相違は指摘できない。

ホルンフェルスの分布 1号ブロックのみ分布していた。微視的には、石器が集中分布するDV-166Gの南西側と北東側の2ヶ所に分布するようにも見える。細部調整を施す石器にはむかない石材だが、剥片類を量産している。北東側で接合資料が多い点を除けば、黒曜石の分布状況と大きな差は指摘できない。

褐色碧玉の分布 南北2ヶ所の礫群の周辺域に分布していた。両地点とも少量の削片と多量の破片類が分布しており、彫器類の製作に伴う資料群であるということができよう。各々の石器は地点間に偏在することなく分布しており、現状では地点間の相違点は指摘できない。

赤碧玉の分布 資料点数が少ないため分布傾向は明確ではない。赤碧玉は「希少石材」で、褐色碧玉と

同様な分布傾向が指摘できるのではないだろうか、と考えている。

溶結凝灰岩の分布 1号ブロックのみ分布した。2号礫群に近い集中部・南西側に多く分布している点で、他の石材とは異なる。

チャートの分布 1号ブロックのみ分布していた。ホルンフェルス同様に、集中部の南西側と北東側の2ヶ所に分布する傾向が指摘され、両地点を跨ぐ接合資料を確認している。南西側の地点には石核3が、北東側には破片類が出土しており、剥離地点の特定が可能かもしれない。

珪質頁岩の分布 1号ブロックのみ分布していた。ホルンフェルス同様に、集中部の南西側と北東側の2ヶ所に分布する傾向を示していた。破片類は3種類の母岩からなり、剥片の部分的加工が想定できよう。

珪質変質岩の分布 1号ブロック(集中部・北東側)のみ分布していた。4点の破片は総て母岩が異なる。このうち2点は良質で尖頭器の製作が充分可能だが、残る2点は質的には劣る。

黒色安山岩の分布 集中部の南西側と北東側の2ヶ所に分布していた。剥片類も単独出土する傾向が強く、遺跡内で剥片を剥離しているとはいえ、削片が出土していることからみて、少量の破片は彫器類の存在を暗示しているかもしれない。

黒色頁岩の分布 集中部の南西側と北東側の2ヶ所に分布していた。出土資料には少量の削片や両面加工石器の存在を示唆する剥片の接合以外にも、少量の剥片生産を示す接合資料を確認している。

砂岩の分布 集中部・北東側に分布していた。同一母岩から剥離した可能性が高い剥片2、破片3からなる。出土資料は砂岩の中でも粒度が粗く、ホルンフェルスに似た石材性状を有している。そうした意味では便宜的に剥離した剥片類であるということができよう。

(2) 第2地点

a. 概 要

石器群は、尾根状地形が東側に張り出した地点の南側斜面部に分布（第5図を参照）していた。石器の分布範囲は東西55m・南北11mに及び、総計1545点（礫・礫片244点を含む）の石器が出土した。石器ブロックを9ヶ所で、礫群を12ヶ所で確認した。地形的には、もう少し南側にも石器分布が確認できてよさそうだが、これ以上南には石器分布が見られなかった。同様に、調査区北の石器分布も地形的には充分想定可能——調査区中央より西側のブロックは確実に調査区外に伸びている——だが、尾根状台地に列状分布して終わる可能性も否定できない。礫群は、基本的に石器ブロックと重複するよう分布（第9図）していた。

石器の出土層位はVI～IX層だが、VII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。礫群も同様で、石器の出土状態とも整合していた。

石器石材は黒色頁岩が714点（42.6%、第5表を参照）と圧倒的多数を占め、黒色安山岩288点（18.6%）、チャート260点（16.8%）と続き、第1地点とは異なり、在地石材の使用頻度が極めて高い。

接合資料は43例139点を確認しており、接合率は10.6%と極めて低い数字を示した。

石器分布が調査区・北に延びるため石器群の全貌は不明だが、尖頭器の製作地点が明確に分離（8a・8bブロック）され、他のブロックとは異なる石器の分布状態を示していた。

b. 出土石器

総計1301点の石器が出土している。砕片類が970点（74.6%、剥片類と併せ96.1%）と圧倒的多数を占めている。示準的・代表的器種は槍先形尖頭器で、ほかには少量の石刃ナイフや削器が組成する。

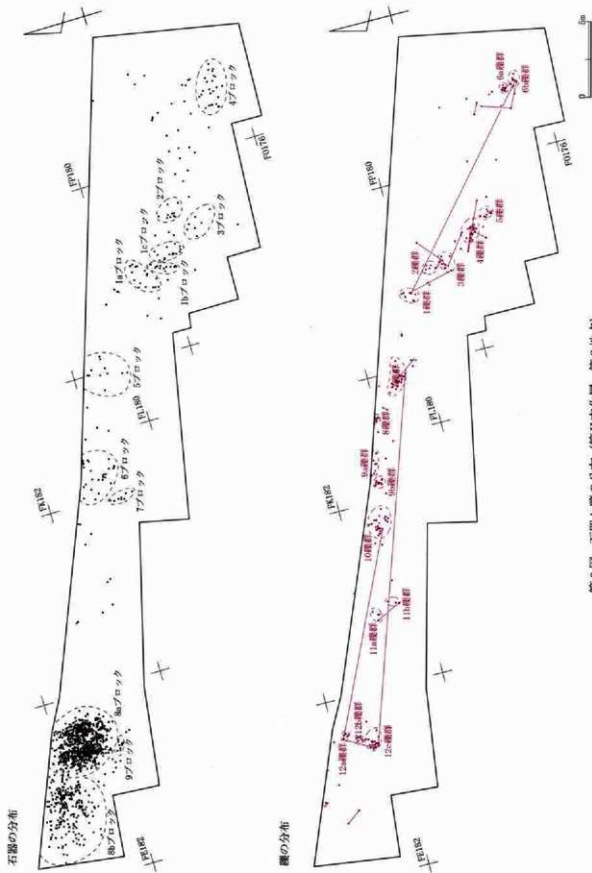
槍先形尖頭器（第60図・第61図1～4・6）

13点が出土している。尖頭器は基本的に両面加工

第5表 器種・石材構成（II-2地点）

	黒安	黒頁	砂頁	チャート	珪頁	珪安	ホルン	滑礫	粗安	ひん岩	合計
ナイフ	0 0.0%	2 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100%
尖頭器	4 30.8%	4 30.8%	0 0.0%	5 38.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	13 100%
削器	1 50.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100%
削片	0 0.0%	1 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100%
加工板	2 28.6%	4 57.1%	0 0.0%	1 14.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 100%
使用板	0 0.0%	6 60.0%	0 0.0%	4 40.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	10 100%
敲石	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 33.3%	1 33.3%	1 33.3%	3 100%
石核	4 57.1%	2 28.6%	0 0.0%	1 14.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 100%
竪長	1 16.7%	4 66.7%	0 0.0%	0 0.0%	1 16.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6 100%
剥片	92 32.9%	143 51.1%	0 0.0%	45 16.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	280 100%
砕片	183 18.9%	547 56.4%	1 0.1%	203 20.9%	18 1.9%	0 0.0%	3 0.3%	1 0.1%	14 1.4%	0 0.0%	970 100%
礫	0 0.0%	0 0.0%	3 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.4%	13 5.5%	0 0.0%	218 92.8%	0 0.0%	225 100%
礫片	1 11.1%	0 0.0%	0 0.0%	1 11.1%	0 0.0%	1 11.1%	2 22.2%	1 11.1%	3 33.3%	0 0.0%	9 100%
合計	288 18.6%	714 46.2%	4 0.3%	260 16.8%	19 1.2%	2 0.1%	18 1.2%	3 0.2%	236 15.3%	1 0.1%	1545 100%

II 調査の成果



第9図 石器と鏝の分布 (第II文化層・第2地点)

だが、周辺加工する例も出土している。また、製作途上の破損例も多く、匏型的石器の出土は極めて少ない。唯一、最も完成度の高い尖頭器が第60図1で、やや細身の木葉形状を呈している。

第60図1は、両面加工した尖頭器。調整加工は丁寧で、左右対称の石器形状を作出している。上端部の石器形状は丸く、また、断面形状もD字状を呈することから、石器の先端部は図とは逆転するかもしれない。チャート。2は、右側縁が直線の形状を示す両面加工の尖頭器。器体中央付近の剝離は表裏両面とも階段状を呈する。表面側の左側縁・上半部と裏面側の右側縁・下半部には粗く加工しており、特徴的である。チャート。3は、左側縁が弧状・右側縁が直線的であるという点や、この部分の加工が粗い点でも尖頭器2の特徴に近い。出土資料は石器中央付近で破損した後に、破損部を加工しており、破損以前は倍する程度の尖頭器が想定されよう。推定長6cm。黒色頁岩。4は、石器の表裏両面を加工した尖頭器。左側縁・下端部を欠損するため形状は不明だが、概ね木葉形状の石器形状を呈した、と捉えている。右側縁・上端部には未加工の大きな剝離面を残しており特徴的だが、最初から予定して石器に取り込んだ剝離面が現状では明確ではない。黒色頁岩。5は、両面加工した尖頭器。左側縁・下端部を欠損するため不明だが、比較的細身の尖頭器と捉えている。片側が直線的側縁を呈し、もう片側が弧状の側縁形状を呈する点が特徴的で、尖頭器2・3に似る。調整加工も丁寧で、これ以上細身にはできないほど石器が完成している反面、石器の断面は厚く、出土資料は製作途上で破損した可能性が高い。推定長8cm。黒色頁岩。6は、石器の表裏両面を加工した尖頭器。器体中央付近から欠損するため不明だが、比較的細身の尖頭器と捉えている。左右対称の側縁形状を呈し、完成を目前に破損した可能性が高い。推定長10cm。黒色安山岩。7は、裏面側周縁を加工した尖頭器。調整加工は粗く、石器製作の初期段階で破損した可能性が高い。チャート。8は、両面加工した尖頭器。石器は製作途上、中央付近で欠損。

幅広の木葉形状を呈している。この石器は9点の剥片類と接合(第72図、接-97を参照)している。チャート。

第61図1は、周縁加工した尖頭器。石器周縁の加工は概して浅く、表面側・右側縁には角度ある調整を施しており、尖頭器の典型的剝離とは明確に相違している。縦長剥片(?)を用いる。チャート。2は、周縁加工した尖頭器。石器の周縁加工は概して浅く、1と同様、右側縁にはやや角度ある加工を施している。木葉形状の石器形状を呈し、石器先端を欠損する。小形・幅広剥片を用いる。黒色安山岩。3は、周縁加工した尖頭器。側縁加工は「刃渡り」加工に近く、錯交的に施す。1と同様に、左側縁が直線的であるのに対して、右側縁は弧状気味の側縁形状を有する。4は、断面三角形形状を呈する尖頭器。稜面を大きく残す、やや幅広の剥片を石器素材に用い、裏面側に浅い剝離を、表面側に厚い角度ある加工を施している。石器は概ね左右対称で、石器基部を若干欠損する。黒色安山岩。6は、先端部を微細加工した尖頭器。断面・三角形形状を呈する石刃を素材に用い、剥片形状を大きく変えることなく、微細な剝離を左右の側縁に加え、石器を作出している。器体中央より下半を欠損する。黒色頁岩。

ナイフ形石器(第61図5・7)

2点が出土している。出土資料は断片的で、実態は明確ではない。典型的なナイフは1点と少なく、搬入石器でもあるため確実な共存関係とはいきれない。感覚的だが、出土資料は尖頭器製作に伴う砕片が主体を占めており、点数以上にナイフは客体的組成と考えている。

第61図5は、バルブの発達した幅広剥片を用い石器の表裏両面に浅い剝離を施す。石器裏面の加工は砂川期ナイフに典型的な裏面加工だが、基部破片でもあり他の部分の加工が明確ではなく、分類が妥当か、検討を要する。黒色頁岩。7は、二側縁加工したナイフ形石器。左右の側縁には対向するよう加工するほか、裏面基部調整を施している。搬入石器か。

II 調査の成果

黒色頁岩。

削器 (第61図8・9)

2点が出土している。出土点数が少なく、断片的で実態は不明だが、出土資料からみる限り剥片生産過程で作出した、比較的良好な形状の剥片を選択・加工している可能性が高い。

第61図8は、木葉形状を呈す幅広剥片を用いたもの。裏面・左側縁を粗く加工して刃部を作出している。礫面を大きく残す剥離過程の初期に生じた剥片で、他の剥片類と接合関係(接-85)を確認していること、この石器が尖頭器製作に関連した資料(接-84)と同じ母岩でもあることから、「便宜的石器」の枠内で捉え得る石器と評価できよう。黒色頁岩-1。9は、石刃に近い縦長剥片を用いた削器。調整加工は左右の側縁に見られ、表→裏面の順に粗い加工を施す。その後、右側縁には丁寧な連続加工を施している。石器の下半を欠損する。黒色安山岩。

削片 (第61図10)

1点のみ出土した。裏面側・左側縁に石器の底面を部分的に取り込んだもの。右刃の削片で、剥離面構成からみてこの削片を剥離する以前にも削片を剥離していることが分かる。一般的に削片は点状打面を呈する場合は圧倒的だが、この削片の場合は打面を大きく取り過ぎており、剥離に失敗している可能性も否定できない。黒色頁岩。

加工痕ある剥片 (第61図11・12、第62図1・3・4)

7点が出土している。礫面を残す剥離初期の大形剥片を用いるほか、多様な形状の剥片を石器素材に用いている。

第61図11は、小形の縦長剥片を用い、石器裏面を微細加工している。剥片剥離の上下両端を大きく欠損する。黒色頁岩。12は、折断削片を用い「折れ面」を加工したものの。黒色安山岩。

第62図1は、礫面を大きく残す幅広剥片を用い、側縁部分を粗く加工している。鋸歯状を呈す刃縁を

作出している。黒色安山岩。3は、表裏両面に粗い加工痕を残す。本来的には剥片に分類すべきだが、加工石器本体の存在を想定、ここでは敢えて加工痕ある石器に分類した。黒色頁岩。4は、礫面を残す幅広剥片を用いて、右側縁を整形加工・左側縁に薄い剥離を加え刃部を作出したものの。黒色頁岩。

使用痕ある剥片 (第62図2・5・6～63図、64図1)

10点が出土している。比較的形状の整う剥片を選択・石器素材に用いている。

第62図2・5・6、第63図1・2・4は、側縁や剥片端部に「刃こぼれ」を残す黒色頁岩製縦長剥片。比較的大形の剥片を使用している。第63図3・5、第64図1は、尖頭器製作に伴う不良剥片から比較的形状の整う剥片を選択的に使用したものの。使用痕は剥片形状に則している。チャート。

敲石 (第64図2・3)

3点が出土している。比較的大形の礫を使用しており、典型的な敲石とは若干相違するかもしれない。第64図2は、棒状礫を分割して用いている。分割面や礫の小口部分に集合打痕が存在するほか、側面に小剥離痕が見られ、分割面を激しく使用した一端が見える。以上の在り方は、縄文期のスタンプ形石器に共通する特徴でもある。この石器の出土層位はVIII層だがブロック外の出土でもあり、混入した可能性も否定できない。重さ1097g。溶結凝灰岩。3は、薄く扁平気味な礫の小口部分に小剥離痕を残す敲石。1417gを測る礫を用いており、先の敲石とも合わせ石器製作に使用する敲石とは異なるかもしれない。ひん岩。

石核 (第65図、第66図1)

接合資料に4点、単独出土で3点、計7点が出土している。第65図1は、求心的な剥離面構成を残した石核。比較的大形の幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。2は、拳大の円礫を分割して得た石核。分割面を打面に幅広剥片を剥離する。黒色頁岩。

第66図1は、裏面に礫面を大きく残す板状剥片を石核に用いている。石核は剥離使命を終え最終的に廃棄した、残核と捉えている。石核下端の先端には微細な小剥離痕が見られ、石核を転用して劑器的に用いている可能性も否定できない。チャート。

剥片 (第66図2～6、第67～71図)

280点が出土している。石器製作に伴う不良剥片から石刃・縦長剥片まで剥片形状は多様だが、ここでは比較的形の整った剥片を図示した。

第66図2～6、第67図2・3・5～7には、縦長剥片を図示した。礫面を残す剥片剥離の初期段階を示す例は概して少ない。第67図1・4、第68・69図には幅広剥片を図示した。剥片の背面構成は多様で、同一打面から剥片を連続剥離するもの以外にも、打点を大きく移動して剥離するもの、求心的剥離を示唆するものなどからなる。

第70・71図には、縦位、及び、横位に破損した剥片の接合例を一括、図示した。

接合資料

接合資料は43例139点を確認した。尖頭器製作関連の接合資料が多く、通常の剥片生産を示す接合資料は概して少ない。

接合資料—97 (第72図) は、剥片9点と尖頭器1点からなる接合資料。現状で、長さ11.4cm・幅8cmを測る。剥片の接合状態や尖頭器の完成度からみて、剥離開始以前には長さ20cm以上の剥片を用意していた可能性が高い。接合状態からみて、尖頭器の右側縁では3度ほど尖頭器を持ち直して、左側縁でも2度ほど尖頭器を持ち直しており、尖頭器製作の実態をよく示している。石器は製作途上に破損、製作を放棄している。チャート。

接合資料—103 (第73図) は剥片13点からなる接合資料。現状で長さ・幅とも8cmを測り、剥離段階からみて上述した接合資料に近いサイズの素材を用意していた、と考えている。接合状態から想定する限り、尖頭器は最低でも幅4cm程度まで製作が進んだ

ことを示している。チャート。

接合資料—84 (第74図) は、剥片7点、碎片2点からなる接合資料。礫面を大きく残す大形剥片を用いた尖頭器の製作初期を示す接合資料で、先端部から側縁の剥離状態を示している。現状で高さ5cm・幅10cmを測る。接合資料—75 (第74図)・74 (第75図) と同一母岩に分類。黒色頁岩—1。

接合資料—80 (第75図) は、剥片2点からなる接合資料。石核消費の初期段階を示す接合資料で、開設打面より幅広剥片を剥離している。黒色頁岩。

接合資料—73 (第75図) は4点の剥片からなる接合資料。剥片は打点に対向するよう接合しており、打点間は約4cmと狭い。剥片は典型的なポイントフレイクの諸属性を備えており、尖頭器製作の後半段階を示す資料と位置づけられよう。黒色頁岩。

接合資料—76 (第75図) は2点の剥片からなる接合資料。2枚の剥片は背面側に広い剥離面を共有しており、剥離の初期段階を示している。剥離は打点を左右に大きく振り込み、幅広剥片を剥離する。黒色頁岩。

接合資料—101 (第76図) は、剥片3点からなる接合資料。剥片1には大形・板状石核の広い剥離面を残しており、背面構成を勘案して、尖頭器製作の初期段階を示す接合資料と捉えている。幾重にも脈が発達したチャートを用いる。

接合資料—88 (第76図) は、剥片3点からなる接合資料。90°打面転移を行い剥片剥離は進み、小形・幅広剥片を剥離している。黒色頁岩。

接合資料—86 (第76図) は、剥片2点からなる接合資料。剥片2の断面形状は強く湾曲しており、尖頭器製作に伴う剥片と評価できよう。黒色頁岩—1に分類。

接合資料—62 (第77図) は、剥片4点からなる接合資料。剥片形状は典型的なポイントフレイクで、尖頭器製作の早い段階を示している。側縁の打点間は約8cmを測る。黒色安山岩。

接合資料—70 (第77図) は、剥片2点からなる接合資料。剥片形状は大形・幅広で、現状では剥離意

II 調査の成果

図は不明だが、2枚の剥片は打点高が1cmほど異なること、打点を大きく左右に振り剥片剥離していること、通常の剥片剥離とは異なり打面が小さいことなどから、接合資料は尖頭器製作に関わるもの、と理解されよう。黒色安山岩。

接合資料—72 (第78図) は、剥片2点、石核1点からなる接合資料。石核正面、及び、上面で剥離を行い、やや幅広いの小形剥片を剥離している。原石は拳大程度か。黒色頁岩。

接合資料—99 (第78図) は、剥片2点からなる接合資料。剥片1の打点が遠く不明だが、剥片1・2の打点は確実に対向している。比較的良質なチャートだが、節理が発達している。チャート—1。

接合資料—104 (第78図) は、剥片1点、砕片1点からなる接合資料で、剥離段階で破損した可能性が高い。脈が縦横に走る。チャート。

接合資料—64 (第79図) は、剥片4点、石核1点からなる接合資料。原石を1/4程度に分割して石核に用いている。剥片剥離は稜面を除去するよう剥片1・2を剥離、剥片3は打面を90°入れ替えて石核右側から剥離している。剥片3を剥離直後、石核は破損した可能性が高い。黒色安山岩。

接合資料—63 (第80図) は、剥片2点、石核1点からなる接合資料。拳大程度のお石を石核素材に用いている。剥片剥離は90°打面転移を行い進み、小形で幅広い剥片を剥離している。黒色安山岩。

接合資料—66 (第80図) は、2点の剥片からなる接合資料。剥離面の背面構成からみて、打点を大きく振り幅広い剥片を剥離したもの、と考えている。剥片2は打面を欠いており不明だが、剥離軸が右に大きく傾いており、剥片1と同じ打面から剥離したものなのか確認できない。黒色安山岩。

接合資料—102 (第81図) は、剥片3点からなる接合資料。打点を左右に振り、幅広い剥片を剥離している。頭部調整を施したうえで、打点は後上を選択している。チャート。

接合資料—90 (第81図) は、剥片2点からなる接合資料。稜面を大きく残し、石核消費の初期段階を

示している。両設打面からやや幅広い大形剥片を剥離している。黒色頁岩—3。

接合資料—67 (第82図) は、剥片2点からなる接合資料。やや幅広いの縦長剥片を連続剥離している。黒色安山岩。

接合資料—77・87・89・100 (第81・82図) は、尖頭器製作に伴う剥片類の接合資料。

接合資料—68 (第83図) は、剥片2点からなる接合資料。稜面を大きく残す石核消費の初期段階を示す資料で、幅広い剥片を剥離している。黒色安山岩。

接合資料—91 (第83図) は、剥片2点からなる接合資料。打点を大きく左右に振り、幅広い剥片を剥離している。黒色頁岩—3。

接合資料—65 (第83図) は、剥片3点からなる接合資料。厚さ1.8cm程度の板状剥片を石核に用い、小形・幅広い剥片を剥離している。打面は大きく、形状もポイントフレイクとは異なる。黒色安山岩。

接合資料—85 (第84図) は、剥片3点からなる接合資料。剥片形状は典型的なポイントフレイクと考えている。尖頭器製作を示す接合資料だが、このうち1点(接合—85)は左右の側縁を加工、削器を作出している。黒色頁岩—1。

接合資料—69 (第84図) は、剥片2点からなる接合資料。剥片1・2とも稜面を大きく残していることから、石核消費の初期段階の様相を示している、と考えている。黒色安山岩。

C. 石器と礫の分布

当該期石器群は標高159mを測る丘陵から東へ張り出した、尾根の南側斜面に分布していた。石器の分布範囲は東西55m・南北11mと約600m²に達し、総計1545点(礫・礫片244点を含む)の石器が出土した。石器ブロックを9ヶ所で、礫群を12ヶ所で確認、両者は重複するよう分布していた。

ブロック別に見た石器の出土点数は、調査区・西に位置する8a・bブロックで1166点が出土しており、他のブロックの平均(14.5点)を大きく引き離している。この地点では多数の尖頭器製作を示す接

合資料を確認した。

確認した12基の礫群は比較的少数の礫からなり、1kgを超える大形礫の使用も稀ではなく、10kgを超えるものさえあった。礫の平均重量は300g前後を示す礫群から1kgを超える礫群まで多様性に富み、礫の供給源（通常、流れ山は礫群と同じ粗粒安山岩を基盤層に多く含む）を控えた遺跡の特徴かもしれない。礫の接合資料は38例89点を確認している。大部分が礫群内の接合だが、6例ほど礫群間でも礫の接合を確認しており、その接合関係を見る限り、礫群が弧状配置する調査区・東と、礫群が直線配置するそれより西側の地点で括れるようにも見える。

1 a ブロック (第85図)

位 置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近 (FN-179G)

規 模 長径2.4m・短径1.2m

分布状態 比較的散漫に分布する。分布軸は北東一南西。

出土層位 VII層を主体に出土。VII層から出土した石器は1点と極めて少ない。

出土点数 17点

器種構成 石核1、剥片13、砕片3

石材構成 黒色頁岩13、黒色安山岩3、チャート1

その他 接合資料2例（1例は1bブロックの剥片と接合）を確認した。砕片の出土量は少ない。

1 b 号ブロック (第85図)

位 置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近 (FN-178・179G)

規 模 長径1.8m・短径0.4m

分布状態 南北に細く楕円形状に分布している。1

第6表 ブロック別器種構成 (II-2 地点)

	ナイフ	尖頭器	削 器	削 片	加工板	使用痕	礫 石	石 核	礫 片	剥 片	砕 片	合 計
1 a 号ブロック	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	1/5.9%	0/0.0%	13/76.5%	3/17.6%	17/100%
1 b 号ブロック	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	42.9%	8/57.1%	14/100%
1 c 号ブロック	0/0.0%	1/6.7%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	53.3%	8/40.0%	15/100%
2 号ブロック	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	40.0%	4/60.0%	10/100%
3 号ブロック	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	1/14.3%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	1/14.3%	3/42.9%	2/28.6%	7/100%
4 号ブロック	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	3/12.0%	0/0.0%	2/8.0%	0/0.0%	56.0%	14/24.0%	25/100%
5 号ブロック	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	1/9.1%	0/0.0%	0/0.0%	1/9.1%	72.7%	1/9.1%	11/100%
6 号ブロック	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	4/14.8%	0/0.0%	59.3%	7/25.9%	27/100%
7 号ブロック	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	62.5%	3/37.5%	8/100%
8 a 号ブロック	1/0.1%	6/0.7%	1/0.1%	0/0.0%	4/0.5%	2/0.2%	0/0.0%	0/0.0%	2/0.2%	145/17.5%	666/80.5%	827/100%
8 b 号ブロック	1/0.4%	3/1.3%	0/0.0%	1/0.4%	1/0.4%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	10.9%	207/86.6%	239/100%
9 号ブロック	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	10/100%	10/100%
ブロック外	0/0.0%	3/4.5%	1/1.5%	0/0.0%	1/1.5%	4/6.0%	3/4.5%	0/0.0%	2/3.0%	32/47.8%	21/31.3%	67/100%
不 明	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	0/0.0%	24/100%	24/100%
合 計	2/0.2%	13/1.0%	2/0.2%	1/0.1%	7/0.5%	10/0.8%	3/0.2%	7/0.5%	6/0.5%	280/21.5%	970/74.6%	1301/100%

II 調査の成果

a・1cブロックに比べ、石器の密集度は高い。

出土層位 分布範囲は狭く、VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 14点

器種構成 剥片6、砕片8

石材構成 黒色安山岩8、黒色頁岩5、チャート1

その他 接合資料は1例（1aブロックの剥片と接合）を確認。1a・1cブロックに隣接している。

1cブロック（第85図）

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近（FN-178・179G）

規模 長径1.8m・短径0.9m

分布状態 やや散漫に分布している。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 15点

器種構成 尖頭器1、剥片8、砕片6

石材構成 黒色安山岩9、黒色頁岩4、チャート1、珪質頁岩1

その他 接合資料は2例（1例は2号ブロックの剥片と接合）を確認した。石器の分布範囲は狭い。

2号ブロック（第85図）

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近（FO-178G）

規模 長径1.6m・短径1.0m

分布状態 西側は集中分布、東側は散漫に分布。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 10点

器種構成 剥片4、砕片6

石材構成 黒色安山岩8、チャート2

その他 接合資料は1例（1cブロックの剥片と接合）を確認している。

第7表 ブロック別石材構成（II-2地点）

	黒安	黒頁	砂頁	チャート	珪頁	ホルン	溶凝	粗安	ひん岩	合計
1a号ブロック	17.6% ³	76.5% ¹³	0.0% ⁰	5.9% ¹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	17
1b号ブロック	57.1% ⁸	35.7% ⁵	0.0% ⁰	7.1% ¹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	14
1c号ブロック	60.0% ⁹	26.7% ⁴	0.0% ⁰	6.7% ¹	6.7% ¹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	15
2号ブロック	80.0% ⁸	0.0% ⁰	0.0% ⁰	20.0% ²	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	10
3号ブロック	0.0% ⁰	100% ⁷	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	7
4号ブロック	56.0% ¹⁴	4.0% ¹	0.0% ⁰	40.0% ¹⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	25
5号ブロック	54.5% ⁶	36.4% ⁴	0.0% ⁰	9.1% ¹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	11
6号ブロック	66.7% ¹⁸	33.3% ⁹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	27
7号ブロック	75.0% ⁶	25.0% ²	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	8
8a号ブロック	21.4% ¹⁷⁷	49.5% ⁴⁰⁹	0.0% ⁰	26.8% ²²²	1.3% ¹¹	0.1% ¹	0.0% ⁰	0.8% ⁷	0.0% ⁰	827
8b号ブロック	0.4% ¹	92.5% ²²¹	0.4% ¹	0.8% ²	2.5% ⁶	0.4% ¹	0.4% ¹	2.5% ⁶	0.0% ⁰	239
9号ブロック	60.0% ⁶	10.0% ¹	0.0% ⁰	30.0% ³	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	10
ブロック外	43.3% ²⁹	31.3% ²¹	0.0% ⁰	16.4% ¹¹	1.5% ¹	1.5% ¹	1.5% ¹	3.0% ²	1.5% ¹	67
不明	8.4% ²	79.8% ¹⁷	0.0% ⁰	20.8% ⁵	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	24
合計	22.1% ²⁸⁷	54.9% ⁷¹⁴	0.1% ¹	19.9% ²⁵⁹	1.4% ¹⁹	0.2% ³	0.1% ²	1.2% ¹⁵	0.1% ¹	1301

3号ブロック (第85図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近 (FN・FO-178G)

規模 長径2.0m・短径1.0m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 大部分がⅦ層からⅧ層に出土、1点のみⅨ層から出土している。

出土点数 7点

器種構成 加工痕ある剥片1、縦長剥片1、剥片3、
砕片2

石材構成 黒色頁岩7

その他 接合資料は1例(接合-94)を確認している。1a~1cブロック、4号ブロックに隣接。

4号ブロック (第85図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近 (FP・FQ-177G)

規模 長径3.0m・短径1.7m

分布状態 比較的密集して分布する。

出土層位 台帳の記載はⅧ層だが、基本的にはⅦ層下部からⅧ層上部の出土と考えている。

出土点数 25点

器種構成 使用痕ある剥片3、石核2、剥片14、
砕片6

石材構成 黒色安山岩14、チャート10、黒色頁岩1

その他 接合資料は4例(チャート3例、黒色安山岩1例、接合資料-102は調査区西側の8aブロックの剥片2点と接合)を確認している。石材構成からみて剥片に対する砕片の出土量が少ない。

5号ブロック (第85図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部 (FL・FM-180G)

規模 長径2.8m・短径2.4m

分布状態 石器は比較的散漫に分布する。

出土層位 Ⅶ層下部からⅧ層上部に出土している。

出土点数 11点

器種構成 使用痕ある剥片1、縦長剥片1、剥片8、

砕片1

石材構成 黒色安山岩6、黒色頁岩4、チャート1
その他 接合資料は4例(黒色安山岩2例、チャート1例、黒色頁岩1例、接合資料-103は西側の8aブロックの剥片12点と接合)を確認している。

6号ブロック (第86図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部 (FK-180・181G)

規模 長径3.0m・短径(2.4)m

分布状態 石器は比較的散漫に分布する。石器分布は確実に調査区の北に延びている。

出土層位 Ⅶ層下部からⅧ層上部に出土している。

出土点数 27点

器種構成 石核4、剥片16、砕片7

石材構成 黒色安山岩18、黒色頁岩9

その他 接合資料は4例(黒色安山岩2例、黒色頁岩2例)を確認している。石材構成からみて剥片に対する砕片の出土量が少ない。調査精度の問題か。

7号ブロック (第86図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部 (FJ-180G)

規模 長径1.6m・短径0.8m

分布状態 石器は比較的散漫に分布する。

出土層位 Ⅶ層下部からⅧ層上部に出土している。

出土点数 8点

器種構成 剥片5、砕片3

石材構成 黒色安山岩6、黒色頁岩2

その他 接合資料は2例(黒色安山岩、2例とも6号ブロックの石器と接合)を確認している。この地点でも砕片の出土量が少ない。調査精度の問題か。

8aブロック (第86図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部 (FF・FG-182・183G)

規模 長径(5.0)m・短径3.8m

分布状態 石器は集中分布する。石器分布は確実に

II 調査の成果

調査区の北に延びている。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に多出している。

出土点数 827点

器種構成 ナイフ形石器? 1、尖頭器 6、削器 1、加工痕ある剥片 4、使用痕ある剥片 2、縦長剥片 2、剥片145、砕片666

石材構成 黒色頁岩409、チャート222、黒色安山岩177、珪質頁岩11など（第7表を参照）

その他 接合資料は20例（黒色頁岩13、チャート6、黒色安山岩1）を確認している。

8 bブロック（第86図）

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部（FE・FF-182・183G）

規模 長径5.6m・短径（3.8）m

分布状態 8 aブロックに比べて、石器の集中度は劣る。石器分布は確実に調査区の北に延びている。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に多出している。

出土点数 239点

器種構成 ナイフ形石器 1、尖頭器 3、削片? 1、加工痕ある剥片 1、剥片26、砕片207

石材構成 黒色頁岩221、珪質頁岩 6、チャート 2、黒色安山岩 1 など（第7表を参照）

その他 接合資料は 5 例（黒色頁岩 4、チャート

1）を確認している。

9号ブロック（第86図）

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部（FG-182G周辺）

規模 長径0.8m・短径0.4m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 台帳の記載はVIII層だが、基本的にはVII層下部からVIII層上部の出土と考えている。

出土点数 10点

器種構成 砕片10

石材構成 黒色安山岩 6、チャート 3、黒色頁岩 1

その他 若干の空白域を隔てて 8 a ブロックに接して分布。ブロックの分離が有意か、検討を要す。

1号礫群（第87図）

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近（FN-179・180G）

規模 長径0.8m・短径0.4m

分布状態 1号ブロックの北側に散漫に分布している。見かけ上、礫は直線配列するよう見える。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。

出土点数 8点

第8表 重量別礫の構成比（II-2地点）

	100g未満	200g未満	300g未満	500g未満	1000g未満	1000g以上	合計
1号礫群	1	1	3	2	1	0	8
2号礫群	0	2	0	1	0	4	7
3号礫群	5	1	1	2	4	0	13
4号礫群	4	4	3	4	6	0	21
5号礫群	1	0	0	0	0	8	9
6a号礫群	4	3	1	2	0	0	10
6b号礫群	1	1	3	5	1	0	11
7号礫群	15	1	3	2	1	2	24
8号礫群	1	0	1	1	3	0	6
9a号礫群	1	0	0	1	2	3	7
9b号礫群	3	3	3	3	0	1	13
10号礫群	4	5	3	5	2	4	23
11a号礫群	0	1	2	1	0	0	4
11b号礫群	0	0	0	0	1	2	3
12a号礫群	2	1	1	3	0	0	7
12b号礫群	0	1	4	1	2	0	8
12c号礫群	4	5	2	7	3	0	21
礫群外	18	6	3	4	9	8	48
合計	64	35	33	44	35	32	243

石材構成 粗粒安山岩 8

接合資料 2例(1例は3mほど離れた3号礫群と、1例は15mほど離れた6号礫群と接合)を確認している。

その他 200~300g以下の礫が3点多出。500gを超える礫も、1点だが出土している。礫重量は最大574g・最小98g(平均295g)を測り、それぞれ232g・394gを測る完形礫(円礫)2点が出土している。

2号礫群(第87図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近(FN-179G)

規模 長径1.4m・短径0.9m

分布状態 1aブロックに重複、散漫に分布する。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。

出土点数 7点

石材構成 粗粒安山岩 7

接合資料 なし

その他 1000g以上の礫が4点多出しており、礫重量は平均で2723g(最大で10kgを超える礫が出土)を測る。

3号礫群(第9図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近(FN-179G)

規模 長径0.9m・短径0.7m

分布状態 1a~1cブロックに接して散漫に分布する。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。

出土点数 13点

石材構成 粗粒安山岩13

接合資料 4例(このうち1例は1号礫群と、1例は4号礫群と接合関係を有する)を確認している。

その他 100g未満の礫が5点多出しており、礫重量は平均で294g(最大548g、最小13g)を測る。

4号礫群(第87図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近(FM・FN-178G)

規模 長径1.1m・短径1.0m

分布状態 2号ブロックに重複、比較的散漫に分布する。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。

出土点数 21点

石材構成 粗粒安山岩21

接合資料 6例(うち1例は3号礫群と、その他は基本的に礫群内で接合)を確認している。

その他 500g前後を測る礫が6点と最も多く出土している。礫重量は平均で301g(最大で600g、最小で35g)を測る。

5号礫群(第87図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近(FN-178G)

規模 長径0.7m・短径0.5m

分布状態 3号ブロックに重複、比較的集中して分布する。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。

出土点数 9点

石材構成 粗粒安山岩 9

接合資料 なし

その他 1000g以上を測る礫が6点と最も多く出土している。礫重量は平均で2315g(最大で11800g、最小で14g)を測る。

6a礫群(第87図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近(FQ-177G)

規模 長径0.35m・短径0.35m

分布状態 6号ブロックに重複して分布する。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。

II 調査の成果

出土点数 10点

石材構成 粗粒安山岩10

接合資料 2例を確認している。2例とも礫群内で接合する。

その他 200g以下の礫が7点と最も多く出土している。礫重量は平均で165g（最大で485g、最小で27g）を測る。

6b礫群（第87図）

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の先端付近（FQ-177G）

規模 長径0.8m・短径0.5m

分布状態 6号ブロックに重複して分布する。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。

出土点数 11点

石材構成 粗粒安山岩11

接合資料 4例（このうち、1例は1号礫群、1例は6a礫群と接合関係を有する）を確認している。

その他 200g程度の礫が4点と最も多く出土している。礫重量は平均で335g（最大で746g、最小で97g）を測る。

7号礫群（第87図）

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部（FL・FM-180G）

規模 長径2.0m・短径1.2m

分布状態 5号ブロックに重複して分布する。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。

出土点数 24点

石材構成 ホルンフェルス12、粗粒安山岩8、砂岩3、珪質変質岩1

接合資料 7例（このうち、1例は25mほど離れた12c号礫群と接合、その他は基本的に礫群内で接合）を確認している。

その他 100g未満の礫が15点と最も多く出土している。礫重量は平均で521gだが、最大で8900gを

測る礫が平均重量を大きく上げている。

8号礫群（第88図）

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部（FL-181G）

規模 長径0.3m・短径0.3m

分布状態 比較的大形の礫がL字状に分布する。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 6点

石材構成 粗粒安山岩6

接合資料 1例（礫群内で接合）を確認している。

その他 500~600g程度の礫が3点と最も多く出土している。礫重量は平均で398g（最大で622g、最小で46g）を測る。

9a礫群（第88図）

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部（FK-181G）

規模 長径1.3m・短径0.4m

分布状態 比較的散漫だが、大小の礫が東西方向に直線的に並んで分布している。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 7点

石材構成 粗粒安山岩7

接合資料 なし

その他 礫重量は平均で2398g（11kgを超える大形礫が平均値を引き上げている）だが、1000g程度の大形礫が主体を占める。

9b礫群（第88図）

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部（FK-181G）

規模 長径0.6m・短径0.4m

分布状態 大小の礫が集中分布している。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 13点

石材構成 粗粒安山岩13

接合資料 なし

その他 1000gを超える礫1点を除いて、礫重量は200~300g程度と、この地点では小形礫を使用する礫群の部類に入る。

10号礫群 (第88図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部 (FJ-181G)

規模 長径1.8m・短径1.4m

分布状態 比較的大形の礫が散漫に分布している。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 23点

石材構成 粗粒安山岩23

接合資料 5例 (1例は12c礫群の礫と接合関係を有している)を確認している。

その他 1000gを超える大形礫が4点多い。礫の平均重量は715gだが、大形礫を除けば200~300g程度に平均値は下がる。

11a礫群 (第88図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部 (FI-181G)

規模 長径0.8m・短径0.4m

分布状態 散漫に分布している。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 4点

石材構成 粗粒安山岩3、ホルンフェルス1

接合資料 1例 (11b礫群の礫と接合関係を有している)を確認している。

その他 200~300g程度の礫を多く用いている。構成礫の数が少なく、礫群と認定可能か、疑問も残る。

11b礫群 (第88図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部 (FI-181G)

規模 長径0.3m・短径0.3m

分布状態 径0.3m程の範囲に集中分布している。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 3点

石材構成 粗粒安山岩2、ホルンフェルス1

接合資料 1例 (11a礫群の礫と接合関係を有している)を確認している。

その他 200~300g程度の礫(平均重量は259gを測る)を多く用いている。構成礫の数が少なく、礫群と認定可能か、疑問も残る。

12a礫群 (第88図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部 (FG-182G)

規模 長径0.5m・短径0.3m

分布状態 比較的散漫に分布している。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 7点

石材構成 粗粒安山岩7

接合資料 2例 (1例は12c礫群の礫と接合関係を有している)を確認している。

その他 礫は比較的小形で、300g程度の礫(平均は227g)を多く用いている。

12b礫群 (第88図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部 (FG-182G)

規模 長径0.5m・短径0.4m

分布状態 比較的散漫に分布している。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 8点

石材構成 粗粒安山岩8

接合資料 2例 (2例とも礫群内で接合する)を確認している。

その他 礫は比較的小形で、200~300g程度の礫(平均重量は348g)を多く用いている。

12c礫群 (第88図)

位置 丘陵から東側に延びた、やせ尾根の平坦部 (FG-182G)

規模 長径1.1m・短径0.6m

II 調査の成果

分布状態 径0.5m程の範囲に集中分布している。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 21点

石材構成 粗粒安山岩21

接合資料 5例（1例は7号礫群と、1例は10号礫群の礫と接合）を確認している。

その他 礫は比較的小形で、300g程度の礫(平均は286g)を多用するほか、500g前後の礫(最大576gを測る)を用いる。

d. 接合資料の分布

接合作業の結果、43例139点の接合資料を確認した。接合率は10%と低調だが、75%を占める砕片を除いた40%を超える接合率は、尖頭器の製作址ということ踏まえれば、あながち低い数字とはいえない。接合資料は分布密度の高い8a・bブロックに集中、他のブロックを凌駕していた。接合資料は大部分がブロック内の接合だが、調査区東端の4号ブロック(50mほど離れている)などとも接合関係が見られ、石器群の同時性を示唆していた。

黒色頁岩 25例64点の接合資料を確認した。剥片9点の接合が最大で、平均は2.5点と少ない。8a・bブロックに分布した接合資料は7割(17例)を占め、大部分が尖頭器関連の資料と考えている。これ以外のブロックで確認した接合資料は縦長剥片を含む剥片類であることは注意されよう。

第89図には、8a・bブロックに分布した接合資料を図示した。14例がブロック内で接合が完結、3例がブロック間で接合している。接合資料-76は1号ブロックに近いFN-177Gに出土した剥片(第75図)と接合した。現状では剥片の移動理由は不明だが、比較的形状が整う台形剥片で、臨機的使用には耐える属性を備えている。接合資料-79は調査区東端に近いFQ-177Gに出土した砕片(第71図参照)と接合した。この接合資料は3点が接合して剥片に戻る接合資料で、なぜ50mも離れて接合したのか理解に苦しむ。接合資料-85は1aブロックに出土した剥片(第84図)と接合した。尖頭器製作に伴

う剥片の選択的使用を示す接合例だが、不定形剥片でもあり、一義的に移動したのではないだろう。

第90図には、8a・bブロック以外で確認した接合資料を図示した。接合資料-72は石核と剥片の接合例。接合状態からみて、この地点で複数の剥片を剥離、石核を消費した可能性が高い。接合資料-90・91は剥片類の接合例。出土点数からみて、剥片生産は低調で、石核を少量消費している程度である。接合資料-83・92~94は剥離段階で破損した剥片の接合例。石刃に近い78は搬入石器である可能性も否定できない。

黒色安山岩 10例29点の接合資料を確認した。剥片6点の接合が最大で、平均接合点数は約3点と少ない。尖頭器製作を示す確実な接合例は1例(接合-62)を除いてほかにはない。

接合資料-62・63・64・68はブロック間で接合したもの。接合資料-62は8aブロックで作出した尖頭器の不要剥片の中から大形剥片を選び5号ブロックに持ち出した可能性が強い。接合資料-63・64は隣接するブロック間(6・7号)の接合で、移動理由は明確ではない。接合資料-68については判断材料に乏しく、剥離地点は特定できない。

接合資料-69・70はブロック外の剥片と接合する例で、剥片の移動理由は不明だが、礫群の分布に重なる点に注意されよう。

チャート 8例46点の接合資料を確認した。10点を超える剥片類が接合するもの2例を確認している。8a・bブロックの接合資料は総て尖頭器製作を示す接合資料、4号ブロックの接合資料は通常の剥片剥離に伴う剥片の接合資料と捉えている。接合資料-102は東西両端のブロック(4・8a号)間で、104は1・4号ブロック間で接合関係を有する。

e. 母岩分布

母岩分類は難しく石器群の構造的な理解には程遠い状況だが、ここでは分類の現状のみ報告しておく。チャート 5母岩75点を抽出した。チャート-1は44点からなる。4号ブロックに出土した剥片2を除

く44点の剥片類が、8aブロックに出土している。この母岩は4例の接合資料(97~100)を含んでおり、現状では4例とも尖頭器関連の資料と考えている。チャート-2(計6点からなる)は4号ブロック、及び、その周辺域に分布した。尖頭器1・接合資料(101)1を含む。チャート-3は8aブロックに剥片2が、4号ブロックに剥片1が分布した。3点の剥片は形状からみて通常の剥離で得た剥片。チャート-4は17点からなる。2点を除いて8aブロックに出土しており、剥片類17点が総て接合(103)した。チャート-5は剥片2・碎片3からなる。碎片2が2号ブロックに、碎片1が1bブロックに、剥片1が4号ブロックに、剥片1がブロック外に出土した。現状では接合関係を確認できない。

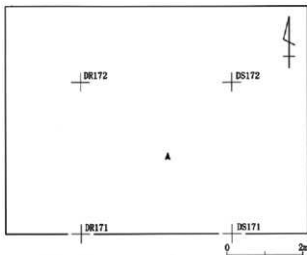
黒色頁岩 10母岩69点を抽出した。黒色頁岩-1は8aブロックに25点が、8bブロックに3点が、1aブロックに1点が出土した。この母岩には4例の接合資料(84~87)を含んでおり、いずれも尖頭器関連の接合資料と考えている。黒色頁岩-2は総て8aブロックに分布した。この母岩は接合資料-88・89を含む。接合資料は2例とも尖頭器関連の資料。黒色頁岩-3は総計6点からなる母岩別資料。1a~cブロックに剥片(1a・bブロックに各1点、1cブロックに2点)が分布したほか、3号ブロックには剥片1が、6号ブロックには剥片1が出土した。この母岩を構成する剥片は大形剥片(接-90・91)が主で、通常の剥片生産を示している。黒色頁岩-4は8bブロックから出土した。剥片1、剥片2、碎片2からなる。黒色頁岩-5・6・7は、それぞれ接合する2点の剥片からなる資料。母岩5(接合-92)は1aブロック、母岩6(接-93)はブロック外、母岩7(接合-94)は3号ブロックに出土した。母岩8・9は、それぞれ5号・1aブロックから出土。

(3) 第3地点

尖頭器1が単独で出土している。丘陵鞍部に位置しており、樺状剥離が特徴的な形器類が多量に出土した第1地点の石器群とは20mほど離れている。

出土した尖頭器(第95図1)は、器体の中央付近から欠損しているため詳細は不明だが、柳葉形状を呈する尖頭器と考えている。この尖頭器の推定長は約7cmと見られ、中形の部類に入る。調整加工は表面側・左側縁が先行、途中石器を持ち替えて表面側・右側縁、裏面側・右側縁の順に進み、石器裏面に節理面を残して剥離を終えている。残存状況からみてほぼ完成状態を示している。破損したのち、石器は器種転用され、破損部分(折れ面)には微細な調整加工を施している。調整加工は折れ面を完全に除去するほど丁寧で、加工状態は撞器的にも見える。この石器は撞器的にも使用可能だが、特に右側縁は直線の形状を残しており、削器の機能も備えているようにも見える。チャート製。

この石器の台帳上の出土層位はXII層だが、石器の層位的見解と形態的な特徴とは大きくかけ離れている。出土地点の土層と石器の「取り上げ高」を照合した結果、レベル的にはXII層だが、そこから確実に出土したということを確認する根拠が提示できないため、ここでは形態的特徴を重視、第2文化層出土の石器と捉えた。



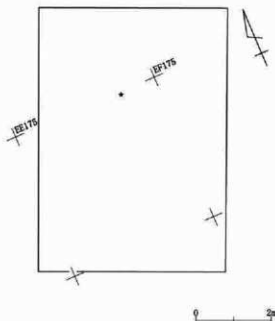
第10図 石器の分布(第II文化層・第3地点)

II 調査の成果

(4) 第4地点

丘陵鞍部に近い南東側斜面に位置しており、第1地点出土の石器群とは50mほど離れている。石器はVII層から1点のみ単独出土した。出土地点・南の試掘が甘く当該期石器群の出土も想定可能だが、石器の出土量・調査期間を勘案して対応したものだが、調査が不十分と言えれば不十分である。

出土した石器(第95図2)は、礫面を大きく残す大形剥片を用い、側縁に刃部を作出したもの。やや粗い調整加工を表裏両面に施し、直線的な刃部を作出している。石器石材は周辺遺跡では少ない砂岩を用いており、礫器的機能が想定可能かもしれない。101gを測る。ここでは便宜的に「加工痕ある剥片」と捉えた。



第11図 石器の分布(第II文化層・第4地点)

(5) 第5地点

a. 概要

石器群は浅い谷が丘陵に入り込む丘陵の東側斜面に出土した。石器は南北15m・東西10m程の範囲に広がり、礫13点を含む58点の石器が出土、石器ブロックを4ヶ所、礫群を1ヶ所で確認した。既に説明した第1～第4地点の石器群とは直線距離で200m以上も離れており、後述する第6地点の石器群とも120mほど離れている。4ヶ所のブロックは、概ね浅く入り込んだ谷を意識して配置しているようにも見えた。

石器の出土層位はVII～IX層だが、VII層から最も多く出土した。礫群の出土状態も同様で、出土状態は両者とも整合していた。

石器石材は、黒色頁岩が44点と圧倒的多数を占めており、その他の石材では礫を除けば黒曜石1が出土しているのにすぎない。

接合資料は3例6点を確認した。



第12図 石器と礫の分布(第II文化層・第5地点)

b. 出土石器

58点の石器(礫9点を含む)が出土した。礫を除いた剥片類の組成率は73%と通常より20%近く低く、搬入石器の占める割合が高い。示準的・代表的器種は二側縁加工のナイフで、このほかには石刃類が安定して組成するようである。

ナイフ形石器 (第95図3~7)

5点が出土している。大部分が欠損資料で詳細は不明だが、加工部位からみてナイフの形態的多様性が指摘されよう。

第95図3は、二側縁加工のナイフか。石器の上下両端を欠損するため不明だが、残存加工部位、及び、右側縁・下部の抉れた側縁形態からみて判断した。黒色頁岩。4は、端辺加工のナイフ。石器基部を欠損する。黒色頁岩。5は、基部側の右側縁を粗く加工したナイフ。残存部分が少なく不明だが、側縁の二次加工を開始した直後に、破損して石器製作を放棄した可能性が高い。黒色頁岩。6は、二側縁加工のナイフ。石器基部を欠損する。打面部が先端部に一致するよう石器素材を用いる在り方は、3や4の素材の用い方に一致している。黒色頁岩。7は、側縁加工したナイフ。幅広剥片の側縁に丁寧に連続剥離している。先端部を欠損する。黒色頁岩。

削片 (第95図8)

1点のみ出土している。この石器を除いて、出土資料は総て黒色頁岩を用いている。

8は、左側縁に礫面を残す削片。石器・裏面を構成する大きな二つの剥離面には、石器表面のスレ具合が異なり、単なる同時剥離とは判断できないため、ここでは削片と捉えた。右側縁から左側縁に向う斜め方向の剥離の性格は不明だが、現状では石器を薄く仕上げる意図が働いた、と考えている。黒曜石。

加工痕ある剥片 (第96図1)

2点が出土している。石器素材には1点が石刃を、もう1点は幅広剥片を用いている。

第96図1は、比較的大形の石刃を用い剥片端部を加工している。この剥片端部の加工は剥片軸に直交しており、端辺加工のナイフとは決定的に異なる。黒色頁岩。もう1点は不定形剥片の打面部を加工、ノッチ状に石器を整形したもの。加工意図は不明。黒色頁岩。

縦長剥片 (第96図2~4、第97図1)

4点が出土している。4点とも搬入石器と捉えている。

第96図2・3は、剥片端部に礫面を小さく残す。両側縁が並行するわけでもなく、また、先端が一点で交わるわけでもない。第96図4・第97図1も比較的剥離が進んだものだが、同様に剥片先端の形状は甘く典型的な石刃とはいえない。4点が剥離初期の所産で、もう少し石核消費が進めば典型的な石刃の剥離に成功するのかわ判断できない。全般に打面調整は顕著で、点状の打面を有している。現状では、頭部調整は見られない。黒色頁岩。

剥片類 (第97図2~5、第98図)

21点が出土しており、うち9点を図示した。剥片と砕片の出土量からみて、剥片生産は低調と捉えるべきである。打面調整を施す剥片(第97図2・5、第98図2~4)は半数程度で、残る剥片には調整は見られない。剥片には礫面を残す例が少なく、剥離が進んだ段階の剥片である点は注意すべきだろう。

接合資料

接合資料は3例6点を確認した。剥離段階の破損を示す接合資料、及び、打面転移を伴う接合資料で、

第9表 器種・石材構成 (II-5地点)

	ナイフ	削片	加工痕	縦長	剥片	砕片	礫	合計
黒 頁	5 100%	0 0.0%	2 100%	4 100%	21 100%	12 100%	0 0.0%	44 75.9%
黒 曜 石	0 0.0%	1 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.7%
粗 安	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	13 100%	13 22.4%
合 計	5 100%	1 100%	2 100%	4 100%	21 100%	12 100%	13 100%	58 100%

II 調査の成果

石刃剥離を示す接合資料は見られない。

接合資料一107(第98図5)は、剥離段階で破損した剥片の接合資料。やや広い複剥離打面から剥離しており、大形・幅広い剥片形状を呈している。剥片の剥離面構成からみて、打点を左右に大きく振り剥離を進めた可能性が高い。黒色頁岩。接合資料一105(第99図)は、小形剥片2点の接合資料。剥片1・2の打点は完全に一致することから、剥片1・2は剥離段階で破損したもの(同時剥離)と考えている。黒色頁岩。接合資料一106(第99図)は、小形の幅広い剥片2点からなる接合資料。90°打面転移を行い、剥片剥離している。黒色頁岩。

c. 石器と礫の分布

既に述べた通り、石器群は浅い谷が丘陵に入り込む丘陵の東側斜面に分布していた。石器は南北15m・東西10m程の範囲に広がり、礫13点を含む58点の石器が出土、石器ブロックを4ヶ所、礫群を1ヶ所で確認した。遺跡北端に近い第1～4地点の石器群とは直線距離で200m以上、最近接の石器群(第6地点)とも120mほど離れており、第5地点の石器群は孤立気味である。石器の分布地点は傾斜が強く、適当な居住空間とはいえない。全般的に剥片生産が低調であるということも、この想定を支持していると考えている。

1号ブロック(第101図)

位置 東側の沖積地から浅く入り込んだ谷を隔む丘陵斜面(GD・GE-134G)

規模 長さ2.2m・短径2.0m

分布状態 比較的散漫に分布する。

出土層位 Ⅷ層に出土している。

出土点数 13点

器種構成 加工痕1、縦長剥片2、剥片7、碎片2、礫1

石材構成 黒色頁岩12、粗粒安山岩1

その他 接合資料は2例(黒色頁岩、1例は2号ブロックの石器と接合)を確認している。剥片に対する碎片の出土量が少ない。

第10表 ブロック別・礫群別石材構成(Ⅱ-5地点)

	黒 頁	黒曜石	粗 安	合 計
1号ブロック	92.3 ¹²	0.0 ⁰	7.7 ¹	100 ¹³
2号ブロック	100 ⁶	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ⁶
3号ブロック	77.8 ⁷	11.1 ¹	11.1 ¹	100 ⁹
4号ブロック	100 ¹¹	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ¹¹
ブロック外	77.8 ⁷	0.0 ⁰	22.2 ²	100 ⁹
1号礫群	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ⁹	100 ⁹
不 明	100 ¹	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ¹
合 計	75.9 ⁴⁴	1.7 ¹	22.4 ¹³	100 ⁵⁸

第11表 ブロック別・礫群別器種構成(Ⅱ-5地点)

	ナイフ	剥 片	加工痕	縦 長	剥 片	碎 片	礫	合 計
1号ブロック	0.0 ⁰	0.0 ⁰	7.7 ¹	15.4 ²	53.8 ⁷	15.4 ²	7.7 ¹	100 ¹³
2号ブロック	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	16.7 ¹	50.0 ³	33.3 ²	0.0 ⁰	100 ⁶
3号ブロック	11.1 ¹	11.1 ¹	0.0 ⁰	0.0 ⁰	66.7 ⁶	0.0 ⁰	11.1 ¹	100 ⁹
4号ブロック	27.3 ³	0.0 ⁰	0.0 ⁰	9.1 ¹	27.3 ³	36.4 ⁴	0.0 ⁰	100 ¹¹
ブロック外	11.1 ¹	0.0 ⁰	11.1 ¹	0.0 ⁰	22.2 ²	33.3 ³	22.2 ²	100 ⁹
1号礫群	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ⁹	100 ⁹
不 明	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ¹	0.0 ⁰	100 ¹
合 計	8.6 ⁵	1.7 ¹	3.4 ²	6.9 ⁴	36.2 ²¹	20.7 ¹²	22.4 ¹³	100 ⁵⁸

2号ブロック (第101図)

位置 東側の沖積地から浅く入り込んだ谷を臨む丘陵斜面 (GD・GE-133G)

規模 長径2.7m・短径1.0m

分布状態 比較的散漫に分布する。

出土層位 VII層下部からVIII層上部に出土している。

出土点数 6点

器種構成 縦長剥片1、剥片3、碎片2

石材構成 黒色頁岩6

その他 接合資料は1例(1号ブロックの石器と接合)を確認している。剥片に対する碎片の出土量が少ない。

3号ブロック (第101図)

位置 東側の沖積地から浅く入り込んだ谷を臨む丘陵斜面 (GE-132G)

規模 長径3.1m・短径1.3m

分布状態 比較的散漫に分布する。

出土層位 VII層からIX層に出土している。

出土点数 9点

器種構成 ナイフ形石器1、削片1、剥片6、礫1

石材構成 黒色頁岩7、黒曜石1、粗粒安山岩1

その他 接合資料なし。ここでも剥片に対する碎片の出土量が少ない。

4号ブロック (第101図)

位置 東側の沖積地から浅く入り込んだ谷を臨む丘陵斜面 (GC・GD-133・134G)

規模 長径2.1m・短径1.5m

分布状態 比較的散漫に分布する。

出土層位 VIII層からIX層に出土している。

出土点数 11点

器種構成 ナイフ形石器3、縦長剥片1、剥片3、碎片4

石材構成 黒色頁岩11

その他 接合資料なし。3点のナイフと縦長剥片は搬入石器。碎片の出土量が少なく、ここでも剥片生産は低調である。

1号礫群 (第12図)

位置 東側の沖積地から浅く入り込んだ谷を臨む丘陵斜面 (GD-135G)

規模 長径1.4m・短径0.7m

分布状態 比較的集中して分布する。

出土層位 VIII層下部からVIII層上部に最も多く出土している。

出土点数 9点

石材構成 粗粒安山岩9

接合資料 なし

その他 100g以上を測る礫は皆無。礫の平均重量は約55gで、総て破損礫からなる。

d. 接合資料の分布

接合作業の結果、3例6点の接合資料を確認した。基本的に、接合資料は1号ブロック、及び、周辺域に分布していた。

接合資料-105・106は基本的には1号ブロックに分布する資料である。全般的には低調な剥片生産が、この地点では多少なりともみられた。剥離段階の破損と捉えた接合資料-107は、礫群の分布域に単独出土しており、意図的折断を想定するべきかもしれない。

e. 石材別(器種別)分布

黒曜石の1点を除いてこの石器群の石材構成は黒色頁岩のみからなっていた。母岩分類が難しいため、ここでは器種別分布の概要を記す。

石器群の主たる構成器種はナイフや縦長剥片であった。出土資料を見る限り、碎片の出土量が少ないこと、出土点数の数の割には接合資料が少ないことから、これらについては大部分が搬入石器と断定した。器種別に見た分布上の差を敢えて指摘するなら、ナイフ3点が出土した4号ブロックが特徴的である。また、これとは逆に、2例の接合資料を確認している1号ブロックでは意外に碎片が少なく特徴的だが、現状で見る限り4ヶ所のブロックに内容的な差は指摘できない。

II 調査の成果

(6) 第6地点

a. 概要

石器群は、丘陵性台地の南東斜面部に分布した。石器は南北3m・東西4m程の範囲に広がり、11点の石器が出土した。

石器の出土層位はVII～VIII層で、VII層（相当層）で7点、VIII層で4点が出土している。接合資料は1例2点を確認している。

石器石材は黒色安山岩が9点と圧倒的多数を占め、残り2点が黒色頁岩である。

この地点のVIII層は変質しており軟質・土壌化が著しいため、地点間の対比を難しくしている。実際、出土石器は第1～5地点出土の石器とは大きく様相が異なるのであり、下層の第3文化層に繰り入れ理解すべき石器群かもしれない。

b. 出土石器

11点の石器が出土している。出土資料は量的にも貧弱で、断片的である。石器群を支えた主な器種は切出形のナイフで、これ以外では削器が加わる程度である。

ナイフ形石器（第100図）

2点が出土している。形態的にもサイズのにも、さらには素材剥片の用い方も他の地点のナイフとは異なり、類似要素に乏しい。

第100図1は、石器の基部・先端を欠損する切出形

のナイフ形石器。両設打面を有す石核から剥片を剝離、石器の素材に用いる。剥片形状の詳細は不明だが、残存状況から判断して、打面側が狭く先端側が広い剥片形状が想定されよう。調整加工は両側縁を粗く大きく打ち欠いたあと、微細加工を施し石器を作出している。右側縁の刃部は若干使用して消耗している。搬入石器。黒色安山岩。2は、小形剥片を用いた切出形のナイフ形石器。素材剥片の形状を巧く取り込んで石器を作出しており、少ない加工量で石器の製作を終えている。石器の右側縁、及び、基部を切断した上で側縁を加工している。搬入石器。黒色安山岩。

削器（第100図4）

1点が出土している。大形・幅広剥片を用い、左側縁を粗く加工して刃部を作出している。この石器の破損が加工段階であるか、使用段階であるか、については現状では判断できない。黒色安山岩。

石核（第100図3）

1点が出土している。大形の板状剥片を石核素材に用いる。幅広の小形剥片を剝離するものだが、剥片が得られないまま石核を放棄している可能性が高い。接合資料—108。黒色安山岩。

第12表 ブロック別石材構成（II-6地点）

	黒安	黒頁	合計
1号ブロック	7 87.5%	1 12.5%	8 100%
ブロック外	2 66.7%	1 33.3%	3 100%
合計	9 81.4%	2 18.2%	11 100%

第13表 ブロック別器種構成（II-6地点）

	ナイフ	削器	石核	剥片	碎片	合計
1号ブロック	2 25.0%	0 0.0%	1 12.5%	3 37.5%	2 25.0%	8 100%
ブロック外	0 0.0%	1 33.3%	0 0.0%	0 0.0%	2 66.7%	3 100%
合計	2 18.2%	1 9.1%	1 9.1%	3 27.3%	4 36.4%	11 100%

c. 石器の分布

第6地点出土の石器は、多田山丘陵の南東側斜面に分布していた。石器の分布範囲は狭く、確認した石器ブロックも1ヶ所と少ない。

1号ブロック (第103図)

位置 丘陵性台地の南東側斜面 (EY・FA-121 G)

規模 長径2.5m・短径1.3m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 VII層 (相当層) からVIII層に出土している。

出土点数 8点

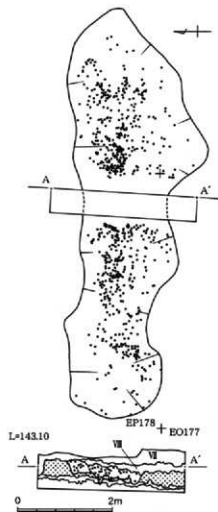
器種構成 ナイフ形石器2、石核1、剥片3、砕片2

石材構成 黒色安山岩7、黒色頁岩1

その他 接合資料1例2点 (接合資料-108) を確認した。砕片の出土量が少なく、剥片生産は低調である。

(7) 炭化物集中地点

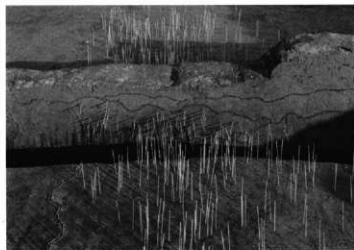
谷頭に近いEP・EQ-178Gで確認した。炭化物の集中地点 (第13図) は、多量の彫器類が出土した第1地点と、尖頭器石器群の出土した第2地点の中間に位置しており、その確認面はセクション図から判断する限り、IX層上面ということになる。炭化物は試掘坑を拡張して調査しようだが、周辺域に旧石器が出土したわけではなく、炭化物が単独で存在しよう。炭化物の分布範囲は、現状で長径6.45



第13図 炭化物集中地点 (第II文化層・第7地点)



炭化物集中地点、完備状態



炭化物の確認状態

II 調査の成果

m・短径2.20mを測る。

詳細は不明だが、おそらく炭化物を確認したのち、平面精査と炭化物の「載ち割り」を平行させ遺構の性格を検討したはずである。記録類から見る限り、大きな炭化物の塊や焼土が分布したわけではなく、炭化物はIX層のみから出土ということである。注記には「IX層土に炭化物が混入」とあり、セクション図にある「立ち上がり」は炭化物の有無を基準に認定した可能性が残る。

一般的に、ローム中の遺構は生活面に近づくほど遺構の「立ち上がり」は明確ではなくなり、仮に図示した通り確実に立ち上がるなら、IX層の上から掘り込んだものということになる。

(8) その他の石器

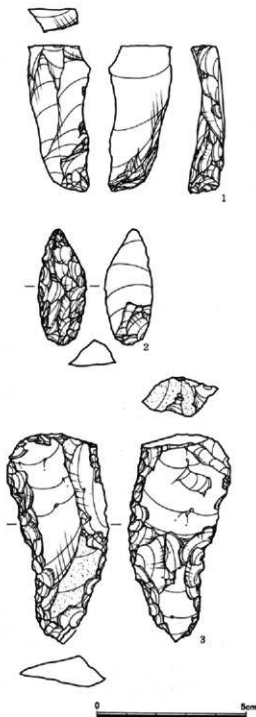
ここでは、上層の包含層調査で出土した旧石器3点を図示する。1点(第14図3)は出土地点が不明だが、残る2点は出土地点も確実で、石器の形態的特徴や母岩の特徴からみて、おおよそAs—Ok1の降下段階の所産と見て大過なく、紹介しておく。

第14図1は、上半部を欠損した縦長剥片。左側縁には稜上調整の痕跡を残しており、剥離面構成からみて、両設打面の存在と縦長剥片(石刃?)の連続剥離を示唆している。剥片剥離後、左側縁下端を加工するほか、右側縁には連続する「刃こぼれ」が生じている。石器は白濁した黒曜石を用いている。石器の出土地点はDQ—163G。類似した黒曜石が約20m離れた第1地点の石器にもある。

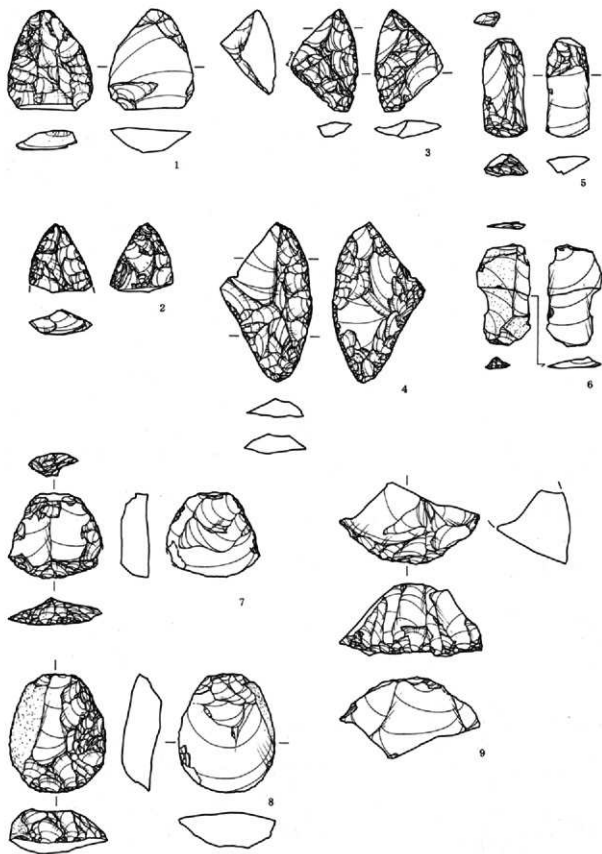
2は、片面加工した尖頭器。断面形状は三角形を呈する。縦長剥片を石器素材に用いており、主軸方向に大きく反り返る。調整加工は背面側全体を覆い、裏面基部にはバルブを除去するよう平坦剥離を施している。石器は縞状構造の発達した黒曜石を用いている。石器は丘陵東側斜面(GF—118G)に出土、第5・6地点とは約60m離れている。

3は、縦長剥片素材の削器。表裏両面とも左右の側縁を粗く打ち欠き、刃部を作出している。厚く大

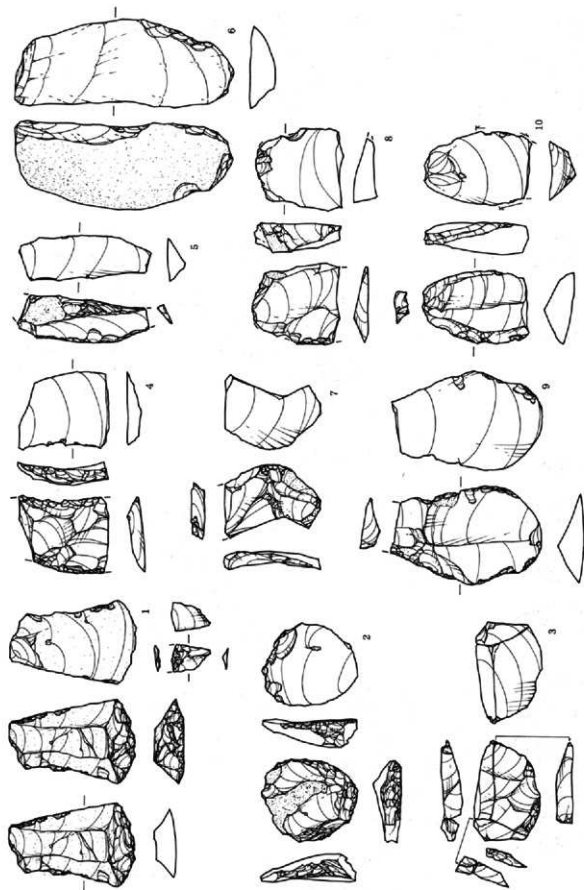
きな打面を有しており、最大厚は打面部に持つ。斑晶を多く含む漆黒の黒曜石を用いており、第1～6地点出土の黒曜石には類似した母岩は見られない。出土地点不明。表採。ラベルには産廃を意味する記載があり、2区で採取した石器と考えている。



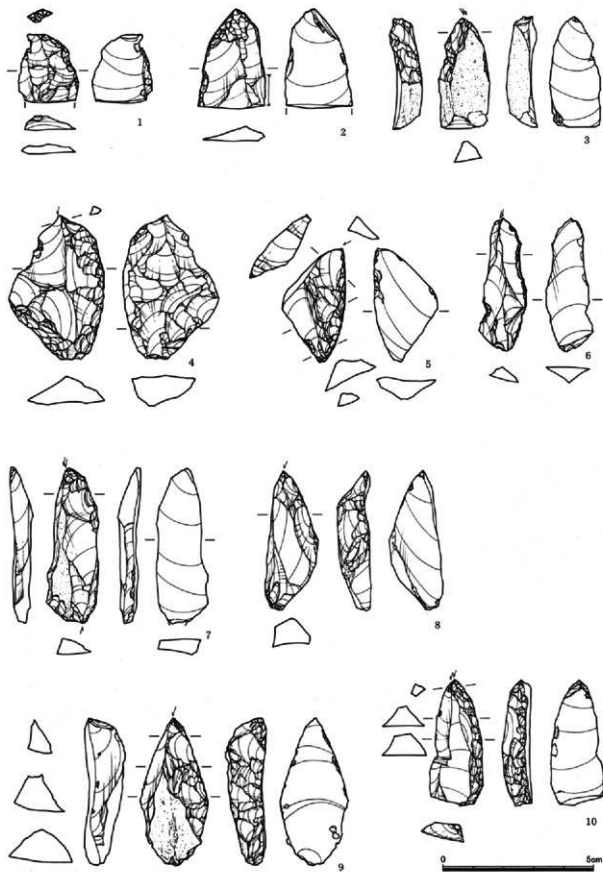
第14図 その他の石器 (第II文化層)



第15圖 出土石器 1 (第1地点)

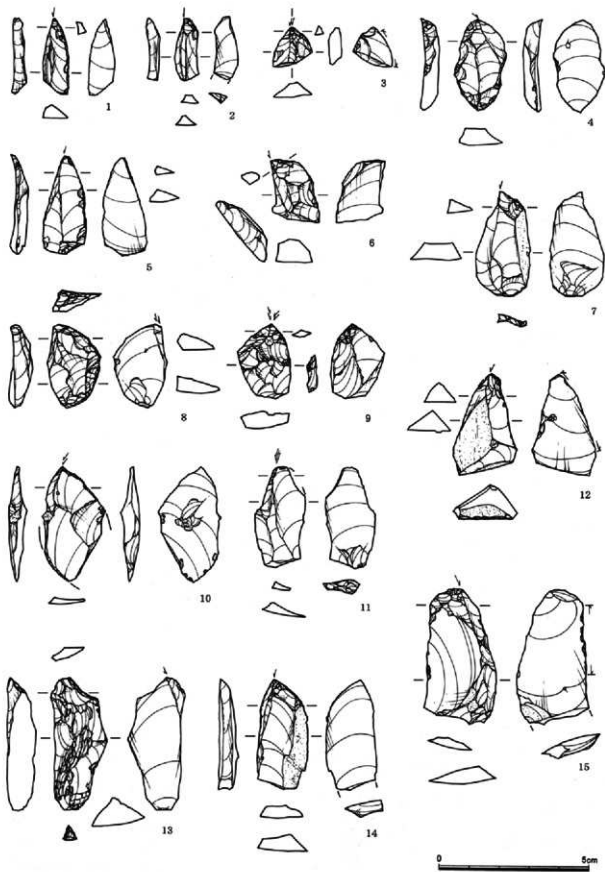


第16図 出土石器 2 (第1地点)

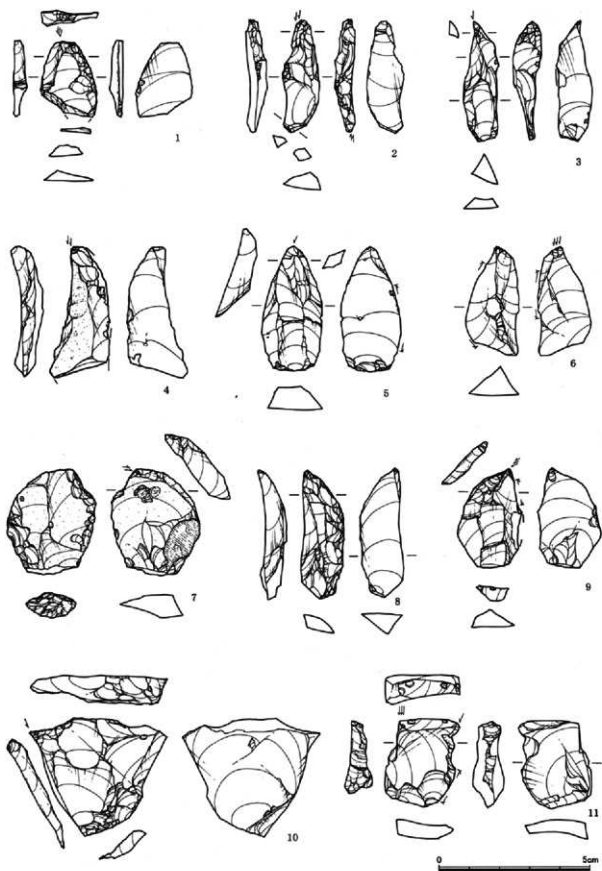


第17图 出土石器3 (第1地点)

II 調査の成果

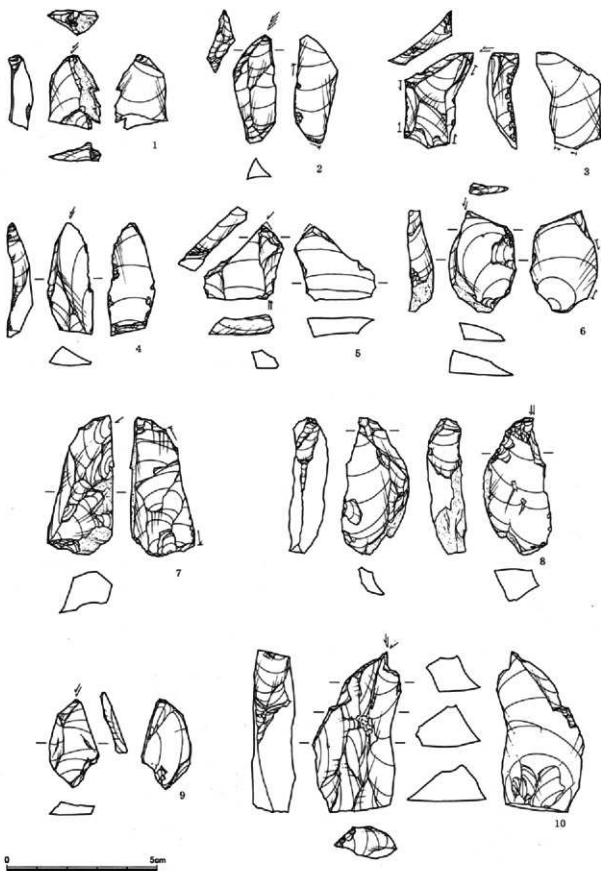


第18図 出土石器4 (第1地点)

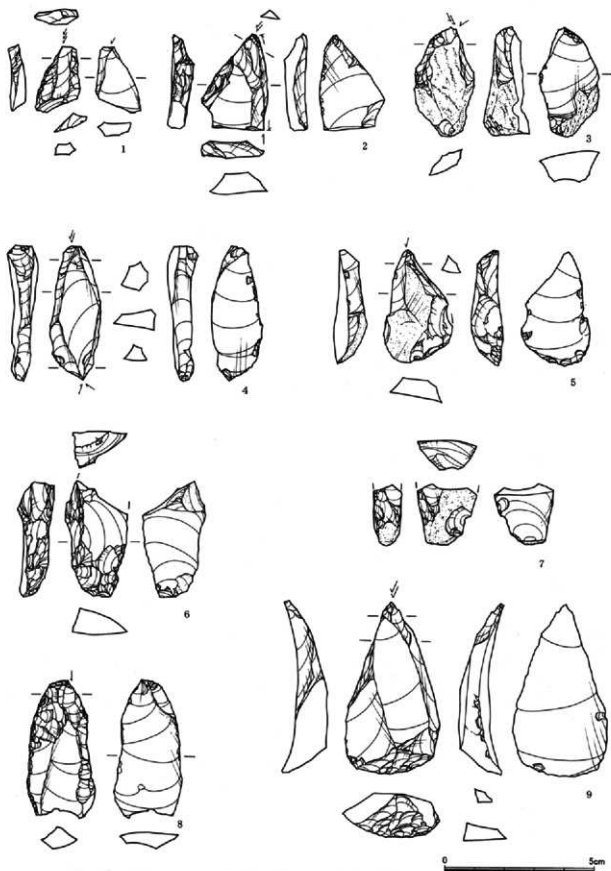


第19圖 出土石器5 (第1地点)

II 調査の成果

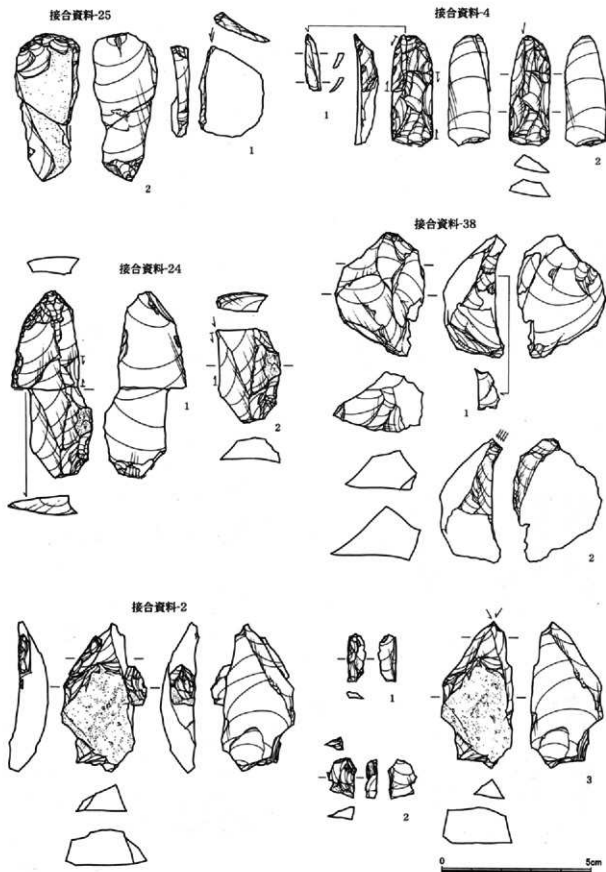


第20圖 出土石器6 (第1地点)

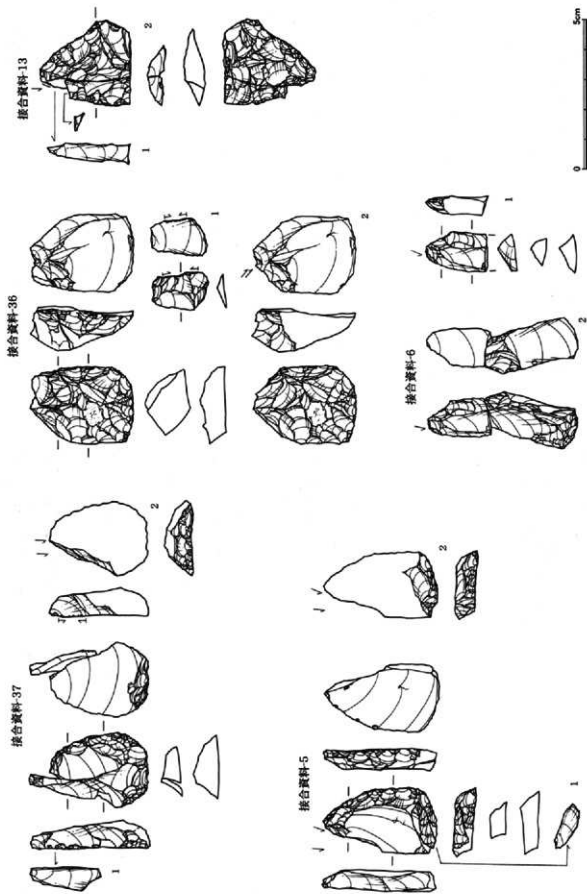


第21图 出土石器7 (第1地点)

II 調査の成果

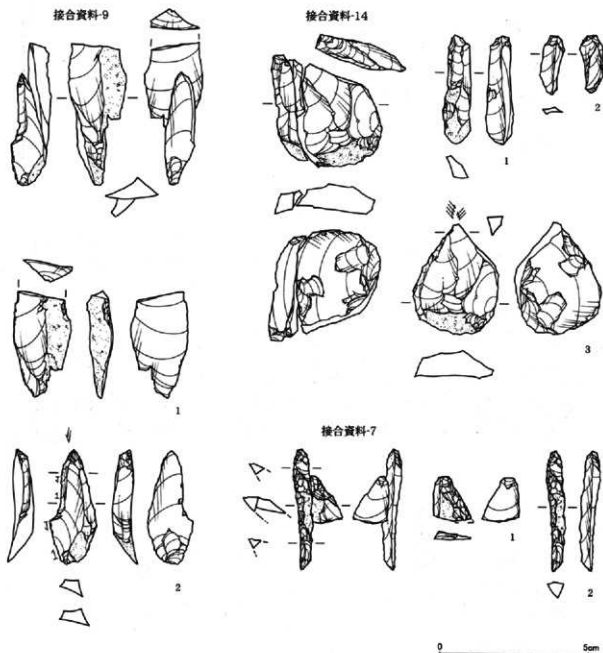


第22図 出土石器 8 (第1地点)

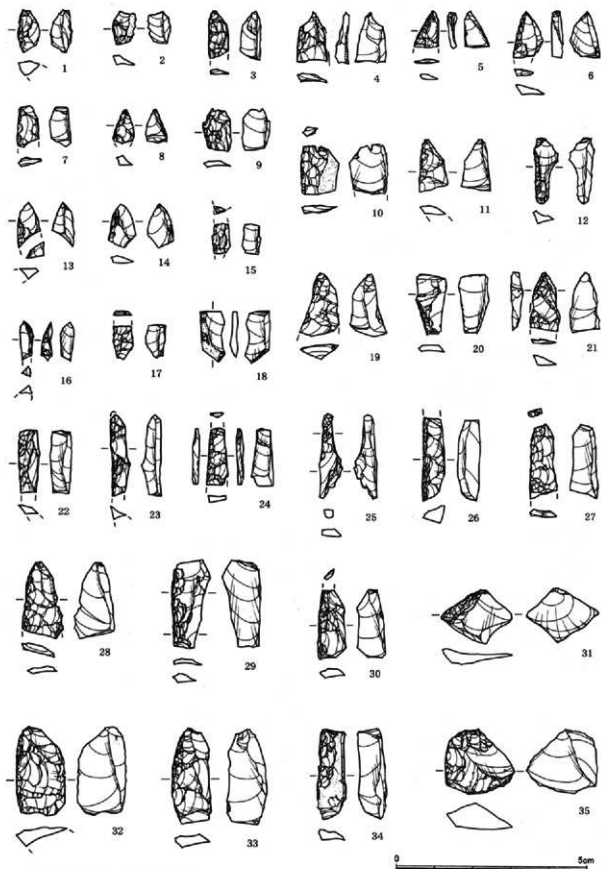


第23圖 出土石器9 (第1地点)

II 調査の成果

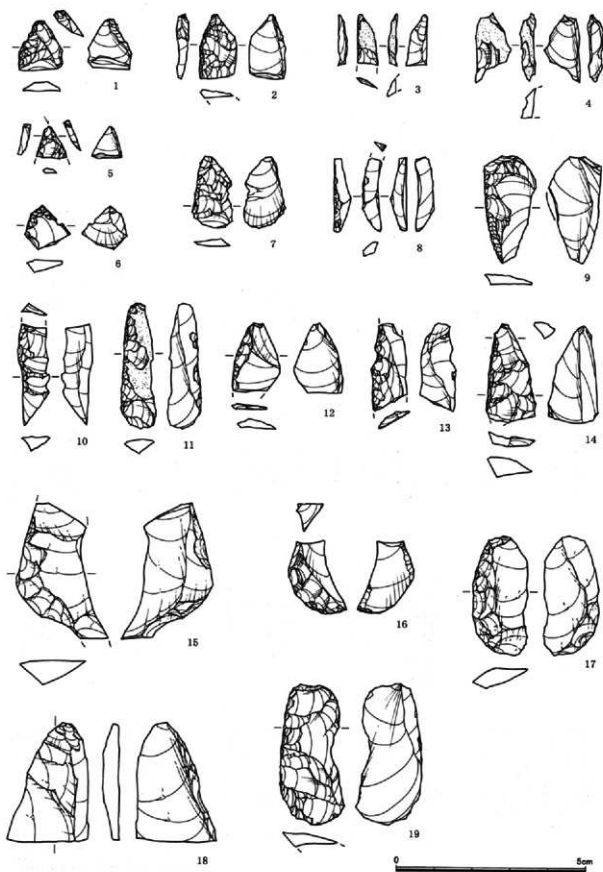


第24図 出土石器10 (第1地点)



第25图 出土石器11 (第1地点)

II 調査の成果

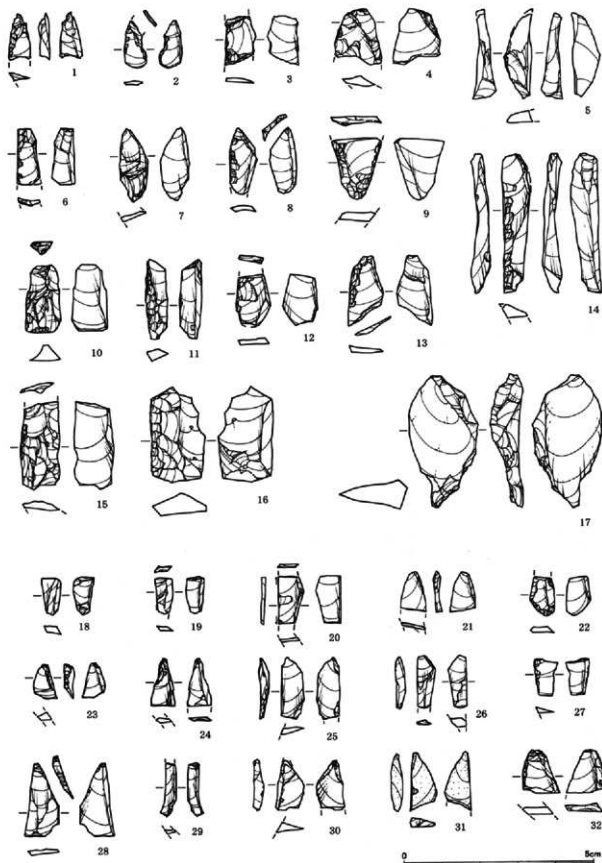


第26图 出土石器12 (第1地点)

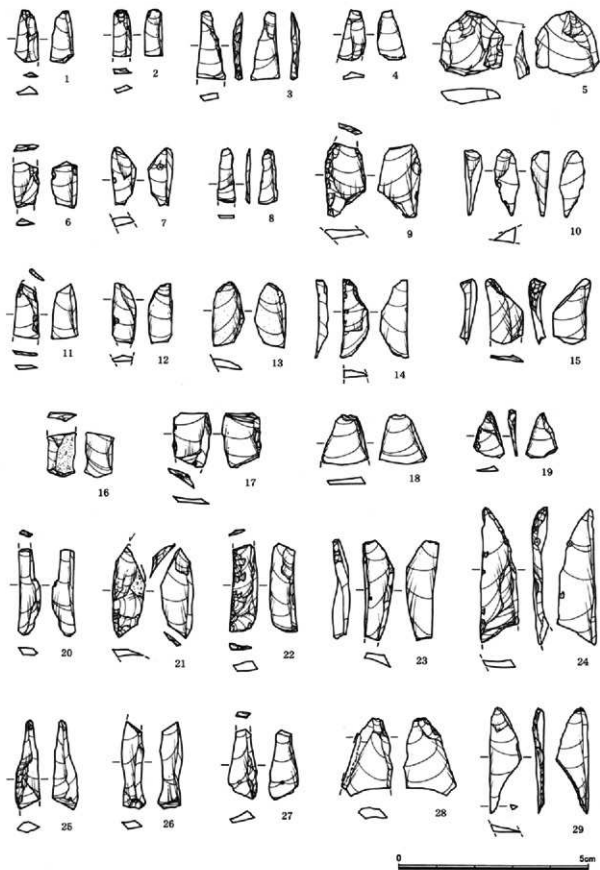


第27圖 出土石器13 (第1地点)

II 調査の成果

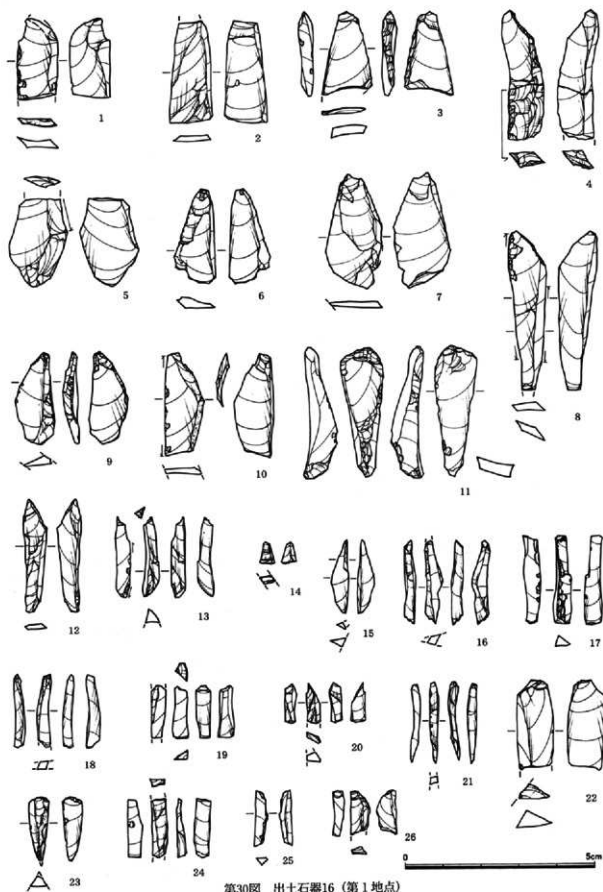


第28図 出土石器14 (第1地点)



第29图 出土石器15 (第1地点)

II 調査の成果

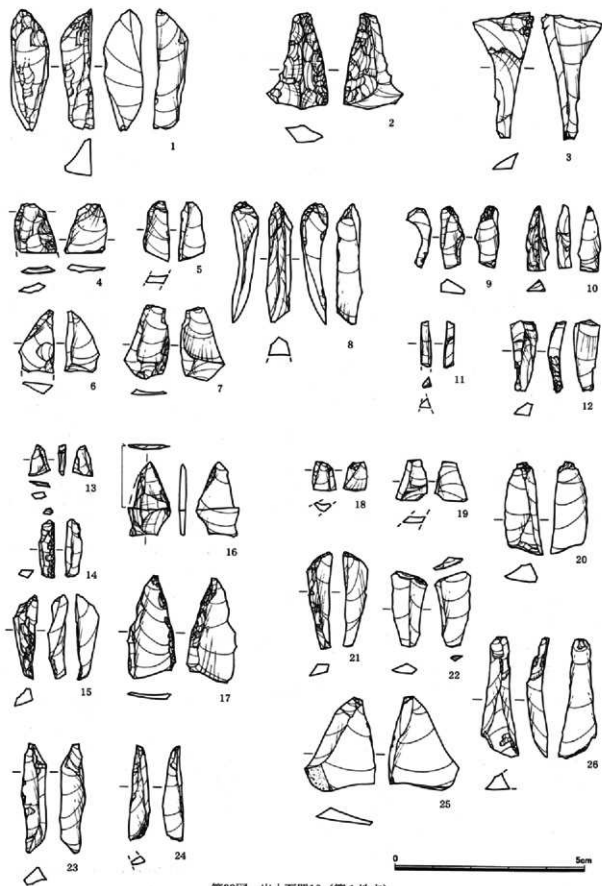


第30図 出土石器16 (第1地点)

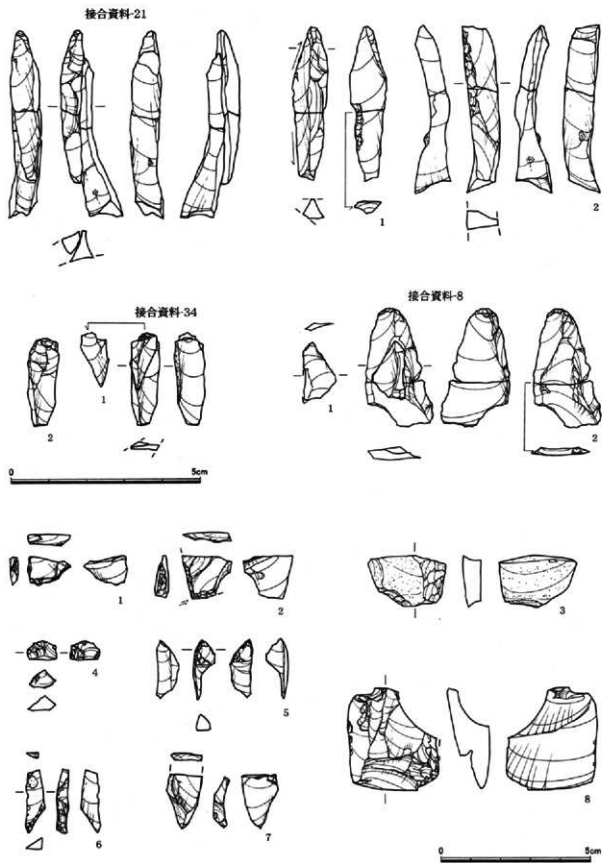


第31圖 出土石器17 (第1地点)

II 調査の成果

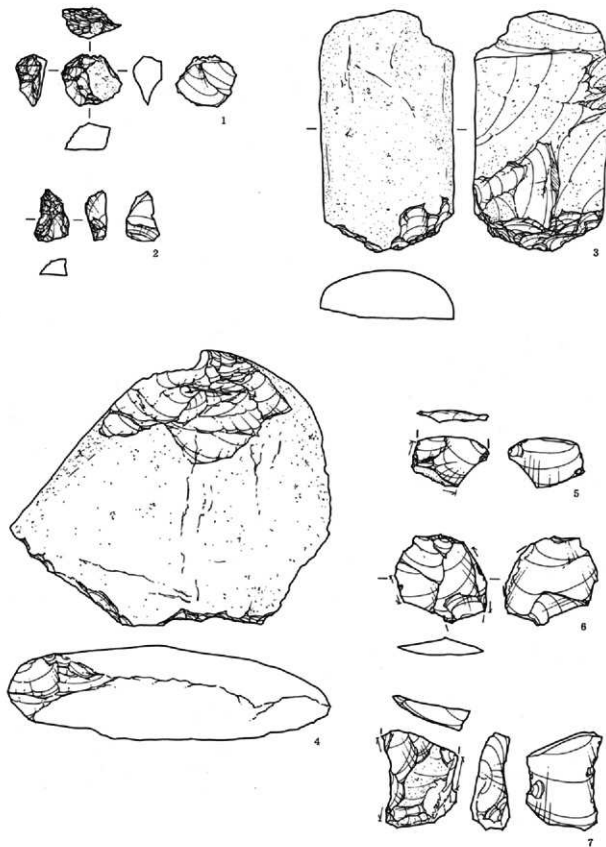


第32図 出土石器18 (第1地点)

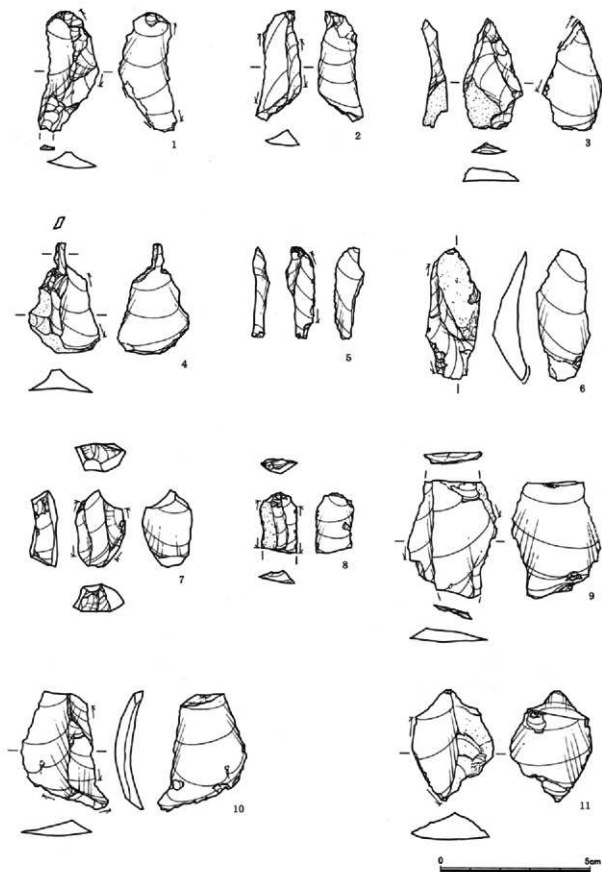


第33圖 出土石器19 (第1地点)

II 調査の成果

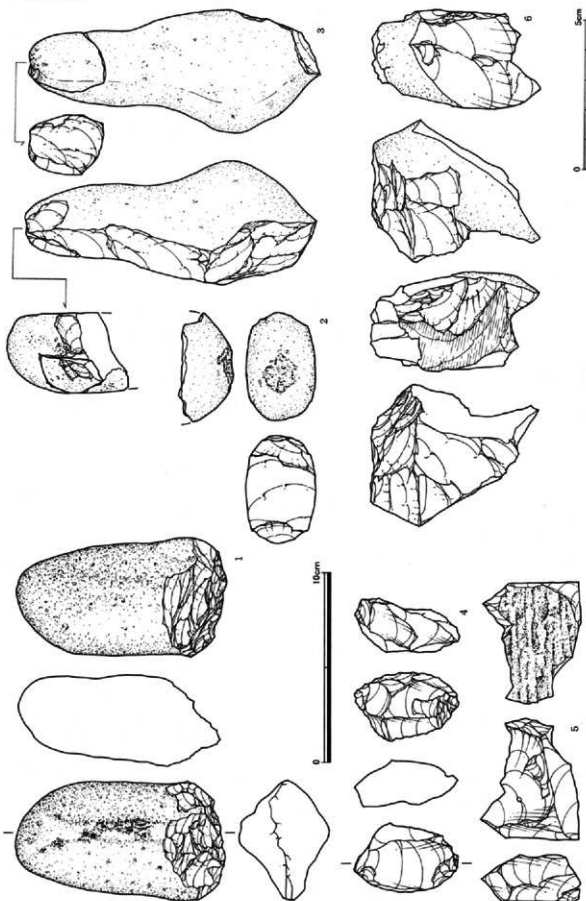


第34図 出土石器20 (第1地点)

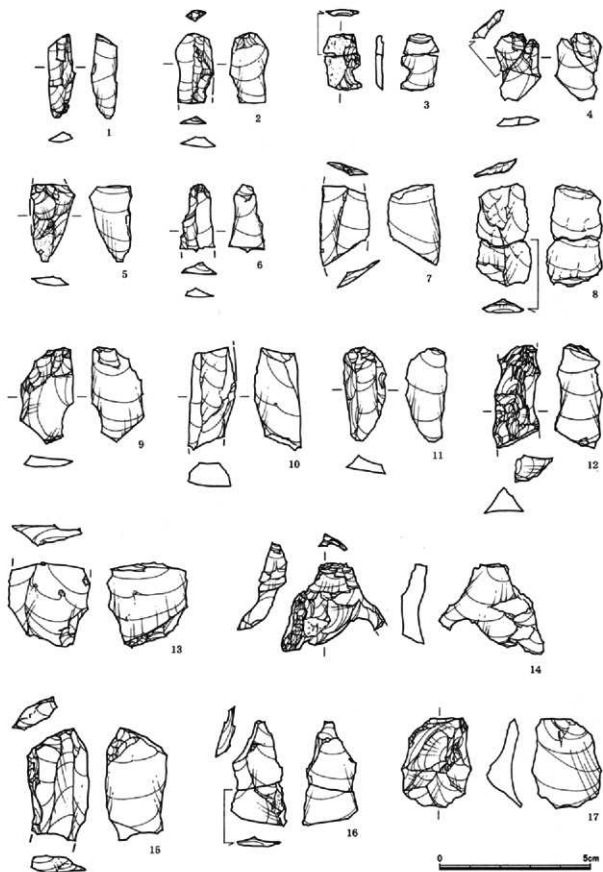


第35图 出土石器21 (第1地点)

II 調査の成果

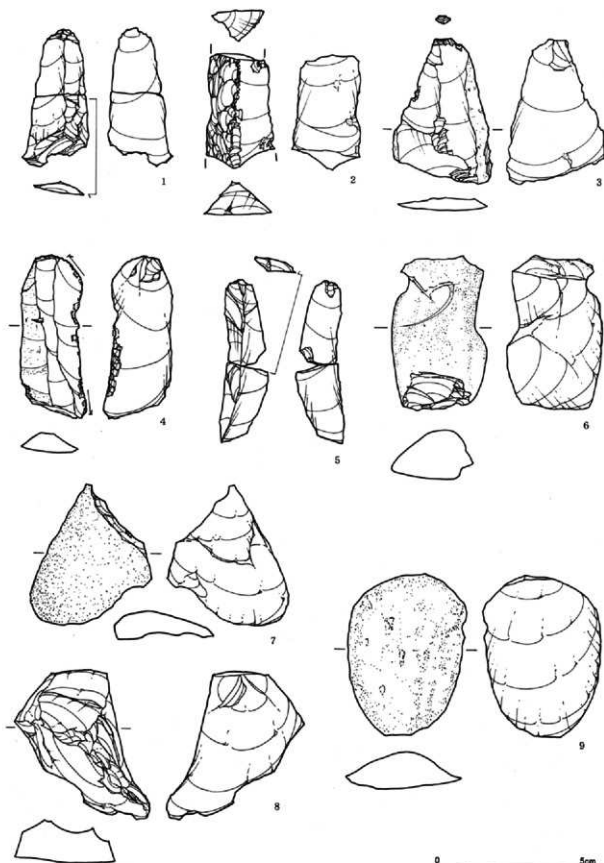


第36図 出土石器22 (第1地点)

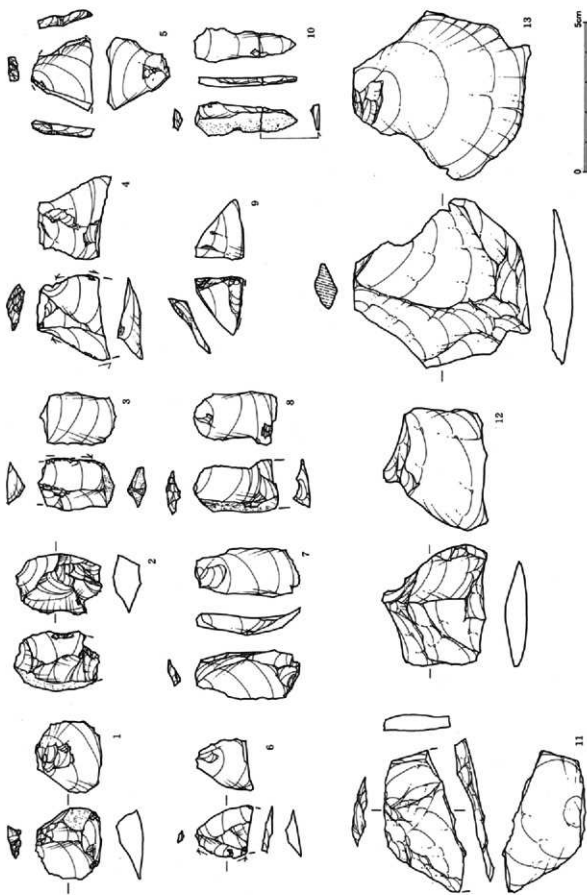


第37图 出土石器23 (第1地点)

II 調査の成果

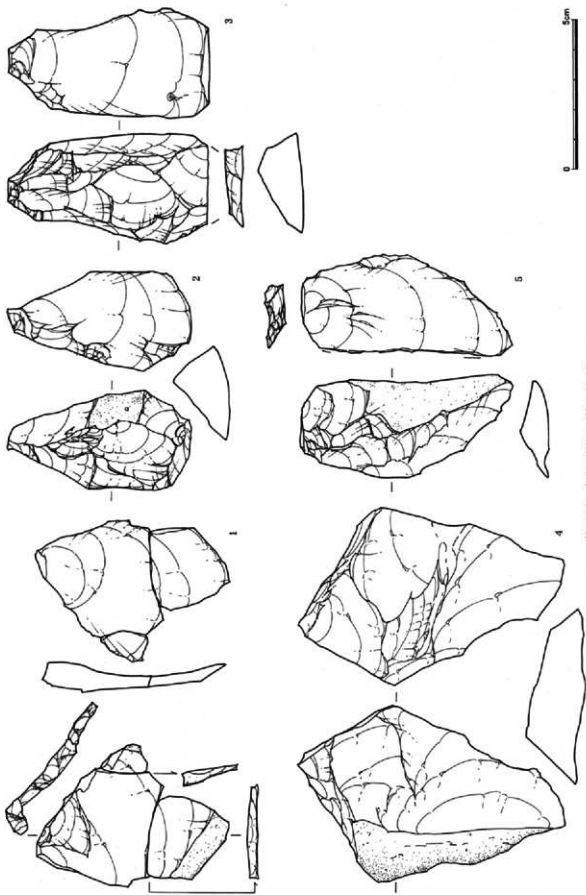


第38圖 出土石器24 (第1地点)



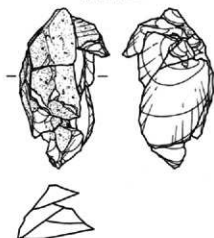
第39图 出土石器25 (第1地点)

II 調査の成果

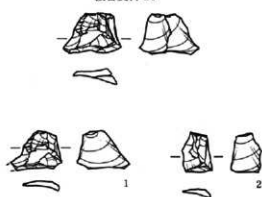


第40図 出土石器26 (第1地点)

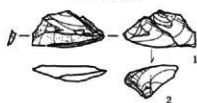
接合資料-16



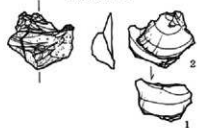
接合資料-10



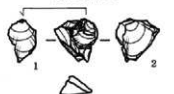
接合資料-29



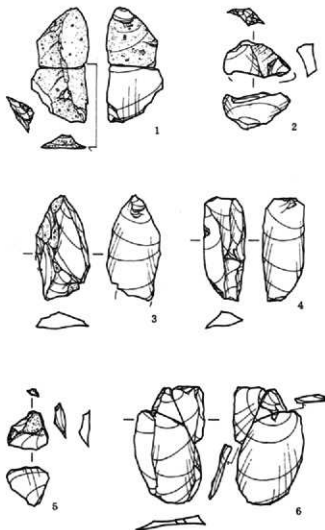
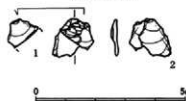
接合資料-28



接合資料-33



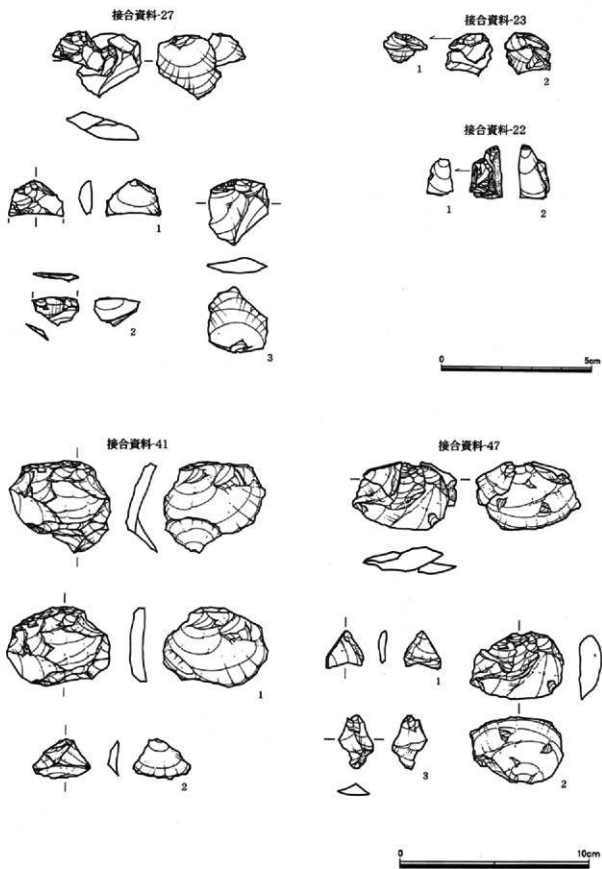
接合資料-32



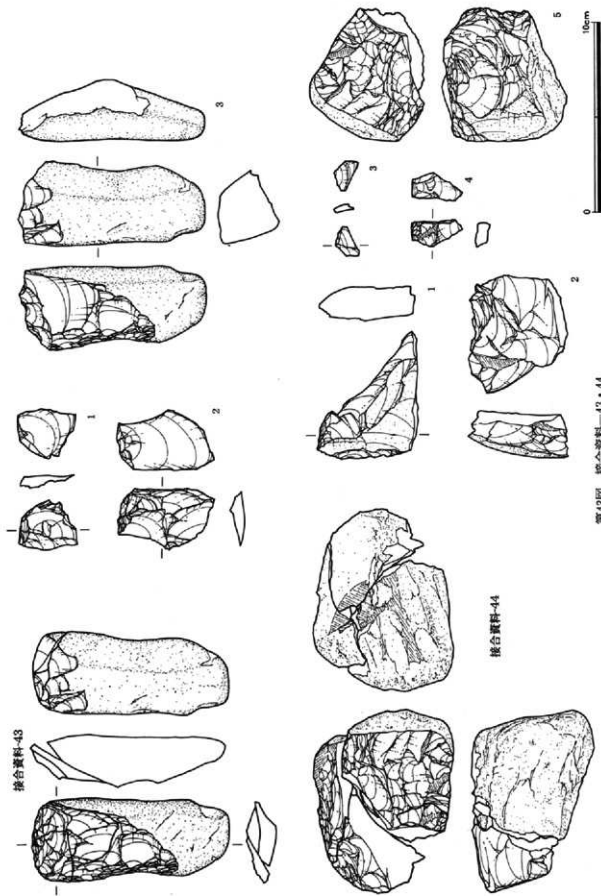
0 5cm

第41圖 接合資料-10・16・28・29・32・33

II 調査の成果

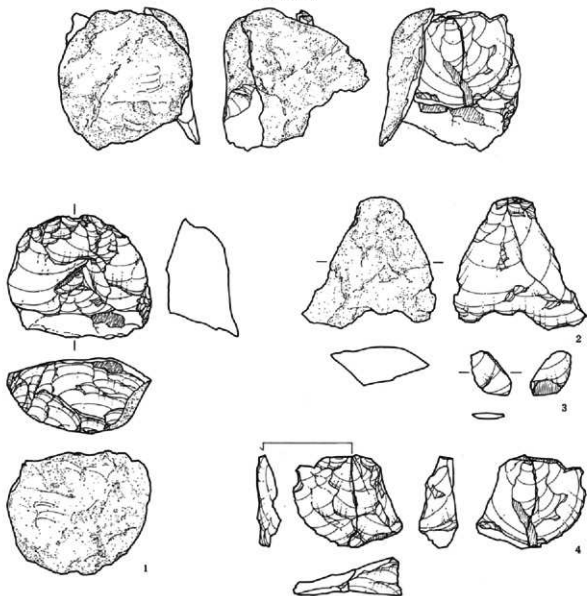


第42図 接合資料-22・23・27・41・47

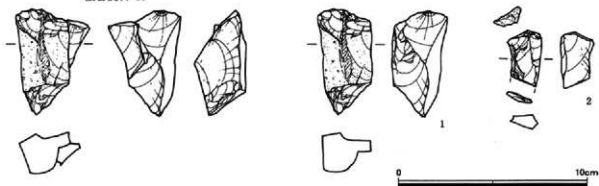


第43図 接合資料-43・44

接合資料-46

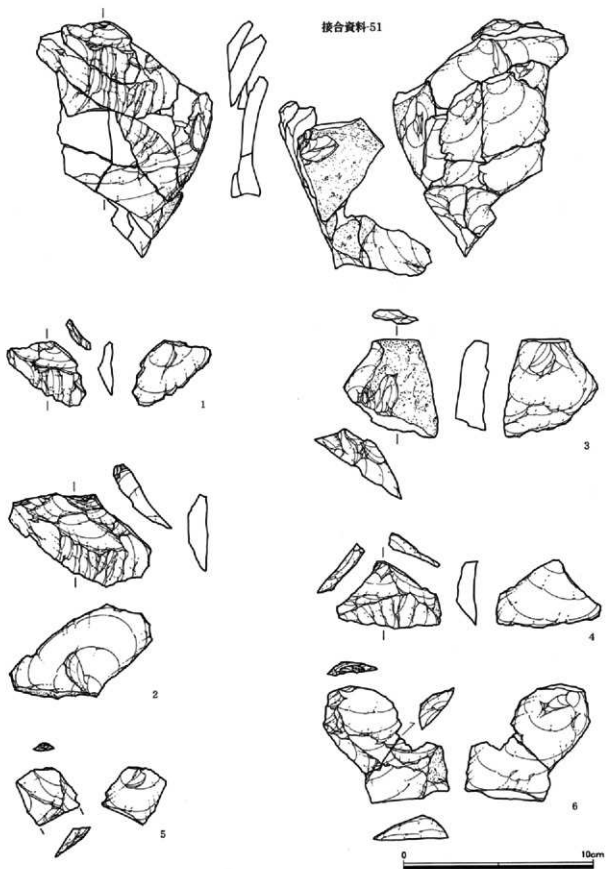


接合資料-45



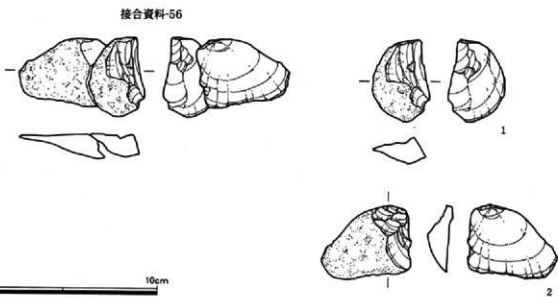
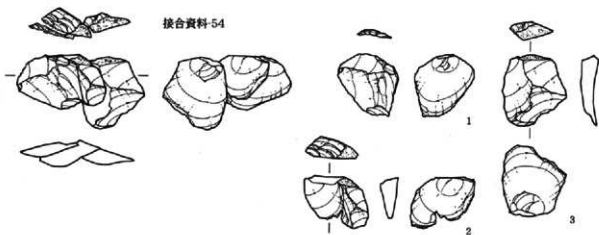
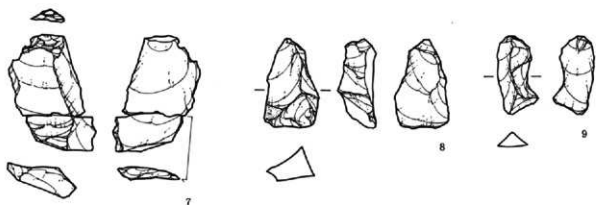
第44図 接合資料—45・46

接合資料-51

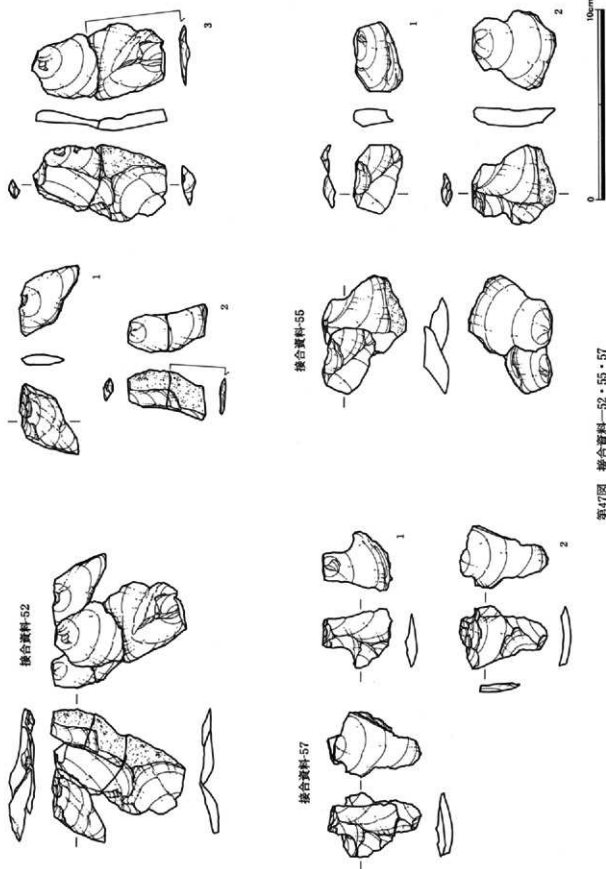


第45図 接合資料-51(1)

II 調査の成果

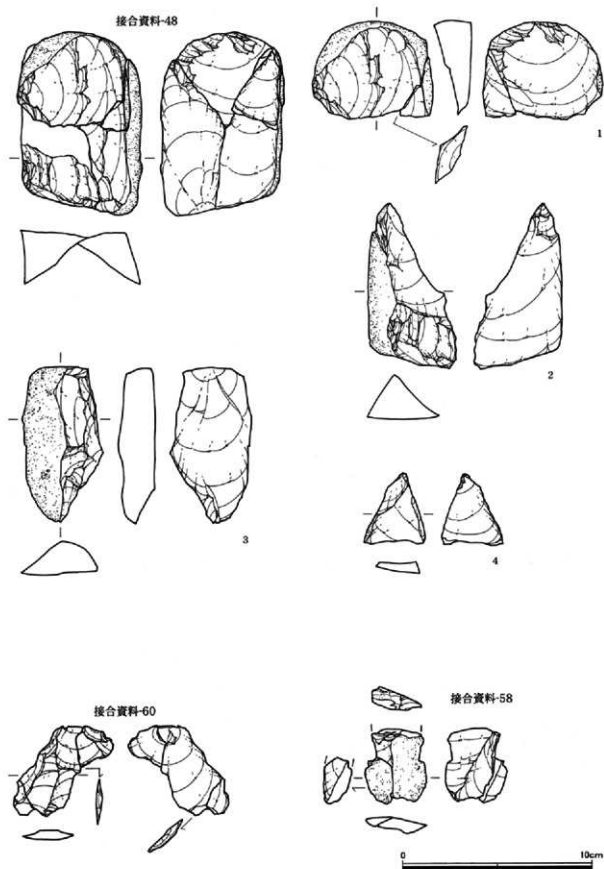


第46図 接合資料-51(2)・54・56

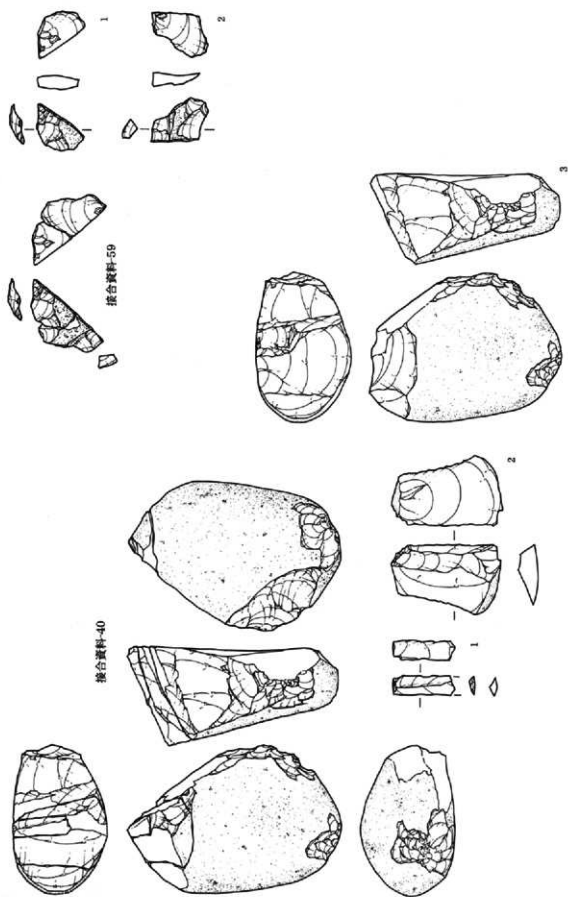


第47図 接合資料-52・55・57

II 調査の成果

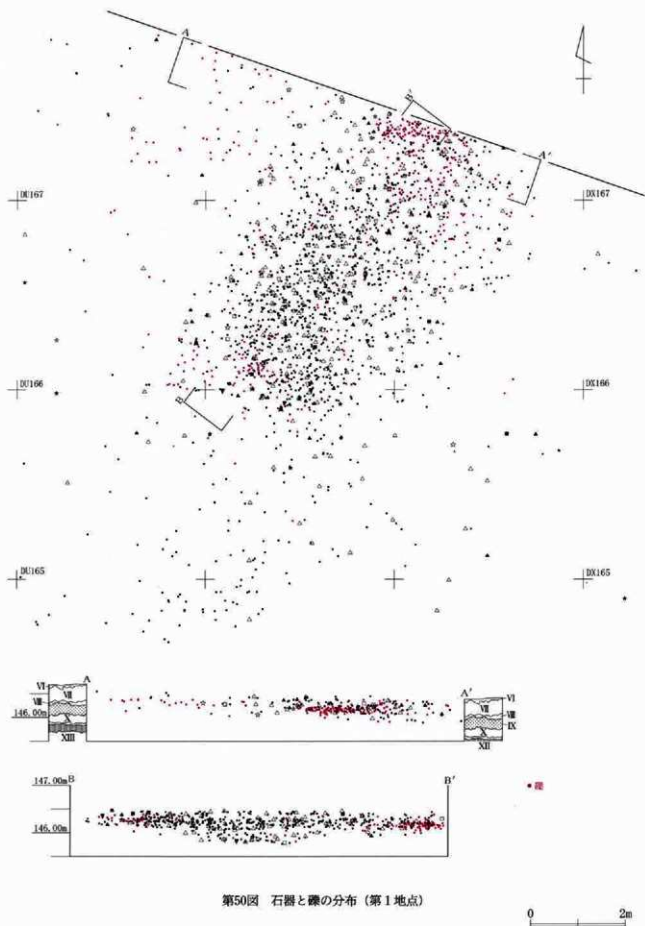


第48図 接合資料-48・58・60

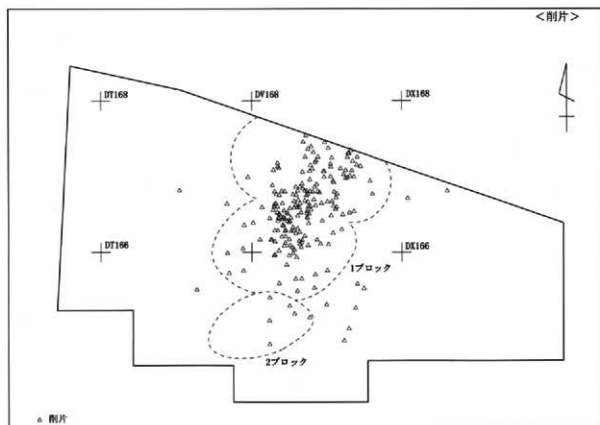
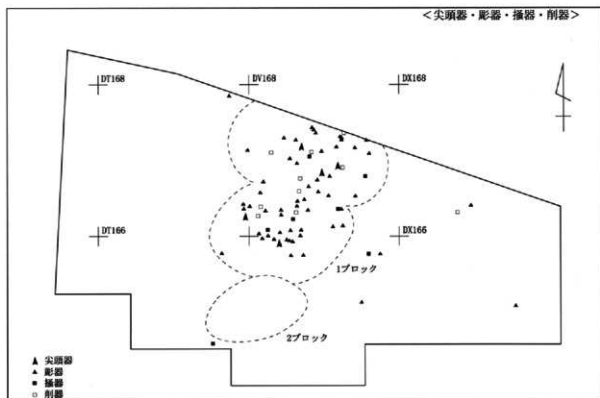


第49圖 接合資料-40・59

II 調査の成果



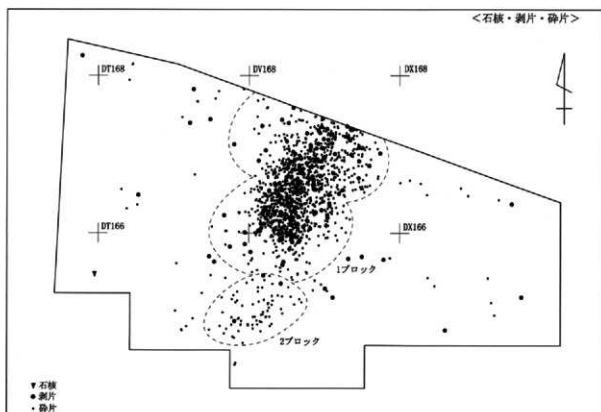
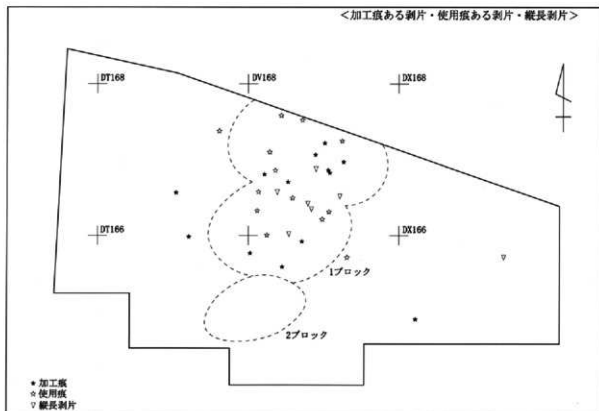
第50図 石器と跡の分布 (第1地点)



第51図 器種別分布図1 (第1地点)

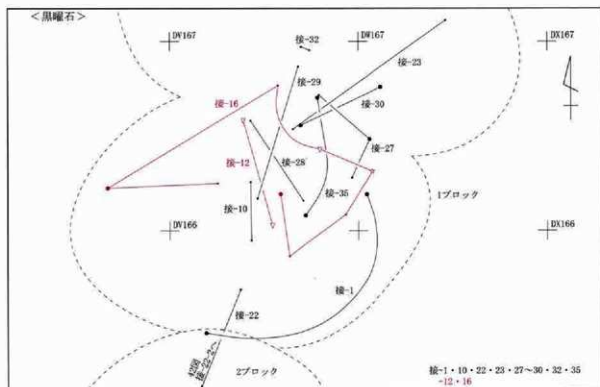
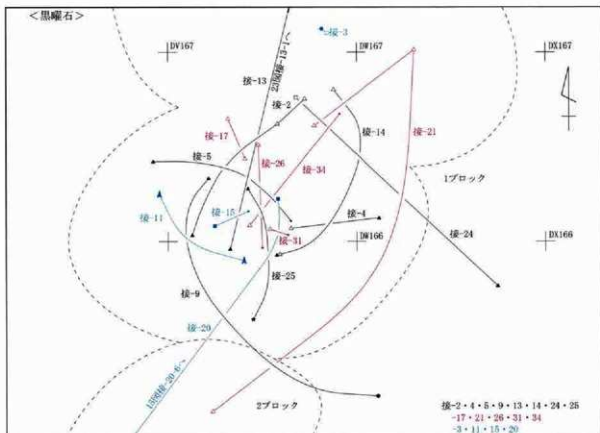
0 5m

II 調査の成果



第52図 器種別分布図2 (第1地点)

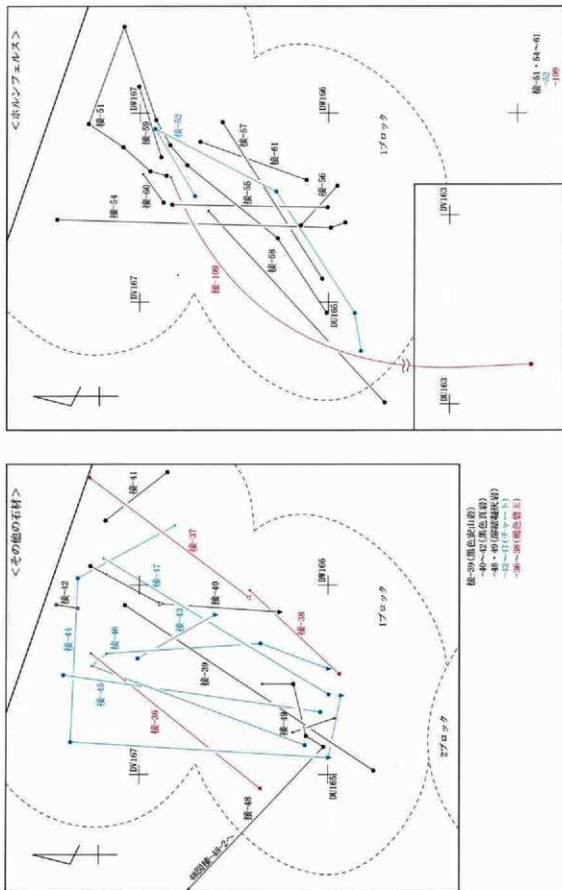
0 5m



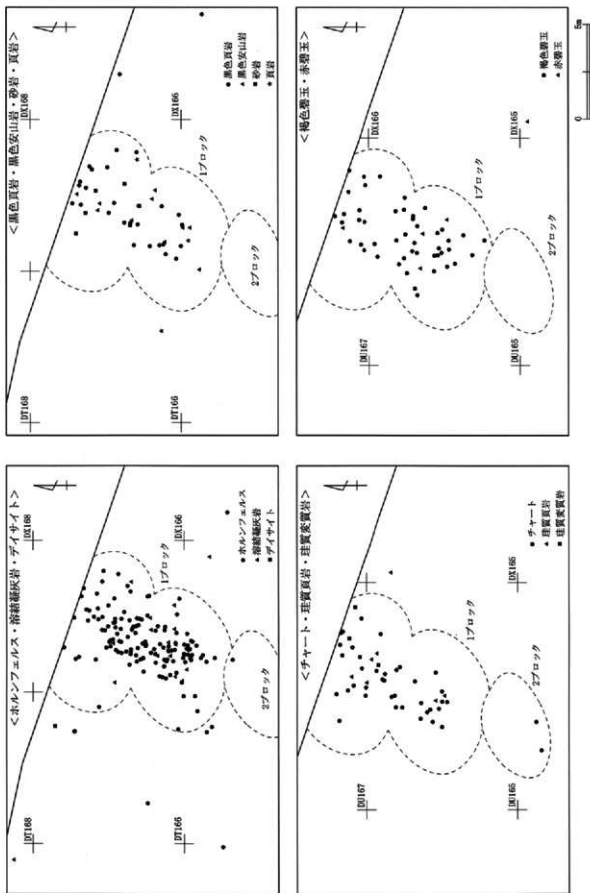
第53図 接合資料の分布1 (第1地点)

0 2m

II 調査の成果

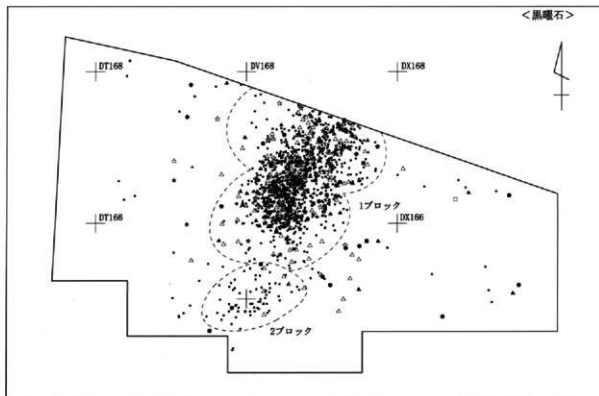


第54図 接合資料の分布 2 (第1地点)

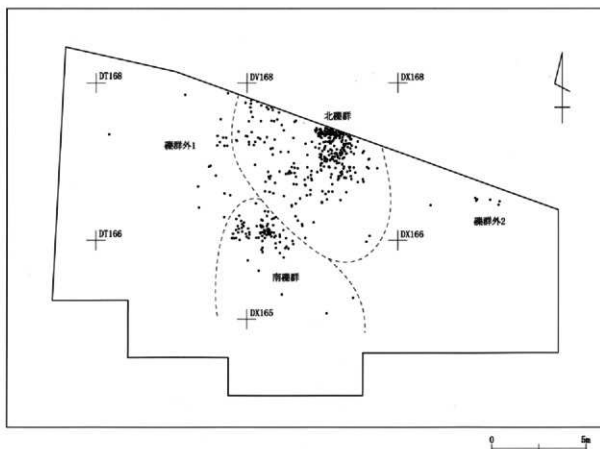


第55図 石材分布図1 (第1地点)

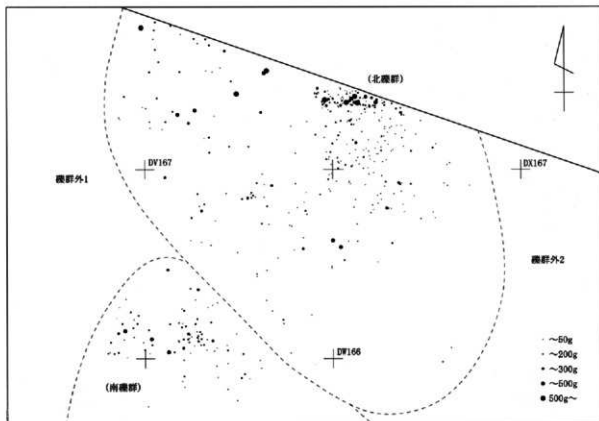
II 調査の成果



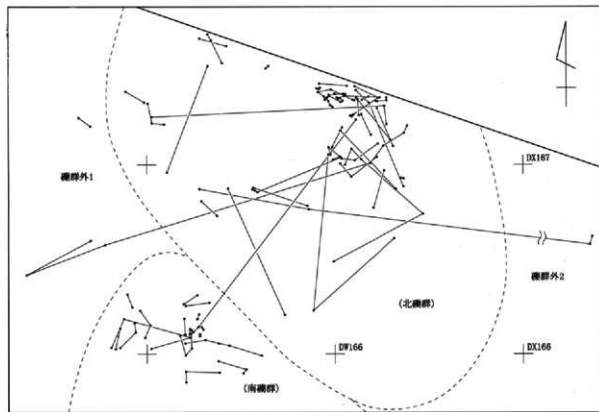
第56図 石材別分布図2 (第1地点)



第57図 礫・礫片の分布 (第1地点)

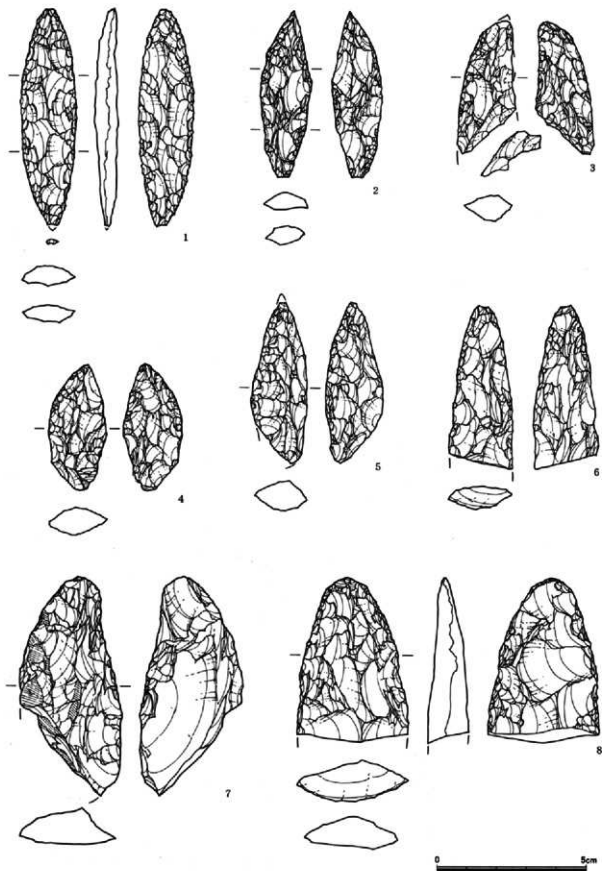


第58図 石の重量別分布 (第1地点)

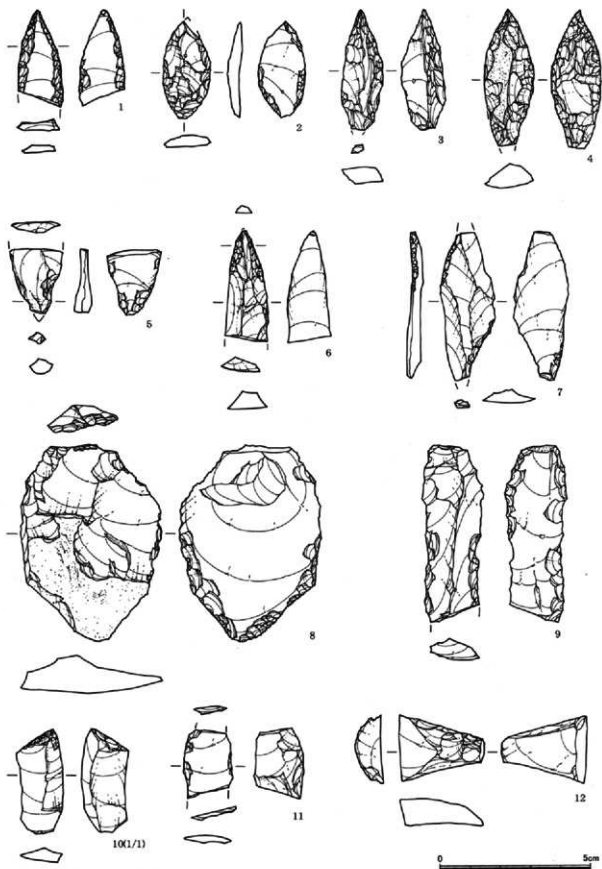


第59図 継接合資料の分布 (第1地点)

II 調査の成果

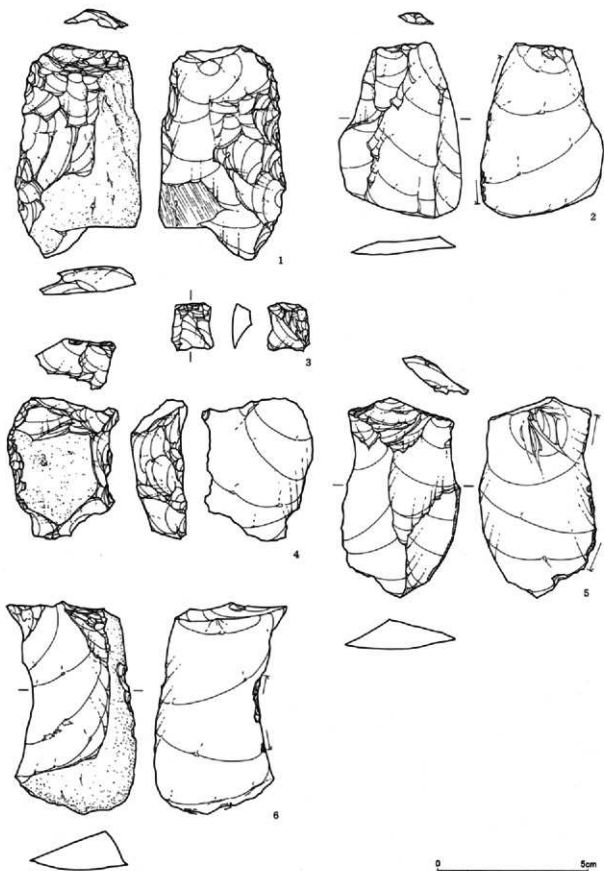


第60図 出土石器 1 (第2地点)

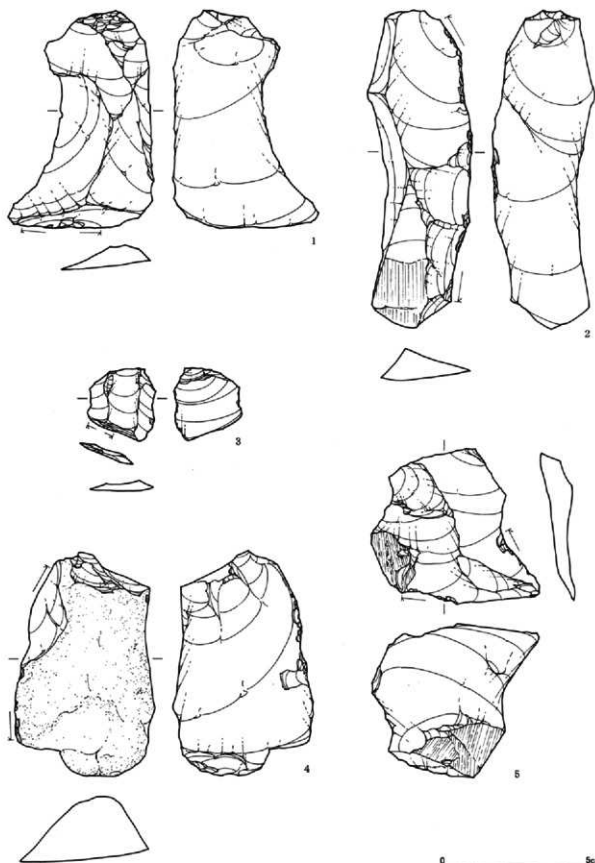


第61圖 出土石器2 (第2地点)

II 調査の成果

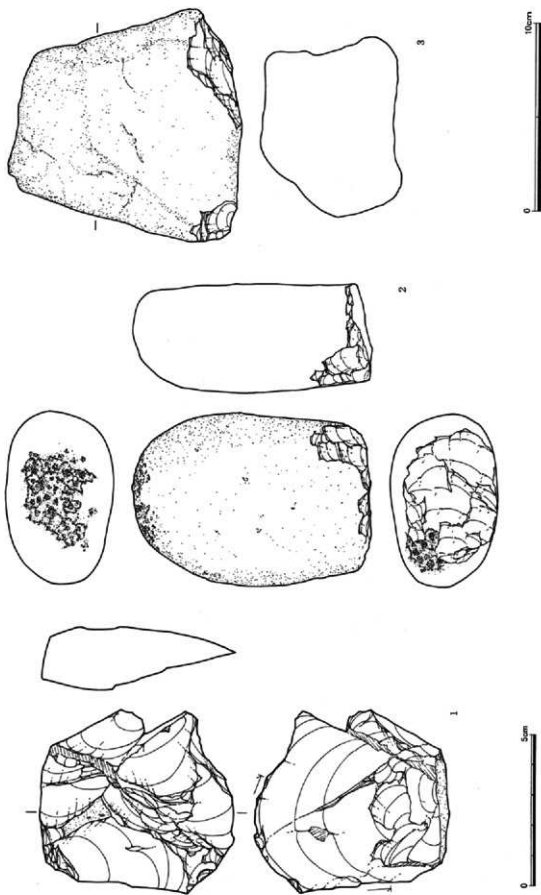


第62図 出土石器 3 (第2地点)

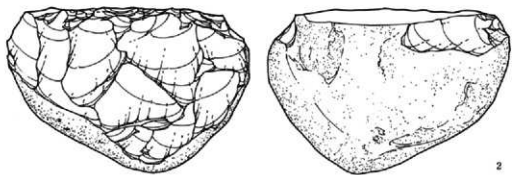
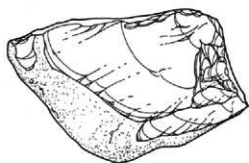
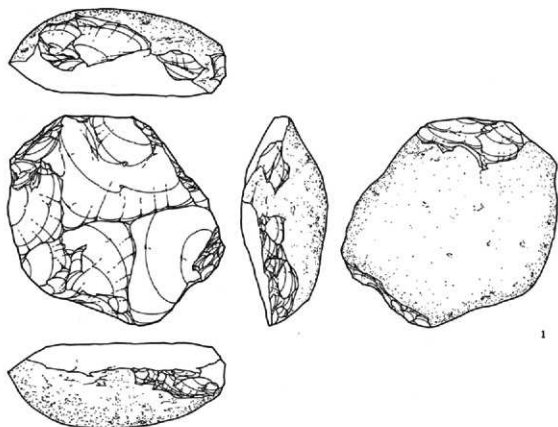


第63圖 出土石器4 (第2地点)

II 調査の成果

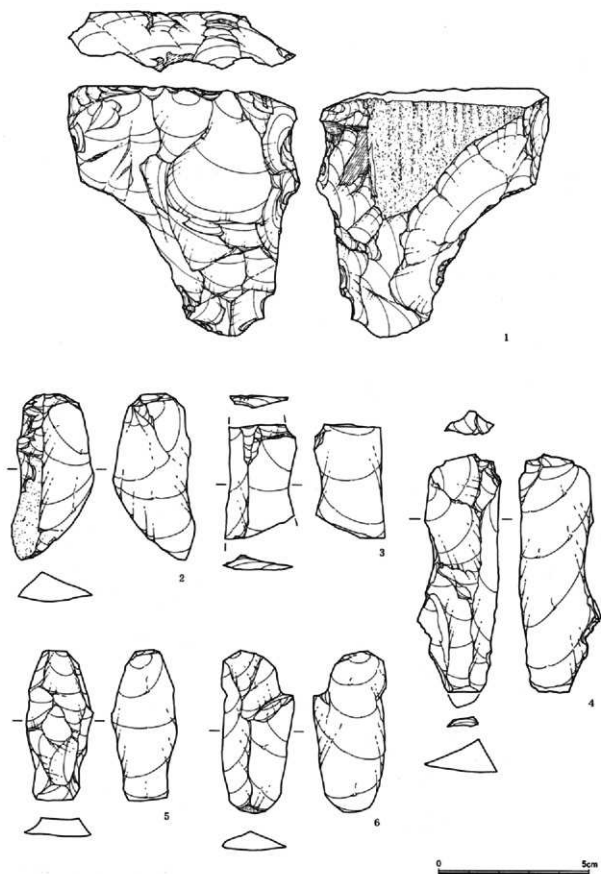


第64図 出土石器 5 (第2地点)

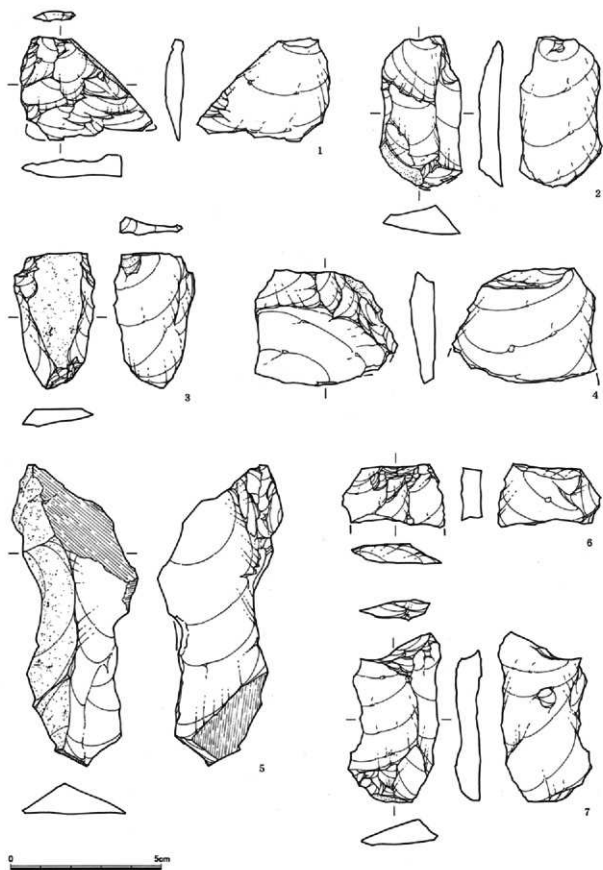


第65圖 出土石器6 (第2地点)

II 調査の成果

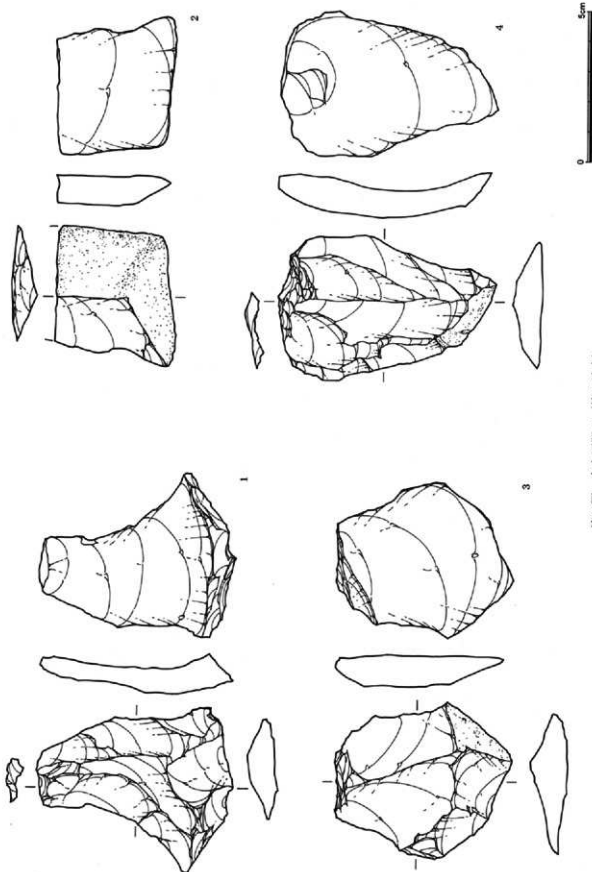


第66図 出土石器7 (第2地点)

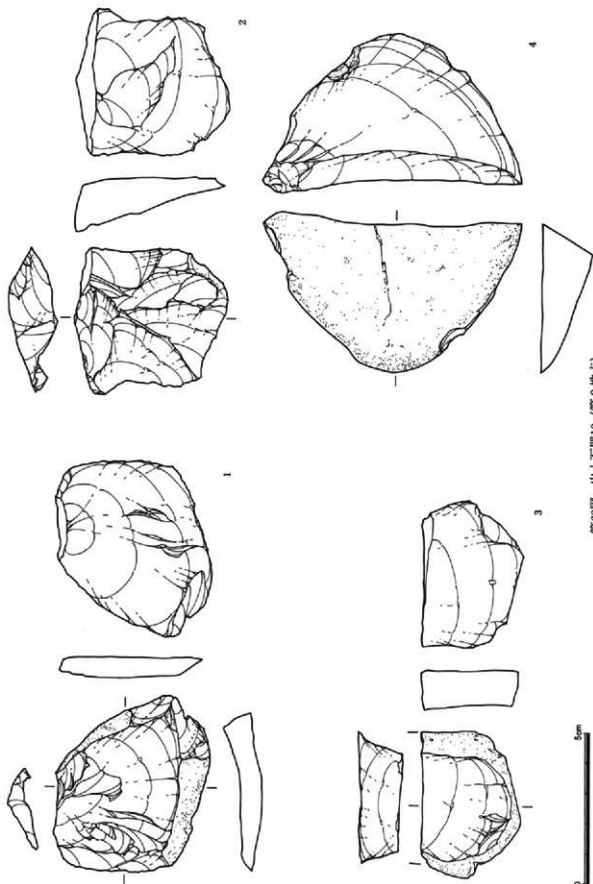


第67图 出土石器 8 (第2地点)

II 調査の成果

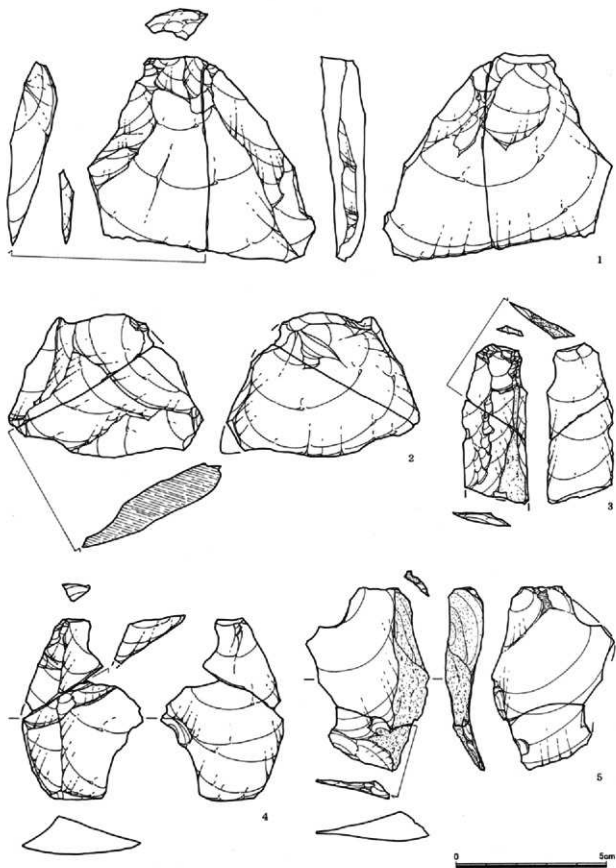


第68図 出土石器 9 (第2地点)

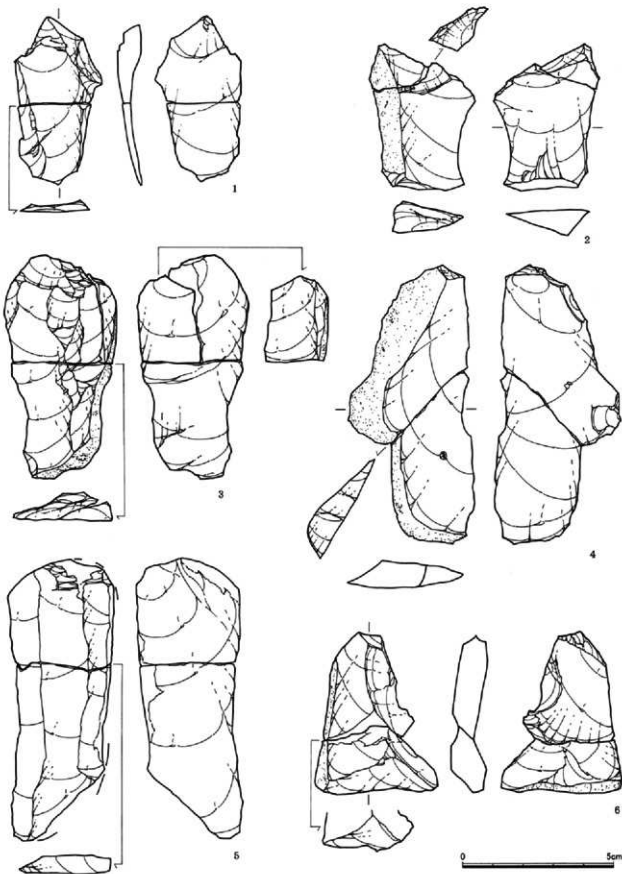


第69圖 出土石器10 (第2地点)

II 調査の成果

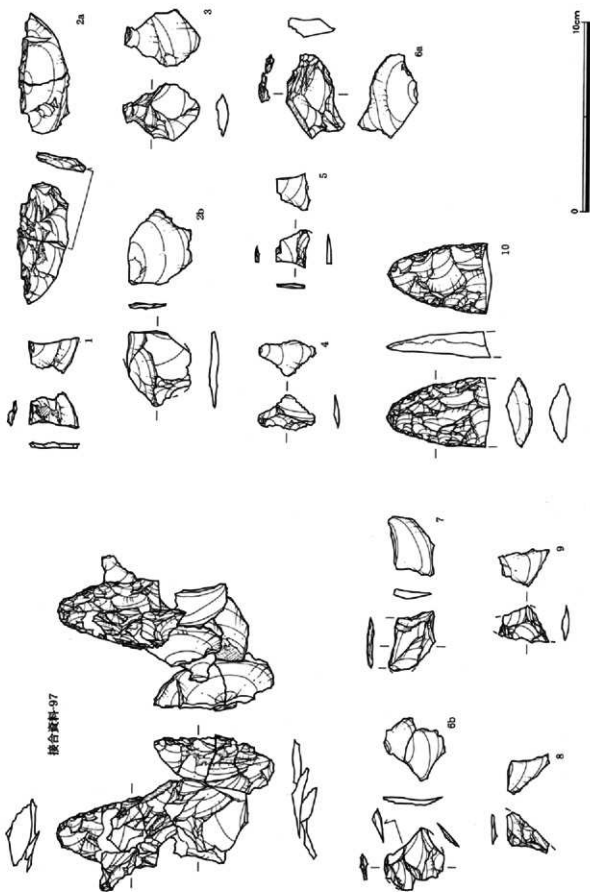


第70図 出土石器11 (第2地点)



第71图 出土石器12 (第2地点)

II 調査の成果

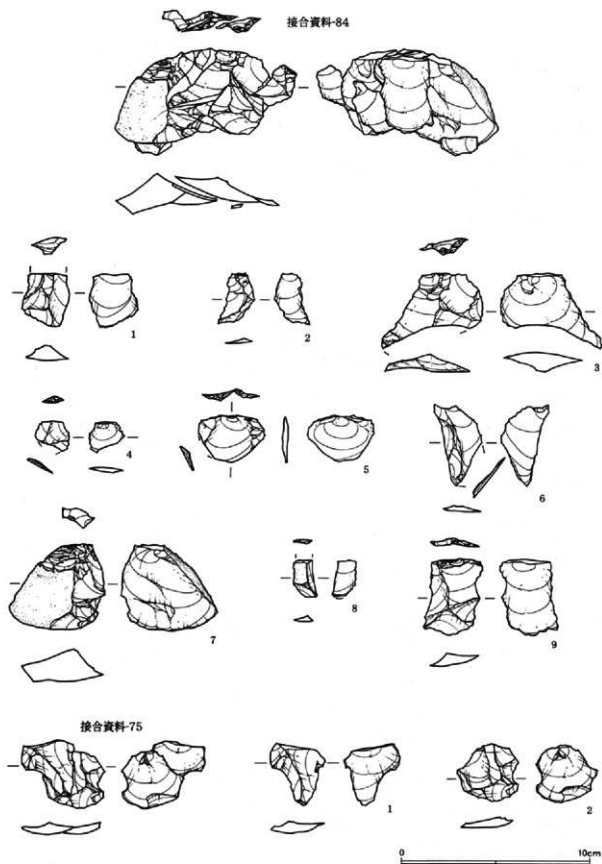


第72図 接合資料-97

接合資料-103

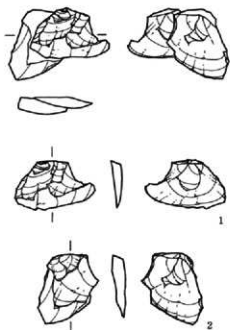


第73圖 接合資料-103

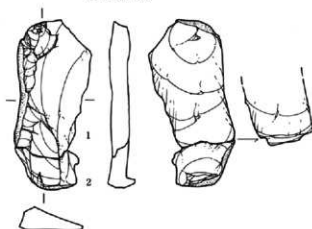


第74図 接合資料-75・84

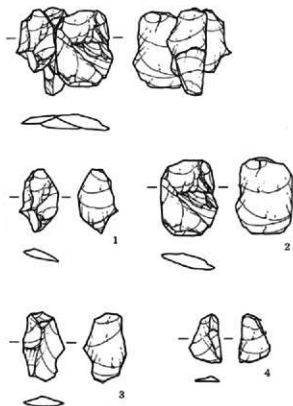
接合資料-74



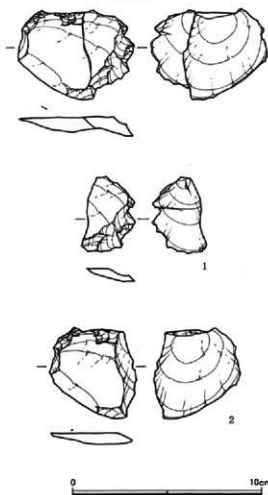
接合資料-80



接合資料-73

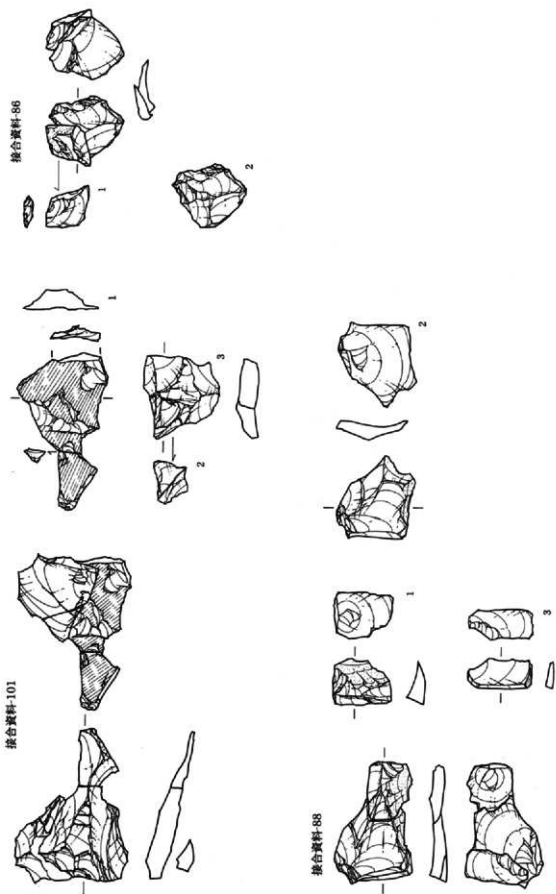


接合資料-76



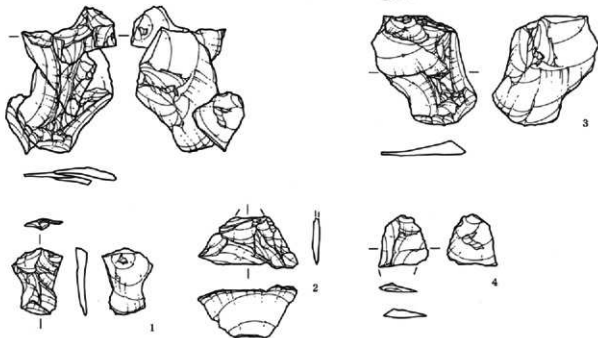
第75圖 接合資料-73・74・76・80

II 調査の成果

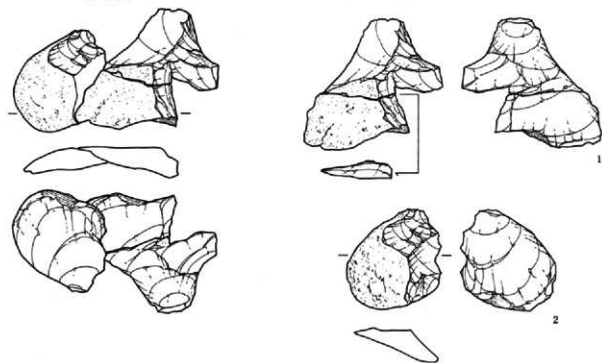


第76図 接合資料-86・88・101

接合資料-62

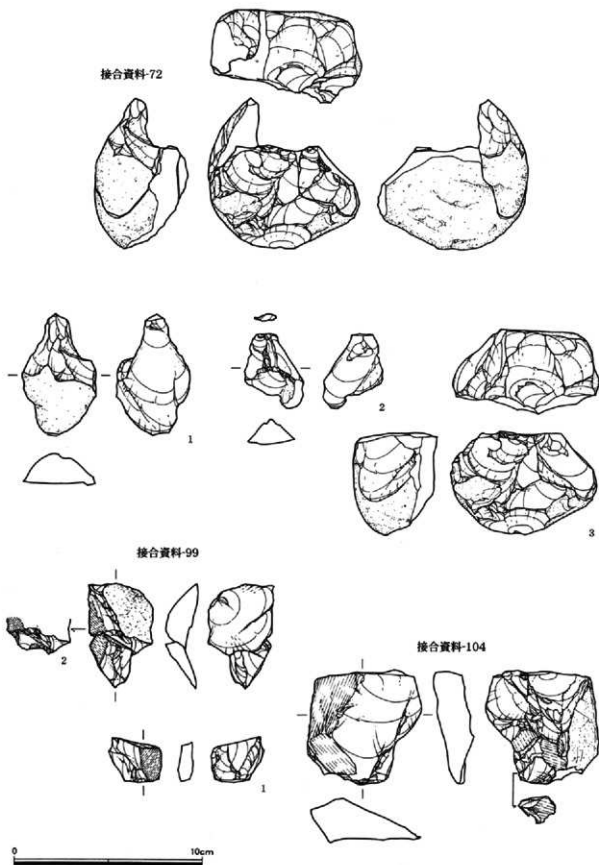


接合資料-70



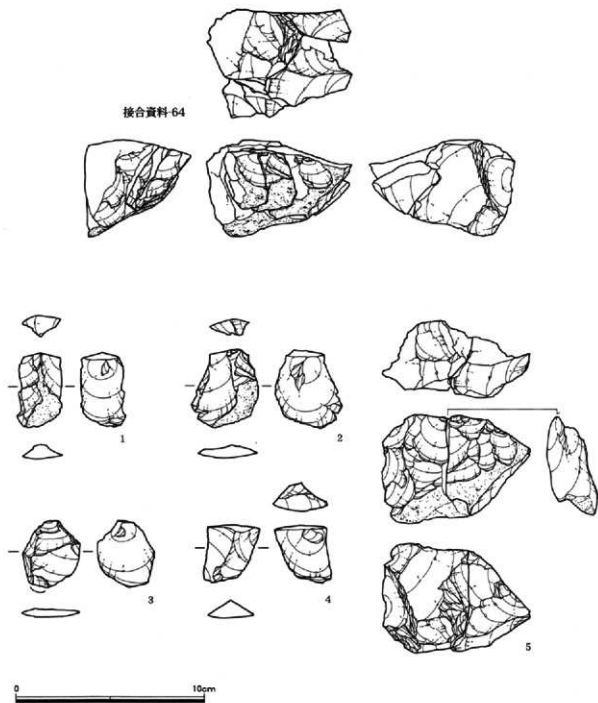
0 10cm

第77圖 接合資料—62・70



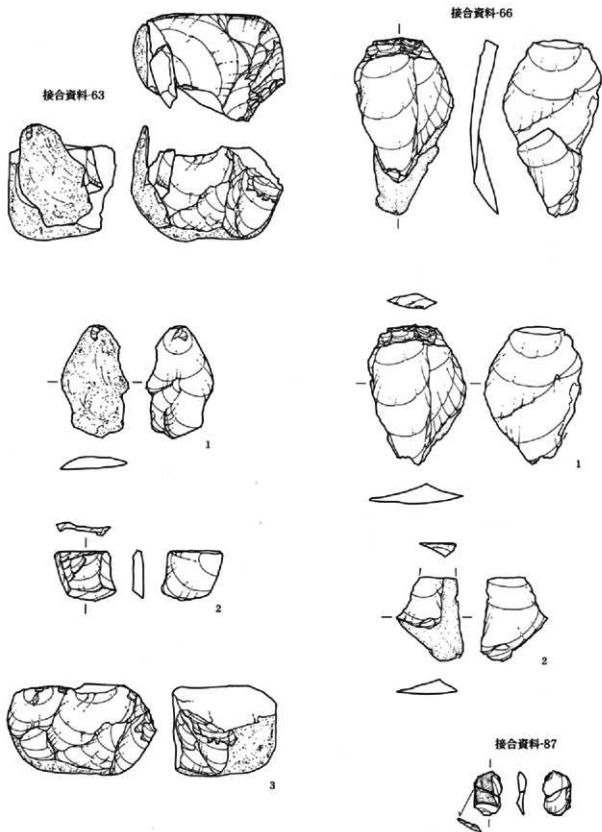
第78図 接合資料-72・99・104

接合資料-64

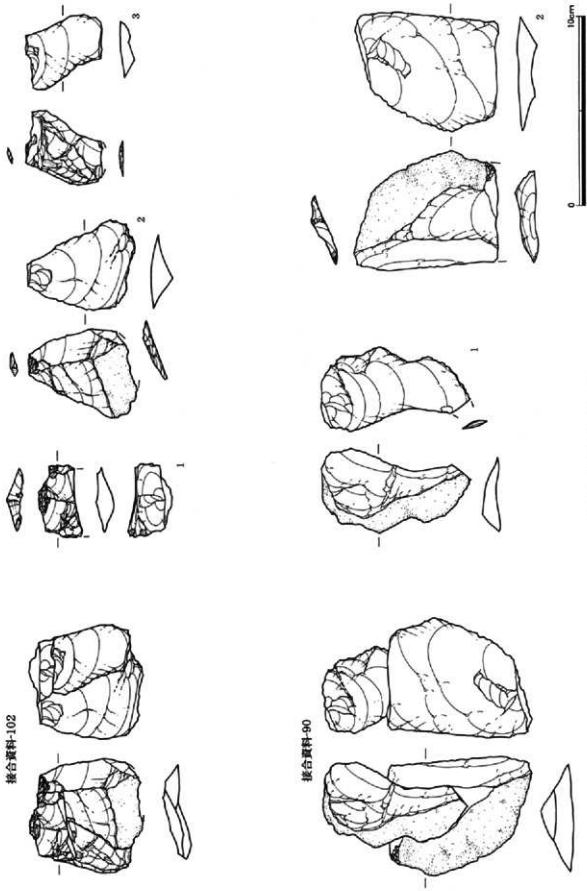


第79図 接合資料-64

II 調査の成果

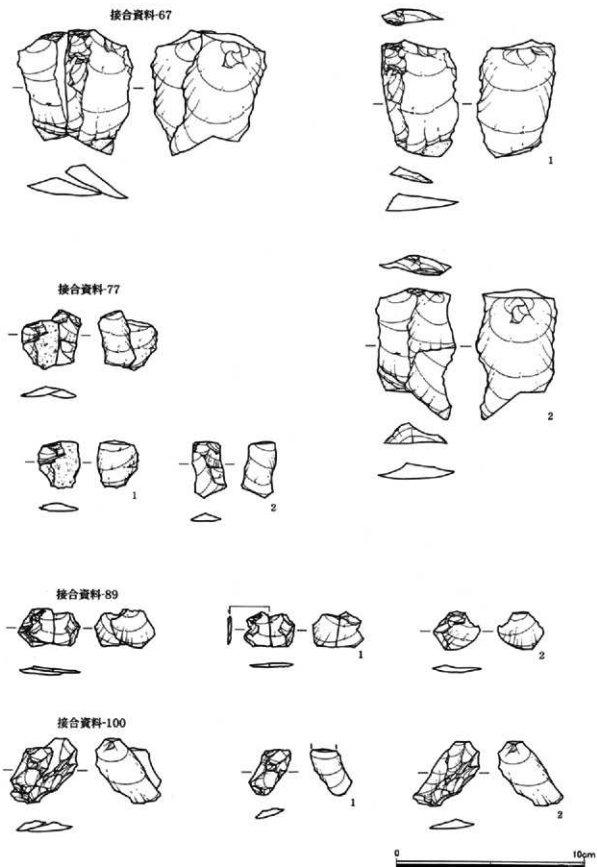


第80図 接合資料-63・66・87

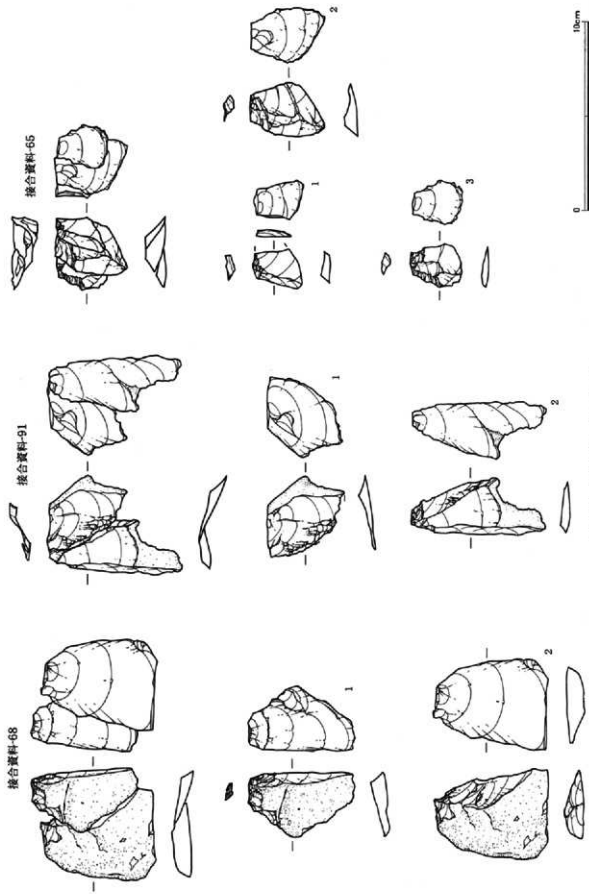


第81圖 接合資料-90・102

II 調査の成果

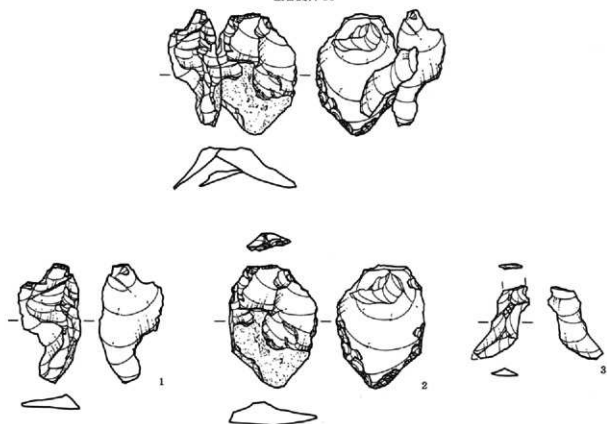


第82図 接合資料—67・77・89・100

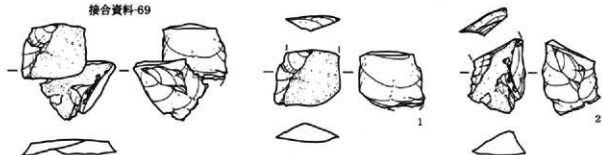


第833圖 接合資料-65・68・91

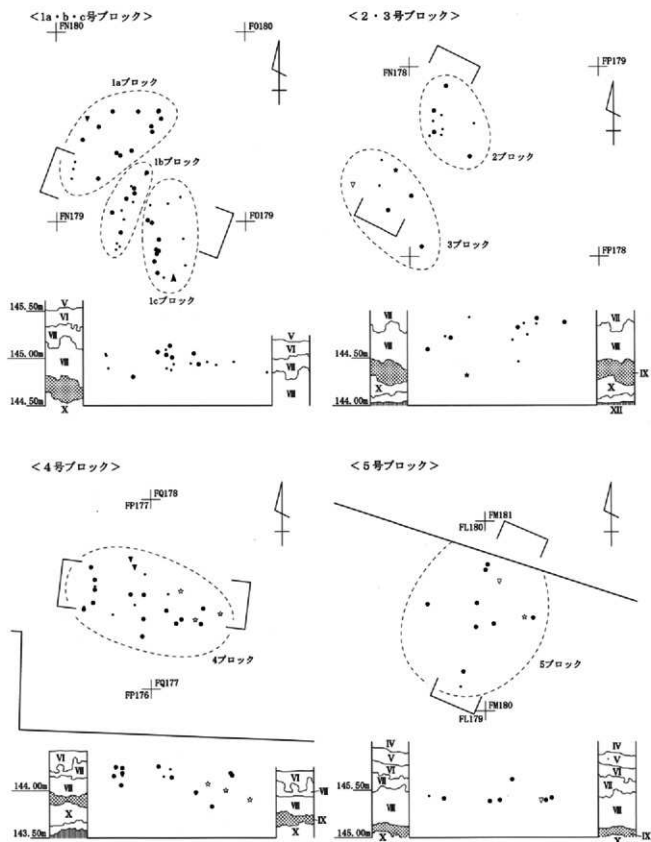
接合資料-85



接合資料-69

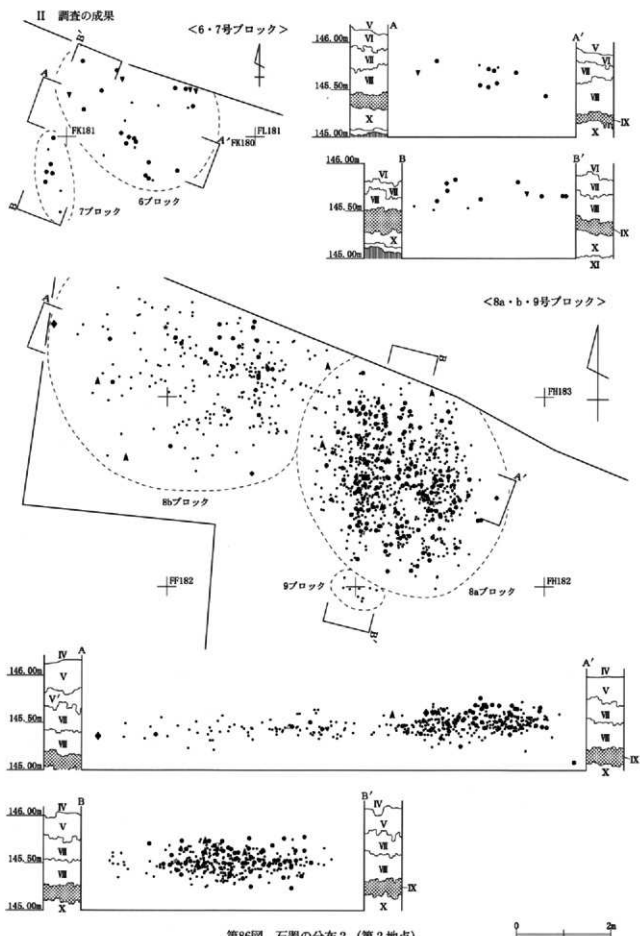


第84図 接合資料-69・85

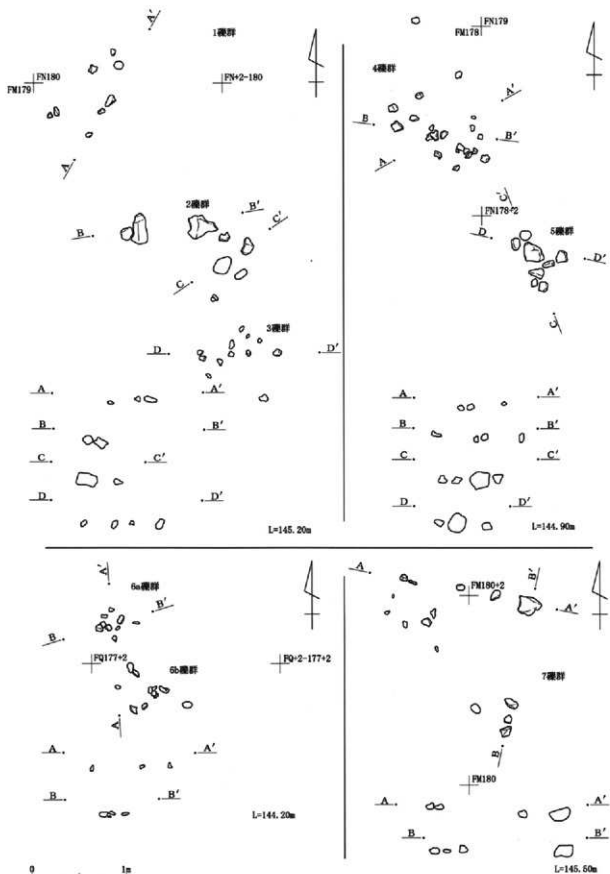


第85図 石器の分布1 (第2地点)

0 2m

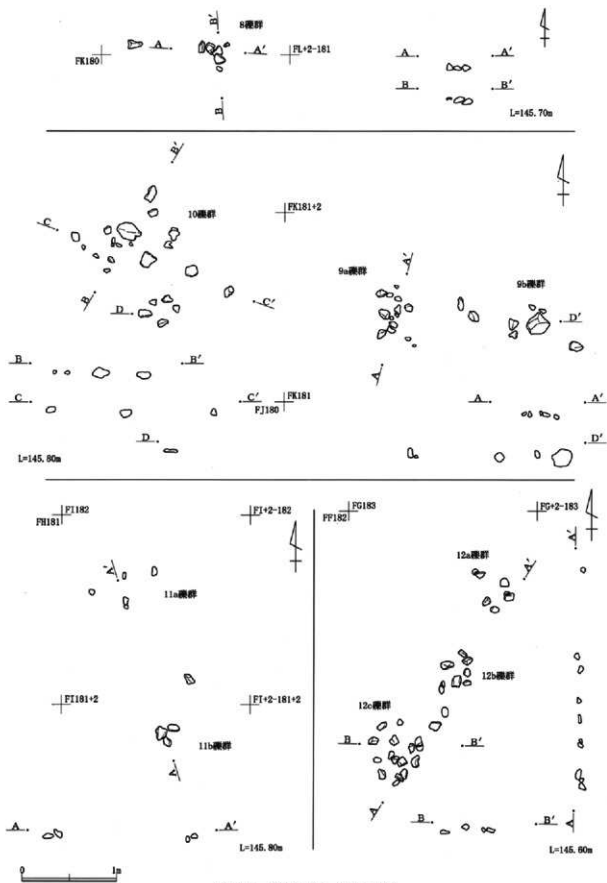


第86図 石器の分布2 (第2地点)

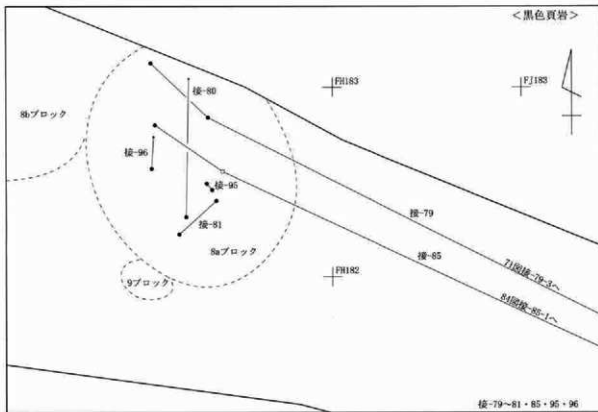
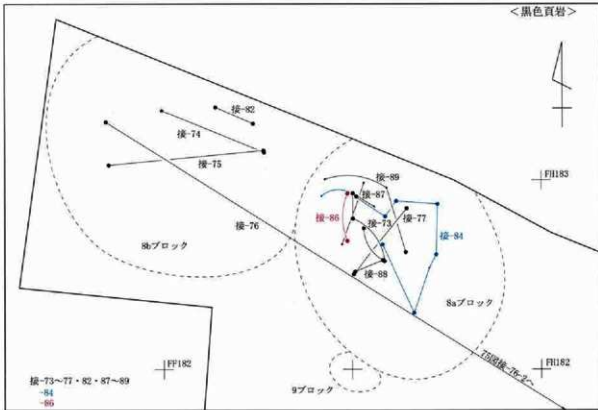


第87図 竪の分布1 (第2地点)

II 調査の成果

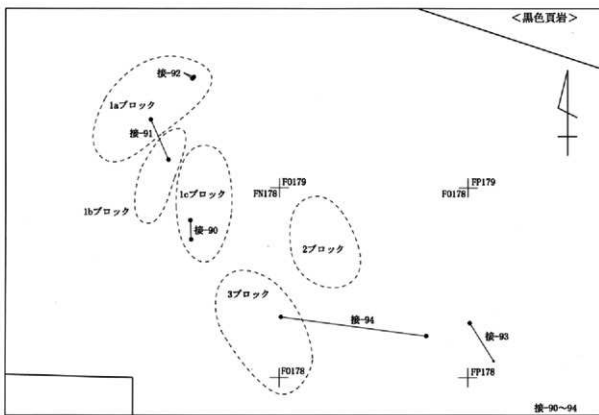
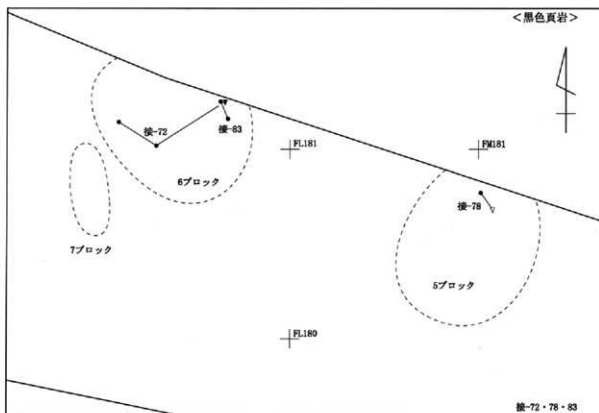


第88図 礫の分布 2 (第2地点)

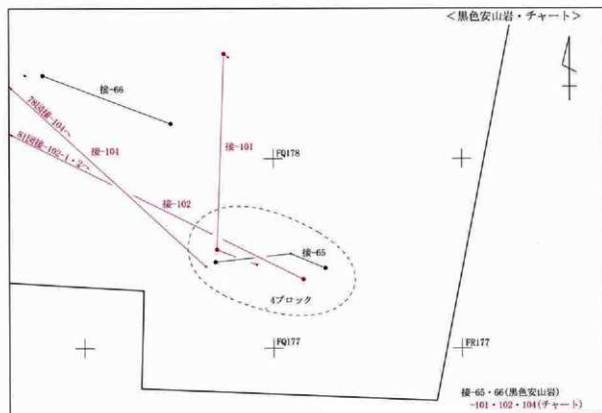
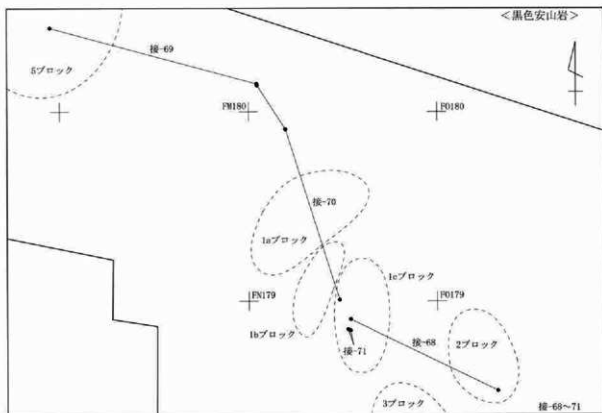


第89図 接合資料の分布1 (第2地点)

II 調査の成果



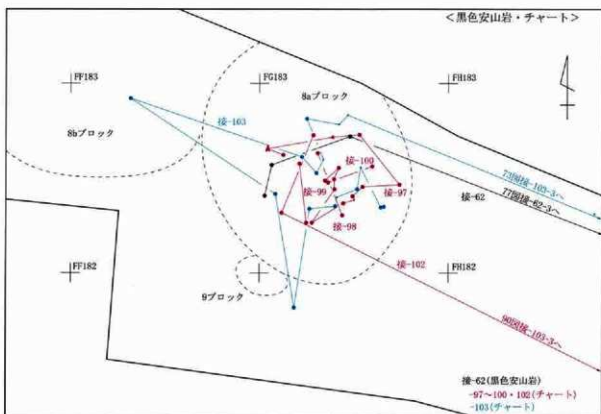
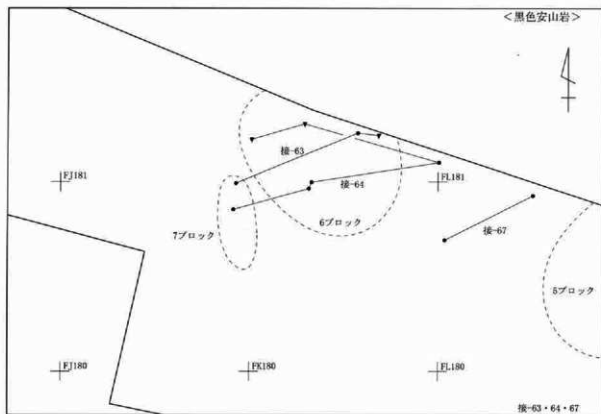
第90図 接合資料の分布 2 (第2地点)



第91図 接合資料の分布3 (第2地点)

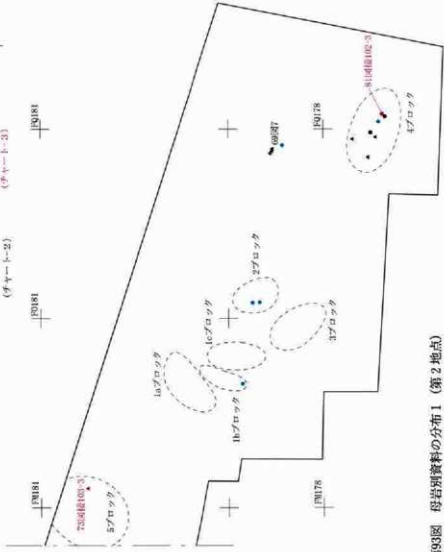
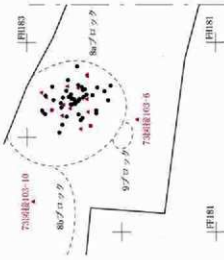
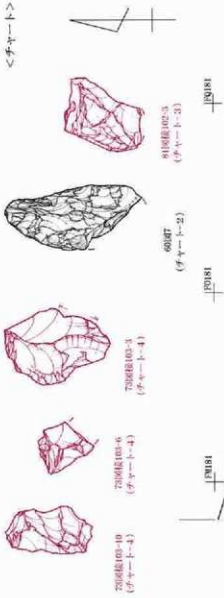
0 2m

II 調査の成果



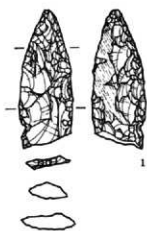
第92図 接合資料の分布4 (第2地点)



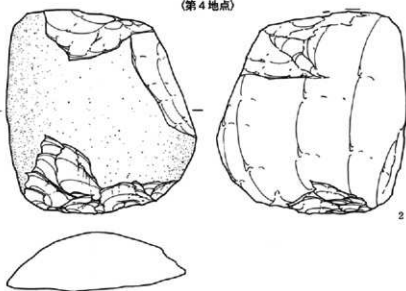


第93図 母岩別資料の分布1 (第2地点)

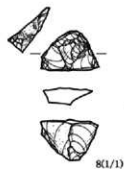
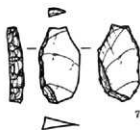
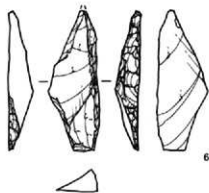
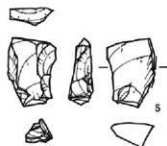
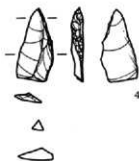
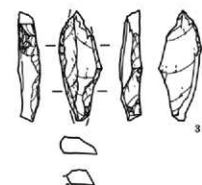
〈第3地点〉



〈第4地点〉



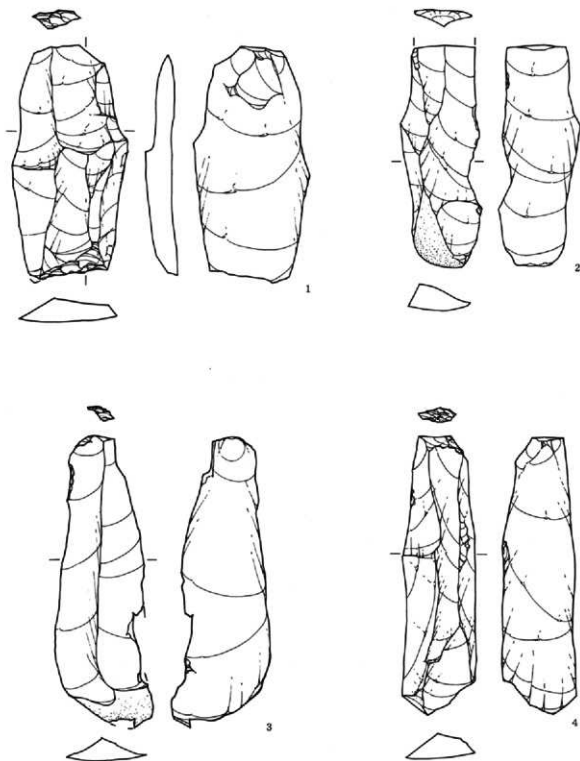
〈第5地点〉



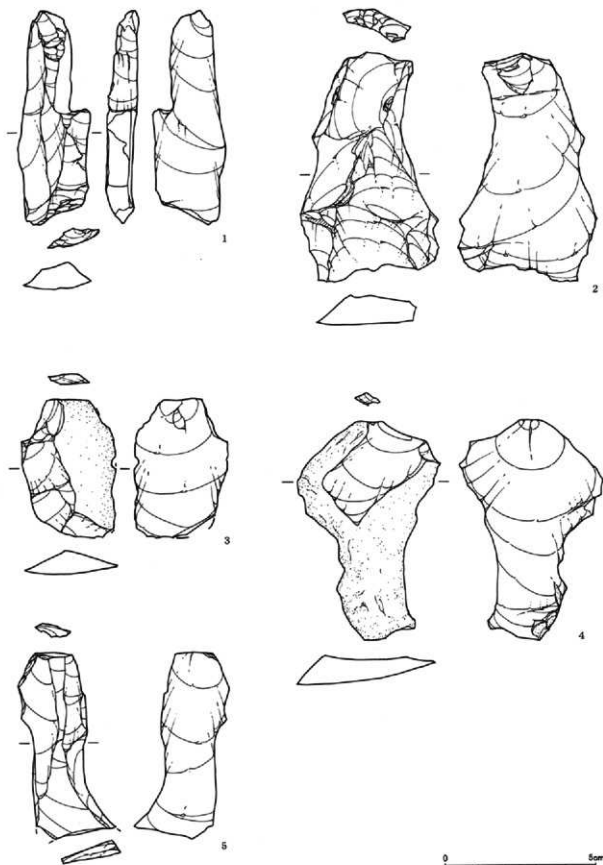
第95圖 出土石器 1 (第3・4・5地点)



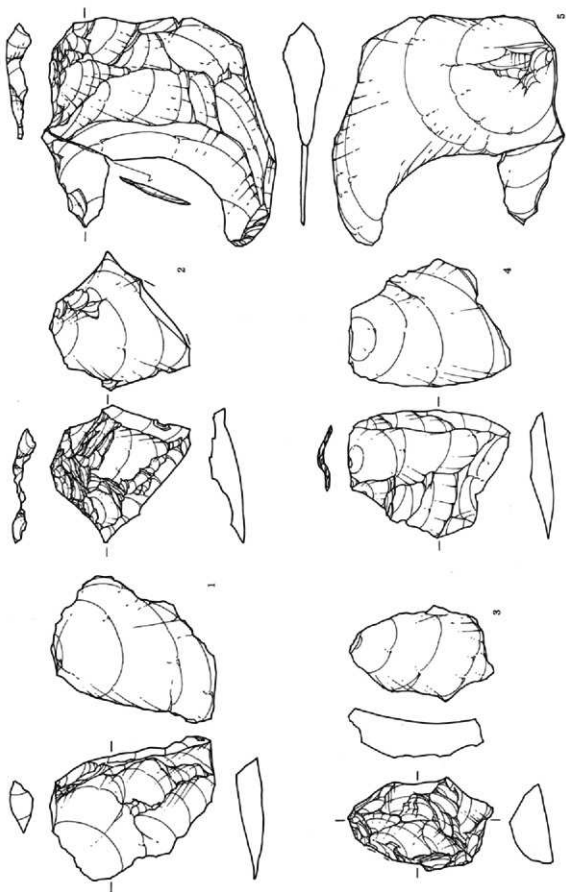
II 調査の成果



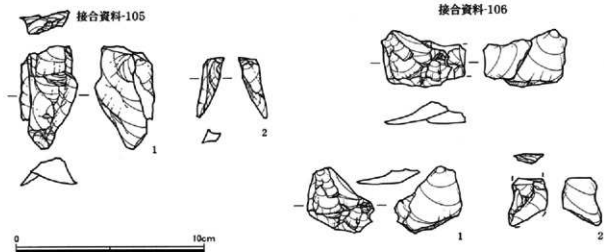
第96図 出土石器 2 (第5地点)



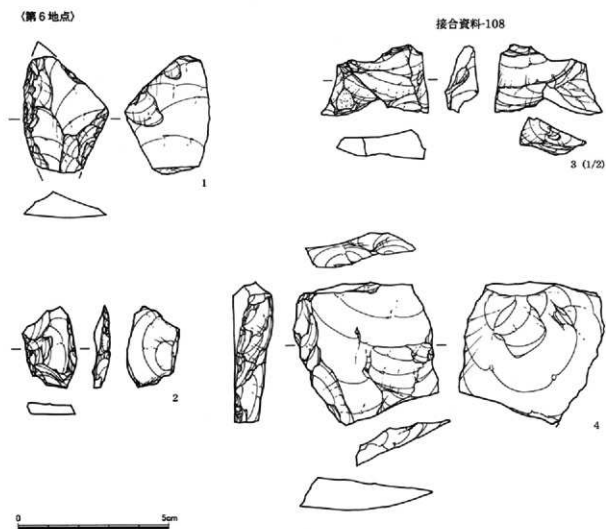
第97图 出土石器3 (第5地点)



第98図 出土石器 4 (第5地点)

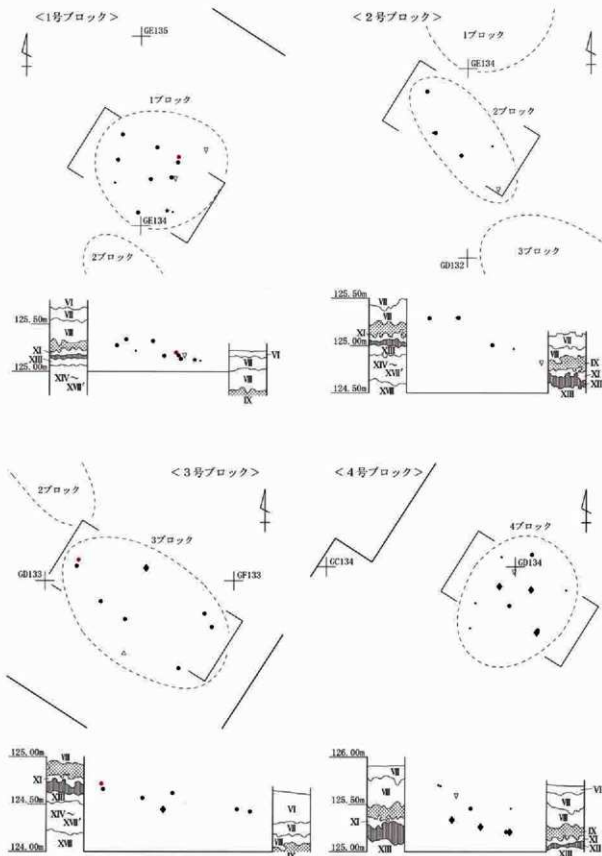


第99圖 接合資料—105・106

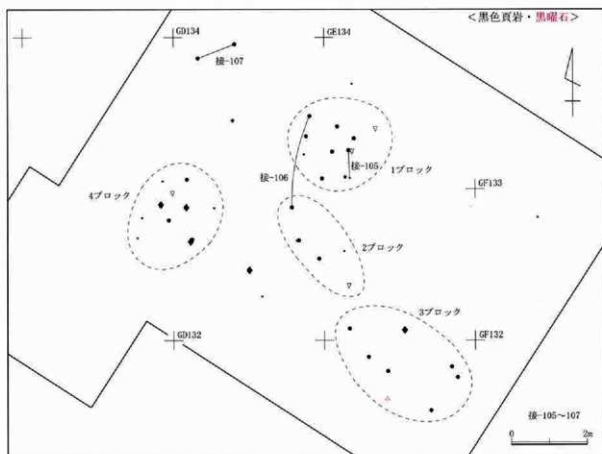


第100圖 出土石器1 (第6地点)

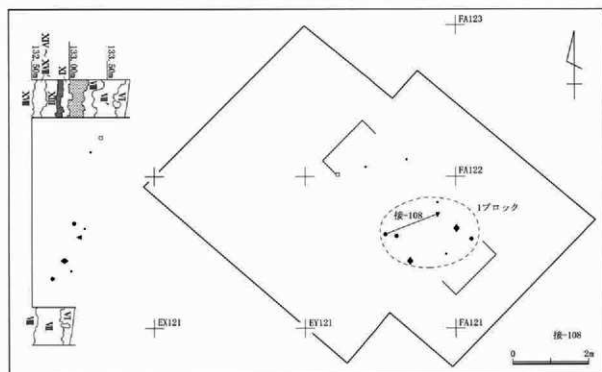
II 調査の成果



第101図 石器の分布 (第5地点)



第102図 石材別・接合資料の分布 (第5地点)



第103図 石器・接合資料の分布 (第6地点)

II-3 第III文化層

当該期石器群は、5地点に分布（第104図を参照）していた。層位的にはIX～X層に出土しており、IX層下部からX層上部に出土量のピークを示す石器群である。3ヶ所の石器群（第2～4地点）が丘陵頂部に近い平坦面に分布したほか、丘陵の東側斜面と西側斜面に各1ヶ所の石器群が分布していた。石器の出土点数が100点にもみえない小規模な石器群が多く、また、石器の分布範囲も狭い。地点間関係は不明だが、石器群の同時性については否定的である。雑群は、5号ブロックに重複して分布していた。

(1) 第1地点

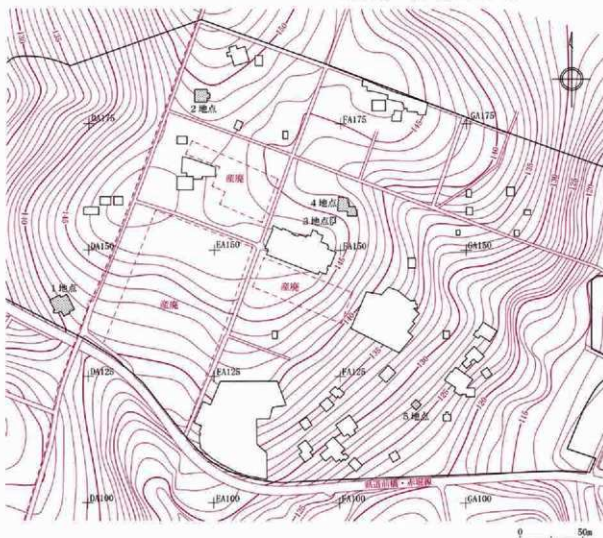
a. 概要

石器群は丘陵を侵食する谷の谷頭に近い南西斜面に出土した。石器は東西10m・南北7mの範囲に広がり、163点（礫15点を含む）の石器が出土した。発掘調査では石器ブロックを6ヶ所、礫群を1ヶ所で確認しており、石器ブロックは弧状分布するようにも見える。

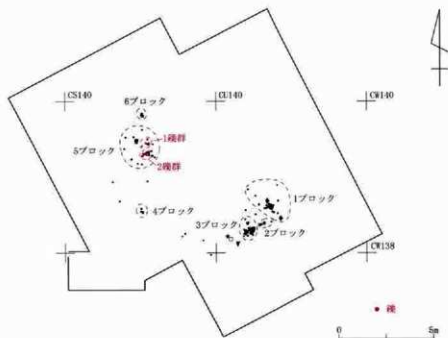
石器はIX層から62点が、X層から101点が出土しており、IX層下部からX層上部に多出している。

石器石材は黒色安山岩が90%以上と圧倒的多数を占め、黒色頁岩6.8%が続く。

接合資料は13例53点を確認した。



第104図 石器の出土地点（第III文化層）



第105図 石器と礫の分布 (第III文化層・第1地点)

第14表 器種・石材構成 (III-1 地点)

	黒安	黒頁	珪頁	割安	合計
ナイフ	100%	0%	0%	0%	100%
角錐状	100%	0%	0%	0%	100%
撻器	100%	0%	0%	0%	100%
削器	0%	0%	100%	0%	100%
加工痕	100%	0%	0%	0%	100%
礫石	0%	100%	0%	0%	100%
石核	66.7%	33.3%	0%	0%	100%
剥片	91.5%	8.5%	0%	0%	100%
砕片	96.0%	4.0%	0%	0%	100%
礫	0%	0%	0%	15%	15%
合計	84.0%	6.1%	0.6%	9.2%	100%

b. 出土石器

総計163点の石器が出土しており、剥片類(砕片を含む)が134点(90.6%)と圧倒的多数を占めている。石器群を構成する示準の石器には、ナイフ形石器(第113図1~4)や角錐状石器5があり、このほかには少量の円形撻器6が構成する。

ナイフ形石器(第109図1~4)

4点が出土している。断面三角形を呈する厚い剥片を用い、側縁を連続加工して石器を作成する。側縁の調整加工が特徴的で、大きく粗く打ち欠いたあと、側縁形状を整えるよう微細に加工している。

第109図1は、左側縁を粗く調整加工したナイフ。先端が尖る三角形の剥片を石器素材に用いている。右側縁は直線的で角度が厚く、「突く」には恰好の先端ということになる。黒色安山岩。2は、右側縁を粗く調整加工したナイフ。鋸歯状を呈する側縁の加工状態、折れ面の在り方からみて、古い打撃痕が作用して製作途上に破損した可能性が高い。幅広い縦長剥片を用いる。黒色安山岩。3は、左側縁を粗く加工したナイフ。先端が尖る三角形の剥片を用いる。左側縁は粗く打ち欠いたあと、微細加工を施しており、直線的で角度が厚い。三角形の厚い先端を有する石器を作成している。器体中央付近より基部側を欠損する。黒色安山岩。4は、左側縁を加工したナイフ。調整加工は粗く側縁形状は鋸歯状を呈する。器体中央付近より上半を石器の製作途上に破損している。幅広い縦長剥片を石器素材に用いる。黒色安山岩。

II 調査の成果

角錐状石器 (第109図5)

1点のみ出土した。5は、器体中央付近より上半部分を欠損した角錐状石器。幅広剥片を横位に用い、剥片の打面部分には執拗に調整加工を加えている。加工段階に破損か。黒色安山岩。

搔器 (第109図6)

1点のみ出土した。6は、厚い刃部を有する搔器。横長剥片の右側縁を連続加工して、刃部を作出している。黒色安山岩。

加工痕ある剥片 (第109図7)

ここでは1点のみ図示した。7は、剥片端部から右側縁を加工した石器。左側縁(直線的な側縁形状を示す)に近い剥片端部を除いて加工は粗く、加工量の多い石器と考えている。黒色安山岩。

削器 (第109図8)

1点のみ出土している。8は、縦長剥片を用い、側縁を加工した削器。磨耗が著しく断定は困難だが、右側縁を粗く打ち欠き、刃部を作出している。この石器は長年に流水に晒され磨耗した可能性が強く、河川等で採取したのち、遺跡に持ち込んだものかもしれない。珪質頁岩。

敲石 (第110図3)

1点のみ出土している。残存する礫面からみて、比較的小形な棒状礫と考えている。小口部分には打撃に伴う打痕や小剥離痕が見られ、この部分から弾け飛んだ破片と推定している。黒色頁岩。

石核 (第110図1)

石核は3点(2点は接合資料)が出土している。ここでは、単独出土した1点を図示する。1は、礫面を大きく残す幅広の大形剥片(図の正面右下に打点が残る)を用い、石核の表裏両面で小形剥片を剥離している。黒色頁岩。

剥片 (第110図2・4・5、第111・112図)

59点が出土している。ここでは、主な剥片類を図示した。

第110図2・5は、礫面を大きく残す縦長剥片。2点とも平坦打面より剥離している。黒色頁岩。4は、礫面を残す幅広剥片。剥片剥離は打点を大きく左右に振り剥離するタイプで、打点は背面構成を意識して稜の後を叩いている。黒色頁岩。

第111図には、幅広剥片を一括した。平坦打面(礫面や広い平坦剥離面など)から剥片剥離している。打面調整や頭部調整は見られない。2・4の打面は剥離段階に弾け飛んでいる。黒色安山岩(4は黒色頁岩)。

第112図には横長剥片を図示した。1は、礫面を大きく残す剥片剥離の初期段階に生じる剥片だが、剥片の表面には小剥離痕が残る、敲石の可能性も否定できない。黒色頁岩。2・3は黒色安山岩。

接合資料

接合資料は12例50点を確認した。比較的大形の接合資料は基本的に原石を分割して剥片を剥離しており、類似する。

接合資料一 (第113・114図)

19点からなる接合資料。高さ13.8cm、幅9.4cm、厚さ7.2cmを測り、石核裏面には大きく礫面を残す。剥片剥離は幅広剥片1を剥離・打面を作出することからはじまり、頻繁な打面転移を繰り返し進む。作業面は主に分割礫の小口部分に設定、幅広剥片を剥離する。黒色安山岩。

原石の分割?→1(打面作出)

⇒(90°打面転移)

○→(下設打面へ) ○→2

⇒(上設打面へ) 3→○

⇒(90°打面転移、石核左側に打面移動) 4

⇒(90°打面転移、石核右側に打面移動) 5

⇒(90°打面転移) ○→○→6

⇒(90°打面転移、石核左側に打面移動) 7

⇒(90°打面転移) 8→9→10

⇒ (90°打面転移)

11→12・13→○○→14→○○→15

接合資料-8 (第115図)

9点からなる接合資料。高さ3.8cm、幅13.8cm、厚さ5.8cmを測る分割線を用いる。石核の裏面には礫面を大きく残す。剥片1は剥片2～6の剝離に先行した、比較的大形の剥片を剝離したとき生じた目的外剥片の可能性が高い。剝離は作業面を固定して行われ、幅広の小形剥片を連続的に剝離している。黒色安山岩。

原石の分割→1 (石核上面で大形剥片剝離)

⇒ (90°打面転移) ○○→2→○……○→3→4→○
→5→6→7

接合資料-3・5・7・10・11 (第116図)

2点からなる剥片の接合資料を一括した。礫面を残す例は見られないことから、比較的剝離が進んだ段階の接合資料で、5例とも小形の幅広剥片を剝離している。黒色安山岩。

c. 石器と礫の分布

第1地点出土の石器群は、西側の沖積地から入り込んだ浅い谷に近い、丘陵の南西斜面に出土した。

南側には丘陵東側の沖積地から谷が入り込んでおり、石器群は丘陵の鞍部に近い丘陵斜面に分布したともいえよう。石器群は東西10m・南北7mの範囲に広がり、石器ブロックを6ヶ所、礫群を1ヶ所で確認した。石器ブロックは弧状分布しているようにも見える。ブロック間の接合資料は乏しく不満だが、石器が弧状分布すること、礫群が1ヶ所しかないことなど、石器群の同時性が確実であるだけに注意すべき分布状態を示している、と考えている。

1号ブロック (第123図)

位置 丘陵の南西斜面 (CU-138G) に分布。

南北2群からなる石器群の南群を構成するブロックの1つ。

規模 長径1.4m・短径0.8m

分布状態 中心部では比較的集中して分布、周辺域では散漫に分布する。

出土層位 IX層～X層に出土している。

出土点数 30点

器種構成 ナイフ形石器4、剥片9、碎片17

石材構成 黒色安山岩30

その他 接合資料6例を確認している。このうち、1例(接合-5)は4号ブロックの剥片と接合している。

第15表 ブロック別器種構成 (III-1地点)

	ナイフ	角礫状	器器	削器	加工痕	巖石	石核	剥片	碎片	合計
1号ブロック	13.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	30.0%	56.7%	30
2号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	16.7%	66.7%	6
3号ブロック	0.0%	1.6%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%	1.6%	19.7%	75.4%	61
4号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	83.3%	16.7%	6
5号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.2%	4.2%	83.3%	8.3%	34
6号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	14.3%	71.4%	7
ブロック外	0.0%	0.0%	0.0%	7.1%	7.1%	0.0%	7.1%	78.6%	0.0%	14
合計	2.7%	0.7%	0.7%	0.7%	2.0%	0.7%	2.0%	39.9%	50.7%	148

II 調査の成果

2号ブロック (第123図)

位置 丘陵の南西斜面 (CU-138G) に分布。
南北2群からなる石器群の南群を構成するブロックの1つ。1・3号ブロックに隣接する。

規模 長径0.7m・短径0.2m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX層から出土している。

出土点数 6点

器種構成 加工痕ある剥片1、剥片1、砕片4

石材構成 黒色安山岩6

その他 ブロック外の剥片と接合する接合資料1例 (接合-11) を確認している。

3号ブロック (第123図)

位置 丘陵の南西斜面 (CU-138G) に分布。
南北2群からなる石器群の南群を構成するブロックの1つ。

規模 長径1.0m・短径0.8m

分布状態 中心部では比較的集中して分布、周辺域では散漫に分布する。

出土層位 IX層～X層に出土している。

出土点数 61点

器種構成 角錐状石器1、瓶器1、石核1、剥片12、砕片46

石材構成 黒色安山岩57、黒色頁岩4

その他 ブロック内の接合資料4例 (接合-8～10・12) を確認している。

4号ブロック (第123図)

位置 丘陵の南西斜面 (CT-138G) に分布。
南北2群からなる石器群の北群を構成するブロックの1つ。

規模 長径0.4m・短径0.2m

分布状態 小範囲に集中分布する。

出土層位 IX層～X層に出土している。

出土点数 6点

器種構成 剥片5、砕片1

石材構成 黒色安山岩5、黒色頁岩1

その他 ブロック間の接合資料2例 (接合-1・5) を確認している。接合-1は5号ブロックの剥片と、接合-5は4号ブロックの剥片と接合。

5号ブロック (第123図)

位置 丘陵の南西斜面 (CS-CT-139G) に分布している。南北2群からなる石器群の北群を構成するブロックの1つ。

規模 径1.8m

分布状態 分布域の東側に集中分布するほか、西側では散漫に分布する傾向を示す。

出土層位 IX層～X層に出土している。

出土点数 24点

器種構成 蔽石1、石核1、剥片20、砕片2

石材構成 黒色安山岩21、黒色頁岩3

その他 接合資料1例を確認している。

6号ブロック (第123図)

位置 丘陵の南西斜面 (CT-139G) に分布。
南北2群からなる石器群の北群を構成するブロックの1つ。

規模 径0.2m

分布状態 集中分布する。

出土層位 IX層～X層に出土している。

出土点数 7点

第16表 ブロック別石材構成 (III-1地点)

	黒安	黒頁	埴頁	合計
1号ブロック	30 100%	0 0.0%	0 0.0%	30 100%
2号ブロック	6 100%	0 0.0%	0 0.0%	6 100%
3号ブロック	57 93.4%	4 6.6%	0 0.0%	61 100%
4号ブロック	5 83.3%	1 16.7%	0 0.0%	6 100%
5号ブロック	21 87.5%	3 12.5%	0 0.0%	24 100%
6号ブロック	7 100%	0 0.0%	0 0.0%	7 100%
ブロック外	11 78.6%	2 14.3%	1 7.1%	14 100%
合計	137 92.6%	10 6.8%	1 0.7%	148 100%

器種構成 加工痕ある剥片1、剥片1、碎片5
石材構成 黒色安山岩7
その他 加工痕ある剥片1、剥片1の2点が主に5号ブロックに分布する接合資料-1に接合する。

1号礫群 (第105図)

位置 丘陵の南西斜面 (CU-138G) に出土。
 5号ブロックに重複分布している。
規模 長径0.5m・短径0.3m
分布状態 散漫に分布する。
出土層位 X層に出土している。
出土点数 4点
石材構成 粗粒安山岩4
その他 1kgを超える大形礫1 (完形) と、破損礫3 (1点は約300gの破損礫、残る2点は70~90gの破損礫) からなる。接合礫は見られない。

2号礫群 (第105図)

位置 丘陵の南西斜面 (CU-138G) に出土。
 1号ブロックの南側に0.5mほど離れて出土、5号ブロックに重複分布している。
規模 長径0.5m・短径0.3m
分布状態 集中分布する。
出土層位 X層に出土している。
出土点数 10点
石材構成 粗粒安山岩10
その他 礫重量は平均重量261g (最大761g、最小16g) を測る。破損礫が7点を占め、このうち2点が接合した。



礫の出土状態 (手前が2号礫群)

d. 接合資料の分布

接合作業の結果、13例53点 (礫の接合1を含む) の接合資料を確認した。北群 (5号ブロック) に分布した接合資料-1を除く、他の接合資料は南側のブロックに分布した。

第124図・左には、北群に分布した接合資料を図示した。この地点には、接合資料-1のみ分布していた。接合資料は基本的に5号ブロックに分布、4・6号ブロックに出土した剥片類と接合関係を有していた。5号ブロック出土の砕片が少ないため、剥離地点の特定が難しく不安だが、分布論的には他の地点から出土した剥片類 (3点) は剥離地点の移動を示唆するというより、選択的な剥片の「持ち出し」と捉えておきたい。

第124図・右には接合点数の多い南群の接合資料を図示した。接合資料-8はブロック外の3点と接合する資料だが、ブロック外に分布した剥片は比較的大形であるという傾向を示している。

第125図には南群に分布した接合資料を図示した。1号ブロックには接合資料-2~7の6個体が、2号ブロックにはブロック外の剥片1と接合する接合資料-11が、3号ブロックには接合資料-9・10・12が分布した。1号ブロックに分布した接合資料-5は4号ブロックに分布した剥片1と接合関係を有する。

e. 石材分布

第14表に示した通り、黒色安山岩は137点を数え、石器群の大部分 (91%) を占めていた。この他には黒色頁岩10、珪質頁岩1が出土しているだけで、極めて単純な石材構成を示していた。

黒色安山岩 出土した黒色安山岩は斑晶が少なく、極めてよく似た母岩的特長を備えていた。南北2群からなる石器群は原石を分割、それぞれの地点で母岩を消費したとも考えたが、分析の結果、確証が得られないため、ここでは前項 (d. 接合資料の分布) で解説した接合資料の在り方を参照して、接合資料の分布を踏まえ、黒色安山岩の分布状況を述べる。

II 調査の成果

石器群の90%以上を占める黒色安山岩の分布はこの地点の石器分布とも言えるものだが、接合資料の分布には大きな相違が見られ、黒色安山岩の出土量に対する接合資料の割合（南群：11個体、北群：1個体）が逆転するという現象が生じていた。この現象が生じた理由は不明だが、この地点の石器群を解釈する上で重要な問題と考えている。

まず南群の石器群だが、接合資料は1号ブロックと3号ブロックに分けてみた接合資料の分布が特徴的である。両ブロックとも剥片2点からなる接合が主体だが、1号ブロックには製作途中破損した多数のナイフが出土していること（碎片の接合資料—4・6が出土していることでも傍証となるだろう）、3号ブロックには多量の碎片（46点）が出土、7点からなる接合資料—8が分布したことなどから、接合資料—9・10・12は一連の剥片生産に伴う資料と考えている。北群には接合資料1例が分布したのみだが、量的には南群と変わらない接合点数を確保した。問題は碎片の出土量が少ないということで、単なる調査精度の問題か、課題を残している。現状では断定は困難だが、4号ブロックや6号ブロックの接合資料を重視して暫定的に5号ブロックを剥離地点と考えておきたい。

黒色頁岩 3～5号ブロックに分布したほか、剥片2点がブロック外に出土している。出土資料を見る限り黒色頁岩は基本的に搬入石器と見られ、また、3号ブロックの碎片（3点）も敲石に分類可能な破片（接合資料—12）であり、黒色頁岩を用いた剥片生産は低調と断言できよう。なお、残る碎片は通常の剥片剥離に伴う碎片と捉えている。

珪質頁岩 3号ブロックに1点が出土した。出土石器の項で説明した通り、石器石材は河川等で採取した可能性が強く、意図的に遺跡に持ち込んでいるということだけは確実である。

(2) 第2地点

a. 概要

調査区・北に近い丘陵の南側斜面に分布した。石器と礫は径3m程の範囲に広がり、8点（礫3点を含む）の石器が出土、石器ブロック・配石（礫群）を1ヶ所ずつ確認した。

石器は大部分がX層から出土しており、X層下部～X1層上部に出土した礫の出土層位とも矛盾なく整合している。出土資料は搬入石器と見られ、石器石材は在地系石材3種類（黒色安山岩・黒色頁岩・ホルンフェルス）の他、非在地系1種類（黒曜石）を確認している。

b. 出土石器

5点（礫3点を除く）の石器が出土している。主な石器は3点のナイフ形石器だが、このほか加工痕ある剥片1、剥片1が組成する。

ナイフ形石器（第117図1～3）

3点が出土している。小形の幅広剥片を横位に用い、側縁に連続加工して石器を作出する。出土資料には碎片類が見られないことから、3点とも搬入石器と考えている。

第117図1は、左側縁に連続剥離を施したナイフ。小形・横長剥片の打面側を打ち欠き、剥片端部に刃部を求めている。斑晶を含む漆黒の黒曜石。2は、左側縁を粗く調整加工したナイフ。幅広剥片を縦位に用いる。調整加工は粗く側縁を打ち欠いたあと、

第17表 器種・石材構成（III—2地点）

	黒安	黒頁	黒曜石	ホルン	粗安	合計
ナイフ	33.3%	0.0%	66.7%	0.0%	0.0%	100%
加工痕	0.0%	100%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
剥片	0.0%	0.0%	0.0%	100%	0.0%	100%
礫	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%	100%
合計	12.5%	12.5%	25.0%	12.5%	37.5%	100%

微細加工を施して石器を整形している。石器の断面形状は厚く、三角形状を呈する。黒色安山岩。3は、左側縁に連続剝離を施したナイフ。小形・横長剥片を横位に用いる。加工部位、及び、刃部位置は1のナイフと同様で、母岩の特徴も酷似している。器体の上半部分を欠損する。黒曜石。

加工痕ある剥片 (第117図4)

1点のみ出土した。4は小形の幅広剥片を縦位、及び、横位に折断した剥片を用いる。縦の折断面を粗く加工している。加工は小範囲に留まるため加工意図は不明だが、形状の良好な側縁を有しており、見方を変えれば、切出形のナイフ形石器にも見える。黒色頁岩。

剥片 (第117図5)

1点のみ出土した。比較的良好な剥片形状を有する幅広剥片。剝離面打面の対辺には、礫面を大きく残している。比較的緻密で、良質なホルンフェルスを用いている。

c. 石器と礫の分布

石器群は、丘陵南側の斜面に分布した。既に述べた通り、この地点は上層石器群(II-1 第I文化層)が出土した地点でもある。石器は20m程度の範囲に広がり、石器ブロック1・配石1を確認した。

出土資料は8点と少なく、うち礫が3点を占める。

1号ブロック (第127図)

位置 丘陵の南側斜面(DW-180G)に分布。

規模 長径13.0m・短径1.0m

分布状態 ナイフ3点が集中する一方、やや離れて剥片が分布。全般的に散漫な分布状況を呈する。

出土層位 X層～XI層に出土している。

出土点数 4点

器種構成 ナイフ形石器3、剥片1

石材構成 黒曜石2、ホルンフェルス1、黒色安山岩1

その他 接合資料なし。このブロックより約3m離れて加工痕ある剥片1が分布。

1号配石 (第127図)

位置 丘陵の南側斜面(DW-180G)に出土。

1号ブロックの西側に隣接している。

規模 長径0.7m・短径0.2m

分布状態 3点の礫は、それぞれ0.2m・0.5mほど離れて分布する。

出土層位 X層に出土している。

出土点数 3点

石材構成 粗粒安山岩3

その他 礫重量は平均重量1019g(最大1582g、最小729g)を測る。通常の礫群とは異なり礫重量が重く、ここでは配石と呼んだ。

第18表 ブロック別・配石別器種構成(III-2地点)

	ナイフ	加工痕	剥片	礫	合計
1号ブロック	75.0 ³	0.0 ⁰	25.0 ¹	0.0 ⁰	100 ⁴
ブロック外	0.0 ⁰	100 ¹	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ¹
1号配石	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ³	100 ³
合計	37.5 ³	12.5 ¹	12.5 ¹	37.5 ³	100 ⁸

第19表 ブロック別・配石別石材構成(III-2地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	ホルン	粗安	合計
1号ブロック	25.0 ¹	0.0 ⁰	50.0 ²	25.0 ¹	0.0 ⁰	100 ⁴
ブロック外	0.0 ⁰	100 ¹	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ¹
1号配石	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ³	100 ³
合計	12.5 ¹	12.5 ¹	25.0 ²	12.5 ¹	37.5 ³	100 ⁸

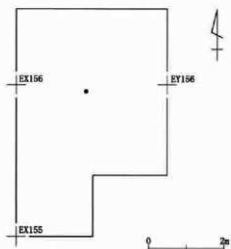
II 調査の成果

(3) 第3地点

丘陵が東に大きく張り出した、尾根状丘陵の北側斜面に分布(第106図)した。試掘調査で剥片1が出土したため拡張調査を行い、最終的には単独出土ということで決着した。この地点から北に10mほど離れた地点に第4地点がある。

石器はX層より出土している。なお、この地点のロームはIX層の堆積が薄く、IX層(As-BP)が流出している可能性も否定できない。

出土した石器は、剥離の段階で打点付近から縦位に破損した剥片(第118図1)。形態的には扇状を呈する幅広剥片と見られ、移動理由や単独出土する理由は明確ではない。石器石材はホルンフェルスで、同種石材の中では比較的良質な部類に入る。



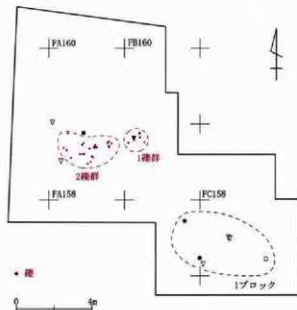
第106図 石器の分布(第III文化層・第3地点)

(4) 第4地点

a. 概要

丘陵が東に張り出した、尾根状丘陵の北東側斜面に分布(第107図)した。石器は長径13m・短径5m程の範囲に広がり、石器10点と礫・礫片29点が出土した。発掘調査の結果、礫群を2ヶ所で確認。石器ブロックについては礫群の南西側に散漫な石器の分布域が見られ、ブロックを捉えるならこれ以外にブロックと呼べる分布は見られない。

石器(礫29点を含む)は総てX層から出土している。なお、この地点では地点毎にローム層の堆積状況が大きく異なり、斜面の下ほどX層が不安定になるという傾向を示していた。



第107図 石器と礫の分布(第III文化層・第4地点)

b. 出土石器

石器は、10点が出土した。削器や加工痕ある剥片など加工具や大形石刃が出土しており、示準的石器は見られない。

第20表 器種・石材構成(Ⅲ-4地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	チャート	粗安	合計
削器	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{1}{100\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	1
加工痕	$\frac{1}{100\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	1
石核	$\frac{1}{100\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	1
礫片	$\frac{3}{60.0\%}$	$\frac{2}{49.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	5
剥片	$\frac{1}{50.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{1}{50.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	2
礫	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{0}{0.0\%}$	$\frac{29}{100\%}$	29
合計	$\frac{6}{15.4\%}$	$\frac{2}{5.1\%}$	$\frac{1}{2.6\%}$	$\frac{1}{2.6\%}$	$\frac{29}{74.4\%}$	39

削器 (第119図1)

1点のみ出土した。1は、縦長剥片を用いた削器。右側縁を粗く打ち欠き、刃部を作出している。石器は上端部分を欠く。左側縁の礫面は平滑で、河床礫に特徴的な礫面の状態とは異なる。器体中央より先端は調査時に破損している。搬入石器。斑品を少し含む黒曜石。

加工痕ある剥片 (第119図2)

1点のみ出土した。2は縦長剥片を用いて右側縁を「ノッチ」状に加工している。礫面が背面側に少し残る程度に、石核を消費した段階で剥離した可能性が高く、断面・台形状を呈している。搬入石器と捉えている。黒色安山岩。

石核 (第119図3)

1点のみ出土した。拳大程度の円礫を石核素材に用いる。初期段階の石核形状は不明だが、90°打面転移して剥片を剥離していた可能性が高い。形態的にはこれ以上の剥離が難しいようにも見える反面、石核は搬入石器と見られ、さらなる剥片剥離を目指してこの地点に持ち込んだ可能性が高い。黒色安山岩。

剥片 (第119図4、第120・121図1)

7点が出土している。出土した石器には、類似母岩が見られないことから7点は搬入石器と考えている。このうち5点は大形の縦長剥片である。

第119図4は、石刃状を呈す縦長剥片。背面の剥離面構成は両設打面の存在を示唆しており、両端から縦長剥片を剥

離したのであろう。打面調整、及び、頭部調整は見られない。三角形の断面形状を呈す。黒色安山岩。

第120図1は、やや幅広い縦長剥片。背面側には稜上調整に類似した剥離が見られ、剥片(石刃?)剥離の初期を示す可能性が指摘されよう。黒色頁岩。2・3は、三角形を呈す縦長剥片。2の左側縁は粗く加工され「ノッチ」状を呈する。2点とも列点状の織状構造を有する。2・3の風化度は若干相違する。黒色安山岩。4・5は、小形の幅広い剥片。2点とも類似母岩は見られないことから搬入石器と考えている。4は黒色頁岩、5はチャート製。

第121図1は、礫面を大きく残す大形の幅広い剥片。裏面側・右側縁には「ノッチ」状の加工(第120図2に類似、同・左側縁の剥離痕は剥離段階の打撃痕か?)が見られ、特徴的である。剥片の打面付近を大きく欠損する。黒色安山岩。

第21表 ブロック別・礫群別石材構成 (III-4地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	チャート	粗安	合計
1号ブロック	83.3 ⁵	0.0 ⁰	16.7 ¹	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ⁶
ブロック外	25.0 ¹	50.0 ²	0.0 ⁰	25.0 ¹	0.0 ⁰	100 ⁴
1号礫群	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ⁵	100 ⁵
2号礫群	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ²⁴	100 ²⁴
合計	15.4 ⁶	5.1 ²	2.6 ¹	2.6 ¹	74.4 ²⁹	100 ³⁹

第22表 ブロック別・礫群別器種構成 (III-4地点)

	削器	加工痕	石核	縦長	剥片	礫	合計
1号ブロック	16.7 ¹	16.7 ¹	0.0 ⁰	50.0 ³	16.7 ¹	0.0 ⁰	100 ⁶
ブロック外	0.0 ⁰	0.0 ⁰	25.0 ¹	50.0 ²	25.0 ¹	0.0 ⁰	100 ⁴
1号礫群	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ⁵	100 ⁵
2号礫群	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	0.0 ⁰	100 ²⁴	100 ²⁴
合計	2.6 ¹	2.6 ¹	2.6 ¹	12.8 ⁵	5.1 ²	74.4 ²⁹	100 ³⁹

II 調査の成果

c. 石器と礫の分布

第4地点出土の石器群は、東側に張り出した尾根状丘陵の北東斜面に分布した。石器の分布域は狭く、礫群2ヶ所と散漫な石器分布域を1ヶ所で確認した。

1号ブロック (第107図を参照)

位置 丘陵の北東側斜面 (FB・FC-157G) に分布。

規模 長径4.5m・短径2.0m

分布状態 全般的に散漫な分布状況を呈する。

出土層位 X層に出土している。

出土点数 6点

器種構成 削器1、加工痕ある剥片1、縦長剥片3、剥片1

石材構成 黒曜石1、黒色安山岩5

その他 接合資料なし。このブロックより約6m離れて礫群が分布。

1号礫群 (第127図)

位置 丘陵の北東側斜面 (FB-158G) に出土。

1号ブロックより北西へ約5m離れている。

規模 長径1.0m・短径0.6m

分布状態 散漫に分布する。やや離れて大形礫が分布している。

出土層位 X層に出土している。

出土点数 5点

石材構成 粗粒安山岩5

その他 重量的にはバラツキが著しく、どの程度の礫が平均的か判断できない。礫重量の平均は515g (最大1551g、最小99g) を測る。出土した5点は全て破損礫。

2号礫群 (第127図)

位置 丘陵の南側斜面 (FA-157G) に出土。

規模 長径3.0m・短径1.8m

分布状態 散漫に分布する。大形礫2 (1点は2195g、1点は5715gを測る) が礫群の周辺に分布して

いる。

出土層位 X層に出土している。

出土点数 24点

石材構成 粗粒安山岩24

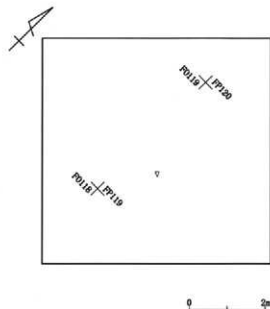
その他 300g前後の礫が最も多く出土している。礫重量の平均は551g (最大5715g、最小42g) だが、2kgを超える礫2個体を除く礫の平均重量は242gで、通常の礫群と何ら変わらない。接合資料は礫群内で3例6点を確認した。

(5) 第5地点

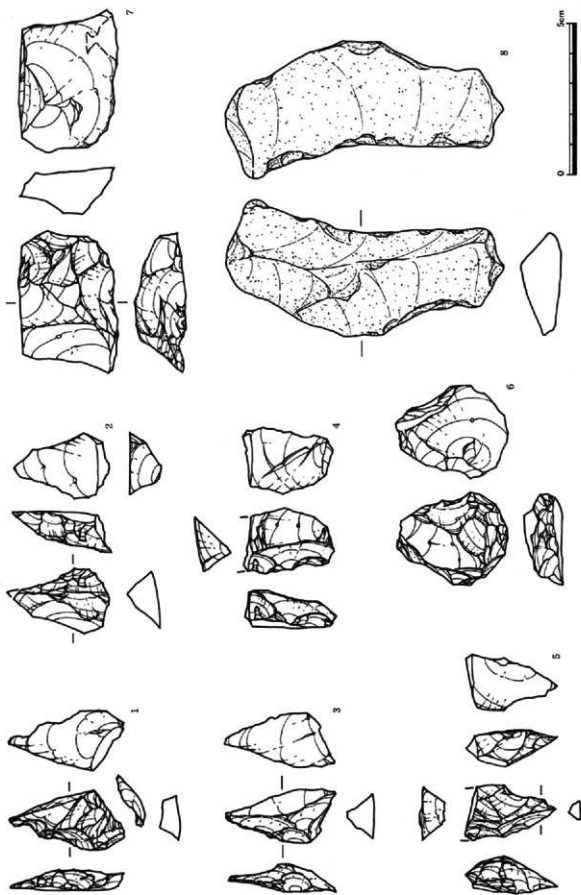
石器群は、丘陵性台地の南東斜面に分布 (第104・108図) しており、最も近い石器群 (第3地点) から150m以上も離れている。石器は1点のみ出土。

この調査地点ではX層の堆積が見られないため、出土層位をIX層と捉えたようだが、本来的には石器の出土層位はIX・X層と捉えるべきかもしれない。

出土した石器 (第122図1) は、下半部を欠いた縦長剥片。折れ面は斑晶付近を中心にリングが同心円状に見える。微細な打面調整を施す。斑晶の混入の少ない漆黒の黒曜石を用いる。

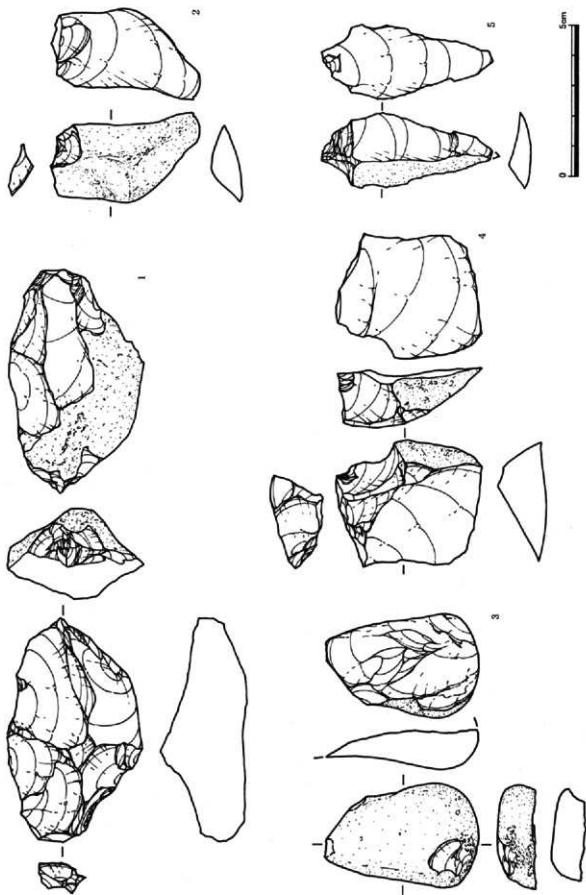


第108図 石器の分布 (第三文化層・第5地点)

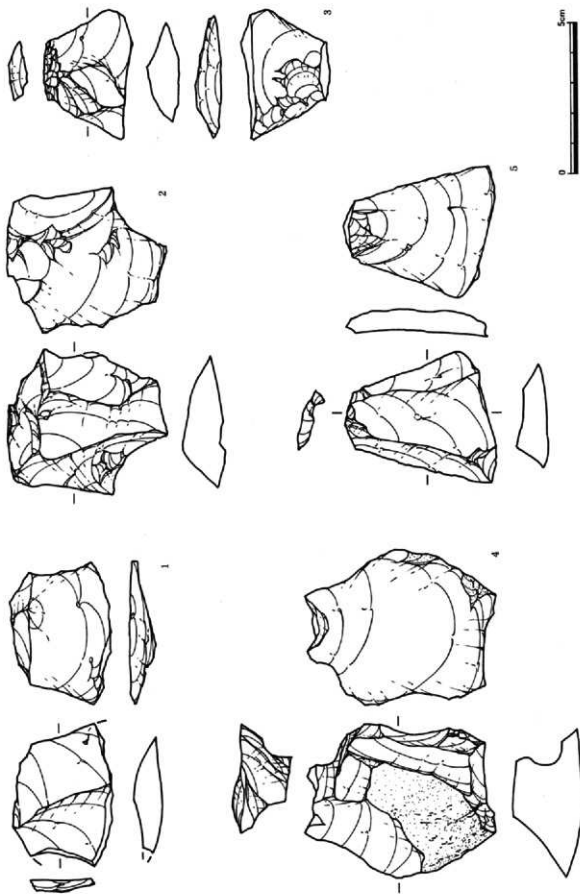


第109図 出土石器1 (第1地点)

II 調査の成果

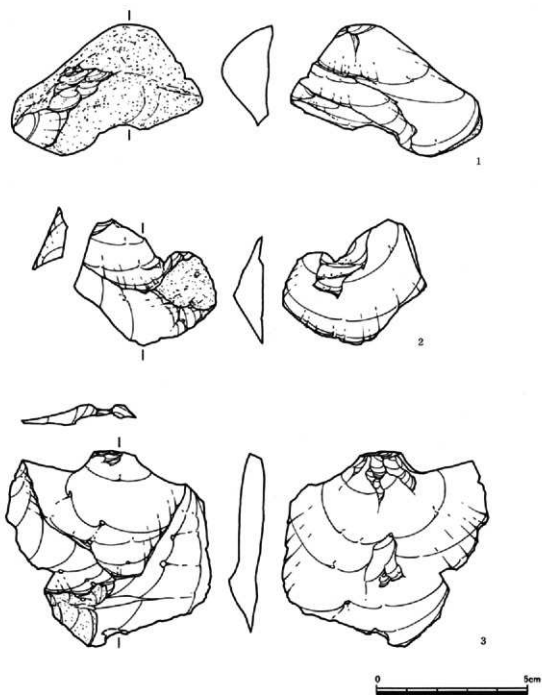


第110図 出土石器2 (第1地点)



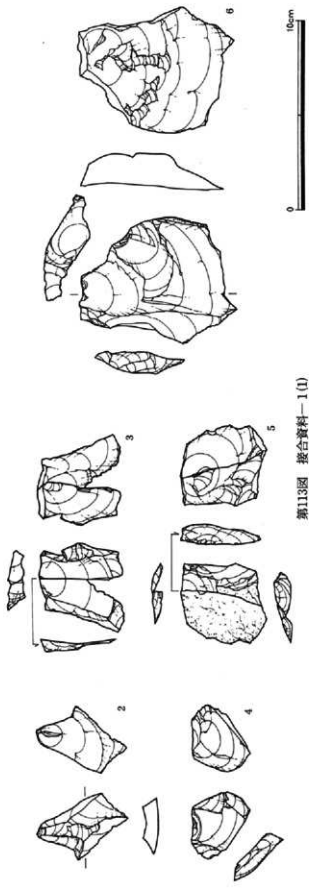
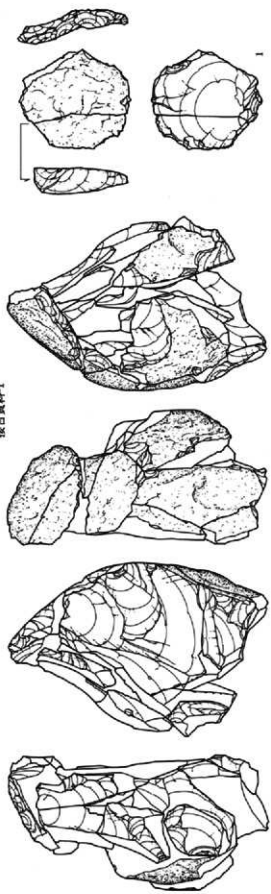
第111图 出土石器3 (第1地点)

II 調査の成果



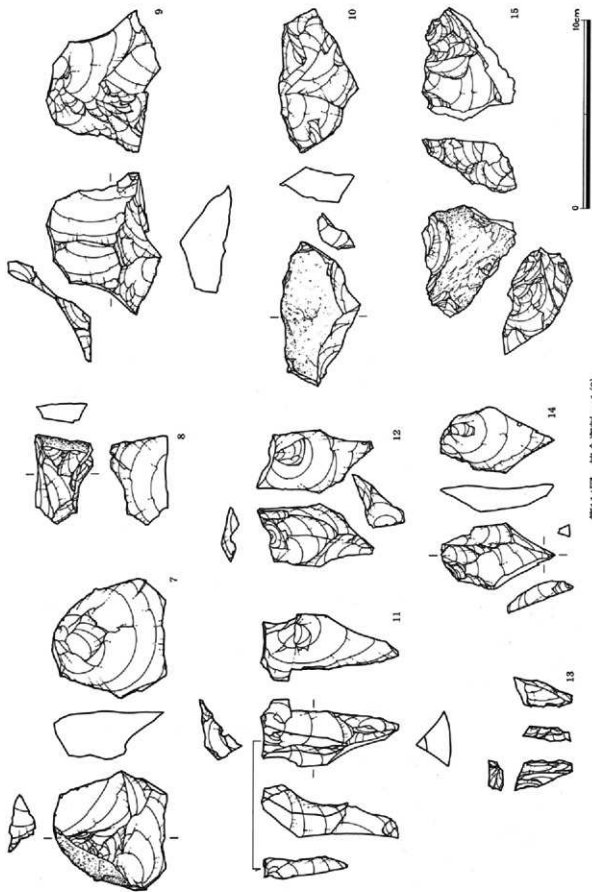
第112図 出土石器4 (第1地点)

接合資料-1



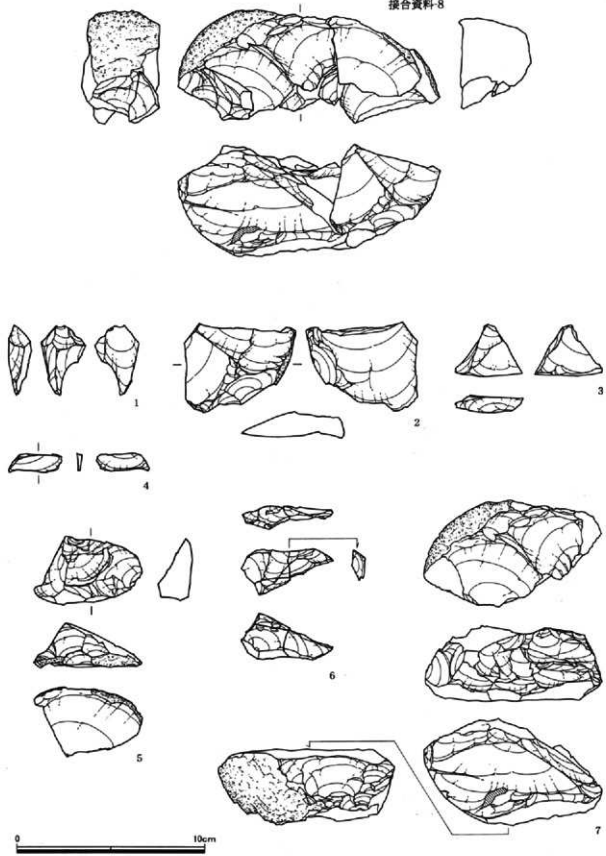
第113図 接合資料-1(1)

II 調査の成果



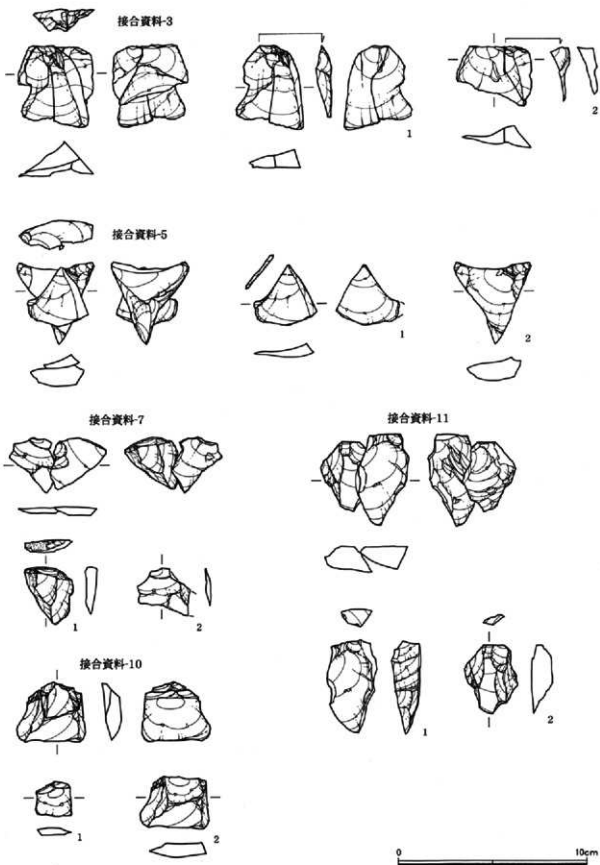
第114図 総合資料-1(2)

接合資料-8

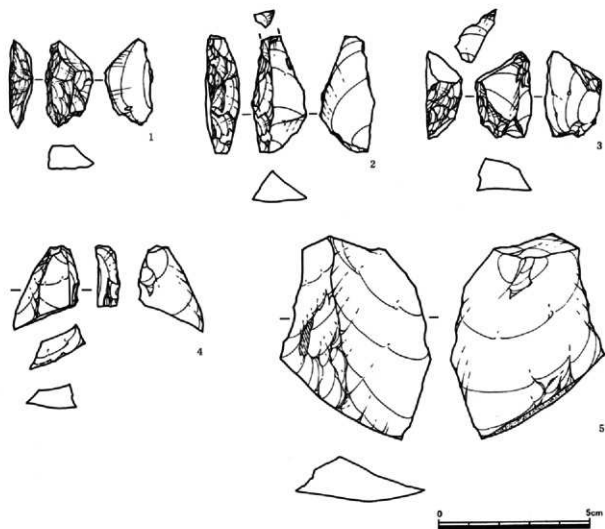


第115圖 接合資料-8

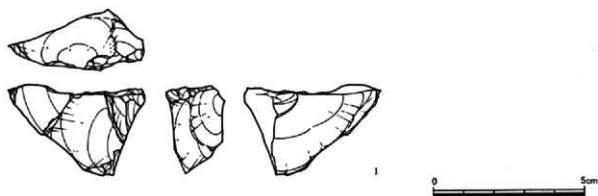
II 調査の成果



第116図 接合資料-3・5・7・10・11

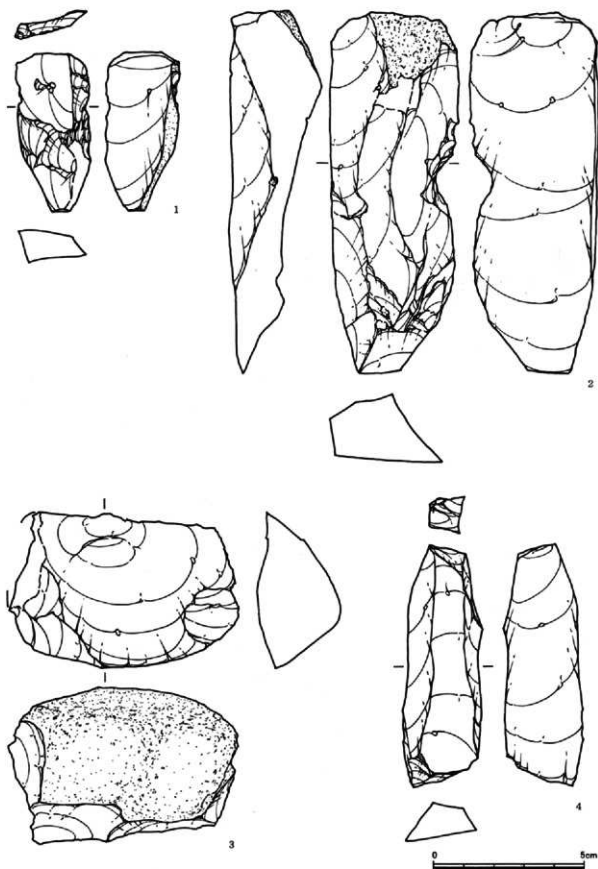


第117圖 出土石器 1 (第2地点)

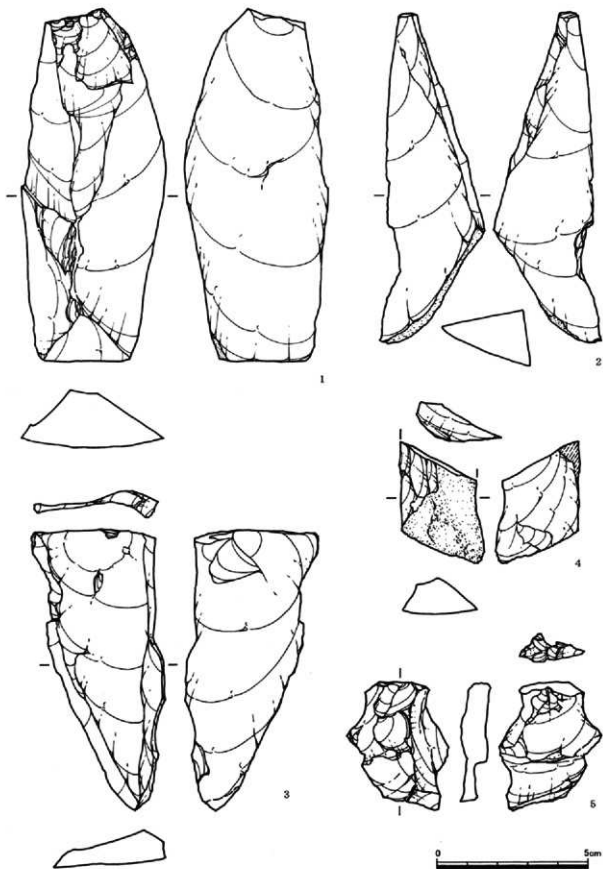


第118圖 出土石器 1 (第3地点)

II 調査の成果

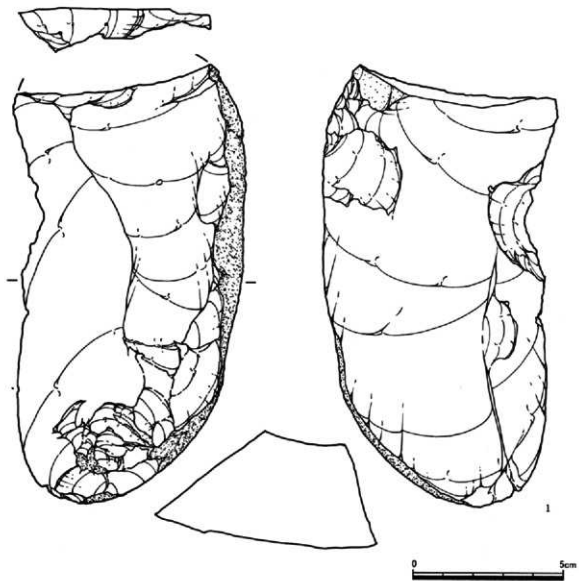


第119図 出土石器 1 (第4地点)

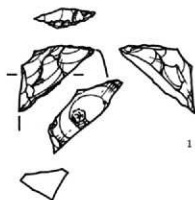


第120圖 出土石器 2 (第4地点)

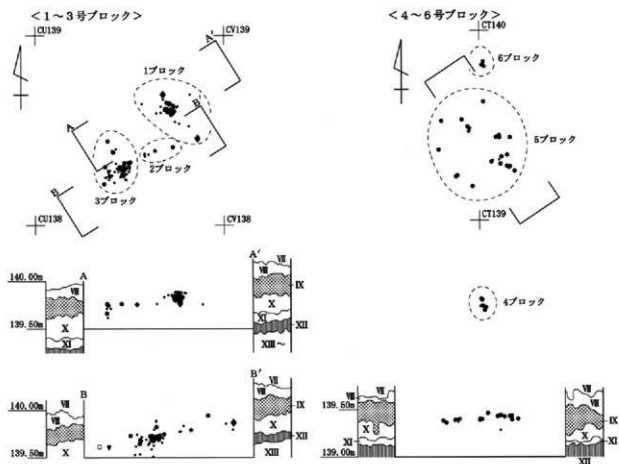
II 調査の成果



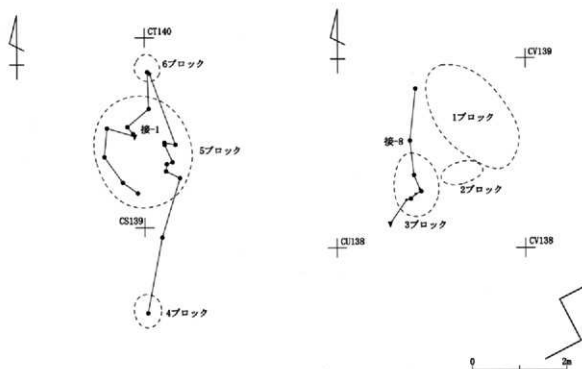
第121図 出土石器 3 (第4地点)



第122図 出土石器 1 (第5地点)

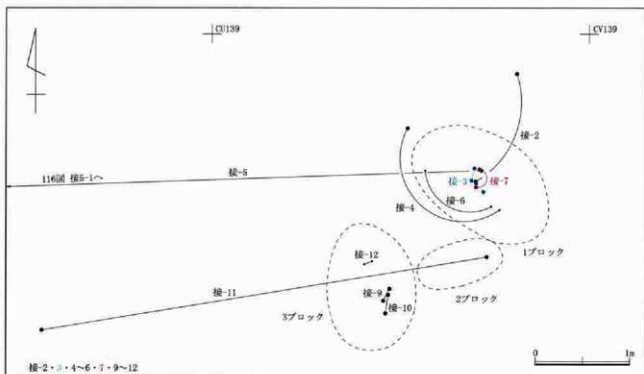


第123図 石器の分布 (第1地点)

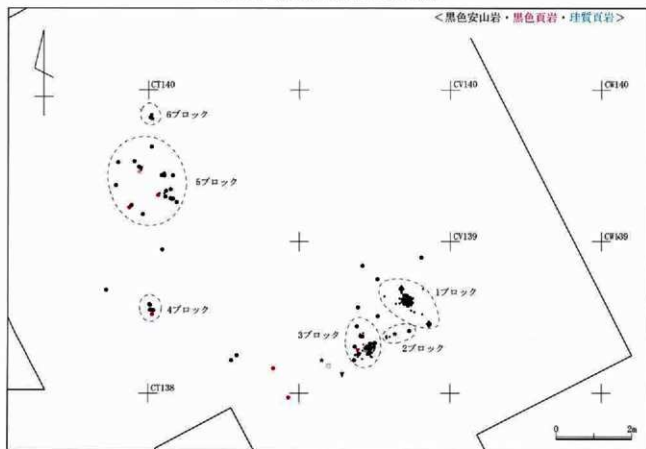


第124図 接合資料の分布1 (第1地点)

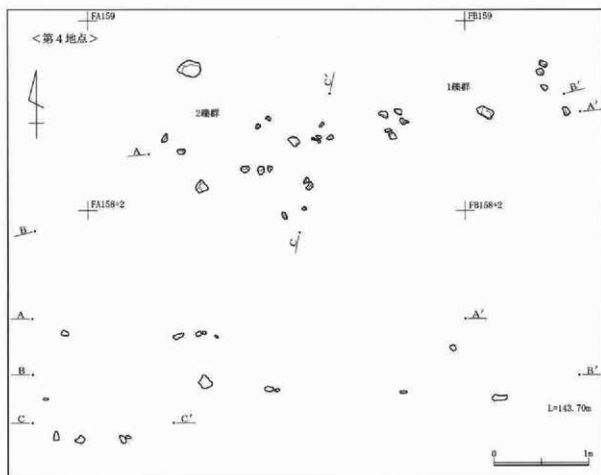
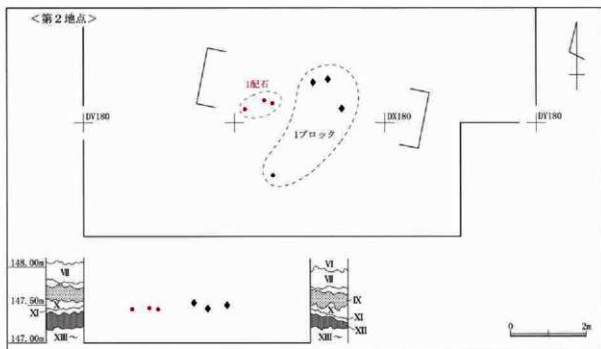
II 調査の結果



第125図 接合資料の分布2 (第1地点)



第126図 石材別分布図 (第1地点)



第127図 石器と礫の分布 (第2地点)

II-4 第IV文化層

当該期石器群は、37ヶ所の地点に分布(第128図を参照)していた。層的には、XI層～XIII層に出土しており、XII層に出土量のピークを示す石器群である。1000m²を超える分布範囲の広い石器群が、尾根状台地の平坦部(A地点)や丘陵の東南斜面(B・C地点)に分布したほか、100点にもみえない小規模な石器群が比較的標高の低い東南斜面に分布した。

石器群は丘陵の西側斜面、及び、浅く入り込んだ谷より北の東側斜面を除いて、濃密に分布していた可能性が強い。比較的平坦な丘陵頂部の石器分布が

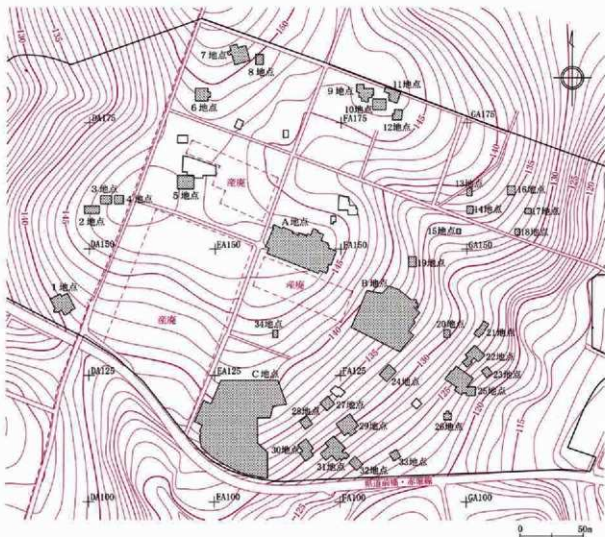
薄い点は意外だが、石器群が確認できなかったわけではなく、丘陵平坦部の未確認地点(産廃処理に伴う掘削で大きく削平を受けていた)にも当該期石器群が分布していた可能性が高い、と考えている。

37ヶ所の石器群には、接合資料や母岩レベルを地点間を結び付けるものがなく、また、層的にも微妙に異なるため、地点間の関係については現状では結論づけられない。

(1) A地点

a. 概要

石器群は丘陵性台地が東側に張り出した、比較的



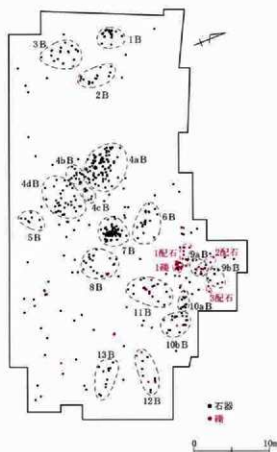
第128図 石器の出土地点(第IV文化層)

平坦な尾根の北側斜面に分布した。石器は東西55m・南北30mの範囲に広がり、622点(礫68点を含む)の石器が出土、石器ブロックを13ヶ所で、礫群・配石を各1ヶ所で確認した。

石器はVIII層から2点、IX層から17点、X層から87点、X I層から79点、X II層から423点が出土した。出土量のピークをX II層に持つ石器群が大部分だが、X層に出土量のピークを示すブロックが2地点(1・2号ブロック)、X層とX II層に出土量のピークを持つブロックが5地点(4c・4d・6・8・10b号ブロック)に見られ、文化層が重複している可能性も否定できない。

石器石材は黒色安山岩が最も多く出土、371点(59%)を占めている。以下には、黒色頁岩が137点(22%)、珪質頁岩25点(4%)と続く。

接合資料は52例233点を確認した。



第129図 石器と礫の分布(第IV文化層・A地点)

b. 出土石器

統計585点の石器が出土した。剥片類(碎片106点を含む)が481点(82%)と圧倒的多数を占めている。石器群を構成する主たる器種には石刃ナイフ(基部・先端加工、二側縁加工)や台形縁石器で、このほかには若干の加工剥片が組成する程度である。

ナイフ形石器(第132図)

12点が出土した。基部加工や先端加工のナイフが主体を占め、このほか少量の二側縁加工のナイフが組成する。

第132図1は、二側縁加工したナイフ。石器基部を除く左側縁には表裏両面から急峻な調整加工を施す他、右側縁にはより平坦な剥離を施す。加工量が多く剥片形状は不明だが、先端の尖る幅広剥片を用いた、と考えている。8号ブロック出土。黒色頁岩。2は、一側縁加工したナイフ。やや丸く見える先端は正面・左から衝撃を受け、破損した可能性が強く、意図的に作出したものではない。基部側・左側縁の小剥離は細部加工ではなく、剥離段階に生じている可能性が高い。石器は上下逆転して捉えるべきかもしれない。4dブロック出土。黒色安山岩。3は、二側縁加工したナイフ。石器基部を背面側から加工して作出するほか、基部側・右側縁を表裏両面から加工しており、加工状態は多様で一貫性に乏しい。幅広剥片を用いる。ブロック外。黒色頁岩。4は、断面三角形状を呈する細身の縦長剥片を用い、基部側の左側縁を加工したナイフ。大きく換れた剥片を用いている。どちらが先端部か、形態的特徴から判断することは難しい。ブロック外。黒色頁岩。5は、基部加工したナイフ。頭部調整を施し剥離した小形の縦長剥片を用いる。基部側の左側縁に微細剥離を施して、石器を作出している。10aブロック出土。黒色安山岩。6は、小形の幅広剥片を用い、ノッチ状に微細加工を石器基部に施したナイフ。打面部分を剥離段階で欠いており、剥片の底面には礫面を残している。8号ブロック出土。黒色頁岩。7・11・12は、先端加工したナイフ。11は細身で石器基部を

II 調査の成果

第23表 器種・石材構成 (IV-A地点)

	ナイフ	台形様	加工痕	使用痕	蔵石	石核	蔵長	剥片	砕片	礫	礫片	合計
黒安	58.3% ⁷	100% ⁶	44.4% ⁴	25.0% ²	0.0% ⁰	62.9% ²²	60.0% ⁶	68.5% ²⁵⁰	69.8% ⁷⁴	0.0% ⁰	0.0% ⁰	371 ^{59.6%}
黒頁	33.3% ⁴	0.0% ⁰	11.1% ¹	50.0% ⁴	0.0% ⁰	37.1% ¹³	40.0% ⁴	23.6% ⁸⁶	23.6% ²⁵	0.0% ⁰	0.0% ⁰	137 ^{22.0%}
点頁	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.5% ²	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.3% ²
黒曜石	0.0% ⁰	0.0% ⁰	11.1% ¹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.3% ¹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.3% ²
チャート	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	12.5% ¹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	1.9% ⁷	0.9% ¹	6.8% ⁴	22.2% ²	15 ^{2.4%}
珪結	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.3% ¹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.2% ¹
珪頁	8.3% ¹	0.0% ⁰	11.1% ¹	12.5% ¹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	4.7% ¹⁷	4.7% ⁵	0.0% ⁰	0.0% ⁰	4.0% ²⁵
変玄	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	11.1% ¹	0.2% ¹
変安	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.9% ¹	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.2% ¹
ホルン	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	11.1% ¹	0.2% ¹
砂岩	0.0% ⁰	0.0% ⁰	22.2% ²	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.3% ²
磨礫	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.3% ¹	0.0% ⁰	3.4% ²	0.0% ⁰	0.3% ³
粗安	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	100% ³	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	88.1% ⁵²	44.4% ⁴	9.5% ⁵⁹
輝緑岩	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	11.1% ¹	0.2% ¹
石斑	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	0.0% ⁰	1.7% ¹	0.0% ⁰	0.2% ¹
合計	100% ¹²	100% ⁶	100% ⁹	100% ⁸	100% ³	100% ³⁵	100% ¹⁰	100% ³⁶⁵	100% ¹⁰⁶	100% ⁵⁹	100% ⁹	622 ^{100%}

破損している。8号ブロック出土。黒色安山岩。12は三角形の厚い断面形状を呈する縦長剥片を用い、先端加工を施したナイフ。石器下端部分には数条の縞状刻線が見られ、「播種の機能」を意図したもののかもしれない。石器石材には東北産の硬質頁岩を用いている。7号ブロック出土。8～10は、基部加工したナイフ。断面三角形を呈する、剥片中央に稜線が通る縦長剥片(石刃)を用いる。8は10aブロック、残る2点は11号ブロック出土。黒色安山岩。

台形様石器 (第133図1～6)

6点が出土した。石器形状は台形、切出形、ベン先形と多様で、調整加工も平坦剝離、刃潰し加工、剥片の折断と多様性に富む。

第133図1は、器体長軸に直交する刃部を有する台

形様石器。幅広剥片の上下両端を折断、左側縁・下端部分に浅い調整加工を施す。4dブロック出土。黒色安山岩。2は、切出状の刃部を持つ台形様石器。右側縁には「刃潰し」状の調整加工を加えるほか、左側縁を折断して石器を作出する。台形状を呈する幅広剥片を用いる。4aブロック出土。黒色安山岩。3は、器体長軸に直交する刃部を持つ台形様石器。小形・横長剥片を用いて、裏面側の右側縁を微細に加工、剥片形状を巧く利用して石器を作出している。加工は微細で器種分類が妥当か、検討を要している。接合資料—99 (第156・157図参照)。4aブロック出土。黒色安山岩。4は、ベン先形の刃部を有する台形様石器。小形・幅広剥片を用いて、両側縁を折り取り、石器を作出している。調整加工は左右の側縁で若干ことなり、左側縁には折断した後やや粗い平

坦剝離を加えるのに対して、右側縁の折断面をトリミングするよう剝離を加えている。2号ブロック出土。黒色安山岩。5は、器体長軸に直交する刃部を持つ台形礫石器。調整加工は左右の側縁で若干ことなり、左側縁には折断したのち平坦剝離を加えるのに対して、右側縁では折断したのち中央より下半に素材を裁切するよう剝離を加えている。この調整加工の相違は折断面が厚いか薄いか、の相違と理解されよう。12号ブロック出土。黒色安山岩。6は、切出状の刃部を有する台形礫石器。右側縁を折断するほか、左側縁・中央より上半を粗く加工する。台形状を呈する幅広剝片を素材に用いている。4aブロック出土。黒色安山岩。

加工痕ある剝片（第133図7～11、第134図1・5）

9点が出土している。通常、在地石材（黒色頁岩など）では多様な部位に多様な加工を加えて、剝片形状に応じ加工・使用しているのに対して、非在地石材（黒曜石など）では折れた石刃を再生するなどしており、基本的な素材の運用形態が異なる場合が多い。A地点出土の石器にも同様な傾向は指摘されよう。

第133図7は、表裏両面に大きく風化面を残す剝片を用い、剝片上端に連続加工を加えたもの。上端の加工を除く各縁辺の折れ面は、基本的に加工段階の破損と理解されよう。4dブロック出土。黒曜石。8は、石刃の側縁を部分的に加工したもの。石器の上下両端を欠損するため、石器の形状や加工範囲は明確ではない。調整加工は若干角度が浅く、ナイフの側縁加工とは異なる。遺跡内には同種母岩が見られないことから、搬入石器と考えている。良質だがやや油光沢には欠け、典型的な珪質頁岩（東北産）とは異なる。ブロック外。9～11は、剝片端部や側縁を粗く打ち欠き、刃部を作出したもの。裏面側を加工する例が多く、特徴的加工となっている。9・11はブロック外、10は2号ブロック出土。9・10は黒色安山岩、11は砂岩。

第134図1・5は、礫面を大きく残す大形剝片を用

いたもの。加工は部分的で加工意図は不明だが、1は裏面側・左側縁をノッチ状に、5は右側縁を粗く表裏両面から剝離して「嘴状」の刃部を作出している。1は4dブロック出土、黒色頁岩。5は7号ブロック出土、砂岩。

使用痕ある剝片（第134図2～4）

8点が出土している。加工痕ある剝片と同様に、使用刃部は剝片形状に応じて選択していた傾向が指摘されよう。

第134図2は縦長剝片の裏面側・左側縁が、4は剝片端部が「刃こぼれ」している。3は、両側縁の小剝離が微妙で細部加工か、否か、明瞭ではない。剝片端部を欠損するため不明だが、ここではより確実な「刃こぼれ」を重視した。2は4cブロック出土、チャート。3はブロック外の出土、黒色安山岩。4は7号ブロック出土、珪質頁岩。

敲石（第135図1～3）

3点が出土している。3点とも棒状礫を用い、礫の小口部分を激しく使用しており、著しい敲打痕と敲打に伴う剝離痕を残している。礫重量は1・3が約260g、2が116gを測り、小形剝片の剝離に用いた敲石と考えている。1は1号ブロック出土、2・3はブロック外の出土。粗粒安山岩。

石核（第135図4、第136～137図、第138図1）

35点が出土している。ここでは、接合関係が確認できない単独出土の石核9点を図示した。

第136図1・2・4は、剝離途中えた大形剝片を石核に用いたもの。剝片形状を勘案した上で作業面を選択しており、頻繁な打面転移を行い小形・横長剝片を剝離している。1はブロック外の、2は6号ブロック、4は3号ブロックの出土。3点とも黒色安山岩を用いている。3は、大形・幅広剝片を石核に用いたもの。側縁部分で小形・横長剝片を剝離するほか、折断面を利用して小形剝片を剝離している。12号ブロック出土。黒色安山岩。5は、分割礫を用

II 調査の成果

いた石核。剥片剥離は石核の裏面側・表面側の順に進み、最終的には石核正面で大形の幅広剥片3枚を剥離して剥離を終えている。4dブロック出土。黒色頁岩。

第137図1・2は、小形・幅広剥片を用いた石核。1は石核正面・左、及び、石核上端の表裏両面で、2は石核の小口部分で小形剥片を剥離している。1はブロック外の出土で、黒色安山岩を用いる。2は2号ブロックの出土で、黒色頁岩を用いている。3は、礫面を1/4程度に分割した石核。剥片剥離は石核上端の分割面を打面に、正面、及び、左右両側で行われ、幅広剥片を剥離している。ブロック外の出土。黒色頁岩。

第138図1は、大形の幅広剥片を石核に用いる。剥片剥離は石核の上端部分で行われ、小形剥片1枚を剥離して剥離を終えている。4aブロック出土。黒色安山岩。

剥片（第138図2～6、第139～155図）

剥片類（縦長剥片を含む）は375点が出土した。多様な形状の剥片が出土しており、3～5cm程度の小形剥片から8cm程度の大型剥片まで多様性に富む。ここではこの剥片類の多様性が理解してもらえるよう配慮して、接合関係が確認できない比較的形状の良好な剥片（多様な剥片の実態は接合図を併せ理解されたい）を図示した。出土資料には石刃に類する剥片も散見され、縦長剥片を志向した剥離を試みているもの、と理解されよう。

石器石材は、黒色安山岩が256点(68%、第23表を参照)と最も多い。続いて黒色頁岩90点(24%)が出土しており、在地系石材2種類で90%以上を占めている。珪質頁岩17点には、8点の在地石材と1点の非在地系石材(第151図1)を確認した。残る8点については、採集地は明確ではない。

第138図2～6、第139図1～4には比較的形状の整った縦長剥片を、第139図5～14、第140～143図には小形剥片を、第144～147図には大型剥片を図示した。第143図2は、器体中央で破損した小形剥片。若干気

泡の入る良質な黒曜石を用いている。搬入石器。

第148～151図には比較的小形の幅広剥片を、第152～155図には大形の幅広剥片を図示した。第151図1は、幅広の小形剥片。褐色～黄白色を呈す珪質頁岩を用いている。県内では見かけない種類の石材であり、搬入石材と考えてよいかもしれない。第154図2は、珪質粘板岩を用いた幅広剥片。石器表面の風化が激しく、作出意図・器種は判断できない。石材から受ける印象では石斧素材には適しているように見える。同種石材は出土資料にはなく、搬入石器と判断できよう。

接合資料

接合資料は、52例233点を確認した。接合資料からみた剥片剥離の特徴は原石を大きく分割、石核形状・剥離面構成に応じて、随時打面転移を繰り返して剥離を進める点に集約されよう。

接合資料—99（第156・157図）

15点からなる接合資料。高さ11.5cm、幅7.2cm、厚さ7.0cmを測り、裏面には礫面を大きく残す。原石を4分割して石核素材に用いる。剥片剥離は上面の剥片(1+2)を剥離したのち、石核正面で大形剥片を剥離することからはじまる。以下の剥離は基本的に石核上端と下端に作業面を設定、90°の打面転移を繰り返して、小形・幅広剥片を剥離している。10は大型剥片を石核に転用したもので、剥片の小口部分を利用、小形・縦長剥片を剥離している。黒色安山岩。15点ともXII層の出土。

原石の分佈→(1+2)

⇒(90°打面転移)⇒○○

⇒(90°打面転移)3⇒4→(5・6)

⇒(90°打面転移)○○⇒7⇒8⇒(9→10)

⇒(90°打面転移)11⇒(12・13)⇒14⇒○○→15

接合資料—93（第157図）

4点よりなる接合資料。分割礫素材の石核を2分割し、各々で剥離を行う。剥片剥離は打点を左右に大きく振り展開、小形の幅広剥片を連続剥離する。黒色安山岩—2。4点ともXII層の出土。

1 → ○ ……
2 → 3 → 4

接合資料—102 (第158・159図)

13点よりなる接合資料。人頭程度の円礫を4分割して石核素材に用いる。剥片剥離は石核正面で礫表皮を剥離、以後90°の打面転移を繰り返し剥離が進む。剥片6の剥離直後、石核を2分してそれぞれの石核で剥片剥離を行う。作出剥片の形状は概して幅広である。黒色安山岩。1点がX層、1点がX I層、残る11点がX II層の出土。

○ → (90°打面転移) ○ ○ → 1 → ○ → 2 → 3 → ○ →
4 → ○ 5 → 6
7 → ○ → ○ → 8 → 9
10 → 11 → 12 → 13

接合資料—89 (第159図)

5点よりなる接合資料。厚い大形剥片を石核に用いる。平坦な剥離面を打面に剥離を開始、剥片1・2を剥離、90°の打面転移を行い、幅広剥片を剥離する。最終的には対面で剥片3を剥離して剥離を終えている。黒色安山岩。2点ともX II層の出土。

○ ○ → 1 → 2 → (90°打面転移) → ○ → 3 → 4

接合資料—132 (第160・161図)

19点よりなる接合資料。高さ14.8cm、幅11.0cm、厚さ6.2cmを測る分割礫を石核素材に用いる。石核・左の小口部分で礫面を打面に剥片1を剥離、90°打面転移して剥片2～4を剥離する。同様な剥離は反対側にも見られ、剥片5・6を連続剥離している。剥片7以後の剥離は、基本的に分割面を打面に石核左右の小口部分や正面で剥離を進めている。石核は二分して出土しており、凍結・氷解の影響で破損した可能性が高い。黒色頁岩。6点がX I層、13点がX II層の出土。

(原石の分割)

1 → (90°打面転移) 2 → 3 → 4
5 → 6 → ○ ○ ○ → 12
7 → 8 → 9 → (90°打面転移) 10 → 11 → ○ ○ ○ → 13
→ 14 → 15

接合資料—100 (第162・163図)

13点よりなる接合資料。分割礫を石核に用い、90°打面転移を行い、小形の幅広剥片を剥離する。黒色安山岩。1点がX層、1点がX I層、残る11点がX II層の出土。

○ → 1 → 2 → (90°打面転移) 3 → ○ → 4 → 5 → 6
→ 7 → 8 → 9 → 10 → ○ → 11 → 12

接合資料—103 (第163図)

3点よりなる接合資料。剥片剥離は90°打面転移を繰り返し進み幅広剥片を剥離、最終的には石核の小口部分で小形剥片を剥離、石核を放棄している。拳大よりやや大きな比較的扁平な河床礫を用いる。黒色安山岩。1点がX I層、2点がX II層の出土。

1 → ○ ○ → (90°打面転移) ○ …… ○ → ○ ○ → 2

接合資料—98 (第164～166図)

28点からなる接合資料。高さ12.7cm、幅11.1cm、厚さ5.5cmを測る大形の板状剥片を石核に用いる。剥片剥離は大形剥片1を剥離、打点を左右に振り進む。剥片1の剥離直後に、石核を大きく破損、二分した各々の石核で剥離を行う。正面右半部の石核は破損部(分割面)を打面に石核の小口部分で剥片3枚(2～4)を剥離、続いて打面を入れ換え剥片(5～8、9)を剥離している。左半部の石核は破損部に近い礫面を打面に剥片剥離を開始、打点を左右に振り幅広剥片を連続剥離する。黒色安山岩。10点がX I層、17点がX II層の出土。

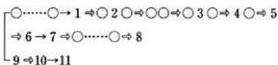
○ → 1 → ○
- 2 → ○ → 3 → ○ → 4 → (90°打面転移) 5 → 6 → 7
→ ○ ○ → 8 → 9
- 10 → ○ → 11 → 12 → 13 → 14 → 15 → 16 → 17 → 18 → 19 →
(90°打面転移) 20 → ○ → 21 → 22 → 23 → 24 → 25 → 26

接合資料—122 (第167図)

11点よりなる接合資料。礫面の形状からみて拳大よりやや大きな礫を分割して石核素材に用いる。剥離は石核の上下両端で90°打面転移を繰り返して進み、小形剥片を剥離する。高さ7.5cm、幅7.2cm、厚さ4.7cmを測る。黒色安山岩。1点がX層、7点がX層、2点がX I層、1点がX II層の出土。

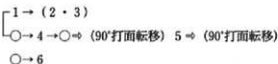
II 調査の成果

(原石の分割)



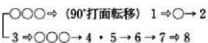
接合資料—92 (第168図)

7点よりなる接合資料。拳大程度の河床礫を用い、小形・幅広剥片を剥離する。剥片剥離は下端の平坦な剥離面から剥片1を剥離したのち、打面転移して左側面で剥片数点を剥離している。この過程で石核素材は大きく破損したようで、石核2・3を放棄、残る部分で剥片4以下の剥離を行い、石核6の表裏両面で小形・幅広剥片を剥離している。裏面に大きく礫面を残す。黒色安山岩—2。5点がX1層、2点がXII層の出土。



接合資料—130 (第169図)

8点からなる接合資料。現状で高さ13.8cm、幅6.6cm、厚さ6.2cmを測る石核から、幅広剥片を剥離する。石核素材には分割礫を用いており、分割礫の小口部分で初期の剥離は展開する。石核下端より大形剥片を剥離、剥片2の剥離直後、打面再生を目的に石核を横打して打面上端に移動、剥片4以下の剥離を行う。黒色頁岩。1点がX層、1点がX1層、6点がXII層の出土。



接合資料—123 (第170図)

5点よりなる接合資料。人頭大の円礫を二分した石核だが、剥離(分割?)段階で破損、結果的に廃棄した可能性が強い。長さ14.0cm、幅9.6cm、厚さ8.2cmを測る。黒色頁岩。5点ともXII層の出土。

接合資料—125 (第171図)

3点よりなる接合資料。石核底面に礫面を残す小形の石核からほぼ連続的に小形剥片を剥離している。石核の推定長は約6cm程度か。黒色頁岩。2点がX層、1点がXII層の出土。

接合資料—128 (第171図)

石核1、剥片1からなる接合資料。石核の剥離面構成からみて、90°打面転移を行う剥離が想定可能だが、最終的には小形石核(推定長5cm)から小形の縦長剥片を連続剥離して剥離を終えている。黒色頁岩—1。2点ともXII層の出土。

接合資料—90 (第171図)

石核1、剥片1からなる接合資料。厚い大形剥片の側縁で小形・縦長剥片を連続剥離している。剥片1は石核下端の調整剥片に位置づけられよう。黒色安山岩。2点ともXII層の出土。

接合資料—114 (第171図)

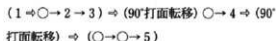
剥片2点からなる接合資料。剥片剥離は90°打面転移を行い進む。黒色安山岩。X1層の出土。

接合資料—124 (第172図)

石核1、剥片1からなる接合資料。大形剥片を石核に用い、石核の小口部分で剥片を剥離する。黒色頁岩。2点ともXII層の出土。

接合資料—127 (第172図)

5点からなる接合資料。上下両端の石核から剥片を剥離、大形剥片を選択的に石核素材に用い、小形剥片を剥離する。黒色頁岩。5点ともXII層の出土。



接合資料—88 (第173図)

3点からなる接合資料。裏面に大きく礫面を残す大形剥片を石核に用い、打面側より幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。3点ともX層の出土。

接合資料—101 (第173図)

5点よりなる接合資料。長さ9.2cm以上、幅10.2cmを測る、大形の板状剥片を石核素材に用いる。主な剥離作業は左右の側面で行われ、小形・幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。1点がX層、4点がXII層の出土。



接合資料—135 (第174図)

4点からなる接合資料。礫面を打面に幅広剥片1・2を剥離したのち、途中打面転移を挟み平坦な

剥離面打面より縦長剥片3・4を連続剥離している。剥片4の右側縁は節理部分で破損。偏平礫を石核に用いる。珪質頁岩—1。4点ともXII層の出土。

接合資料—104 (第174図)

3点よりなる接合資料。比較的初期の剥片剥離を示す例で、接合資料の表面には礫面が大きく残る。1・2は剥離段階で2分した大形剥片を用いた石核で、1は折断部分で小形剥片を2枚、2は右側面、及び、剥片端部で小形・幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。3点ともXII層の出土。

1・2→3

接合資料—111 (第175図)

2点からなる接合資料。側面に礫面を大きく残す石核を用い、上面の剥離面打面から幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。2点ともXII層の出土。

接合資料—109 (第175図)

2点からなる接合資料。上面の礫面を打面に幅広剥片を連続剥離している。黒色安山岩。2点ともXII層の出土。

接合資料—129 (第175図)

2点からなる接合資料。厚い大形剥片を石核素材に用い、幅広剥片を連続剥離している。剥片は2点とも剥片端部に礫面を残している。黒色頁岩—1。2点ともXII層の出土。

接合資料—126 (第176図)

3点からなる接合資料。平坦な剥離面打面より打点を大きく左右に振り、縦長の剥片を連続剥離している。珪質頁岩。3点ともXII層の出土。

接合資料—138 (第176図)

3点からなる接合資料。平坦な剥離面打面から打点を大きく左右に振り、幅広剥片を剥離している。チャート。X～XII層に各1点が出土。

接合資料—108 (第176図)

2点からなる接合資料。分割礫(?)を石核に用いた剥離の比較的初期を示す接合資料。打点は背面構成の稜上を選択、縦長剥片を意識して剥離する。黒色安山岩。2点ともXII層の出土。

接合資料—137 (第176図)

2点からなる接合資料。平坦な剥離面打面より、縦長剥片を連続剥離している。珪質頁岩—2。2点ともXII層の出土。

接合資料—112 (第177図)

剥片2点からなる接合資料。分割礫を石核素材に用いた剥片剥離の初期を示す接合資料。2点ともXII層の出土。黒色安山岩。

接合資料—115 (第177図)

3点からなる接合資料。平坦な剥離面打面から打点を大きく右から左に移動させ、小形の幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。3点ともXII層の出土。

接合資料—113 (第177図)

2点からなる接合資料。上面の礫面を打面に、幅広の剥片を剥離している。黒色安山岩。1点がXI層、1点がXII層の出土。

接合資料—107 (第177図)

側縁に礫面を残す幅広の大形剥片2点の接合資料。分割礫を石核素材に用い、打点を直線的に後退させ、剥片を剥離している。剥片剥離の初期段階を示す。黒色安山岩。剥片1がX層、剥片2がXII層から出土している。

接合資料—106 (第178図)

2点からなる接合資料。平坦な剥離面打面から、打点を左右に振り小形・幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。1点がX層、1点がXII層の出土。

接合資料—119 (第178図)

2点よりなる接合資料。90°打面転移を行い、幅広の小形剥片を剥離している。剥片は2点とも礫面を大きく残している。黒色安山岩。1点がXI層、1点がXII層の出土。

接合資料—105 (第178図)

4点からなる接合資料。剥片1の剥離に続いて何枚か小形・幅広剥片を剥離したのち、剥片2・3を剥離する。2は厚い大形剥片を利用した石核で小形剥片を剥離している。黒色安山岩。1点がXI層、残る3点がXII層の出土。

1→○…○→2 (○→○→○)⇒3

II 調査の成果

接合資料—118 (第179図)

2点からなる接合資料。平坦な剥離面を打面に打点を左右に振り、小形の幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。2点ともX層の出土。

接合資料—117 (第179図)

2点からなる接合資料。90°打面転移を行い、幅広の小形剥片を剥離している。剥片端部には礫面を大きく残している。黒色安山岩。1点がX I層、1点がX II層の出土。

接合資料—91 (第179図)

2点からなる接合資料。礫面を打面に剥片1を剥離、作業面を入れ替え剥片1枚を剥離したのち、再び打面転移して剥片2を剥離している。黒色安山岩。2点ともX II層の出土。

接合資料—110 (第179図)

2点からなる接合資料。分割礫を石核素材に用い打点を大きく左右に振り幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。2点ともX II層の出土。

接合資料—226 (第180図)

2点からなる接合資料。接合状態からみて柱状の石核から打面転移を行い剥離するタイプの接合資料と考えている。黒色安山岩。2点ともX II層の出土。

接合資料—139・95・131・133・97・94・134・121・96 (第180・181図)

縦位、及び、横位折断した剥片の接合資料を一括した。破損は打点付近で生じているほか、斑晶部分で生じており、意図的折断とは判断できない。139は点紋頁岩、95・97・94・121・96は黒色安山岩、131・133・134は黒色頁岩。

接合資料—120 (第181図)

4点からなる接合資料。礫面を大きく残した大形剥片を用いる。接合資料は剥離段階に大きく二分、石核に転用している可能性が高い。裏面側左側縁には剥片剥離と考えるにはやや小さな剥離痕が見られ、ここでは加工痕ある剥片と捉えた。黒色安山岩。4点ともX II層の出土。

第24表 層別別石器の出土点数 (IV-A地点)

	8層	9層	10層	11層	12層	不明	合計
1号ブロック	0	3	18	6	2	0	29
2号ブロック	0	1	15	2	1	0	19
3号ブロック	0	1	1	7	13	0	22
4a号ブロック	0	2	5	13	96	0	116
4b号ブロック	0	0	3	3	11	0	17
4c号ブロック	0	1	3	0	3	0	7
4d号ブロック	1	1	10	6	19	0	37
5号ブロック	0	0	3	2	3	0	8
6号ブロック	0	0	5	3	13	0	21
7号ブロック	0	1	7	16	57	0	81
8号ブロック	0	0	5	0	17	0	22
9a号ブロック	0	0	0	0	10	0	10
9b号ブロック	0	0	0	4	4	0	8
10a号ブロック	0	1	2	3	8	0	14
10b号ブロック	0	0	3	1	15	0	19
11号ブロック	0	0	0	0	23	0	23
12号ブロック	1	1	0	0	10	0	12
13号ブロック	0	0	0	3	8	0	11
ブロック外	0	5	7	10	73	0	95
1号配石	0	0	0	0	8	0	8
2号配石	0	0	0	0	5	0	5
3号配石	0	0	0	0	2	0	2
1号礫群	0	0	0	0	22	0	22
不明	0	0	0	0	0	14	14

c. 石器と礫の分布

石器群は、尾根状に張り出した丘陵性台地の平坦部に分布した。石器の分布範囲は1500m²に達しており、石器ブロックを13ヶ所で、礫群・配石を各1ヶ所で確認している。石器群の出土したA地点は東側から入り込んだ谷に近く北側と東側に緩く傾斜しており、この浅い谷を意識して石器が分布しているようにも見えた。接合関係を加味してみた石器分布は連続して並ぶ3ブロックが単位的石器群を形成するようにもみえ、直線的にブロックが並ぶパターン、礫群を囲みブロックが並ぶパターン、の3様が指摘されよう。

各ブロックの石器の平均出土点数は29.7点と少なく、ブロックが直線的に連なる4a・7号ブロックを除いて比較的散漫な分布状況を示していた。

石器の出土層位は概ねVIII層からX II層に及んでいた。層別に見た石器の出土状況 (第24表

を参照)はX層にピークを持つブロック、XII層にピークを持つブロック、X層とXII層にピークを持つブロックの3様相が見られ、異なる時期の石器群が重複分布した可能性も否定できない。

礫群1は3ヶ所のブロックに按ずるように分布した。礫群の北側には大形礫が並んで出土、礫重量が1kgを超えることから、ここでは配石と扱えた。

なお、調査区の北東側の試掘(第2図を参照)が不十分であり、石器群は北東側にも広がる可能性を残している。

1号ブロック(第182図)

位置 調査区西側の丘陵平坦部(EL-152G)

規模 長径2.8m・短径1.9m

分布状態 EL-152Gに集中分布する。

出土層位 IX層～XII層

器種構成 敲石1、石核2、剥片8、碎片18

石材構成 黒色安山岩28、粗粒安山岩1

その他 出土量のピークはX層で、敲石1を含む18点の石器が出土している。石器の出土状況を単純に見れば、X層に生活面を有するブロックと捉えられる。

2号ブロック(第182図)

位置 調査区西側の丘陵平坦部(EM-150・151G)

規模 長径4.4m・短径1.6m

分布状態 比較的散漫に分布する。

出土層位 IX層～XII層

器種構成 台形様石器1、加工痕ある剥片1、石核1、剥片9、碎片5、礫1、礫片1

石材構成 黒色安山岩16、黒色頁岩1、粗粒安山岩2

その他 出土量のピークはX層で、80%近い15点の石器がX層から出土している。石器の出土状況を単純に見れば、X層に生活面を有するブロックと捉えられる。

3号ブロック(第182図)

位置 調査区西側の丘陵平坦部(EL-150G)

規模 長径5.1m・短径2.9m

分布状態 EL-152Gを中心に散漫に分布する。

出土層位 IX層～XII層

器種構成 石核5、剥片12、碎片4、礫片1

石材構成 黒色安山岩21、チャート1

第25表 ブロック別器種構成1(IV-A地点)

	ナイフ	台形様	加工痕	使用痕	敲石	石核	竪長	剥片	碎片	礫	礫片	合計
1号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.4%	6.9%	0.0%	27.6%	62.1%	0.0%	0.0%	29 100%
2号ブロック	0.0%	5.3%	5.3%	0.0%	0.0%	5.3%	0.0%	47.4%	26.3%	5.3%	5.3%	19 100%
3号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	22.7%	0.0%	54.5%	18.2%	0.0%	4.5%	22 100%
4a号ブロック	0.0%	2.6%	0.0%	3.4%	0.0%	7.8%	0.0%	63.8%	22.4%	0.0%	0.0%	116 100%
4b号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	11.8%	0.0%	64.7%	23.5%	0.0%	0.0%	17 100%
4c号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	14.3%	0.0%	57.1%	14.3%	0.0%	0.0%	7 100%
4d号ブロック	2.7%	2.7%	5.4%	2.7%	0.0%	2.7%	0.0%	75.7%	8.1%	0.0%	0.0%	37 100%
5号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	75.0%	12.5%	0.0%	0.0%	8 100%
6号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	81.0%	0.0%	0.0%	4.8%	21 100%
7号ブロック	2.5%	0.0%	1.2%	1.2%	0.0%	1.2%	3.7%	79.0%	11.1%	0.0%	0.0%	81 100%

II 調査の成果

その他 出土量のピークはXII層で、XI層から7点、XII層から13点が出土している。出土状況からみてXII層に生活面を有するブロックと捉えている。

4 a号ブロック (第183図)

位置 調査区中央の丘陵平坦部 (EP-149~151 G)

規模 長径5.8m・短径4.8m

分布状態 EP-150G付近に比較的集中して分布。

出土層位 IX層~XII層

器種構成 台形椀石器3、使用痕ある剥片4、石核9、剥片74、砕片26

石材構成 黒色安山岩71、黒色頁岩43、チャート1、珪質頁岩1

その他 出土量のピークはXII層で、XI層から13点、XII層から96点が出土している。出土状況からみてXII層に生活面を有するブロックと捉えている。

4 b号ブロック (第183図)

位置 調査区中央の丘陵平坦部 (EP-149G)

規模 長径2.5m・短径1.3m

分布状態 EP-150Gに散漫に分布する。

出土層位 X層~XII層

器種構成 石核2、剥片11、砕片4

石材構成 黒色安山岩9、黒色頁岩8

その他 出土量のピークはXII層で、XII層から11点が出土している。石器の出土状況からみてXII層に生活面を有するブロックと捉えられる。

4 c号ブロック (第183図)

位置 調査区中央の丘陵平坦部 (EQ-149G)

規模 長径1.6m・短径0.6m

分布状態 EQ-149G付近に散漫に分布する。

出土層位 IX層~XII層

器種構成 使用痕ある剥片1、石核1、剥片4、砕片1

石材構成 黒色安山岩4、黒色頁岩2、チャート1

その他 石器はIX層に1点、X層・XII層に3点が出土した。

第26表 ブロック別器種構成2 (IV-A地点)

	ナイフ	台形椀	加工痕	使用痕	敲石	石核	縦長	剥片	砕片	鏃	鏃片	合計
8号ブロック	13.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.5%	0.0%	63.6%	9.1%	4.5%	4.5%	22
9a号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.0%	70.0%	20.0%	0.0%	0.0%	10
9b号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	75.0%	12.5%	12.5%	0.0%	8
10a号ブロック	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	7.1%	50.0%	7.1%	7.1%	14.3%	14
10b号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.3%	63.2%	21.1%	10.5%	0.0%	19
11号ブロック	8.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	65.2%	0.0%	26.1%	0.0%	23
12号ブロック	0.0%	8.3%	0.0%	0.0%	0.0%	8.3%	0.0%	41.7%	16.7%	25.0%	0.0%	12
13号ブロック	0.0%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	9.1%	0.0%	63.6%	18.2%	0.0%	0.0%	11
ブロック外	2.1%	0.0%	4.2%	1.1%	2.1%	5.3%	4.2%	56.8%	13.7%	8.4%	2.1%	95
不明	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	7.1%	0.0%	35.7%	57.1%	0.0%	0.0%	14
合計	2.1%	1.0%	1.5%	1.4%	0.5%	6.0%	1.7%	62.4%	18.1%	3.9%	1.4%	585

4 d号ブロック (第183図)

位置 調査区中央の丘陵平坦部 (EP・EQ
—148・149G)

規模 長さ5.3m・短径4.7m

分布状態 EQ—149付近に比較的散漫に分布する。

出土層位 VII層～XII層

器種構成 ナイフ形石器1、台形椀石器1、加工痕
ある剥片2、使用痕ある剥片1、石核1、剥片28、
砕片3

石材構成 黒色安山岩23、黒色頁岩13、黒曜石1

その他 石器はVII層・IX層に1点、X層に10点、
XI層に6点、XII層に19点が出土した。X層とX
II層に出土量のピークが見られ、石器の出土状況か
らみる限り、文化層が重複している可能性が否定で
きない。

5号ブロック (第183図)

位置 調査区中央の丘陵平坦部 (EQ—147G)

規模 長さ2.8m・短径1.2m

分布状態 4 dブロックの南側に散漫に分布する。

第27表 ブロック別石材構成 (IV-A地点)

	黒安	黒頁	点頁	黒曜石	チャート	珪	粘	珪頁	変	変	変	砂	岩	滑	粗	安	輝緑	輝	合
1号ブロック	28 96.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 3.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	29 100%
2号ブロック	16 84.2%	1 5.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 10.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	19 100%
3号ブロック	21 95.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	22 100%
4 a号ブロック	71 61.2%	43 37.1%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.9%	0 0.0%	1 0.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	116 100%
4 b号ブロック	9 52.9%	8 47.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	17 100%
4 c号ブロック	4 57.1%	2 28.6%	0 0.0%	0 0.0%	1 14.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 100%
4 d号ブロック	23 62.2%	13 35.1%	0 0.0%	1 2.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	37 100%
5号ブロック	7 87.5%	1 12.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 100%
6号ブロック	18 85.7%	2 9.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	21 100%
7号ブロック	50 61.7%	24 29.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 6.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.2%	1 1.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	81 100%
8号ブロック	2 9.1%	15 68.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.5%	2 9.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 9.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	22 100%
9 a号ブロック	9 90.0%	1 10.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	10 100%
9 b号ブロック	6 75.0%	1 12.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 12.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 100%
10 a号ブロック	8 57.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 28.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 7.1%	1 7.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	14 100%
10 b号ブロック	14 73.7%	1 5.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 10.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 10.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	19 100%
11号ブロック	9 39.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 34.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6 26.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	23 100%
12号ブロック	9 75.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	12 100%
13号ブロック	10 90.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 9.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	11 100%
ブロック外	51 53.7%	19 20.0%	2 2.1%	1 1.1%	4 4.2%	0 0.0%	4 4.2%	1 1.1%	1 1.1%	1 1.1%	1 1.1%	0 0.0%	0 0.0%	11 11.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	95 100%
不 明	6 42.9%	6 42.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 14.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	14 100%
合 計	371 63.4%	137 23.6%	2 0.3%	2 0.3%	11 1.9%	1 0.2%	25 4.3%	1 0.2%	1 0.2%	1 0.2%	2 0.3%	2 0.3%	1 0.2%	30 5.1%	1 0.2%	1 0.2%	0 0.0%	0 0.0%	585 100%

II 調査の成果

出土層位 X層～XII層

器種構成 石核1、剥片6、破片1

石材構成 黒色安山岩7、黒色頁岩1

その他 石器はX層に3点、XI層に2点、XII層に3点が出土しており、X層・XII層に出土量のピークを示す。文化層が重複している可能性も否定できない反面、現状では明確な基準で出土資料を分離できない。

6号ブロック (第184図)

位置 調査区中央の丘陵平坦部 (ER-150・151 G)

規模 長径4.8m・短径2.4m

分布状態 7号ブロックの北側に散漫に分布する。

出土層位 X層～XII層

器種構成 石核3、剥片17、礫片1

石材構成 黒色安山岩18、黒色頁岩2、粗粒安山岩1

その他 石器はX層に5点、XI層に3点、XII層に13点が出土しており、X層、及び、XII層に出土量のピークを示す。文化層が重複している可能性も否定できない反面、現状では明確な基準で出土資料を分離できない。

7号ブロック (第184図)

位置 調査区中央の丘陵平坦部 (ER-149・150 G)

規模 径3.5m

分布状態 比較的集中して分布する。

出土層位 IX層～XII層

器種構成 ナイフ形石器2、加工痕ある剥片1、使用痕ある剥片1、石核1、縦長剥片3、剥片64、破片9

石材構成 黒色安山岩50、黒色頁岩24、珪質頁岩5、砂岩1、溶結凝灰岩1

その他 石器はIX層に1点、X層に7点、XI層に16点、XII層に57点が出土している。

8号ブロック (第184図)

位置 調査区中央の丘陵平坦部 (ES-148・149 G)

規模 長径4.5m・短径3.3m

分布状態 7号ブロックの南側に散漫に分布する。

出土層位 X層～XII層

器種構成 ナイフ形石器3、石核1、剥片14、破片2、礫1、礫片1

石材構成 黒色安山岩2、黒色頁岩15、珪質粘板岩1、珪質頁岩2、粗粒安山岩2

その他 石器はX層に5点、XII層に17点が出土しており、X層とXII層に石器出土量のピークを有している。文化層の分離も想定可能だが、XI層の堆積が薄く、取り上げ段階では層位認識が厳密には難しく、分離が妥当か断定できない。

9 a号ブロック (第186図)

位置 調査区北側の丘陵平坦部～丘陵斜面部 (ET-152 G)

規模 長径2.2m・短径1.8m

分布状態 ET-152 G付近に散漫に分布する。

出土層位 XII層

器種構成 縦長剥片1、剥片7、破片2

石材構成 黒色安山岩9、黒色頁岩1

その他 2号配石と重複分布する。

9 b号ブロック (第186図)

位置 調査区北側の丘陵平坦部～丘陵斜面部 (EU-152 G)

規模 長径1.8m・短径1.5m

分布状態 EU-152 G付近に散漫に分布する。

出土層位 XI層～XII層

器種構成 剥片6、破片1、礫1

石材構成 黒色安山岩6、黒色頁岩1、粗粒安山岩1

その他 XI層に4点、XII層に4点が出土している。

10a号ブロック (第185図)

位置 調査区北側の丘陵平坦部～丘陵斜面部
(EU-151G)

規模 長径1.5m・短径0.7m

分布状態 EU-151G付近に散漫に分布する。

出土層位 IX層～XII層

器種構成 ナイフ形石器2、縦長剥片1、剥片7、
碎片1、礫1、礫片2

石材構成 黒色安山岩8、チャート4、粗粒安山岩
1、輝緑岩1

その他 礫群の周辺に分布する散漫な石器分布の
1つ。北東側には9号ブロックが、南西側には11号
ブロックが分布する。IX層で1点、X層で2点、X
I層で3点、XII層で8点が出土している。

10b号ブロック (第185図)

位置 調査区北側の丘陵平坦部～丘陵斜面部
(EU・EV-150・151G)

規模 長径3.3m・短径3.0m

分布状態 EV-151付近に散漫に分布する。

出土層位 X層～XII層

器種構成 縦長剥片1、剥片12、碎片4、礫2

石材構成 黒色安山岩14、黒色頁岩1、珪質頁岩2、
粗粒安山岩2

その他 X層に3点、XI層に1点、XII層に15
点が出土しており、みだ目にはX層とXII層に出土
量のピークを有している。文化層の分離も想定可能
だが、XI層の堆積が薄く、また、碎片の出土量も
少なく、取り上げ段階の層位認識と、調査精度に問
題が問われよう。

11号ブロック (第185図)

位置 調査区北側の丘陵平坦部～丘陵斜面部
(ET・EU-149・150G)

規模 長径5.1m・短径2.7m

分布状態 ET-150G付近に散漫に分布する。

出土層位 XII層

器種構成 ナイフ形石器2、剥片15、礫6

石材構成 黒色安山岩9、珪質頁岩8、粗粒安山岩
6

12号ブロック (第185図)

位置 調査区東側の丘陵平坦部～丘陵斜面部
(EV・EW-149G)

規模 長径5.3m・短径1.7m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 VIII層～XII層

器種構成 台形楕石器1、石核1、剥片5、碎片2、
礫3

石材構成 黒色安山岩9、粗粒安山岩3

その他 石器はVIII層・IX層で各1点、XII層から
10点が出土している。2層から石器が出土しない
ことから文化層の重複を想定するべきかもしれない。
ここでも碎片の量が少なく、調査精度には問題
を残している。

13号ブロック (第185図)

位置 調査区東側の丘陵平坦部～丘陵斜面部
(EV・EW-147・148G)

規模 長径4.7m・短径1.5m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 XI層～XII層

器種構成 加工痕ある剥片1、石核1、剥片7、碎
片2

石材構成 黒色安山岩10、珪質頁岩1

1号礫群 (第186図)

位置 調査区北側の丘陵平坦部～斜面部 (ET
-151G)

規模 長径1.2m・短径0.8m

分布状態 比較的集中して分布する。

出土層位 XII層

出土点数 22点

石材構成 チャート4、ホルンフェルス1、溶結凝
灰岩2、粗粒安山岩14、石英斑岩1

接合資料 1例2点 (1482g)

II 調査の成果

その他 完形礫・破損礫とも100g前後を計る。

1号配石 (第186図)

位置 調査区北側の丘陵平坦面～斜面部 (ET-151G) で検出。1号礫群の北側に接して分布した。

規模 長径2.0m・短径1.0m

分布状態 構成礫は50cm程度の間隔を置いて分布した。

出土層位 X II層

出土点数 8点

石材構成 粗粒安山岩 8

接合資料 なし

その他 構成礫には100g未満の礫(1点)や500g程度の礫(2点)を含む。1kgを超える礫は4点で、1点を除いて総て破損している。

2号配石 (第186図)

位置 調査区北側の丘陵平坦面～斜面部 (ET-152G) で検出。9aブロックに重複分布した。

規模 長径2.5m・短径0.7m

分布状態 9aブロックに重複分布した礫は50~70cm間隔で分布したほか、北西側に1mほど離れて礫が分布した。

出土層位 X II層

出土点数 5点

石材構成 粗粒安山岩 5

接合資料 なし

その他 配石は完形礫2点、破損礫3点からなる。完形礫は、それぞれ336g・1450gを測る。破損礫は3点とも1kgを超え、最重量礫は3459gを測る。

3号配石 (第186図)

位置 調査区北側の丘陵平坦面～斜面部 (EU-152G) で検出。

規模 径0.8m

分布状態 9bブロックに接して分布した。

出土層位 X II層

出土点数 2点

石材構成 粗粒安山岩 2

接合資料 なし

その他 配石は2点とも破損礫で、80cm間隔で分布した。礫重量は1300g程度。

第28表 石材構成 (配石・礫群、IV-A地点)

	チャート	ホルン	溶凝	粗安	石斑	合計
1号配石	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 100%	0 0.0%	8 100%
2号配石	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%	0 0.0%	5 100%
3号配石	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100%	0 0.0%	2 100%
1号礫群	18.2%	4.5%	1 9.1%	2 63.6%	1 4.5%	22 100%
合計	10.8%	2.7%	1 5.4%	2 78.4%	29 2.7%	37 100%

d. 接合資料の分布

接合作業の結果、52例233点の接合資料(このほか礫の接合5例17点が存在)を確認している。25例は剥片類2点が接合したものだが、残り27例の接合資料は平均で6.8点の剥片類が接合しているということになり、42%にも達した接合率からみて比較的多量の接合資料を得た、と考えている。

接合資料の大部分はブロック内や隣接するブロック間で接合している。20mほど離れて接合した資料が最も離れた接合資料(接-101、第187図を参照)で、「遠距離接合」は概して少ない。

黒色安山岩 36例167点の接合資料を確認した。平均接合点数は4.6点だが、10点を超える接合資料を4例(最大28点の剥片が接合)確認している。接合資料は基本的に隣接するブロック間で接合しており、密接な関係を有する単位的石器群を形成していた。本書ではこの単位的石器群を5ヶ所と捉え、以下その分布状況(第188~191図)について概要を記していきたい。

調査区西端の1~3号ブロックでは、接合資料9例を得た。このうち、接合資料3例(接-88・103・122、第188図)がブロック間の接合関係を有していた。ブロック間の接合資料は3例とも1点のみ接合しており、現状では移動理由を判断できない。調査

区の中央付近に位置する4・5号ブロックでは、11例の接合資料を得た。このうち、接合資料5例（接-98・101・105・107・116、第189～190図）がブロック間の接合関係を有していた。移動理由は不明だが、接合資料-98については選択的に剥片を持ち出した（7号→4aブロック）可能性が想定されよう。同一101については約20m離れた剥片が接合したもののだが、10号ブロックに分布した剥片は定形的でもなく、加工しているわけでもなく、移動理由が判断できない。4・5号ブロックに隣接した6～8号ブロックでは6例の接合資料を得た。このうち、接合資料3例（接-98・102・107）がブロック間の接合関係を有していた。接合資料-102には剥片の選択的移動（第158図2・7・8）が確実だが、接合資料-98・107についても同様な評価が可能で、剥片の選択的移動の結果、4aブロック付近に分布したものと捉えることが可能かもしれない。

調査区北端の9～11号ブロックでは接合資料2例（接-89・95）を確認した。接合資料-89については4点からなる接合資料だが、接合状態からみて2枚ほど剥片が欠けている程度と考えている。石核の周辺に剥片類が2点分布することからみてこの地点に剥離地点が想定可能かもしれない。資料規模からみて剥片類の分布範囲（第193図を参照）は広い。黒色頁岩 11例52点の接合資料を確認した。平均接合点数は4.7点で、1例（接-132）を除き10点を超える接合資料は見られない。黒色頁岩は調査区の中央付近に偏在して分布（第194図）していた。

4・5号ブロックでは6例の接合資料（123・128・129・131～133）を確認、接合資料2例（132・133）がブロック間の接合関係を有していた。接合資料-132については剥片剥離地点が4aブロックであるということは確実だが、4bブロックの剥片9や5号ブロックの剥片12（第191図を参照）の移動根拠が明確ではない。6～8号ブロックでは接合資料4例（124・125・127・130）を確認した。資料規模が少ないということもあり、現状ではブロック間の接合は確認できない。

その他の石材 接合関係を有するその他の石材は3種類（珪質頁岩、点紋頁岩、チャート）が存在した。6～8号ブロックでは珪質頁岩1（接-135）、点紋頁岩1（接-139、6号ブロックの南西側に分布）の接合を確認した。接合資料-135については剥離段階の異なる剥片が分布地点を変えて分布、7号→8号ブロックの順で地点を変え剥離した、と考えている。9～11号ブロックでは珪質頁岩2（接合資料-126・137）、チャート1（同一-138）の接合を確認した。126・137はブロック内の接合、138は10aブロックの剥片2点とブロック外の剥片1点の接合。特に、チャートは分布が散漫で、二次的に剥片が移動している可能性も考えている。

e. 母岩別資料の分布

A地点出土の石器は13種類の石材から構成され、多様な石材構成を示していた。石器群は在地の黒色安山岩と黒色頁岩が90%近く（508点）を占め、残る大部分の石材は1%にもみえない数量しかなく、母岩レベルの分析を難しくしている。それぞれ希少石材はブロック内に分布が限定され、大部分は戴入石器と考えてよく、ここでは分布図を省略した。

黒色安山岩や黒色頁岩は母岩分類が難しい石材で、いつもながら対応に苦慮した。本来的には接合資料の分布を示して報告を終わりたいところだが、調査データは文化層が重複した可能性を示していたため繰り返し検討を重ねた。結論的には文化層の分離は難しく断念したというのが実態だが、具体的な検討過程を以下に記す。

石器分布、及び、垂直分布を検討した結果、基本的に調査時の層位の所見は正しいということが判明した。同時に、X層に出土量のピークを持つブロック（1・2号）とXII層にピークを持つブロック（3号）が確実に存在することから、X層とXII層にピークを有するブロックについても文化層の重複を考慮する必要が生じた。文化層の重複を想定した場合、X層とXII層に跨る石器の接合も稀ではなく、また、石材毎に分布（第195～198図を参照されたい）が異

II 調査の成果

なるわけでもないこと、層別別に7号ブロックの石器の出土状態を検討したところ石器分布が重複していること、9・10号ブロックではX・XI層の石器が丘陵斜面の低い側に分布する傾向が窺われ、石器の二次的移動(自然営力?)を考慮するべき状況を呈していたため、文化層の分離は現実的には困難と結論した。

以上の問題点を踏まえ、ここでは主要石材(黒色頁岩・黒色安山岩)に限定して、その分布状態を記す。

黒色安山岩 約1/4(95点)の黒色安山岩を2母岩に分類した。黒色安山岩—1は線状・点状の流状構造を有する特徴的の石材で、1号ブロックに10点、2号ブロックに9点が分布したほか、やや離れて4dブロックに1点、30mほど離れた10aブロックに1点が分布した。4dブロックの1点は確実な同一母岩だが、10aブロックの剥片の分類は信頼度が低い。接合資料を1例(88)含む。黒色安山岩—2は多孔質。3号ブロックに16点、4号ブロックに25点、5・8号ブロックに各1点、9号ブロックに9点、10号ブロックに8点、11号ブロックに5点、12号ブロックに3点、ブロック外に15点が分布した。接合資料の存在から導いた「単位的石器群」別に見た母岩2の分布は特徴的で、南北に連なる6～8号ブロックを除く各ブロック群=単位的石器群に分布しており、確認した接合資料9例(88～97)は基本的にブロック内で接合していること、遺跡内製作の剥片である割にはブロック間の接合が確認できないことなどから「同一露頭採集の異母岩石材」と理解され、分類の妥当性について検討の余地を残している。

黒色頁岩 出土総量の50%近い67点を6母岩に分類した。分類的にはほぼ確実な分類と考えている。黒色頁岩—1は4a・bブロックに各4点が分布した。石核1点、剥片7点からなり、接合資料2例(128・129)を含む。青灰色を呈し、やや粗い粒子が抜け落ちた小孔が特徴的である。黒色頁岩—2は7号ブロックのみ分布した。縦長剥片1点、剥片7点、剥片1点からなり、縦長剥片を除く8点が接合(130)

しており、石核を遺跡外に持ち出している。灰白色を呈する。黒色頁岩—3は4aブロックに17点、4b・5号ブロックに各1点が分布した。使用痕ある剥片3、石核2、剥片11、砕片1からなり、17点とも接合(132)している。石核は1/3程度を残して剥離を終えている。やや珪化が進んでおり、風化は弱い。黒色頁岩—4は7号ブロックに11点が分布したほか、4a・bブロックに各1点、4dブロックに2点、8号ブロックに4点、ブロック外にも3点が分布した。縦長剥片1、使用痕ある剥片1、剥片20からなり、剥離段階に破損した剥片の接合を2例(133・134)確認している。石器は風化が激しく進んでおり、剥片の表面が部分的に剥がれ落ちている程である。資料点数の割に接合資料が少なく、他の地点で剥離したのち、遺跡に持ち込んでいる可能性も残る。黒色頁岩—5は剥片2点、砕片4点からなり4aブロックのみ分布した。接合関係は見られない。石器表面の風化が著しい。黒色頁岩—6は縦長剥片1、剥片2からなる母岩別資料で、4dブロックに2点、ブロック外に1点が分布した。褐色を呈する黒色頁岩で、良質な部類に入り、剥片形状や資料点数からみて、遺跡内では部分的に石核を消費した程度と考えている。

(2) B地点

a. 概要

石器群は丘陵性台地の東側斜面に分布した。石器群が出土した地点は比較的傾斜（6°程度）が強く、調査区の東西で約5mの比高差を有していた。石器は東西40m・南北35mの範囲に広がり、435点（礫21点を含む）の石器が略「環状分布」した。石器ブロック16ヶ所を確認した。石器ブロックは全周せず北西側には見られないこと、分布範囲が広い割には石器の出土点数が少なく、加えて中央広場の炭化物が見られない点も特徴的と考えている。

丘陵・東側斜面には「暗色帯」が良好に堆積しており、石器群が出土したこの地点も暗色帯が厚く、二分（XII a・b層）して捉えた。B地点出土の石器も、この細分層に従い取り上げている。

石器はXII b層に最も多く（302点が出土、70%を占める）出土、XII a層（83点）、XI層（9点）、IX層（2点）と続いている。

石器石材はチャートが最も多く出土、396点（91%）を占めている。以下には、黒色安山岩が8点（1.8%）、

文象斑岩5点（1.2%）と続く。接合資料は49例186点を確認した。

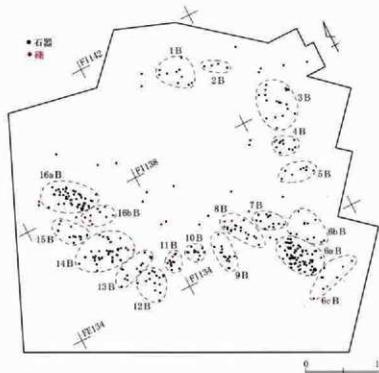
b. 出土石器

礫・礫片21点を含む435点の石器が出土、剥片類（碎片152点を含む）が369点（84.8%）と圧倒的多数を占めた。加工具を主体に組成（加工痕ある剥片9、使用痕ある剥片1）しており、狩猟具の類は全く見られない。

加工痕ある剥片（第199図）

9点が出土している。礫面を残す大形剥片の他、剥離段階で生じる多様な形状の剥片を石器素材に用いている。

第199図1は、やや幅広い小形剥片を用いて剥片端部を粗く加工したものの、石核の平坦面を剥片端部に取り込み、この部分を意図的に加工しているようにも見え、振動的に用いた可能性が指摘されよう。6aブロック出土。黒曜石。2は、小形・横長剥片の側縁に粗く浅い加工を加えたもの。6aブロック出土。チャート。3は、棒状を呈す礫の一端に粗い加工を加えている。剥離角は厚く、その刃部角度は振動的にも見える。14号ブロック出土。チャート。4は、厳密には調整剥片だがやや粗く加工した刃部形状から、削器の類と推定している。6cブロック出土。黑色頁岩。5は、形状の比較的良好な幅広い剥片を用い、両側縁を加工したものの、剥片端部を加工することなくそのまま刃部に用いている。7号ブロック出土。チャート。6は、幅広い剥片の一端を粗く加工したものの、加工の段階で薬理面から破損している。9号ブロック出土。チャート。7は、大形剥片の端部を粗く加工したものの。加工は連続しており、やや厚い嘴状刃部を作出している。11号ブロック出土。チャート。8は、礫面を大きく残す横長剥片を用いる。加工意図は



第130図 石器と礫の分布（第四文化層・B地点）

II 調査の成果

第29表 器種・石材構成 (IV-B地点)

	加工痕	使用痕	敲石	石核	竪長	剥片	砕片	礫	礫片	合計
黒安	0.0%	0.0%	0.0%	6.1%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%
黒頁	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	0.0%	5.6%	0.9%
頁岩	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.2%
珪礫	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
ゾイ	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	0.2%
溶礫	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	0.2%
実安	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	0.2%
黒曜石	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.5%
赤碧玉	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%	0.5%
チャート	88.9%	100%	0.0%	90.9%	0.0%	94.0%	94.7%	0.0%	55.6%	91.0%
珪頁	11.1%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.7%
珪実	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	0.5%
ホルン	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	5.6%	0.5%
砂・岩	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	33.3%	0.0%	0.5%
文斑	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	1.9%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%
粗安	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	66.7%	5.6%	0.9%
合計	9%	1%	2%	33%	1%	216%	152%	3%	18%	435%
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

不明だが背面側・右側縁を粗く加工するほか、左側・側縁部分に浅い剥離を加える。石器表面は被熱してひび割れている。8号ブロック出土。珪頁質岩。

敲石 (第200図1・2)

2点が出土している。2点とも200g程度の礫を用いており、小形の部類に属す。

第200図1は、礫の上下両端に打痕を有する敲石。掴んで持てる程度の円礫を用いている。礫重量は214g。16aブロック出土。粗粒安山岩。2は、礫の小口部分に打痕を有する敲石。小剥離面を伴う打痕の在り方からみて、珪化した石材を使用したため生じた現象と理解している。礫重量は243g。8号ブロック出土。珪頁質岩。

石核 (第200図3・4～203図1・2)

33点が出土している。ここでは接合関係の見られない石核を図示した。

第200図3は、葉理で剥れた板状剥片を用いた石核。剥離作業は石核・右側縁で小形剥片を剥離したのち、上下両端の平坦打面から小剥片を剥離して剥離を終えている。16aブロック出土。チャート。4は、葉理で破損した大形剥片を石核に転用したものの。石核正面で1・2枚の幅広剥片を剥離して剥離を終えている。2号ブロック出土。チャート。

第201図1は、剥離途中で生じた厚い大形石片を用いた石核。剥離実態の詳細は不明だが数枚の幅広剥片を剥離したのち、打面転移して石核上端から1枚の縦長剥片を剥離している。7号ブロック出土。チャート。2は、葉理から剥れた大形剥片を用いた

石核。剥片剥離は石核の上下両端で行われ、小形の幅広剥片を剥離する。1号ブロック出土。チャート。3は、葉理で剥れ落ちた厚い大形剥片を用いた石核。板状石核の小口部分で小形剥片を剥離したのち、石核・正面に作業面を移し、幅広剥片を剥離している。6bブロック出土。チャート。4は、剥離途上にて得た大形剥片を用いた石核。剥片剥離は石核正面、及び、上下両面で行われ、幅広剥片を剥離している。剥離順は不明だが、石核正面→上面→正面の順で剥離を進めている。2bブロック出土。チャート。

第202図1は、柱状を呈する石核。裏面側を除く各面で剥離を行い、幅広剥片を剥離している。石核は葉理が発達しており、葉理を選んで作業面を選んでいる。石核正面には平坦な礫面を残しており、原石は露頭から落ちてまもない亜角礫を選択した可能性が指摘されよう。13号ブロック出土。チャート。2は、90°打面転移を頻りに繰り返して小形剥片を剥離した石核。最終的な作業面は石核の小口部分だが、サイズの的にはまだまだ剥片剥離は可能と考えている。右側面には礫面を大きく残す。8号ブロック出土。流状構造の発達した黒色安山岩を用いている。3は、大形剥片を用いた石核で、裏面側で小形剥片を剥離している。石核消費の最終段階を示している。12aブロック出土。黒曜石。4は、亜角礫を用いた石核。石核正面の他、石核上面や左右の側面に作業面を設定、頻りに打面転移して大形の幅広剥片を剥離している。16aブロック出土。チャート。

第203図1は、礫面を大きく残した板状剥片を用いた石核。石核正面で小形剥片を剥離したのち、打点を左右に振り剥離を進め、剥片端部に石核底面を取り込む小形剥片を剥離している。6aブロック。黒色安山岩。2は、葉理で破損した厚い大形剥片を用いた石核。石核正面で小形剥片を剥離した以外の剥離は見られない。11号ブロック出土。チャート。

剥片 (第203図3～205図7)

217点(縦長剥片1点を含む)が出土している。石器群の90%以上を占めるチャートには節理や葉理の

発達する不良石材が多く剥片形状も多様(剥片の多様性は掲載した接合資料を参照されたい)だが、ここでは比較的形状の整った剥片を選び、掲載した。

第203図3は、左側縁に礫面を残す縦長剥片。平坦な剥離面を打面に背面側に生じた稜上を打撃して、剥片剥離している。1号ブロック出土。文象斑岩。4は、葉理面で破損した幅広剥片。平坦打面から剥離しており、打角は浅い。1号ブロック出土。チャート。5は、左右の側縁が葉理で破損した小形剥片。11号ブロック出土。葉理の少ない良質な、赤色チャートを用いる。6は、剥片端部に礫面を残した幅広剥片。剥離時に打面部を破損、左側縁も葉理面から同時に破損した可能性が高い。16aブロック出土。チャート。

第204図1は、平坦打面から剥離した厚い小形の幅広剥片。剥片端部には礫面を大きく残している。5号ブロック出土。文象斑岩。2は、背面側に葉理面を大きく残した幅広の剥片。打面は剥離段階で弾け飛んでいる。10号ブロック出土。チャート。3は、平坦打面から剥離した幅広剥片。13号ブロック出土。黒色安山岩。4は、上端に微細加工痕を残す小形の幅広剥片。裏面側には削片様の剥離面構成が見られポイントフレイク的で、調整剥片と捉えるべきかもしれない。16aブロック出土。珪質凝灰岩。5は、台形状の断面形状を呈する幅広剥片。剥片は厚く、剥離段階で打面が弾け飛んでいる。8号ブロック出土。油光沢に富む良質なチャートで、出土資料には同一母岩は見られない。

第205図1は、亜角礫を石核に用いて剥離した剥離の初期段階を示す大形の幅広剥片。打面部は剥離時に衝撃で弾け飛んでいる。ブロック外。チャート。

接合資料

接合資料は、49例186点を確認した。剥離は頻りに打面転移を繰り返しており、剥離面構成や葉理を意識して剥離を進めていた。

接合資料—10 (第206図)

4点よりなる接合資料。分割礫を用い、打面転移

II 調査の成果

を繰り返して幅広剥片を剥離する。剥片剥離は上面の平坦打面より剥片1を剥離したのち、打面を転移して剥片2を剥離、再び打面を元に戻して剥片3を剥離する。剥片4は、上面で剥片1枚を剥離したのち、打面転移して剥片3を剥離。チャート。

1 → (90°打面転移) 2 → 3 → ○ → 4

接合資料—38 (第207～209図)

24点からなる接合資料。長さ8.0cm、幅11.1cm、厚さ9.6cm以上を測る分割礫を石核に用い、多様な形状の幅広剥片を剥離している。石核の正面やや右側で剥離を開始、1～4の剥片類を剥離する。このうち、3は大形で厚く石核に転用(剥片2を剥離)している。以上の剥離と前後して裏面側の作業面で剥片5を剥離する。剥片6は剥片1～4の作業面を打面に替え剥離、7以下の剥片(～9)も同様に打面転移して連続剥離する。剥片10～13は石核の裏側に接合した剥片。剥片11を剥離したあと、90°打面転移して、剥片12・13を剥離する。剥片14は再び作業面を元に戻して剥離したもののだが、剥片15は対辺に打面を移して剥離、以後の剥離は打面転移を頻繁に繰り返す。チャート。

1 → (2 → 3) → 4 → 5 → ○
6 → ○ → 7 → 8 → 9
10 → 11 → 12 → 13
14 → (180°打面転移) 15 → ○
16 → (90°打面転移) → 17 → (90°打面転移) 18 → 19
20 → 21 → 22 → 23 → 24

接合資料—14 (第209図)

4点からなる接合資料。葉理等で割れた厚い石塊を石核に用い、剥離を行う接合資料。葉理面から割れており剥離状態は不明だが、石核を二分した状態で剥離が進む。剥片1は石核上端の礫面を打面に剥離、打面転移して剥片1枚を剥離している。3・4も葉理面で破損、各々で剥離が進む。チャート。

○ → 1 → ○ → 2
○ → 3
○ → ○ → 4

接合資料—23 (第209図)

2点からなる接合資料。裏面側の葉理面から剥片1を剥離。これ以前の剥離は作業面を石核正面に固定、90°打面転移して剥片剥離している。チャート。

接合資料—6 (第209図)

2点からなる接合資料。厚い板状石核の小口部分から剥片剥離したものの。接合状態からみて同時剥離した可能性が高い。正面右側の側面に礫面を大きく残す。チャート。

接合資料—13 (第210図)

5点からなる接合資料。正面・右側で剥片1を剥離、打面転移して石核上端で数枚の剥片を剥離したのち剥片2を剥離。剥片3は剥片2に対向する打面から剥離、このあと再び打面転移して石核正面で剥片を連続剥離する。チャート。

1 …… ○ → (90°打面転移) ○ …… → 2 → (180°打面転移) 3 → (90°打面転移) 4 → 5

接合資料—1 (第211図)

6点からなる接合資料。高さ4.5cm、幅14.0cm、厚さ7.0cmを測る大形剥片を石核に用いる。剥離は上面の平坦打面より行われ、剥片2～4を連続剥離する。これ以後の剥離は打面を作業面移入れ替え、石核上面で剥片5を含む小形の幅広剥片を剥離している。左上に接合している幅広剥片1は、石核素材となった大形剥片の剥離段階に破損している可能性が高い。チャート。

1
2 → ○ ○ → 3 → ○ → 4 → ○ ○ → ○ ○ → 5 → 6

接合資料—36 (第212～213図)

16点からなる接合資料。長さ10.4cm、幅7.1cm、厚さ4.9cmを測る厚い板状石核を用い、小形の幅広剥片を剥離している。正面左側で剥片剥離(剥片1を剥離)を開始、連続して2～4の剥片を剥離する。続いて、打面を固定したまま作業面を裏側に移して剥片5・6を剥離、打面転移を経て剥片7～11を剥離している。葉理面で割れた11の接合状態から剥片8以下の3点は同時剥離した可能性が高い。これ以後の剥離は石核正面・右側で行われ、頻繁な打面転移

を併い進む。チャート。

1→2→3→4⇒5・6⇒○→7→8・9・10・
11⇒12→13⇒14⇒15⇒16

接合資料—26 (第213図)

2点からなる接合資料。上端の剝離面打面から剝片1・2を連続剝離している。葉理の発達した粗悪なチャートを用いる。

接合資料—7 (第214図)

3点よりなる接合資料。上端の礫面を打面に大形剝片1〜3を連続剝離している。チャート。

接合資料—9 (第214図)

3点からなる接合資料。上端の平坦打面から剝片1〜3を連続剝離している。表面には礫面が大きく残り剝片剝離の初期状態を示している。チャート。

接合資料—30 (第215図)

3点からなる接合資料。厚い板状剝片を石核に用い、小形の幅広剝片を連続剝離している。チャート。

接合資料—43 (第215図)

3点からなる接合資料。剝片剝離は剝片1を剝離したのち、左側縁に打面を移して剝片を剝離、この作業面を打面に替えて剝片2を剝離している。チャート。

接合資料—45 (第215図)

2点からなる接合資料。上端の平坦打面から打点を大きく左右に振り剝片1・2を連続剝離している。チャート。

接合資料—2 (第216図)

2点からなる接合資料。正面上端から剝片1を剝離してのち、打面転移して作業面を打面に替え、剝片2を剝離する。チャート。

接合資料—31 (第216図)

3点からなる接合資料。厚い大形石片を石核に用い、上端の打面から打点を左右に大きく振り、幅広剝片1・2を連続剝離する。チャート。

接合資料—35 (第217図)

4点からなる接合資料。厚い板状石核が二分したのち、各々の石核で剝片剝離を行う。石核2は左側・平坦打面から小形の幅広剝片を剝離。残る石核は出

土せず不明だが、石核2同様にやや厚い幅広剝片3・4を剝離している。チャート。



接合資料—22 (第217図)

2点からなる接合資料。剝片1・2は上端の打面より打点を大きく振り、連続剝離する。接合資料は正面に葉理面を大きく残す、剝離の初期段階を示す接合資料。チャート。

接合資料—34 (第217図)

2点からなる接合資料。剝離の段階で打点部分を欠いているため不明だが、同一打面から連続して剝片を剝離したと捉えている。チャート。

接合資料—21 (第217図)

2点からなる接合資料。上端の平坦打面からやや大形の幅広剝片1・2を連続剝離する。チャート。

接合資料—16 (第218図)

5点からなる接合資料。剝片剝離は上端の平坦な打面から連続して行われ、剝片3・4を剝離した後、打面転移して剝片5を剝離する。剝片5の打面部は剝離段階に破損している。チャート。

1・2→3・4⇒(90°打面転移)5……

接合資料—11 (第218図)

4点からなる接合資料。垂直線を分割して石核に用いた可能性が強く、分割線の小口部分で剝片2を剝離する。剝片3は葉理面から剝離を試みたとき同時剝離した可能性が高い。剝片1は分割したもう片方の石核から剝離。チャート。

接合資料—28 (第218図)

2点からなる接合資料。分割線を用いた石核素材だが葉理から破損、剝離せず石核を放棄した、と判断されよう。チャート。

接合資料—37 (第219図)

6点からなる接合資料。葉理から割れた厚い分割線を石核素材に用い、小形剝片を剝離している。上端の平坦面を打面に剝片1を剝離したのち、裏面に打面を移し剝離を試みている。剝片2〜6は、このとき同時破損した可能性が高い。チャート。

II 調査の成果

接合資料—27 (第219図)

2点からなる接合資料。厚い板状石核の小口部分で剥片剥離を行う。剥片剥離は上端の打面から剥片1を剥離したのち、打面転移して剥片を2枚ほど剥離、再び打面転移して厚い大形剥片2を剥離する。チャート。

1→○⇒○⇒2

接合資料—12 (第220図)

2点からなる接合資料。上下両端に打面を有し、剥片剥離を行う。石核素材は厚い板状石核と見られ、小形の幅広剥片を剥離している。チャート。

接合資料—33 (第220図)

2点からなる接合資料。上端の平坦打面から剥片1・2を連続剥離している。チャート。

接合資料—25 (第220図)

2点からなる接合資料。剥片剥離は上端の葉理面を打面に用い、剥片1・2を連続して剥離している。チャート。

接合資料—40 (第220図)

3点からなる接合資料。左右両側面に葉理面を有しており、打点を左右に振り小形の幅広剥片を連続剥離する。チャート。

接合資料—39 (第220図)

3点からなる接合資料。小形の板状石核を用い、小形剥片を剥離している。剥片剥離は上端の平坦面を打面に行われ、剥片剥離の連続剥離する。剥片1・2剥離段階では同時破損している。チャート。

1・2→3

接合資料—46 (第221図)

2点からなる接合資料。裏面に礫面を大きく残す厚い大形剥片を石核に用い、幅広の小形剥片を剥離している。チャート。

接合資料—29 (第221図)

2点からなる接合資料。大形剥片を石核素材に用い、打面側の厚い部分で小形の剥片を剥離している。石核の破損段階については、素材剥離段階か、小形剥片の剥離段階か、明確ではない。チャート。

接合資料—32 (第221図)

2点からなる接合資料。葉理面で割れた板状石核を用いて正面、及び、左側面で剥片剥離している。最終的に、2は裏面側を粗く加工しており、二次的利用を試みている。チャート。

接合資料—8 (第221図)

2点からなる接合資料。厚い板状剥片を石核に用い、小形剥片を剥離する。石核は途中破損して二分している。チャート。

接合資料—3 (第221図)

2点からなる接合資料。剥離初期で石核が破損、石核を放棄している。チャート。

接合資料—44・48 (第221図)

2点からなる接合資料。接—44は剥離段階で縦位切断した2点が接合したもの。チャート。接—48は同じく横位切断した2点が接合。黒色安山岩。

接合資料—20・15・49・12・19・17・41・4・47・24・5・18 (第222図)

剥離段階で縦位切断した剥片や、横位切断した剥片の接合例を一括した。接—49は文象斑岩、接—47は黒色安山岩で、これ以外の接合資料はチャート製。

c. 石と礫の分布

石器群は、尾根状に張り出した丘陵性台地の東側斜面に分布した。石器の分布範囲は1000m² (東西40m・南北35m)を超え、石器ブロックを16ヶ所で確認した。約400点の石器が略「環状分布」して出土、特徴的な分布状態を示していた。ブロックは全周せず、北西側のブロックが欠けている。概して調査区北側の石器分布が薄く、弧状分布した可能性も否定できない。また通常、中央部に多い炭化物・集中部や搬入石器が見られないこと、この種の石器群には必ず組成する石刃ナイフや台形椀石器、石斧類が全く見られないなど、相違点が指摘されよう。

石器の出土層位はX I層～X III層 (このほかIX層から剥片2点が出土)に及んでいる。層位別には約70%の石器がX II b層から出土しており、出土状態は極めて安定していた、と考えている。

1号ブロック (第223図)

位置 調査区北の丘陵斜面 (FK-140G)
 規模 長径4.7m・短径1.8m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 XII a・b層とも各5点が出土している。
 器種構成 石核2、縦長剥片1、剥片7
 石材構成 チャート9、文象斑岩1
 その他 接合資料1例を確認している。チャートを用いて剥片を剥離したはずだが、出土資料には破片が見られない。

2号ブロック (第223図)

位置 調査区北の丘陵斜面 (FM-140G)
 規模 長径3.0m・短径0.5m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 XII b層からのみ出土している。
 器種構成 石核2、剥片2、破片1
 石材構成 チャート5
 その他 接合資料1例を確認している。

3号ブロック (第224図)

位置 調査区東の丘陵斜面 (FM-137・138G、FN-137・138G)
 規模 径5.5m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 XII a層に8点、XII b層に12点が出土している。
 器種構成 加工痕ある剥片1、石核4、剥片9、破片5、礫片1
 石材構成 チャート19、珪質頁岩1
 その他 接合資料6例を確認している。うち、2例は他ブロックと接合関係を有する。

4号ブロック (第224図)

位置 調査区東の丘陵斜面 (FM・FN-136G)
 規模 長径2.9m・短径1.7m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 XI層に3点、XII a層に6点、XII b層に3点が出土しており、調査時の所見ではXII a層に出土量のピークを持つ。
 器種構成 剥片11、破片1

第30表 ブロック別器種構成1 (IV-B地点)

	加工痕	使用痕	巖石	石核	縦長	剥片	破片	礫	礫片	合計
1号ブロック	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 20.0%	1 10.0%	7 70.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	10 100%
2号ブロック	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 40.0%	0 0.0%	2 40.0%	1 20.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
3号ブロック	1 5.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 20.0%	0 0.0%	5 45.0%	5 25.0%	0 0.0%	1 5.0%	20 100%
4号ブロック	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	11 91.7%	1 8.3%	0 0.0%	0 0.0%	12 100%
5号ブロック	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 12.5%	0 0.0%	7 87.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 100%
6a号ブロック	2 2.4%	0 0.0%	0 0.0%	4 4.7%	0 0.0%	45 52.9%	33 38.8%	1 1.2%	0 0.0%	85 100%
6b号ブロック	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 9.1%	0 0.0%	7 63.6%	2 18.2%	0 0.0%	1 9.1%	11 100%
6c号ブロック	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 11.1%	5 55.6%	0 0.0%	3 33.3%	9 100%
7号ブロック	1 6.7%	0 0.0%	0 0.0%	1 6.7%	0 0.0%	5 33.3%	7 46.7%	1 6.7%	0 0.0%	15 100%
8号ブロック	1 5.3%	0 0.0%	1 5.3%	1 5.3%	0 0.0%	9 47.4%	5 26.3%	0 0.0%	2 10.5%	19 100%

II 調査の成果

石材構成 チャート12

その他 接合資料3例を確認している。うち、2例は他ブロックと接合関係を有する。

5号ブロック (第224図)

位置 調査区東の丘陵斜面 (FM・FN-135G)

規模 長径3.7m・短径0.9m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X I層に1点、X II a層に3点、X II b層に4点が出土している。

器種構成 石核1、剥片7

石材構成 チャート6、文象斑岩2

その他 他ブロックと接合関係を有する接合資料2例を確認している。

6a号ブロック (第223図)

位置 調査区南東の丘陵斜面 (FL-132・133G)

規模 長径5.8m・短径3.3m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X I層に1点、X II a層に15点、X II b

層に67点、X III層に2点が出土。

器種構成 加工痕ある剥片2、石核4、剥片45、碎片33、礫1

石材構成 チャート79、黒色安山岩5、粗粒安山岩1

その他 ブロック内の接合資料11例、ブロック間の接合資料3例を確認している。このうち、1例は調査区・北西側のブロックと接合関係を有する。

6b号ブロック (第223図)

位置 調査区南東の丘陵斜面 (FM-133・134G)

規模 長径5.2m・短径2.2m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X II a層に3点、X II b層に8点が出土している。

器種構成 石核1、剥片7、碎片2、礫片1

石材構成 チャート9、珪質安山岩1、文象斑岩1

その他 接合資料3例を確認している。

第31表 ブロック別器種構成2 (IV-B地点)

	加工痕	使用痕	敲石	石核	縦長	剥片	碎片	礫	礫片	合計
9号ブロック	6.3%	0.0%	0.0%	6.3%	0.0%	25.0%	56.3%	0.0%	6.3%	100%
10号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	18.2%	0.0%	63.6%	18.2%	0.0%	0.0%	100%
11号ブロック	7.7%	0.0%	0.0%	15.4%	0.0%	30.8%	30.8%	0.0%	15.4%	100%
12号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	50.0%	37.5%	0.0%	0.0%	100%
13号ブロック	7.1%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	64.3%	7.1%	7.1%	0.0%	100%
14号ブロック	2.1%	0.0%	0.0%	2.1%	0.0%	51.1%	36.2%	0.0%	8.5%	100%
15号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	76.9%	23.1%	0.0%	0.0%	100%
16a号ブロック	0.0%	1.8%	1.8%	8.9%	0.0%	48.2%	37.5%	0.0%	1.8%	100%
16b号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	22.2%	55.6%	0.0%	11.1%	100%
ブロック外	0.0%	0.0%	0.0%	3.7%	0.0%	63.0%	25.9%	0.0%	7.4%	100%
不明	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.3%	94.7%	0.0%	0.0%	100%
合計	2.1%	0.2%	0.5%	7.6%	0.2%	49.7%	34.9%	0.7%	4.1%	100%

6c号ブロック (第223図)

位置 調査南東側の丘陵斜面 (FM-132G)
 規模 長径5.2m・短径2.2m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X II a層に2点、X II b層に7点が出土。
 器種構成 剥片1、碎片5、礫片3
 石材構成 チャート8、黒色頁岩1
 その他 接合資料なし

7号ブロック (第225図)

位置 調査区南東側の丘陵斜面 (FL-134G)
 規模 長径3.7m・短径1.9m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X II a層に3点、X II b層に12点が出土。
 器種構成 加工痕ある剥片1、石核1、剥片5、碎片7、礫1
 石材構成 チャート12、文象斑岩1、赤碧玉1、粗粒安山岩1
 その他 接合資料2例を確認している。2例とも他ブロックと接合関係を有する。

8号ブロック (第225図)

位置 調査区南東側の丘陵斜面 (FK-134・135G)
 規模 長径4.5m・短径2.1m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X I層に1点、X II a層に4点、X II b層に13点が出土。
 器種構成 加工痕ある剥片1、礫石1、石核1、剥片9、碎片5、礫片2
 石材構成 チャート14、珪質頁岩2、黒色安山岩1、ホルンフェルス1、粗粒安山岩1
 その他 接合資料5例を確認した。ブロックの北側に散漫に分布する剥片類に接合する例が3例を占める。

9号ブロック (第225図)

位置 調査区南側の丘陵斜面 (FJ-134G)

規模 長径3.5m・短径1.7m

分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX層に1点、X I層に1点、X II a層に3点、X II b層に11点が出土。
 器種構成 加工痕ある剥片1、石核1、剥片4、碎片9、礫片1
 石材構成 チャート15、変質安山岩1
 その他 接合資料4例を確認している。

10号ブロック (第225図)

位置 調査区南側の丘陵斜面 (FI-134・135G)
 規模 長径2.2m・短径1.6m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X II a層に1点、X II b層に10点が出土。
 器種構成 石核2、剥片7、碎片2
 石材構成 チャート11
 その他 接合関係3例を確認している。うち、1例は9号ブロックと接合関係を有する。

11号ブロック (第227図)

位置 調査区南側の丘陵斜面 (FH-134・135G)
 規模 長径2.2m・短径0.7m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X II b層に9点、X III層に4点が出土。
 器種構成 加工痕ある剥片1、石核2、剥片4、碎片4、礫片2
 石材構成 チャート13
 その他 接合資料1例を確認。

12号ブロック (第227図)

位置 調査区南側の丘陵斜面 (FG・FH-134G)
 規模 長径4.0m・短径3.6m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X II a層に2点、X II b層に14点が出土した。
 器種構成 石核2、剥片8、碎片6

II 調査の成果

第32表 ブロック別石材構成 (IV—B地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	赤碧玉	チャート	珪頁	珪変	ホルン	砂岩	文班	粗安	その他	合計
1号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	90.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.0%	0.0%	0.0%	100%
2号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
3号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	95.0%	5.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
4号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
5号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	75.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	100%
6a号ブロック	5.9%	0.0%	0.0%	0.0%	92.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	100%
6b号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	81.8%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	100%
6c号ブロック	0.0%	11.1%	0.0%	0.0%	88.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
7号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	80.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	6.7%	0.0%	100%
8号ブロック	5.3%	0.0%	0.0%	0.0%	73.7%	10.5%	0.0%	5.3%	0.0%	0.0%	5.3%	0.0%	100%
9号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	93.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1(変安) 6.3%	100%
10号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
11号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
12号ブロック	0.0%	0.0%	6.3%	0.0%	93.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
13号ブロック	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%	85.7%	0.0%	0.0%	0.0%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
14号ブロック	0.0%	2.1%	0.0%	0.0%	95.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1(磨羅) 2.1%	100%
15号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
16a号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	96.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	1(珪頁) 1.8%	100%
16b号ブロック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	88.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1(デイ) 11.1%	100%
ブロック外	3.7%	0.0%	0.0%	0.0%	81.5%	0.0%	3.7%	3.7%	3.7%	0.0%	0.0%	1(珪頁) 3.7%	100%
不明	0.0%	10.5%	5.3%	5.3%	78.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%
合計	1.8%	0.9%	0.5%	0.5%	91.0%	0.7%	0.5%	0.5%	0.5%	1.1%	0.9%	1.1%	100%

石材構成 チャート15、黒曜石1

その他 ブロック間で接合する接合資料1例を確認した。

13号ブロック (第227図)

位置 調査区西側の丘陵斜面 (FG—135G)

規模 長径4.7m・短径2.0m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X II a層に5点、X II b層に9点が出土。

器種構成 加工痕ある剥片1、石核2、剥片9、砕片1、礫1

石材構成 チャート12、黒色安山岩1、砂岩1

その他 接合資料3例を確認した。

14号ブロック (第226図)

位置 調査区西側の丘陵斜面 (FF・FG—136G)

規 模 長径6.5m・短径4.9m
分布状態 比較的集中して分布する。
出土層位 X II a 層に10点、X II b 層に36点、X III 層に1点が出土。
器種構成 加工痕ある剥片1、石核1、剥片24、破片17、礫片4
石材構成 チャート45、黒色頁岩1、溶結凝灰岩1
その他 接合資料4例を確認。

15号ブロック (第226図)

位 置 調査区西側の丘陵斜面 (FF-137G)
規 模 長径3.7m・短径1.5m
分布状態 散漫に分布する。
出土層位 X II a 層に1点、X II b 層に12点が出土している。
器種構成 剥片10、破片3
石材構成 チャート13
その他 接合資料3例を確認。

16a号ブロック (第226図)

位 置 調査区西側の丘陵斜面 (FF-FG-138G)
規 模 長径5.7m・短径2.4m
分布状態 比較的集中して分布する。
出土層位 X I 層に1点、X II a 層に7点、X II b 層に39点、X III 層に9点が出土。
器種構成 使用痕ある剥片1、敲石1、石核5、剥片27、破片21、礫片1
石材構成 チャート54、珪質凝灰岩1、粗粒安山岩1
その他 接合資料7例を確認。

16b号ブロック (第226図)

位 置 調査区西側の丘陵斜面 (FG-137G)
規 模 長径3.3m・短径2.5m
分布状態 散漫に分布する。
出土層位 IX 層に1点、X II a 層に1点、X II b 層に7点が出土。
器種構成 石核1、剥片2、破片5、礫片1

石材構成 チャート8、デイサイト1

その他 接合関係3例を確認。

d. 接合資料の分布

接合作業を通じて、49例185点の接合資料を確認した。このうち、25例は剥片類2点が接合したもので、残り24例の接合資料は平均で5.6点の剥片が接合したということになる。42%にも達した接合率からみて、接合の難しい石材（薬理等で不規則に割れるため）の割には予想以上の接合資料を得た、と考えている。構成点数が少なく、石核の部分的消費しかなく、残されてないブロック（1ブロック平均20点）が大半だが、その割にはブロック間の接合資料も多く予想に反した。ここでは接合関係を介して結び付くブロックを便宜的に「群」と捉え図示した。

1・2号ブロック (第229図) には、接合資料2例が分布した。接-1はブロック外で剥片(第221図4)と接合した。3～5号ブロック (第229図) には、8例の接合資料が分布した。5例の接合資料 (接-3～6・9) がブロック内で、3例 (接-7・8・10) がブロック間で接合した。3ブロック (3・5・7号) の剥片類が接合した接-10は5号→7号→3号ブロックの順に移動・剥離したとも理解可能だが、剥離効率からみて上述した理解は現実的ではなく、剥片の選択的移動を第一に想定すべきだろう。6～8号ブロック (第230図) には、17例の接合資料が分布した。12例がブロック内の接合資料であり、6aブロックに集中している。ブロック間で接合した接-11は薬理で欠け詳細は不明だが、形態的には6aブロックを剥離地点と見なすべきだろう。接-44～46は8号ブロックとブロック外の接合例だが、ブロック内で剥離・ブロック外へ搬出、と単純には評価できないようである。接-47・48は剥離段階で破損した幅広剥片。全般的には黒色安山岩の使用が低調だが、6aブロックには5点 (総計8点) が分布、少量の剥片生産を示唆していた。9～11号ブロック (第231図) には7例の接合資料が分布した。ブロック内の接合が大半で、1例のみブロック間で

II 調査の成果

接合（接-27）した。接-27は石核と剥片の接合資料で、剥離地点の特定は現状ではできない。12~14号ブロック（第231図）には、7例の接合資料（ブロック間で5例が接合）が分布した。接合資料の移動理由は不明だが、接-36は剥片1~6が12号ブロックに、8以下の剥片類が14号ブロックに分布、地点を変え剥離した可能性も想定されよう。15・16a・16b号ブロック（第232図）には、6例の接合資料（3例がブロック間で接合）が分布した。この3例に関する剥片の移動理由は現状では判断が難しい。

e. 石材分布

石器群は90%以上をチャートが、残る10%弱を15種類の石材が占めるという特異な石材構成を示していた。

チャートに次ぐ構成石材は黒色安山岩だが、出土点数は8点と少ない。少なくとも3母岩以上を確認でき、縦位折断している6aブロックの剥片以外は搬入石器と考えるべきかもしれない。1点のみ出土した石材は5種類（頁岩、珪質凝灰岩、変質安山岩、デイサイト、溶結凝灰岩）だが、剥片（第204図4）や砕片で、現状ではデータ不足で評価できない。残る石材3種類（変質安山岩、デイサイト、溶結凝灰岩）は礫片（2g程度の重さ）で、地山の礫に由来する礫（珪質変質岩も同様な礫と捉えた）かもしれない。2点が出土した赤碧玉は油光沢に欠け、石器素材としては決して良質とはいえない。周辺域にはない赤碧玉が出土したこと自体意味あることだが、その由来については明確にはできない。

396点が出土したチャートでは、1母岩91点を抽出した。この母岩は緑泥石起源の緑色チャートだが、赤鉄鉱に由来する赤褐色の斑文様が見られ、比較的容易に分離が可能で、35点（38.4%）が16aブロックに、18点（19.7%）が6aブロックに分布したほか、9点が出土した14号ブロック、及び、周辺ブロックにも数点ずつ分布した。16aブロックに分布した3例の接合資料（接-38・41・43）や1号ブロックで確認した接合資料（接-1）からみて、母岩を分

割して6aブロックや14号ブロックに持ち出して、剥片生産した可能性が想定されよう。

黒色安山岩は6aブロックに5点（接-47・48を含む）が、8・13号ブロックに各1点が、ブロック外に1点が分布した。8号ブロックの1点は石核で、単独出土。13号ブロックの1点も単独出土した剥片で、搬入石器と捉えている。

文象斑岩も搬入石器と捉えるべき石器、と考えている。文象斑岩は2点が分布した5号ブロック以外はブロック（1・6b・7号）に1点のみ単独出土した。図示した通り、剥片（第203図3・第204図1・接-49）は比較的大形で、石核や不良剥片・砕片が見られないことから、他の地点から持ち込んだ剥片と判断している。

黒色頁岩は、砕片3・礫片1（14号ブロック）が分布した。砕片は1点が6cブロックに分布した。第32表の不明2点は1号ブロック付近に分布した砕片である。詳細は不明だが、少量の剥片生産を想定すべきだろう。

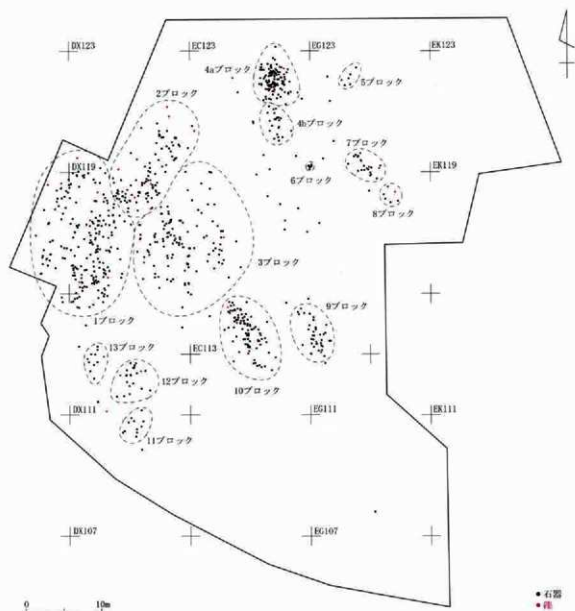
(3) C地点

a. 概要

石器群は丘陵性台地の南側斜面に分布した。石器群が出土した地点はA・B地点と同様、比較的傾斜（6°程度）が強く、調査区の北側と南側では約5～6mの比高差を有していた。石器は東西40m・南北55mの範囲に広がり、858点（35点の礫・礫片を含む）の石器が出土、石器ブロック13ヶ所を確認している。

産廃処理に伴う掘削で石器群の分布域・西側を欠いており、南東側から入り込む小支谷に臨んだこの地点の石器分布についてはその有無さえ不明だが、隣接・重複するよう分布してブロック区分が困難な調査区西側の分布域と、ブロック区分が比較的容易な南側や東側の分布域からなることが指摘されよう。

この地点の「暗色帯」の堆積は良好で、XII層を上下2層（XII a・b層）に細分して捉えた。石器はX層から6点、X I層から108点、XII a層から400



第131図 石器と礫の分布（第IV文化層・C地点）

II 調査の成果

点、XII b層から184点、XIII層から141点、不明19点が出土しており、XII層の上半部に出土量のピークを持つ石器群であることが判明した。

石器石材は、黒色安山岩が最も多く556点(64.8%)を占めている。続いてチャートが121点(14.1%)、黒色頁岩が106点(12.4%)と多用され、以上の石材3種で出土石器総量の90%以上を占めた。

接合資料は調査区全域に及んでおり、84例311点を確認した。

b. 出土石器

総計858点の石器が出土した。剥片類が723点(84%)と圧倒的多数を占めており、石核も50点と多量に出土している。石器群を構成する主な器種は石刃ナイフ(基部加工・側縁加工・二側縁加工)や台形椀石器で、このほかには若干の加工石器が組成する程度である。

ナイフ形石器(第234図)

10点が出土した。二側縁加工のナイフが安定組成したほか、厚い剥片を用いた一側縁加工のナイフが特徴的に存在する。

第234図1は、二側縁加工したナイフ。石器表面に節理面を大きく残す縦長剥片を逆位に用い、裏面側から急峻な調整加工を施す。両側縁の加工は基本的に石器基部の加工に先行している。5号ブロック出土。チャート。2は、二側縁加工したナイフ。幅広い縦長剥片を用い、裏面側からやや粗い調整加工を施している。3号ブロック出土。黒色頁岩。3は、二側縁加工したナイフ。左側縁では調整加工を裏面側から施す反面、右側縁では背面側から施しており、鉛向的である。接合状態(接-217)から分かる通り、やや大形の幅広い剥片を用いており、素材の変形度は高い。9号ブロック出土。珪質頁岩。4は、一側縁加工したナイフ。小形・幅広い剥片を用い、打面側を加工して石器を作出している。器体中央より先端を

第33表 器種・石材構成 (IV—C地点)

	ナイフ	台形椀	盤	削器	加工皿	使用皿	局磨	磨石	石核	縦長剥片	剥片	砕片	磨片	磨片	合計									
黒	安	10.0%	1	5	100%	0.0%	0	50.0%	4	22.2%	2	0.0%	0	0	0	30	2	322	188	0.0%	0	1	556	
			71.4%													60.0%	25.0%	69.3%	72.3%			5.3%	64.8%	
黒	頁	50.0%	5	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0	0	0	0	3	10.0%	62.5%	15.1%	6.2%	12.5%	2	0	106
			0.0%													100%						0.0%	12.4%	
黒	曜	0.0%	0	2	0.0%	50.0%	1	0.0%	11.1%	1	0.0%	0.0%	1	0.4%	0.0%	0	0.0%	0.2%	0.4%	0.0%	0.0%	0	0	6
			0.0%													0.0%						0.0%	0.7%	
硬	頁	0.0%	0	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	1	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0	0	1
			0.0%													0.0%						0.0%	0.1%	
褐	岩	0.0%	0	0	0.0%	0.0%	0	11.1%	1	0.0%	0	0	0	0.0%	0.0%	2.0%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0	0	4
			0.0%													0.0%						0.0%	0.5%	
玉	ざ	0.0%	0	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0	1	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.4%	0.0%	0.0%	0	0	2
			0.0%													0.0%						0.0%	0.2%	
チ	ャ	30.0%	3	0	0.0%	50.0%	4	33.3%	3	0.0%	0	0	10	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	44	46	12.5%	2	8	121	
			0.0%													0.0%		9.5%	17.7%	42.1%	8	14.1%		
珪	頁	10.0%	1	0	0.0%	0.0%	2	50.0%	1	0.0%	4	0	2	12.5%	4.5%	2	0.0%	21	3	0.0%	0	1	32	
			0.0%													0.0%		4.5%	1.2%	0.0%	5.3%	3.7%		
珪	灰	0.0%	0	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0	0	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0	1	0.0%	0	3	4	
			0.0%													0.0%						0.5%		
灰	玄	0.0%	0	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	1	0.0%	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0	0	0.0%	0.0%	0	1	
			0.0%													0.0%						0.1%		
砂	岩	0.0%	0	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0	2	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0	2	
			0.0%													0.0%						0.2%		
滑	礫	0.0%	0	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0	2	0.0%	0.0%	4.0%	0.0%	0.2%	0.8%	5.3%	1	0	6	
			0.0%													0.0%						0.7%		
粗	安	0.0%	0	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0	68.8%	11	6	17		
			0.0%													0.0%						2.0%		
合	計	100%	10	7	100%	100%	2	8	9	2	3	50	8	463	260	16	19	858						
			100%								100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%		

欠損している。接合資料一213(第279図)。4aブロック出土。黒色頁岩。5は、二側縁加工したナイフの基部破片。このため剥片形状は不明だが、調整加工の角度は深く、剥片形状を大きく変え石器を作出している。4bブロック出土。チャート。6は、二側縁加工したナイフ。調整加工は左側縁では石器形状を整える程度だが、右側縁の調整加工は粗い。剥片の打面部は調整加工を施し除去している。風化が激しく、左側縁は部分的に剥落している。3号ブロック出土。黒色頁岩。7は、一側縁加工したナイフ。厚い小形・幅広剥片を用い、変形度の高い調整加工を施している。石器の形状は先端加工したナイフに似る。9号ブロック出土。チャート。8は、左側縁を弧状に加工したもの。左側縁・上半部の加工は比較的丁寧で、腹面側から深い角度で施す半面、左側縁・下半部は背面側から粗く浅い加工を施している。石器は直線的刃部を有しており、形態的には7に似る。1号ブロック出土。黒色安山岩。9は、基部加工した典型的石刃ナイフ。石器先端、及び、右側縁の裏面側は熱を受け剥落している。4aブロック出土。黒色頁岩。10は、一側縁加工したナイフ。この種のナイフについては、県内のAT降下以前の石器群に良く見掛ける石器で、極めて地域色の強い石器と考えている。この種の石器が「他の地域にもあり、型式的な特徴にはならないのではないか」という見解には、黒色頁岩製大形剥片を用い側縁加工する、この種の石器は少なくとも当該期石器群を除いて県内には見られない石器であり、上述した指摘は妥当性を欠いているのではないかと考えている。3号ブロック出土。黒色頁岩。

台形椽石器 (第235図1~6・9)

総計7点が出土している。切出状を呈するタイプと台形状を呈するタイプからなり、ベン先タイプの台形椽石器は見られない。全般的に、やや「作り」が粗く「精製石器」は少ない。

第235図1は、切出状の刃部を有する台形椽石器。小形・横長剥片を用い、裏面側・両側縁に平坦剥離

を加えて石器を作出している。1号ブロック出土。黒色安山岩。2は、1と同様な切出状の刃部を有する台形椽石器。石器下部を欠損するため石器形状は不明だが、左右の側縁が平行する点で特徴的である。側縁加工は錯向的で典型的な平坦剥離だが、右側縁は打面部を粗く打ち欠き除去したのち背面側を剥離するのに対して、左側縁は直接背面を叩いて裏面側を加工している。3号ブロック出土。黒曜石。3は、切出状刃部を有する台形椽石器。小形・横長剥片を用い、左右の側縁を剥離して石器を作出している。右側縁の調整加工は剥片の打面を利用して平坦剥離するのに対して、左側縁は裏面側から浅く剥離しており、加工法が異なる。左側縁側の先端を欠損する。1号ブロック出土。黒色安山岩。4は、切出状を呈する台形椽石器。石器基部のみ加工しており、側縁加工は見られない。1号ブロック出土。黒色安山岩。5は、小形・幅広剥片を用い、側縁加工した台形椽石器。調整加工は左側縁に限られ、打面を除去するよう裏面側から厚い剥離を施す。10号ブロック出土。黒色安山岩。6は、小形・幅広剥片を用い基部側の表裏両面を加工して作出した台形椽石器。石器刃部を調査時に欠いており、刃部形状は明確ではない。調整加工は裏面側が先行、パルプを除去したのち、背面側を剥離している。1号ブロック出土。黒曜石。9は、小形・横長剥片を用い、側縁加工して作出した台形椽石器。右側縁は表裏両面に、左側縁は折れ面から稜線を除去するよう浅い剥離を粗く施す。石器刃部は直線的で、石器の長軸に直交している。1号ブロック出土。黒色安山岩。

削器 (第235図7・10)

2点が出土している。資料点数が少なく、特徴的傾向の指摘は困難だが、基本的には剥片形状に並び刃部を作出した、と判断している。

第235図7は、縦長剥片を用いた削器。剥片端部を全周するよう微細加工を施し刃部を作出している。ブロック外。黒曜石。10は、やや厚い幅広剥片を用いた削器。剥片端部、及び、右側縁に厚い刃部を作

II 調査の成果

出している。2号ブロック出土。チャート。

掘器 (第235図14)

1点のみ出土した。厚い幅広剥片を石器素材に用い、剥片端部に角度の厚い刃部を作出している。2号ブロック出土。黒色安山岩。

加工痕ある剥片 (第235図8・11~13、第236図1)

8点が出土している。ここでは加工意図の不明な石器を一括、単独出土した5点を図示した。

第235図8は、小形・横長剥片を用いたもの。剥片の打面側を折断、背面側の右側縁に粗い調整加工を加えて石器を作出している。石器先端を破損するため石器形状は不明だが、加工状態は台形様石器に類似している。12号ブロック出土。チャート。11は、小形の風化礫片を用い、右側縁を連続加工したものの。調整加工は連続しており、削器に分類が可能かもしれない。1号ブロック出土。チャート。12は、小形の幅広剥片を用いたもの。剥片剝離したのち左側縁を折断、剥片端部に粗い調整加工を加えている。2号ブロック出土。黒色安山岩。13は、小形剥片を用い、側縁を粗く加工したものの。裏面側・右側縁を粗く打ち欠いており、その加工状態は打面側を除去するようにも見える。破片資料でもあり石器形状は不明だが、加工状態は台形様石器に類似する。1号ブロック出土。黒色安山岩。

第236図1は、礫面を大きく残した幅広剥片を用いたもの。粗い調整加工を剥片端部に加えて刃部を作出している。1号ブロック出土。黒色安山岩。

使用痕ある剥片 (第236図2~7)

9点が出土している。多様な形状の剥片を用いており、形状の良好な剥片を選び、使用している。

第236図2は、やや厚い幅広剥片を用いたもの。使用痕は剥片端部に生じている。1号ブロック出土。褐色碧玉。3は、中央付近で横位折断した幅広剥片を用いたもの。やや粗い使用痕が弧状を呈する剥片端部に生じている。1号ブロック出土。黒色安山岩。

4は、小形剥片を用いたもの。やや薄い側縁部分に使用痕が生じている。10号ブロック出土。チャート。5は、大形の縦長剥片を用いたもの。剥片は形状の良好な直線の縁を有しており、この部分に使用痕は生じている。11号ブロック出土。珪質頁岩。6は、折断剥片を用いたもの。斜向する右側縁を刃部に、便宜的に使用した可能性が想定されよう。1号ブロック出土。黒曜石。7は、幅広剥片を用いたもの。比較的形の整う右側縁、および、剥片端部に使用痕が生じている。10号ブロック出土。チャート。

局部磨製石斧 (第237図1・2)

2点が出土している。2点とも破損品の再生資料だが、刃部の研磨や使用石材は著しく相違している。

第237図1は、刃部のみ研磨して作出したもの。右側に振れたようにも見える石器だが、背面・左側から大きく破損したのち、側縁を粗く加工・刃部を研磨して石器を再生した可能性が高い。右側縁に折れ面を取り込む石斧製作の在り方は、南西に約2km離れた牛伏遺跡の石斧などにも類似する。ブロック外。変玄武岩。2は、器体の2/3程度を欠損した局部磨製石斧の刃部破片。礫面を大きく残す薄手の大形剥片を用い、若干の周縁加工を施した後は全面を丁寧に研磨して石器を作出した、と考えている。折れ面には「手ずれ」が著しく、再生後確実に使用しており、着柄せず使用した可能性が高い。刃部幅からみて、石斧は10cmを超えた可能性が高い。3号ブロック出土。珪質頁岩。

敲石 (第237図3)

1点のみ出土した。出土資料は3点からなる接合資料(接-206)で、上下両端の小口部分に著しい打痕を残している。12号ブロック出土。黒色頁岩。

石核 (第237図4~第240図1)

50点が出土した。ここでは、接合関係の確認できない14点を図示した。

図示した石核は、基本的に大形剥片を石核素材に

用いるタイプ(例えば、第239図1~7)で、石核形状を重視して作業面を選択、剥片を剥離しており、石核の主体を占める。出土石核の形状は多様(なかには亀甲状を呈する石核も存在、第239図1・3)だが、剥離実態を暗示している。このほか打面転移を頻繁に繰り返す石核(第238図2・5、第240図1)が出土している。

剥片(第240図2~253図1・2)

剥片類(縦長剥片を含む)は、471点が出土した。多様な形状の剥片が出土しており、長さ3cm前後の小形剥片から長さ8cm前後の大形剥片まで、形状は多様性に富む。ここでは、この剥片類の多様性を理解してもらえよう意図して、接合関係の確認できない剥片を選択的に図示した。

石器石材は黒色安山岩が324点(69%、第33表を参照)と最も多く、続いて黒色頁岩が75点(16%)、チャートが44点(9%)出土、黒曜石や硬質頁岩その他の非在地石材は1~3点と少量出土しているのにすぎない。

第240図2~7、241図・242図1~4には、形状の整う比較的大形の縦長剥片を、第242図5~10にはやや小形だが細身の縦長剥片を図示した。前者は黒色安山岩や黒色頁岩など在地石材を用いる例が多く、後者には在地のチャートを用いる傾向が指摘可能かもしれない。第243図、第244図1・3・5・6・8、第245図1・2・4・5には長さ3cm程度の小形剥片を、第244図2・4・7・9、第245図3・6~8、第246~248図には長さ5cm程度の幅広剥片を図示した。第243図1は硬質頁岩、同11は黒曜石、第246図3は褐色碧玉で非在地系石材を用いたものだが、剥片形状は定形的ではなく単純に搬入剥片とは位置づけられないかもしれない。第249図1~8、第250図には小形の幅広剥片を、第249図9、第251~253図1・2には大形幅広剥片を図示した。

接合資料

接合資料は、84例311点を確認した。剥片剥離の様

相は多様で、原石から剥離するもの(接-144、207)、原石を分割して剥離するもの(接-165、143ほか)、大形剥片を石核に用い剥離するもの(接-158、169ほか)の他、石核消費の多様な段階を示す接合資料を確認している。

接合資料-144(第254・255図)

長さ11.4cm、幅7.4cm、厚さ4.3cmを測る扁平礫を石核に用いる。剥片剥離は礫の小口部分で大形剥片を剥離して開始、打面と作業面を入れ替え剥片1、2・3を剥離する。剥片2は横位折断した大形剥片が中央付近で破損したものだが、剥片3は剥片2に接合する折断剥片の折れ面から打ち欠いた小剥片と考えている。剥片4~9は剥片1・2に続いて連続剥離した剥片である。以下の剥離は打面と作業面を入れ替えた「交互剥離的剥離」が連続する。黒色安山岩。
○→1→(2→3)→4→5→6→7→8→9→10→11→12→13→14→15→16→17

接合資料-165(第256・257図)

高さ5.4cm、幅11.6cm、厚さ10.4cmを測る分割礫を石核素材に用いる。残存する礫面の形状からみて原石サイズは最大でも厚さ7cm程度と考えている。剥片剥離は分割面側で剥片1を剥離したのち、打面を入れ替え反対側で剥片2~7を連続して剥離する。より大形の剥片は石核に転用(第256図5)、小形剥片を剥離しているようである。以下の剥離は頻繁に作業面を入れ替えて進み、大形剥片を石核に転用する剥離の在り方(第256図7、第257図11)は基本的には変わらない。黒色安山岩。

(原石・分割)

1⇨(2→3)→4→(○→5)→6・7
→8⇨(9⇨○・○→10⇨11)
・○○○→12

接合資料-207(第257・258図)

現状で長さ9.8cm、幅8.6cm、厚さ4.2cmを測る扁平礫を石核に用いる。剥片剥離は礫の小口部分を剥離、さらには石核の上下両端で礫面を除去するよう剥離して剥離を進めている。石核は小口部分を後退するよう徐々に小形化する。黒色頁岩。

II 調査の成果

○→1→○→2→3→4→5→6→7→○○→8
⇒9⇒10a⇒10b⇒11⇒○⇒12⇒13

接合資料—143 (第259～261図)

25点よりなる接合資料。高さ9.2cm、幅12.8cm、厚さ11.5cmを測り、石核裏面には礫面を大きく残す。分割線(原石を4分割?)を石核素材に用いる。剥片剥離は正面左側で幅広剥片(1・2・3)を連続剥離したのち、90°の打面転移を行い、剥片4～7を剥離する。以後剥離は基本的に作業面と打面を入れ替え進み、比較的大形の幅広剥片を剥離、拳大程度の大きさまで石核を消費して剥離を終えている。黒色安山岩。

原石の分割

・1→2→3→4→5→6→7→(同一作業面)8
⇒9→10⇒(11→12→13→14)・(15→16→17)⇒
18→19→20→21⇒22⇒23⇒24⇒25

接合資料—155 (第262図)

厚い大形剥片を石核に用いたもの。剥片剥離は石核を全周するよう行われ、石核の最終形状は亀甲状を呈する可能性が高い。剥離面構成の在り方から、接合資料は石核の右側縁(剥片1～5)を中心とする剥離状況を示し、打面と作業面を頻繁に入れ替えて剥片が進む状況が良く分かる。黒色安山岩。

○⇒○○→1→○→2→3→4→5⇒○○⇒6⇒
○○⇒7→8

接合資料—222 (第263図)

3点からなる接合資料。残存する礫面からみて、角柱状を呈す原石の小口部分を打ち欠き打面を作出したのち剥離した、分割線を石核素材に用いたもの。石核は中央付近で大きく二分しており、それぞれで小形・幅広剥片を剥離する。接合資料は、現状で長さ13cmを測る。溶結凝灰岩。

接合資料—221 (第263図)

3点からなる接合資料。左右両面に礫面を残す、柱状を呈する原石を石核に用いたもの。剥片剥離は石核正面、及び、上面で90°の打面転移を繰り返し行われ、小形剥片を剥離する。石核は残存状況からみてさらなる剥離が可能だが、剥離を停止、石核を放

棄している。珪質頁岩。比較的良質だが、脈が縦横に走る。

接合資料—208 (第264図)

4点からなる接合資料。石核上面、及び、右辺に分割面を有するもの。剥片剥離は石核の小口部分で行われ、90°の打面転移を繰り返し小形剥片を剥離する。黒色頁岩。

接合資料—185 (第264図)

4点からなる接合資料。90°打面転移を行い剥片剥離するタイプの接合資料で、3はサイコロ状を呈す典型的な石核形状を示す。黒色安山岩。

接合資料—167 (第265図)

3点からなる接合資料。90°打面転移を行い、小形の幅広剥片を剥離する。黒色安山岩。

接合資料—192 (第265図)

2点からなる接合資料。90°打面転移して小形・幅広剥片を剥離している。石核高は約4cmと脈が発達して剥離が難しい石材の割には、剥離をよく進めた資料と考えている。礫表皮は磨耗度が弱く、露頭から落ちてまもない黒曜石の礫面に類似している。河床採取したチャートの円礫。

接合資料—197 (第265図)

3点からなる接合資料。小形の円礫を分割して石核に用いたもの。剥離は90°打面転移して小形剥片を剥離する。接合資料—192と同様、露頭に近い河床で採取した石材と考えている。チャート。

接合資料—209 (第266図)

6点からなる接合資料。長さ10cm程度の小形の河床礫を石核素材に用い、小口部分から剥離、礫面を除去するよう小形の縦長剥片を剥離している。現状で、接合資料は長さ8.4cm、幅4.8cm、厚さ4.0cmを測る。黒色頁岩。

接合資料—210 (第266図)

2点からなる接合資料。裏面に礫面を大きく残す原石を1/4程度に分割して石核に用い、小形剥片を剥離している。黒色頁岩。

接合資料—158 (第267図)

2点からなる接合資料。裏面に礫面を大きく残す

大形剥片を石核に用い、小形剥片を剥離している。
黒色安山岩。

接合資料—169 (第267図)

2点からなる接合資料。大形剥片を石核に用い、
石核上端側・表裏両面で小形剥片を剥離している。
黒色安山岩。

接合資料—194 (第267図)

2点からなる接合資料。90°打面転移を行い小形剥片を剥離している。石核高は3.6cmで、石核消費の最終段階を示している。チャート。

接合資料—201 (第267図)

厚い剥片を石核に用い、小形剥片を剥離している。石核は最初の小形剥片を剥離した段階で、破損した可能性が高い。チャート。

接合資料—172 (第267図)

2点からなる接合資料。上端の剥離打面から小形剥片を剥離しており、打面は小さい。黒色安山岩。

接合資料—203 (第267図)

2点からなる接合資料。背面に残る剥離面構成は剥離が縦長志向であることを示している。2点とも打点が剥離段階で弾け飛んでいる。なお、剥片2の末端には小剥離痕が見られ、石核に転用した可能性も否定できない。黒色頁岩。

接合資料—151 (第268図)

2点からなる接合資料。上端の平坦打面から連続剥離した剥片の接合資料で、剥片2は剥離段階で破損した可能性が高い。黒色安山岩。

接合資料—168 (第268図)

2点からなる接合資料。裏面に礫面を大きく残す大形剥片を石核に用いたもの。この種の石核は円盤状を呈するようだが、ここでは最終的に上下両端で小形剥片を剥離しており、剥離面構成は著しく変形している。黒色安山岩。

接合資料—152 (第268図)

4点からなる接合資料。裏面に大きく礫面を残す大形剥片を石核に用い、石核上端、及び、右側縁で幅広剥片を剥離している。

接合資料—153 (第269図)

2点からなる接合資料。大形剥片を石核に用い、剥片の左辺で小形剥片を剥離している。黒色安山岩。

接合資料—157 (第269図)

2点からなる接合資料。裏面側に礫面を大きく残す大形剥片の小口部分から剥離を行うタイプの接合資料と捉えている。2は剥離後、石核に転用、小形剥片を剥離している。黒色安山岩。

接合資料—154 (第269図)

2点からなる接合資料。分割礫を石核に用いる。剥離は90°打面転移して、剥離を進めている。黒色安山岩。

接合資料—178 (第270図)

3点からなる接合資料。90°打面転移を行い、剥離を進めており、この段階で生じた大型剥片を石核に転用、小形剥片を剥離している。黒色安山岩。

接合資料—166 (第270図)

5点からなる接合資料。上端の礫面から1の加工石器を剥離したのち、打面転移して剥片2を剥離する。剥片2以下の剥離は不明だが、最終的にはサイコロ状を呈する5が残る。黒色安山岩。

接合資料—187 (第270図)

2点からなる接合資料。大形剥片を石核に用い小形の幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。

接合資料—202 (第271図)

5点からなる接合資料。分割礫を石核に用い打面転移を繰り返し、幅広剥片を剥離する。黒色頁岩。

○→○1→2→3→4→5

接合資料—184 (第272図)

7点からなる接合資料。石核正面・右側で剥片1・2を剥離したのち、打面転移して剥片3を剥離する。石核・裏面側に打面を移し剥離する剥片4と、石核正面で剥離する剥片5以下の剥離順は明確ではない。黒色安山岩。

1→2→3○→4

・5→6→7

接合資料—188 (第273図)

8点からなる接合資料。基本的に、剥離作業は正

II 調査の成果

面、及び、石核上面で行われ、頻繁な打面転移を繰り返して進んでいく。まず、剥離は石核上端で剥片1を剥離したのち、この剥片を剥離した打面を作業面に変え、石核右側に打点を移動、剥片2・3を剥離する。このあと、再び打面を元に戻して上端で剥片を2枚ほど剥離したのち、正面で4～6の剥片を剥離、剥片7・8については打面を右側に移し剥片を連続剥離している。黒色安山岩。

接合資料—214 (第274図)

4点からなる接合資料。分割面を打面に礫表皮を除去したのち、剥片を連続剥離している。黒色頁岩。

接合資料—217 (第274図)

3点からなる接合資料。上端の平坦打面から幅広剥片を剥離、うち1点はナイフ形石器2に加工している。珪質頁岩。

接合資料—193 (第274図)

3点からなる接合資料。打面と作業面を頻繁に入れ替え、幅広剥片を剥離している。チャート。

接合資料—180 (第275図)

3点からなる接合資料。礫表皮を大きく残す剥片の接合資料で、剥離の初期段階を示している。黒色安山岩。

接合資料—159 (第275図)

3点からなる接合資料。剥離の初期資料だが、剥片1と2の間には打面転移が介在している。剥片2以下の剥離は打面を固定して連続する。黒色安山岩。

接合資料—186 (第275図)

2点からなる接合資料。背面に残る剥離面構成は求心的で、打角も鈍い。黒色安山岩。

接合資料—216 (第276図)

2点からなる接合資料。剥離面構成からみて剥離は90°打面転移を行い展開した可能性が高い。珪質頁岩。

接合資料—199 (第276図)

2点からなる接合資料。剥離の初期段階を示す資料だが、剥片は脈の部分から剥れており、剥離実態は明確ではない。接合資料—192・197同様、磨耗度の弱いチャートの内礫を用いている。

接合資料—156 (第276図)

3点からなる接合資料。礫面に側縁に残す剥片を連続剥離しており、より厚い大形剥片を石核に転用している。石核2は、より肉厚な側縁で小形剥片を剥離している。黒色安山岩。

接合資料—225 (第277図)

2点からなる接合資料。背面に残る剥離面構成は90°打面転移を行う剥離実態を示している。剥片1・2は同一打面より連続剥離した幅広剥片である。黒色安山岩。

接合資料—200 (第277図)

2点からなる接合資料。原石を分割してえられた平坦面を石器表面に残し、小形剥片を側縁から剥離したのち、打面転移して幅広剥片を剥離している。チャート。

接合資料—175 (第277図)

2点からなる接合資料。石器表面には広い剥離面を有しており、打点を左右に大きく振る剥離の在り方は求心的剥離を示し、石核は亀甲状を呈するもの、と考えている。黒色安山岩。

接合資料—220 (第277図)

2点からなる接合資料。接合資料は比較的大形で、剥離の初期段階を示している。黒色安山岩。

接合資料—174 (第278図)

2点からなる接合資料。2点とも同一打面から剥離しており、より厚い2は石核に転用、小形剥片を剥離している。黒色安山岩。

接合資料—173 (第278図)

4点からなる接合資料。原石を分割してえた石核の初期段階を示す接合資料。剥片1～3は同時剥離している可能性が高い。黒色安山岩。

接合資料—145 (第278図)

2点からなる接合資料。原石を大きく二分して石核を得て、石核正面・右側の側縁で大形剥片を連続剥離している。黒色安山岩。

接合資料—148 (第279図)

2点からなる接合資料。剥片1・2を上端の平坦打面から連続剥離する。黒色安山岩。

接合資料—147 (第279図)

3点からなる接合資料。剥片には礫面が大きく残り、剥離の初期段階を示している。剥片は3点とも打点が弾け飛んでいる。黒色安山岩。

接合資料—213 (第279図)

2点からなる接合資料。剥離面構成は比較的平坦で、剥離の初期段階を良く示している。小形で薄い1はナイフ形石器に加工、2は剥離段階で打面を欠いている。黒色頁岩。

接合資料—170 (第279図)

3点からなる接合資料。剥片1を下端の礫面を叩き剥離したあと、上端から剥片2・3を剥離する。石核高は約6.5cm、石器表面には原石の分割を示す広い剥離面を残している。黒色安山岩。

接合資料—228・161 (第280図)

2点からなる接合資料。上端の平坦な剥離面からそれぞれ剥片を連続剥離している。黒色安山岩。

接合資料—171 (第280図)

2点からなる接合資料。2点とも端部には平坦面を共有しており、厚い分割線、或は、大形剥片を石核に用い、求心的剥離を行い剥片を剥離したものと理解している。黒色安山岩。

接合資料—190 (第280図)

2点からなる接合資料。2点とも同じ打点から剥離している。礫面を側縁に残しており、それほど磨耗の進んでない礫面の在り方は、これまで紹介してきたチャート製の接合資料に共通する。

接合資料—196・191 (第281図)

2点からなる接合資料。2例とも小形剥片の接合例で、剥離実態は明確ではない。チャート。

接合資料—224・160 (第281図)

2点からなる接合資料。2例とも小形剥片の接合例で、剥離面構成は比較的平坦で、剥離初期の状態を示している。黒色安山岩。

接合資料—140 (第281図)

3点からなる接合資料。3点とも同一打面から剥離している。背面に残る剥離面構成は90°打面転移を行う剥離実態を示唆している。黒色安山岩。

接合資料—195 (第281図)

3点からなる接合資料。原石を二分して剥離を進めており、1・2と3は異なる石核で剥離している。1は表裏両面とも右側縁を加工。2は石核を転用、正面左側・上端を粗く加工している。剥片3は分割面を打面に剥離したものと考えている。チャート。

接合資料—219 (第282図)

2点からなる接合資料。90°打面転移を行い剥離が進む。良質な珪質頁岩を用いる。

接合資料—146 (第282図)

3点からなる接合資料。剥片の左側縁は広い分割面を共有しており、原石の分割後まもない段階の剥片であることを示している。黒色安山岩。

接合資料—218 (第282図)

4点からなる接合資料。接合面が荒れており、熱等を受けて破損した可能性もまったく否定できない。珪質頁岩。

接合資料—182・149・183・162・150・198・205・142・163 (第282・283図)

ここでは横位折断した剥片の接合資料を一括した。チャート製の198を除き、総て黒色安山岩を用いている。

接合資料—229・164・179・141 (第282・283図)

ここでは縦位折断した剥片の接合資料を一括した。4例とも黒色安山岩を用いている。

接合資料—177 (第284図)

2点からなる接合資料。板状剥片の一端で小形の幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。

接合資料—212 (第284図)

3点からなる接合資料。大形剥片に小形剥片1・3が接合するものだが、小形剥片3は大形剥片2に似た剥片を石核に用いて剥離している可能性が想定されよう。黒色頁岩。

接合資料—181・176 (第284図)

横位折断した3点が接合したものと。接合資料は2例とも剥片の打点部や珪晶を基点に破損・接合しており、意図的折断とは異なる。黒色安山岩。

うことになるかもしれない。

1号ブロック (第285・286図)

位 置 調査区西側の丘陵南側斜面 (DW～DY
-115G～118G)

規 模 長径18.5m・短径13.1m

分布状態 ブロック内には3ヶ所ほど石器分布の薄い地点が存在。一般的に、ブロック東側の石器が多く、西側の石器分布が薄い傾向が指摘されよう。

出土層位 X層～XIII層

器種構成 ナイフ形石器1、台形礫石器5、加工痕ある剥片3、使用痕ある剥片3、石核14、剥片108、砕片82、礫2、礫片6

石材構成 黒色安山岩176、チャート18、黒色頁岩15、珪質頁岩6、黒曜石3、褐色碧玉1、玉ずい1、

珪質変質岩1、砂岩1、粗粒安山岩2

その他 ブロック内の石器分布の希薄な地点が3ヶ所ほど存在しており、連結しているよう見える。

2号ブロック (第287・288図)

位 置 調査区西側の丘陵南側斜面 (DY～EC
-118G～120G)

規 模 長径14.1m・短径9.3m

分布状態 石器は北東～南西に弧状分布。

出土層位 X I層～X III層

器種構成 槌器1、削器1、加工痕ある剥片1、使用痕ある剥片1、石核9、剥片59、砕片30、礫3、礫片4

石材構成 黒色安山岩78、チャート19、珪質頁岩6、黒色頁岩1、褐色碧玉1、溶結凝灰岩1、粗粒安山

第35表 ブロック別石材構成 (IV-C地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	硬頁	揚岩	玉ずい	チャート	珪頁	珪変	変玄	砂岩	溶凝	粗安	合計
1号ブロック	176 78.6%	15 6.7%	3 1.3%	0 0.0%	0 0.4%	0 0.4%	18 8.0%	6 2.7%	1 0.4%	0 0.0%	1 0.4%	0 0.0%	2 0.9%	224 100%
2号ブロック	78 71.6%	1 0.9%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.9%	0 0.0%	19 17.4%	6 5.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.9%	3 2.8%	109 100%
3号ブロック	81 64.8%	12 9.6%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	0 0.0%	21 16.8%	5 4.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 2.4%	125 100%
4a号ブロック	46 38.7%	54 45.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.8%	9 7.6%	2 1.7%	1 0.8%	0 0.0%	0 0.0%	5 4.2%	1 0.8%	119 100%
4b号ブロック	6 27.3%	4 18.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	12 54.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	22 100%
5号ブロック	3 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 16.7%	0 0.0%	2 33.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.6%	0 0.0%	6 100%
6号ブロック	6 75.0%	2 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 100%
7号ブロック	16 66.7%	1 4.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 12.5%	3 12.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.2%	24 100%
8号ブロック	5 83.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 16.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6 100%
9号ブロック	18 47.4%	5 13.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	13 34.2%	1 2.6%	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	38 100%
10号ブロック	86 90.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 4.2%	2 2.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 3.2%	95 100%
11号ブロック	8 72.7%	1 9.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 9.1%	1 9.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	11 100%
12号ブロック	6 26.1%	5 21.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	9 39.1%	1 4.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 8.7%	23 100%
13号ブロック	7 63.8%	2 18.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 9.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 9.1%	11 100%
ブロック外	14 40.0%	4 11.4%	2 5.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 22.9%	5 14.3%	0 0.0%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	2 2.9%	35 100%
不明	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100%
合計	556 64.8%	106 12.4%	6 0.7%	1 0.1%	4 0.5%	2 0.2%	121 14.1%	32 3.7%	4 0.5%	1 0.1%	2 0.2%	6 0.7%	17 2.0%	858 100%

II 調査の成果

岩3

その他 1号ブロックと同様な石器分布の希薄な地点が西側に広がる可能性が指摘されよう。微視的には3ヶ所ほど集中部が存在。

3号ブロック (第289・290図)

位置 調査区西側に近い丘陵性台地の南側斜面 (EA~ED-115G~118G)

規模 長径13.6m・短径12.9m

分布状態 石器分布には濃淡が見られ、ブロックの西側に濃く分布する傾向を示している。

出土層位 X I層~X III層

器種構成 ナイフ形石器3、台形楕石器1、加工痕ある剥片2、局部磨製石斧1、石核8、剥片76、碎片31、礫2、礫片1

石材構成 黒色安山岩81、チャート21、黒色頁岩12、珪質頁岩5、黒曜石1、硬質頁岩1、褐色碧玉1、粗粒安山岩3

その他 1号・2号ブロックと同様な石器分布の希薄な地点がブロックの中央に存在する。

4a号ブロック (第291図)

位置 調査区北側に近い丘陵南側斜面 (EE・EF-121・122G)

規模 長径5.3m・短径4.2m

分布状態 集中分布する。

出土層位 X I層~X III層

器種構成 ナイフ形石器2、加工痕ある剥片1、石核9、剥片68、碎片37、礫片2

石材構成 黒色頁岩54、黒色安山岩46、チャート9、溶結凝灰岩5、珪質頁岩2、珪質変質岩1、玉ずい1、粗粒安山岩1

その他 ブロック内には特に石器分布の粗密は見られない。

4b号ブロック (第291図)

位置 調査区北側に近い丘陵南側斜面 (EE-120G)

規模 長径4.8m・短径2.4m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X I層~X II層

器種構成 ナイフ形石器1、石核1、剥片8、碎片12

石材構成 チャート12、黒色安山岩6、黒色頁岩4

その他 1点出土したナイフはチャート製。欠損資料であり、製作途上破損した可能性が高い。

5号ブロック (第291図)

位置 調査区北側に近い丘陵南側斜面 (EH-122G)

規模 長径2.8m・短径1.2m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X I層~X II層

器種構成 ナイフ形石器1、剥片4、碎片1

石材構成 黒色安山岩3、チャート2、褐色碧玉1

その他 小規模ブロックで、組成的にもこの地点では石器製作した痕跡は指摘できない。

6号ブロック (第292図)

位置 調査区東側に近い丘陵南側斜面 (EG-119G)

規模 長径0.6m・短径0.4m

分布状態 点数的には少量だが、分布密度は高い。

出土層位 X I層~X II層

器種構成 剥片4、碎片4

石材構成 黒色安山岩6、黒色頁岩2

その他 X I層から7点が、X II層 (上半) から1点が出土。接合資料も見られないことなどから、この文化層から除外して捉えるべきかもしれない。

7号ブロック (第292図)

位置 調査区東側に近い丘陵南側斜面 (EH・EI-118・119G)

規模 長径4.5m・短径2.2m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X I層~X III層

器種構成 石核2、剥片16、砕片4、礫2
石材構成 黒色安山岩16、チャート3、珪質頁岩3、黒色頁岩1
その他 小規模だが、接合資料を5例確認した。うち、1例は約15m離れた3号ブロックと接合関係を有した。

8号ブロック (第292図)

位置 調査区東側に近い丘陵南側斜面 (EI-118G)
規模 長径2.2m・短径1.3m
分布状態 散漫に分布する。
出土層位 X I層～X II層
器種構成 剥片2、砕片3、礫片1
石材構成 黒色安山岩5、珪質変質岩1
その他 黒色安山岩のみからなり、情報不足で性格は不明だが、少量の剥片生産を試みた地点と理解している。

9号ブロック (第293図)

位置 調査区南東側の丘陵南側斜面 (EF・EG-113・114G)
規模 長径7.1m・短径3.9m
分布状態 散漫に分布する。
出土層位 X I層～X III層
器種構成 ナイフ形石器2、剥片12、砕片22、礫片2
石材構成 黒色安山岩18、チャート13、黒色頁岩5、珪質頁岩1、珪質変質岩1
その他 石器分布は南北に長く、地形的要素を加味して理解するべきかもしれない。

10号ブロック (第293図)

位置 調査区南東側の丘陵南側斜面 (ED・EE-112～114G)
規模 長径9.8m・短径6.2m
分布状態 比較的密集して分布する。
出土層位 X I層～X III層

器種構成 台形様石器1、使用痕ある剥片3、石核3、剥片63、砕片22、礫2、礫片1

石材構成 黒色安山岩86、チャート4、珪質頁岩2、粗粒安山岩3

その他 9号ブロックと同様、石器分布は南北に長く、地形的要素を加味して理解するべきかもしれない。

11号ブロック (第294図)

位置 調査区南側に近い丘陵南側斜面 (EA-110G)
規模 長径3.5m・短径3.0m
分布状態 散漫に分布する。
出土層位 X I層～X III層
器種構成 使用痕ある剥片1、石核1、剥片8、砕片1
石材構成 黒色安山岩8、黒色頁岩1、チャート1、珪質頁岩1
その他 接合資料3例を確認している。

12号ブロック (第294図)

位置 調査区南側の丘陵南側斜面 (DY・EA-111・112G)
規模 長径5.1m・短径4.1m
分布状態 石器の分布密度は北側に濃く、南側に薄い。
出土層位 X I層～X II層
器種構成 加工痕ある剥片1、敲石3、剥片12、砕片4、礫2、礫片1
石材構成 チャート9、黒色安山岩6、黒色頁岩5、珪質頁岩1、粗粒安山岩2
その他 30mほど離れた2・9号ブロックと接合関係を有する。

13号ブロック (第294図)

位置 調査区南側の丘陵斜面 (DX-112・113G)
規模 長径4.4m・短径1.4m

II 調査の成果

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X II層

器種構成 剥片10、礫片1

石材構成 黒色安山岩7、黒色頁岩2、チャート1

その他 約50m離れた5号ブロックと接合関係を有する。

d. 接合資料の分布

接合資料は84例311点を数え、接合率は36.3%に達した。ブロックを跨ぐ接合資料(第295図を参照)も20例を超え、ブロックの同時性を示唆していた。以下には、石材別・ブロック別に見た接合資料の分布について、その概要を記していきたい。

黒色安山岩 53例213点の接合資料を確認した。石器の平均接合点数は4.4点だが、10点を超える接合資料も5例(最も接合点数の多い資料で30点の剥片類が接合)確認している。最も構成点数の多い1号ブロックには15例の接合資料(第296図)が分布、このうち2例(接-155、接-156)がブロック間で接合した。13号ブロックに分布した接-155は剥離初期の剥片1と後半の折断剥片7で、意図的移動を考えてよいかもしれない。ブロック内のみ分布した接合資料は6例(接-141・142・162~164・229)が横位折断剥片や縦位折断剥片であり、また、5例(接-140・157~159・169)が工程的に見て出土資料の中に接合剥片が存在する、接合作業が不十分な資料と理解している。2号ブロックでは12例の接合資料(第296図)が分布、うち4例(接-156・171・174・176)がブロック間で接合している。接-176については接合距離も短く単なる廃棄だが、接-171・174については意図的移動を想定してよいかもしれない。ブロック内の接合資料については接合作業は不充分だが、遺跡内製作の剥片と理解している。3号ブロックには5例の接合資料(第297図)が分布した。ブロック間の接合は1例(接-175)と少ない。この地点には折断剥片(接-172・175・181・183)が多い点の特徴かもしれない。ブロック規模や石器点数など類似性の強い1~3号ブロックの特徴を強いて言えば、折

断剥片が多く接合資料個々の接合点数が少ない、ということになる。

4 a・4 bブロックには3例の接合資料(第297図、接-184・185・187)が分布した。ブロック外にも分布する接-184については、剥片の移動理由が不明だが3例とも分布域が重複しており、典型的な剥片生産の場と理解している。7号ブロックには2例の接合資料(第298図)が分布した。移動理由は不明だが2例(接-186・188)ともブロック外の剥片と接合関係を有している。10号ブロックには6例の接合資料(第298図、接-145~150)が分布した。接合資料は接合点数が少なく、折断剥片も2例(接-149・150)と、少量の剥片生産が想定可能かもしれない。11・12号ブロックには、4例の接合資料(第298図、接-151・153・154・225)が分布した。大形剥片を石核に用い小形剥片を剥離した接合資料を2例(接-151・153)含む点で特徴的である。

第299図には、遠距離接合した黒色安山岩を一括・図示した。接-143・144・165の3例については剥離地点の特定が可能で、接-143・144は10号ブロック、接-165は1号ブロックで剥片生産した可能性が高い。残る2例(接-152・166)については明確な剥片の移動理由が判断できない。

黒色頁岩 12例52点の接合資料を確認した。石器の平均接合点数は4.3点だが、10点を超える接合資料は1例と少ない。石器群に占める黒色頁岩の割合は少なく、接合資料も分散的で、1号ブロック(接-202・203)や7号ブロック(接-208)に剥離の部分的工程を示す接合資料が分布した程度である。

4 aブロックには7例の接合資料(第300図、接-207・209・210~214)が分布した。接-207・209・210は概ね剥離の全工程を、接-211~213は剥離の初期工程を示していた。

チャート 12例27点の接合資料を確認した。石器の平均接合点数は2.2点と少ない。4例(第301図、接-190・191・195・200)がブロック間の接合で1/3を占め特異な在り方だが、剥片形状その他の特徴がブロック内で接合する資料と大きく相違するとい

わけではなく、剥片が分散出土する理由については現状では理解できない。

その他の石材 珪質頁岩を用いた石器の接合資料を6例16点、同じく溶結凝灰岩を用いた接合資料を1例3点(第301図)を確認した。

珪質頁岩製接合資料は90°打面転移を伴い剥片生産を行うタイプと、平坦打面から幅広剥片を連続剥離するタイプが見られ、剥片を数枚剥離した程度の接合資料と理解している。点数的には、2号ブロックが石材消費の中心ということになろう。3ヶ所のブロックに分布した接-2I7については、剥片の剥離地点が現状では特定できない。

3点が接合した溶結凝灰岩については、このほかにも4aブロックに2点が、2号ブロックに1点が分布、4aブロックを石材消費の中心と考えてほぼ間違いないだろう。

(4) その他の地点

第IV文化層の石器群は地点間相互の関係が不明確であるため、ここでは地点単位に概要を示し、記述していきたい。

<第1地点>

石器は、丘陵鞍部に近い南西側斜面に分布(付図1を参照)した。この地点の上層には第III文化層・第1地点の石器群が重複しており、石器の出土層位(XII層)が著しく異なること、石器石材も全く異なることから文化層を分離して捉えた。

石器はチャート製の小形剥片(第302図1)で、切出に近い剥片形状を示している。背面側中央には広い分割面を有している。打面と剥片端部の剥離面は概ね平行しており、板状石核から剥離した剥片と理解している。

<第2地点>

丘陵頂部からやや西側に降りた斜面部に位置する。第3・第4地点とは約10m離れており、地点間関係については明確ではない。

出土した石器は2点とも縦長剥片で、1点(第302図2)は珪質頁岩製、1点(同3)は赤碧玉製と異なる石材を使用している。2点のみ出土しており、他の地点で製作した上で石器を持ち込んでいる可能性が高い。

<第3地点>

第2地点同様、丘陵の西側斜面に位置している。隣接する第4地点とは2mの未調査地を挟んでいるのにすぎない。

出土した石器は3点で、2点が剥片・1点が礫である。剥片は2点とも幅広剥片だが、1点が砂岩(第302図4)、1点が黒色頁岩(同5)で、地点内には剥離痕跡は見られない。3点ともXII層の出土。

<第4地点>

第3地点同様、丘陵の西側斜面に位置した。1点のみ単独出土した。この地点の東側や南側は試掘の密度が薄く、当該期石器群が存在した可能性も否定できない。

石器は黒色頁岩製縦長剥片(第303図1)で、広い平坦打面を有している。側縁には「刃こぼれ」が連続している。

<第5地点>

a. 概要

鞍部に近い丘陵平坦部に位置している。石器群は長径6m・短径3m程の範囲に広がり、礫2点を含む32点の石器が出土、石器ブロックを2ヶ所で確認した。

石器の出土層位はIX層から1点、X層から3点、XI層から9点、XII層から18点、XIII層から1点が出土した。

石器石材は黒色安山岩が最も多く26点が出土、続

II 調査の結果

いて珪質頁岩2点、砂岩1点、チャート1点が出土（礫を除く）している。

接合資料は4例を確認している。

b. 出土石器

32点の石器（礫2点を含む）が出土した。石核・剥片類主体の石器群で、定形石器は見られない。剥片の出土量が多く、石核も20%近く組成、接合資料も4例を確認した割には砕片の出土量（1点）が極めて少なく、調査精度に疑問を感じている。

加工痕ある剥片（第303図2・3）

2点を図示した。第303図2は、チャート製の小形・幅広剥片を用い、剥片端部を加工したものの。調整加工は粗く、剥片の表裏両面を交互剥離して刃部を作出している。2号ブロック出土。3は、小形剥片を用い、側縁を加工したものの。背面側・左側縁の加工は微細であり、「刃こぼれ」に近い。裏面側・左側縁の加工は組織的ではなく、加工目的については判断できない。砂岩。2号ブロック出土。

使用痕ある剥片（第303図4）

1点のみ出土した。第303図4は台形状を呈する幅広剥片を用いたもの。右側縁、及び、剥片端部に微細な使用痕が生じている。2号ブロック出土。珪晶の抜けた小穴が特徴的な黒色安山岩を用いる。

剥片類（第303図5・6～第305図1）

18点が出土している。比較的形状の整った剥片や石材から搬入石器（剥片）が存在する。

第303図5は、小形の幅広剥片。剥片端部を剥離の段階で欠いている。2号ブロック出土。黒色安山岩。6は、剥片端部に礫面を残す縦長剥片。頭部調整が著しい。1号ブロック出土。第303図4に似た特徴的な黒色安山岩を用いる。搬入石器。

第304図1～3は、幅広の小形剥片。1・2は2号ブロック、3は1号ブロックの出土。3点とも黒色安山岩。4は剥片端部を欠いた幅広剥片。裏面側・側縁を粗く打ち欠いており、加工痕ある剥片I分類可能かもしれない。ブロック外。珪質頁岩。5は、側縁に礫面を大きく残した剥片。1号ブロック出土。

脈が縦横に走る珪化の進んだ珪質頁岩を用いる。4・5とも搬入石器。6は、側縁に大きく礫面を残す縦長剥片。背面構成よりみて90°の打面転移を行い作出。2号ブロック出土。珪晶の抜けた小穴の多い黒色安山岩。搬入石器。

第305図1は、礫面を大きく残す小形剥片。端部を剥離段階に破損。2号ブロック出土。黒色安山岩。石核（第305図2・3）

第305図2は、剥離段階に生じた厚い幅広剥片を石核に転用したものの。剥離は頻繁な打面転移を繰り返して行われ、小形剥片を剥離する。2号ブロック出土。黒色安山岩。3は、裏面に礫面を大きく残した石核。剥片剥離は上面の平坦剥離面、及び、裏面側の礫面を打面から行われ、小形剥片を剥離している。1号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料

接合資料は4例6点（第323図）を確認している。基本的に、剥片剥離は90°打面転移を行い小形剥片を剥離するものだが、剥離作業を進める中でも適当な大形剥片を選択的に石核に転用している。

接合資料-53は、剥離段階で縦位に破損した剥片の接合資料。黒色安山岩。接合資料-55は、分割礫、或は、厚い大形剥片を石核に用いたもの。剥片剥離は裏面側の平坦面でも行われ、幅広剥片を剥離している。石核は正面で小形剥片を剥離した時点で破損している。黒色安山岩。接合資料-54は、厚い大形剥片を石核に用いたもの。剥片剥離は表裏両面で行われ、幅広剥片を剥離する。石核2は剥片1を剥離した後も、作業面を打面に入れ替え剥片を剥離している。黒色安山岩。接合資料-223は、石核1・剥片1からなる接合資料。剥片剥離は上面の礫面から打点を大きく左右に振り小形剥片を剥離している。黒色安山岩。

c. 石器と礫の分布

石器群は丘陵東の沖積地から入り込んだ浅い谷を臨む、丘陵頂部に近い平坦地に分布した。石器は長径6m・短径3m程の範囲に広がり、2ヶ所の石器ブロックを確認している。同段階の石器群から50m以上も離れており、孤立気味である。

1号ブロック (第334図)

位置 東側から入り込んだ谷に臨んだ丘陵斜面 (DS-163G)

規模 長径2.0m・短径1.6m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X I層～X II層

出土点数 8点

器種構成 石核1、剥片7

石材構成 黒色安山岩7、珩質頁岩1

その他 接合資料1例を確認している。

2号ブロック (第334図)

位置 東側から入り込んだ谷に臨んだ丘陵斜面 (DT-162G)

規模 長径3.5m・短径1.7m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX層～X III層

出土点数 19点

器種構成 加工痕ある剥片3、使用痕ある剥片1、石核5、剥片9、礫1

石材構成 黒色安山岩16、チャート1、砂岩1、雲母石英片岩1

その他 出土層位はIX層～X III層だが、石器はX II層から10点と最も多く出土している。

d. 接合資料の分布

接合作業の結果、4例6点の接合資料を確認した。基本的には、接合資料はブロック内で接合しており、現状ではブロック間の接合は見られない。

母岩分類が難しく剥離実態は不明だが、出土石器の項でも述べた通り、石器には搬入石器が見られ、また、接合資料が存在することから少量の剥片生産を行う程度にはこの地点を利用した、ということに

なる。

〈第6地点〉

丘陵東側の沖積地から入り込んだ浅い谷に臨んだ丘陵南側斜面に位置している。北側の第7地点とは約30m、南側の第5地点とは50mほど離れている。石器は7点が出土、散漫なブロックを形成していた。石器は総て黒色安山岩で、X II層から出土した。

石器群は石核・剥片主体で、加工石器は1点と少ない。第305図4は、側縁に稜面を残した剥片。背面に残る剥離面構成からみて、剥片は90°打面転移を行い剥離した可能性が高い。黒色安山岩。

接合資料は3例6点(第324図)を確認した。3例とも横位折断した剥片の接合例で、接-58は側縁の加工段階で破損した加工痕ある剥片、接-56は同じく横位折断した大形剥片の側縁から剥離を試みしており、剥離意図は不明だが、ここでは便宜的に石核と理解した。

石器ブロック(第334図)は長径2.7m・短径1.5mの範囲に広がり、散漫な分布状態を示していた。7点中6点が接合関係を有するということになり、少なくともこの地点には剥離作業の痕跡は指摘できない。

〈第7地点〉

a. 概要

調査区北側の丘陵南側斜面に位置しており、東側の第8地点とは10mほど離れている。石器は総計27点が出土、3ヶ所のブロックを形成して散漫に分布した。石器は黒色頁岩が11点(40.7%)と最も多く出土しており、続いて黒色安山岩8点、珩質頁岩5点、粗粒安山岩3点が組成している。石器の出土層位はX層～X II層だが、大部分がX II層の出土と考えてよい。

II 調査の成果

b. 出土石器

石器群は剥片類主体の組成を示しており、ナイフその他の定形石器は見られない。

剥片類 (第306図、第307図1～5)

縦長剥片を含む剥片類が、21点が出土している。第306図1～4には、縦長剥片の類を一括した。4点とも平坦剥離面を打面に剥離している。背面に残る剥離面構成は基本的に剥片の剥離方向に一致しており、打面調整・頭部調整を施さず剥離する在り方も類似する。1は6号ブロック、2は4号ブロック、3・4は5号ブロック出土。1・2は黒色頁岩。3・4は黒色安山岩。第307図1も、同じく黒色頁岩製縦長剥片。背面・右側縁側が熱を受け剥れている。5号ブロック出土。黒色頁岩。

第307図2～4は、珪質頁岩製幅広剥片。石材感が極めて類似しており、同一母岩と捉えている。2の剥片端部には粗い小剥離痕が連続しており、加工痕ある剥片に分類可能かもしれない。3点とも5号ブロックの出土。5は、風化の激しい厚い幅広剥片。打面部を剥離の衝撃で欠いている。同じく5号ブロックの出土。黒色頁岩。

接合資料

接合資料は2例5点を確認した。接-51(第324図)は横位折断した大形の幅広剥片。接合部は比較的新鮮で、取り上げ時に破損した可能性が高い。5号ブロック出土。黒色頁岩。接-52(第324図)は剥片3点の接合例だが、熱で破損した可能性が強く、本来的に単なる剥片が明確には判断できない。5号ブロック出土。黒色頁岩。

c. 石器と礫の分布

27点の石器が3ヶ所のブロックを形成して分布(第335図)した。各ブロックは傾斜に直交して並んでおり、規模的には中央に位置した5号ブロックが最も大きい。

4号ブロック (第335図)

位置 調査区北側に近い丘陵南側斜面 (ED-189G)

規模 長径1.2m・短径0.8m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X I層～X II層

出土点数 4点

器種構成 剥片4

石材構成 黒色安山岩3、黒色頁岩1

5号ブロック (第335図)

位置 調査区北側に近い丘陵南側斜面 (EE-188G)

規模 長径4.1m・短径2.2m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X層～X II層

出土点数 19点

器種構成 石核1、剥片15、碎片2、礫1

石材構成 黒色頁岩9、珪質頁岩5、黒色安山岩4、粗粒安山岩1

その他 接合資料2例を確認している。

6号ブロック (第335図)

位置 調査区北側に近い丘陵南側斜面 (EE-187G)

規模 長径1.6m・短径0.8m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X層～X II層

出土点数 3点

器種構成 剥片2、礫1

石材構成 黒色安山岩1、黒色頁岩1、粗粒安山岩1

d. 接合資料の分布

既に述べた通り、接合資料は2例5点と少ない。5号ブロックを除いて、各ブロックの構成点数は少なく、剥片生産の痕跡は全く見られない。5号ブロックの接合資料も受熱剥片剥離の接合で、剥片生産の実態は明確ではない。ただ、5号ブロックに出土した珪質頁岩5点は同一母岩に分類が可能で、剥片を少量剥離した程度の指摘は可能かもしれない。

〈第8地点〉

調査区北側に近い丘陵南側斜面に位置した。石器群は径3m程の範囲に散漫に分布、石器ブロック1ヶ所を確認した。石器の出土層位はXII層で、石器類については黒色頁岩を用いていた。

出土した石器は石核1、剥片2、礫1、礫片1で、ここでは剥片1（第305図5）、及び、接合資料1例（第324図）を図示した。305図5は、黒色頁岩製の剥片。石器表面の風化が著しく、剥落が激しい。接—50は石核1、剥片1からなる接合資料。分割礫、或は、厚い大形剥片を石核に用い、平坦な分割面、及び、石核の小口部分で剥離を行い、小形剥片を剥離している。

認定したブロック（8号ブロック）は1ヶ所で、石器は長径2.5m・短径1.0m程の範囲に散漫に分布した。

〈第9地点〉

a. 概要

第9地点出土の石器群は、尾根状丘陵が東側に張り出した南側斜面に位置している。付近には10m程の距離を隔てて第10～12地点出土の石器群が分布している。石器群は径9m程の範囲に広がり、礫1点を含む42点の石器が出土、石器ブロック3ヶ所を確認した。出土石器は剥片類が主体であり、定形石器が見られない点は特徴的である。

石器の出土層位はX層～XII層で、XII層に最も多く出土した。

石器石材は黒色安山岩が最も多く33点が出土、続いて黒色頁岩5点、珉質頁岩3点、粗粒安山岩1点が出土している。

接合資料は5例21点を確認している。

b. 出土石器

礫1点を含む42点の石器が出土した。剥片類が主体の石器群で、定形石器は見られない。剥片に比べて碎片の出土量が少ない点は気掛かりだが、少量の剥片生産を行う剥離の在り方は理解できよう。

剥片（第307図7、第308図1～4）

剥片は26点が出土している。そのうちここでは比較的剥片形状の整った剥片5点を図示した。

第307図7は、礫面を大きく残した厚い縦長剥片。右側縁には大きな平坦剥離面を残しており、原石を分割剥離した剥片であることが分かる。ブロック外。黒色頁岩。

第308図1は、剥片下部を欠損した大形の幅広剥片。剥離面に残る剥離面構成からみて、頻りに打面転移を行い剥離した剥片であるということが容易に分かる。ブロック外。黒色安山岩。2は、剥片端部に広い平坦剥離面を取り込んで剥離した小形剥片。剥片形状は三角形を呈する。10号ブロック出土。黒色安山岩。3・4は、礫面を大きく残す幅広剥片。3に比べ4の断面は厚く、打面も剥離段階で弾け飛んでいる。3は9号ブロック、4は10号ブロック出土。2点とも黒色安山岩を用いる。

石核（第307図6）

1点（第307図6）を図示した。この石核は厚い大形剥片を石核に用いたもので、石核の表裏両面でも小形剥片を剥離、剥離途中で破損した可能性が高い。8号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料

既に述べた通り、この地点では5例21点の接合資料を確認した。接合資料には大形剥片を剥離して石核に用いるもの（接—63）や、90°打面転移を繰り返して剥片を剥離するもの（接—64）が見られ、暗色帯から出土する石器群が持つ典型的な剥片剥離の様相を示していた。

接合資料—63（第325図）

6点からなる接合資料。大形剥片を剥離したのち、より厚い剥片を石核に用いて小形剥片を剥離する。小形剥片の剥離は厚い打面側の背面で行われ、打点を左右に振り後退するよう剥離を進めている。黒色安山岩。

接合資料—65（第325図）

3点の折断剥片からなる接合資料。折断が意図的破砕か不明だが、出土資料には類似母岩さえなく、

II 調査の成果

少なくとも剥離段階に生じた偶発的破損ではない、と考えている。良質だが、脈が縦横に走る珪質頁岩を用いている。

接合資料—61 (第325図)

2点からなる接合資料。横断した2点の幅広剥片が接合している。点数的にも遺跡内で剥離したとはいえない。黒色頁岩。

接合資料—64 (第326図)

5点からなる接合資料。90°打面転移を繰り返して、幅広剥片を剥離している。黒色安山岩。

接合資料—62 (第326図)

3点からなる接合資料。礫面に剥片端部に残しており、また、剥片2の右側縁側には平坦な剥離面が見られ、原石を分割・剥離を開始してまもない段階の剥片と理解している。黒色安山岩。

c. 石器と礫の分布

この地点には、42点の石器が3ヶ所のブロックを形成して分布した。概して、各ブロックの石器分布は散漫である。

8号ブロック (第336図)

位置 調査区北側に近い尾根状丘陵の南側斜面 (FD・FE-181G)

規模 長径1.2m・短径0.8m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X層～XII層

出土点数 9点

器種構成 石核1、剥片6、砕片2

石材構成 黒色頁岩4、珪質頁岩3、黒色安山岩2

その他 接合資料2例を確認した。

9号ブロック (第336図)

位置 調査区北側に近い尾根状丘陵の南側斜面 (FF-181G)

規模 長径2.4m・短径0.6m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X層～XII層

出土点数 7点

器種構成 石核1、剥片5、砕片1

石材構成 黒色安山岩7

その他 接合資料2例を確認した。

10号ブロック (第336図)

位置 調査区北側に近い尾根状丘陵の南側斜面 (FE-179G)

規模 長径3.4m・短径1.6m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X層～XII層

出土点数 14点

器種構成 剥片10、砕片4

石材構成 黒色安山岩14

その他 接合資料2例を確認した。

d. 接合資料の分布

確認した5例21点の接合資料は、1例(接-64)を除いてブロック内で接合した。ブロック間で接合した資料は6点(取り上げ点数)が10号ブロック、1点が9号ブロック(剥片3の剥片端部)の出土で、9号ブロックの1点が大形と言えれば大形だが、9号ブロックに移動した理由は明確にはできない。接-63が9号ブロックに、接-64が10号ブロックに分布、剥離も密着には異なるわけだが、母岩は全く異なり、両地点で異なる母岩を部分的に剥離した、と現状では捉えている。

<第10地点>

a. 概要

第10地点の石器群は第9地点の東側に位置した石器群で、東側に張り出した尾根状丘陵の南側斜面に分布した。石器群は東西8m・南北4mの範囲に広がり、17点の石器が出土した。石器ブロックは第9地点と同様に3ヶ所で確認している。

石器の出土層位は、11号ブロックの1点を除いて総てXII層から出土した。

石器石材は、黒色頁岩が最も多く9点が出土している。周辺石器群の主体を占めた黒色安山岩は3点と少なく、このほかには砂質頁岩、ホルンフェルス、チャート各1点が出土している。

接合資料については、現状では確認できていない。

b. 出土石器

燧片2点を含む17点の石器が出土した。剥片類主体の石器群で、定形石器は見られない。

剥片 (第308図5～8、309図1・2)

剥片類は9点が出土している。第308図5・6は、剥離段階に縦位破損したもので、5はホルンフェルス製で、13号ブロック出土。6は12号ブロック出土。燧面に側縁に残した黒色安山岩を用いている。7は、良質なチャートを用いた縦長剥片。唯一のチャート製の石器であり、搬入石器と捉えている。12号ブロック出土。8は、燧面を大きく残す黒色頁岩製幅広剥片。ブロック外。

第309図1は、燧面を剥片端部に残した幅広剥片。背面に残る剥離面構成からみて、打点を大きく左右に振り剥離を進め、同種形状の剥片を連続剥離したものと考えている。12号ブロック出土。黒色安山岩。2は、燧面から剥離した幅広剥片。剥片端部に広い剥離面を有することから、原石を分割した石核から剥離した初期剥片と捉えている。ブロック外。黒色頁岩。

石核 (第309図3・4)

石核は2点出土した。第309図3は、大形剥片を石核に用いたもの。大形剥片の裏面側・打面付近で小形剥片を剥離しているようにも見えたため、便宜的に石核と捉えた。この小剥離痕については、剥離段階の衝撃で生じた可能性も否定できない。12号ブロック出土。黒色頁岩。4は、厚い大形剥片を用い小口部分で小形剥片を剥離したもの。風化が激しい。13号ブロック出土。砂質頁岩。

c. 石器と礫の分布

17点の石器が3ヶ所のブロックを形成して分布した。各ブロックの石器分布は概して散漫な様相を呈していた。

11号ブロック (第336図)

位 置 調査区北側に近い尾根状丘陵の南側斜面

(FG-178G)

規 模 長径1.4m・短径1.1m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X層～XII層

出土点数 4点

器種構成 剥片2、砕片2

石材構成 黒色頁岩4

12号ブロック (第336図)

位 置 調査区北側に近い尾根状丘陵の南側斜面

(FH-178G)

規 模 長径1.6m・短径0.6m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 XII層

出土点数 5点

器種構成 石核1、剥片3、砕片1

石材構成 黒色安山岩2、黒色頁岩2、チャート1

13号ブロック (第336図)

位 置 調査区北側に近い尾根状丘陵の南側斜面

(FI-178G)

規 模 長径1.0m・短径0.3m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 XII層

出土点数 3点

器種構成 石核1、剥片2

石材構成 黒色頁岩1、砂質頁岩1、ホルンフェルス1

〈第11地点〉

a. 概 要

第11地点出土の石器群は第10・12地点の北側に位置した石器群で、東側に張り出した尾根状丘陵の南側斜面に分布した。石器群は東西11m・南北7mの範囲に広がり、31点の石器が出土した。石器ブロックは第9・10地点と同様に3ヶ所で確認した。調査区の最も北側に位置する石器群で、石器群は調査区・北の丘陵へ確実に延びている。

石器の出土層位は、IX層から1点、X層から3点、XII層から27点が出土した。

II 調査の成果

石器石材は黒色安山岩が最も多く24点が出土、続いて黒色頁岩3点、チャート2点、珪質頁岩1点が出土している。

接合資料については、2例5点を確認している。

b. 出土石器

剥片類を主体に31点(礫1点を含む)石器が出土した。ここでは、比較的大形の剥片類を選択したうえで図示した。

加工痕ある剥片(第309図5)

礫面を大きく残した大形剥片を用いたもの。剥片の裏面側・右側縁に浅い剥離を施す。この剥離意図については不明だが、やや内湾気味の剥片端部を刃部としたものと推定されよう。14号ブロック出土。黒色安山岩。

剥片(第310図1~4)

4点を図示した。第310図1は、比較的先端の尖る幅広剥片。背面中央に広い平坦剥離面を有していることから分割礫より剥離した初期剥片と捉えている。16号ブロック出土。黒色頁岩。2は、小形の幅広剥片。ハルブを裏裏両面に有する剥片に見える。15号ブロック出土。黒色安山岩。3は、厚い幅広剥片。剥離段階に剥片端部を欠損している。15号ブロック出土。黒色安山岩。4は、幅広の大形剥片。剥片端部に広い平坦剥離面を有しており、原石を分割して剥離したもの、と捉えている。16号ブロック。黒色安山岩。

接合資料

2例5点を確認した。2例とも剥片2点からなる接合資料だが、母岩的には全く異なる。

接合資料—59(第327図)

2点からなる接合資料。礫面の残存状況、及び、背面に残る剥離面構成からみて、原石を分割した石核から幅広剥片を連続剥離したもの、と考えている。15号ブロック出土。やや風化の進んだ黒色安山岩を用いる。

接合資料—60(第327図)

3点からなる接合資料。剥離面構成からみて、90°

打面転移を行う剥片剥離が想定可能だが、接合資料を前後する時点ではある程度連続的に同一打面から小形剥片を剥離していたもの、と理解している。14号ブロック出土。珪晶の抜けた小穴の目立つ黒色安山岩を用いている。

c. 石器と礫の分布

31点の石器が3ヶ所のブロックを形成して分布した。各ブロックの石器分布は概して散漫な様相を呈していた。

14号ブロック(第337図)

位置 調査区北側の尾根状丘陵の南側斜面(FJ・FK—181G)

規模 長径5.7m・短径(1.7)m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X層~XII層

出土点数 13点

器種構成 加工痕ある剥片1、剥片6、砕片5、礫1

石材構成 黒色安山岩12、チャート1

その他 1点のみX層から出土、残る11点はXII層から出土している。接合資料1例確認している。厳密な出土位置は不明だがこのブロックでは黒曜石、及び、チャート製の砕片、各1点が出土している。

15号ブロック(第337図)

位置 調査区北側の尾根状丘陵の南側斜面(FJ・FK—180G)

規模 長径3.1m・短径2.0m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 XII層

出土点数 10点

器種構成 剥片7、砕片3

石材構成 黒色安山岩10

その他 1点のみX層から出土、残る9点はXII層から出土している。接合資料1例を確認した。

16号ブロック(第337図)

位置 調査区北側の尾根状丘陵の南側斜面(FK

-179G)

規 模 長径3.1m・短径1.1m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX層～XII層

出土点数 6点

器種構成 剥片2、碎片4

石材構成 黒色安山岩2、黒色頁岩3、珪質頁岩1

その他 14号・15号ブロックとは石材構成、及び、器種組成が異なり、剥片生産の頻度は低い。

d. 石器と礫の分布

接合作業の結果、2例5点の接合資料を確認した。2例ともブロック内の接合だが、各ブロックは剥片類が主体を占め、接合点数から受ける印象以上に剥片を剝離していた可能性が高い。現状ではブロック間の接合は確認できない。

〈第12地点〉

第12地点の石器群は第10地点の東側に位置した石器群で、東側に張り出した尾根状丘陵の南側斜面に分布した。3点のみ出土した石器群で、分布範囲も5m程と狭い。石器の出土層位は2点がX層から、1点がX I層から出土しており、周辺石器群がX II層から出土する状況とは異なる。現状では接合関係が見られないこと、母岩の共有関係も確認できないことから、文化層分離の可能性のみ指摘しておく。石器石材は黒色頁岩2点、珪質頁岩1点からなる。

第311図1は、やや幅広い小形剥片。剥片端部に広い平坦剝離面（この部分のみ鉄分が付着・変色している、原石段階のヒビ割れ？）を有していることからみて、分割礫、或は、大形剥片を石核に用いて剝離した剥片と理解できよう。黒色頁岩。2は、90°打面転移を行い剝離した小形剥片。風化が激しい。黒色頁岩。3は、右側縁を粗く加工したもの。器体下部を欠き、形状は不明だが、小形の縦長剥片を用い、側縁加工した削器の類と考えている。やや青味を帯びた珪質頁岩を用いている。

〈第13地点〉

東側から入り込んだ浅い谷に臨んだ丘陵東側斜面に位置する。石器は1点（第310図5）のみX II層から出土した。

出土した石器は小形の削片様剥片。背面構成から見る限り、上下両端に打面を有する高さ5cm程度の石核が想定可能で、剝離途上に得た大形剥片を石核に転用、側面から剥片を剝離した可能性が高い。黒色安山岩。

〈第14地点〉

東側から入り込んだ浅い谷に臨んだ丘陵東側斜面に位置する。北側に位置する第13地点とは約15m離れている。石器は7点が出土、散漫なブロック（17号ブロック、第337図を参照）を形成していた。石器の出土層位はX I層～X II層で、約20cmの高低差を以って出土した。

石器群は石核、剥片類が主体で、加工石器の出土は見られない。第312図1～3には、剥片類を図示した。背面に残る剝離面構成は3点とも90°の打面転移を行い剝離が進んだことを示しており、母岩の特徴も類似している。黒色安山岩。4は、サイコロ状を呈する石核。石核正面下端には広い平坦剝離面を有している。黒色安山岩。

石器ブロック（第337図）は長径2.2m・短径1.6mの範囲に広がり、散漫な分布状態を示していた。

〈第15地点〉

東側から入り込む谷に臨んだ丘陵東側斜面に位置（付図1）する。石器は1点（第311図4）のみ出土した。

第311図4は、完成度の高い押圧剝離を施し石器を作出したのち、表裏両面とも器体中央付近を研磨したもの。石器下半部を欠損するため詳細は不明だが、石器の側縁形状は縄文期石鐮の直線的形状とは異なり、緩く弧を描いてポイント的である。先端付近の加工も特徴的で、微細に加工して意図的にノッチ状の先端を作出している。その断面形状は刺突具特有

II 調査の成果

の断面形状——通常、石鏃は衝撃に耐えるよう配慮して先端部は菱形に近い断面形状を示す——とは異なり、衝撃には弱い構造的特徴を示していた。

ここでは、出土石器を便宜的に「両面加工石器」と捉えたわけだが、調査所見の通り、As-BPより下位のX I層から出土したものなら、周知の旧石器石器群に加わる未知の石器ということになろう。

類似資料が確認できないため断定は困難だが、所見の通り出土層位を認定することができるだろうか。この石器に関する調査所見はX I層というだけで、調査時に石器の重要性を認めていたというわけではなく、あとから気付いたようだ。詳細を写真から判断するのは難しく、レベル的にはX I層に相当するということが分かる程度である。さて、この地点のローム層だが、写真にも示した通り、ローム層の堆積状況は極めて悪く、V層（縄文包含層）下部からX I層の上面まで20cm（実測図1/20の記載から判断）と極めて薄い。仮に、縮尺が1/40と見ても40cmしかなく、動・植物の土壌攪乱等の影響で石器が上層から混入したのではないかとという可能性も全く否定できない。

次に石器だが、押圧剝離と研磨という技術的特徴から、一瞥して局部磨製石鏃が相似する石器として指摘されよう。が、しかし技術的に類似しているということを理由に磨製石鏃と判断するのは難しい。さきにも述べた通り、出土石器には刺突具として欠かせない衝撃に耐える石器先端部を作出する意図が見られないからである。

ポイント的な側縁を有するという点では、草創期の有茎尖頭器が想定可能かもしれない。それも長身の小瀬ヶ沢タイプでなく、幅広・短身の柳又タイプである。しかしながら、この想定も先端部を与えるべき刺突具としての先端部がないということで、単なる見た目の類似ということになろう。

出土石器は、結論的には縄文の石器ということになるが、さしたる根拠があるわけではない。ただ、表裏両面を研磨しているということを重視するならば、製作時というより使用時に破損したとみるのが



ローム層の堆積状態(第15地点、石器は暗色帯より上のX I層一下から3層目一に出土した。最上層は縄文包含層・V層)

妥当である。先端部の小剝離が磨耗しているよう見えるのも、この推定を支持している。石器先端部の衝撃耐久性を踏まえれば、石器は未製品でも再生品でもなく、当初から意図して製作した石器ということになろう。

〈第16地点〉

丘陵の東側斜面に位置（付図1）する。位置的には調査区の最も東側に位置する地点である。

出土した石器は1点で、大形の縦長剥片(第311図5)が出土している。背面構成からみた打点の振り幅は小さく、組織的な石刃の連続剝離が想定可能かもしれない。黒色頁岩。

〈第17地点〉

第16地点同様、丘陵の東側斜面に位置（付図1）する。石器は剥片が1点(第313図1)のみ、X II層から出土している。剥片は打面、及び、側縁に礫面を残しており、概して幅広である。黒色頁岩。

〈第18地点〉

丘陵の東側斜面に位置（付図1）する。石器は台形様石器（第313図2）が1点のみ出土している。

石器は断面・三角形を呈する厚い横長剥片を用い、打面部、及び、対向する剥片端部を加工したものの。石器・先端側の左側縁を調査時に欠損するため不明だが、石器先端や石器基部は加工することなく剥片形状を巧く利用している。珪化の進んだ黒色頁岩を用いている。X II層の出土。

〈第19地点〉

谷の北側に位置した第13～15地点とは対照的に谷の南側に位置（第344図）する。地形的には北東側に傾斜している。出土した石器は2点で、1点が風化の進んだ黒色頁岩製大形剥片（第312図5）、1点（同図6）が礫面を残す大形剥片を石核に用い剥離した小形剥片。剥片2は剥離時に縦位破損した可能性が強い。黒色安山岩。2点ともX II層から出土している。

第36表 ブロック別器種構成1（IV-1～20地点）

	ナイフ	台形様	加工痕	使用痕	両面加工	局磨	巖石	石核	縦長	剥片	砕片	礫	礫片	合計
第1地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
第2地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
第3地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	3
第4地点	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
第5地点（1号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	1	1	6	0	0	0	8
（2号ブロック）	0	0	3	1	0	0	0	5	0	9	0	1	0	19
ブロック外	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	1	0	5
合計	0	0	3	1	0	0	0	6	1	18	1	2	0	32
第6地点（3号ブロック）	0	0	1	0	0	0	0	2	0	4	0	0	0	7
第7地点（4号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	4
（5号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	1	1	14	2	1	0	19
（6号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	3
ブロック外	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
合計	0	0	0	0	0	0	0	1	3	18	2	3	0	27
第8地点（7号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	1	0	4
ブロック外	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
合計	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	1	1	5
第9地点（8号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	1	0	6	2	0	0	9
（9号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	1	0	0	7
（10号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	4	0	0	14
ブロック外	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5	1	0	11
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計	0	0	0	0	0	0	0	2	0	26	13	1	0	42
第10地点（11号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	4
（12号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	0	0	5
（13号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	3
ブロック外	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	4
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計	0	0	0	0	0	0	0	2	1	8	4	0	2	17
第11地点（14号ブロック）	0	0	1	0	0	0	0	0	0	6	5	1	0	13
（15号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	3	0	0	10
（16号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0	0	6
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
合計	0	0	1	0	0	0	0	0	0	15	14	1	0	31
第12地点	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3
第13地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
第14地点（17号ブロック）	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	1	0	0	7
第15地点	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第16地点	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
第17地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
第18地点	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第19地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
第20地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1

II 調査の成果

〈第20地点〉

丘陵の東側斜面に位置(付図1)する。400点を超える石器が環状分布したB地点から30mほど東側に離れた丘陵斜面に分布、これより20mほど離れて21~23-25地点の石器が分布したことになる。

石器は剥片1(第313図3)が出土している。背面に風化剝離面を有する小形剥片で、形態的には砕片に近い。周辺域に剝離地点が存在している性格の資料だが、単独出土であり性格づけられない。黒色の

縞状構造の発達した黒曜石。

〈第21地点〉

石器群は丘陵性台地の東側斜面に分布した。石器群が環状分布したB地点とは50mほど離れており、傾斜の急な斜面に立地している。石器は8点(礫・礫片3点を含む)が出土、ブロックを1ヶ所(18号ブロック)で確認した。石器の出土層位はX I層~X II層だが、他の地点に比べ予想以上に高低差なく出

第37表 ブロック別石材構成1 (IV-1~20地点)

	黒安	黒頁	砂頁	黒曜石	赤碧玉	ナート	珪頁	珪変	ホルン	砂岩	粗安	石閃	雲石片	角閃石	合計
第1地点	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第2地点	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
第3地点	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	3
第4地点	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第5地点 (1号ブロック)	7	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	8
(2号ブロック)	16	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	19
ブロック外	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	5
合計	26	0	0	0	0	1	2	0	0	1	1	0	1	0	32
第6地点 (3号ブロック)	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
第7地点 (4号ブロック)	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
(5号ブロック)	4	9	0	0	0	0	5	0	0	0	1	0	0	0	19
(6号ブロック)	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
ブロック外	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
合計	8	11	0	0	0	0	5	0	0	0	3	0	0	0	27
第8地点 (7号ブロック)	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4
ブロック外	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	5
第9地点 (8号ブロック)	2	4	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	9
(9号ブロック)	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
(10号ブロック)	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
ブロック外	9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	11
不明	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	33	5	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0	0	42
第10地点 (11号ブロック)	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
(12号ブロック)	2	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
(13号ブロック)	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
ブロック外	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	4
不明	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	3	9	1	0	0	1	0	0	1	0	2	0	0	0	17
第11地点 (14号ブロック)	12	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	13
(15号ブロック)	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
(16号ブロック)	2	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6
不明	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	24	3	0	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	31
第12地点	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
第13地点	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第14地点 (17号ブロック)	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
第15地点	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第16地点	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第17地点	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第18地点	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第19地点	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
第20地点	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

土している。石器石材は黒色安山岩（4点）が主体を占める。出土した2点の礫は200g前後を測る破損礫（粗粒安山岩）で、打痕・赤化等の特徴が見られないため断定的に性格づけられないものだが、ブロックの北側には比較的明瞭に炭化物（第337図を参照、炭化物は青いドットで示した）が分布した点を留意しておきたい。

出土した石器は石核1（第313図6）、剥片1（同図5）、砕片3、礫2、礫片1と少量である。剥片が黒色頁岩製であるのに対して、砕片類が黒色安山岩製であることを見れば、黒色安山岩を用いた少量の剥片生産を行ったということが理解されよう。第313図4は、平坦な剥離面打面から剥離した砕片。剥片端部には石核底面を取り込んでおり、厚さ1cm程度の板状石核から剥離したものと考えている。黒色安山岩。5は、小形・縦長剥片。調査時に打面部分を欠き頭部破片でもあるため断言は困難だが、残存状況から見る限り、打面幅の狭い小形石刃と理解している。ブロック外の出土。黒色頁岩。6は、底面に礫面を有した小形石核。石核正面で小形剥片を剥離している。黒色安山岩。

〈第22地点〉

石器群は丘陵性台地の東側斜面に分布した。北側には20mほど離れて第21地点の石器群が、また、南側には同じく20mほど離れて第25地点の石器群が分布している。石器は24点（礫1点を含む）が出土、石器ブロックを1ヶ所（19号ブロック、第338図を参照）で確認している。石器の出土層位はXⅠ層～XⅡ層だが、XⅡ層に最も多く出土した。石器石材は黒色安山岩が22点（91.6%）と圧倒的多数を占めている。

石器ブロックは、長径8.6m・短径4.8mの範囲に広がり、散漫な分布状態を示していた。接合資料4例12点を確認している。

出土した石器は加工痕ある剥片1、石核3、剥片18、砕片1、礫片1で、剥片類が圧倒的に多い。第313図7～9には出土した主な剥片を図示した。7

は、やや幅広い縦長剥片。左側縁の刃部角が厚い剥片で、右側縁は微細に「刃こぼれ」している。8・9は、幅広い横長剥片。8は剥離段階で打面部分が弾け飛んでいる。7・8の剥片は、9に比べて斑晶の少ない良質な黒色安山岩を用いている。

第314図1～3には石核を図示した。1は、底面に広い平坦剥離面を持つ板状石核。剥片剥離は上面の礫面より行われ、小形の幅広い剥片を剥離している。斑晶の抜けた小穴は大きく、見た目の石材観は粗い。黒色安山岩。2は、1と同様に底面に広い平坦剥離面を有した石核。黒色安山岩を用いており、石材観も1に類似していることから同一母岩である可能性も否定できない。3は、大形剥片を石核に転用して、石核に用いたもの。剥片剥離は素材剥片の厚い打面で行われ、小形の幅広い剥片を剥離している。斑晶の少ない黒色安山岩を石核に用いている。

第327・328図には確認した4例12点の接合資料を図示した。接合資料—67（第327図）は3点からなる接合資料。剥片1の平坦打面を石核上面とする高さ4cm程度の分割礫、或は、厚い大形剥片を石核に用いて小形・幅広い剥片を剥離したもの、と理解している。黒色安山岩。接合資料—68（第328図）は横位、69（同図）は縦位、70（同図）は縦位・横位折断した剥片の接合資料。68・69は剥離段階で破損したもののかもしれない。黒色安山岩。

〈第23地点〉

石器群は丘陵性台地の東側斜面に分布した。第22地点から東側に約20m離れた地点に位置している。石器は4点が出土、石器ブロック1ヶ所（20号ブロック、第339図）を確認した。石器は4点とも黒色安山岩で、XⅠ層～XⅡ層に出土（1点のみXⅠ層）した。

石器ブロックは、長径1.7m・短径0.3mの範囲に散漫な分布状態を示し出土、接合資料1例2点を確認している。

出土した石器は、剥片2、砕片2が出土している。第314図4・5には剥片を図示した。4は、礫面を上

II 調査の成果

面に持つ碎片。剥離段階に縦位破損した可能性が高い。20号ブロック出土。黒色安山岩。5は、小形の幅広剥片。剥片端部には広い剥離面を有しており、剥片が分割礫、或は、大形剥片を石核に転用して剥離していることを示している。上半部分を欠損する。黒色安山岩。

接合資料-71(第328図)は、厚い大形剥片を石核に転用して剥離したものの。

<第24地点>

a. 概要

石器群は丘陵性台地の東側斜面に分布した。調査範囲の広いB地点から南側へ20mほど離れた地点に位置しており、周辺域の石器分布は薄い。石器は東西8m・南北4m程の範囲に広がり、46点(礫・礫片4点を含む)の石器が出土、石器ブロックを2ヶ所で確認した。

石器はXI層から2点、XII層から30点、XIII層から8点(不明6点)が出土した。黒曜石主体(80.4%、37点が出土)の石器群であり、このほかにはチャート5、角閃石2、雲母石英片岩1、粗粒安山岩1が出土している。

接合資料は1例2点を確認している。

b. 出土石器

総計46点の石器が出土した。使用痕ある剥片1点が出土した程度で、定形石器は見られない。碎片が34点(73.9%)と圧倒的多数を占めており、剥片を集中的に剥離したものと理解している。

使用痕ある剥片(第315図3)

1点が出土した。使用痕「刃こぼれ」は刃部角の厚い右側縁に見られ、刃部角の薄い左側縁にはほとんど見られない。背面側の剥離面は裏面側に比べてより擦れているようにも見える。22号ブロック出土。黒曜石。

剥片類(第315図1・2・4・5)

4点を図示した。1は、剥片端部を欠損した幅広剥片。複剥離打面の稜上を打撃して剥片を剥離して

おり、打面調整が著しいようにも見える。21号ブロック出土。黒曜石。2は、剥片上端部分を欠損した小形・縦長剥片。左側縁を調査時に欠損する。22号ブロック出土。黒曜石。4は、打面部が剥離段階に弾け飛んだ縦長剥片。左側縁側の細い剥離面を除き、背面側の剥離面は表面が擦れている。22号ブロック出土。黒曜石。5は、背面側に礫面を残した幅広の縦長剥片。4と同様、打面部を剥離段階に欠損している。左側縁は刃こぼれている。21号ブロック出土。黒曜石。

接合資料

1例2点を確認している。接合資料-78(第328図)は、2点からなる接合資料。礫面(風化角礫面)を大きく残す縦長剥片2枚が接合している。剥片1は山形に整形した剥離面打面の稜上を打撃して剥離している。22号ブロック出土。黒曜石。

c. 石器と礫の分布

46点の石器が2ヶ所の石器ブロックを形成して分布していた。ブロックは2ヶ所とも碎片の出土量が多く、組成的には石器製作地点の典型的様相を示していた。

21号ブロック(第339図)

位置 丘陵性台地の東側斜面(FJ-124・125G)

規模 長径2.7m・短径2.1m

分布状態 密集分布した。

出土層位 XI層～XIII層

出土点数 25点

器種構成 剥片3、碎片21、礫1

石材構成 黒曜石21、チャート1、粗粒安山岩1

その他 碎片の出土量が圧倒的に多く、集中的に石器を製作している。

22号ブロック(第339図)

位置 丘陵性台地の東側斜面(FJ・FK-125・126G)

規模 長径3.1m・短径2.4m

分布状態 比較的集中して分布した。

出土層位 XI層～XIII層

出土点数 16点

器種構成 使用痕ある剥片1、剥片4、碎片8、破片3

石材構成 黒曜石13、チャート2、雲母石英片岩1

その他 ブロックは破片類の集中する北西側と、使用痕ある剥片の出土した南東側に分離が可能かもしれない。接合資料1例を確認した。

d. 接合資料の分布

接合作業の結果、接合資料1例2点(接-78)を確認した。2例ともブロック内の接合(第339図)で、母岩的には21・22号ブロックとも5個体前後の母岩が推定可能で、各ブロックとも2個体前後の母岩を共有する可能性が指摘でき、石器製作の様相は単純ではない。

〈第25地点〉

a. 概要

第20～23地点の南側に分布した石器群で、丘陵性台地の東側斜面に分布した。石器群は長径15m・短径7mの範囲に広がり、比較的散漫な分布状態を呈していた。石器は73点が出土しており、概ね4ヶ所の石器ブロックを形成していた。

石器の出土層位はX層～XII層だが、XII層に多く出土している。

石器石材は黒色安山岩が最も多く、66点(90%)が出土している。その他の石材では、粗粒安山岩5、珪質頁岩1、石英閃緑岩1が出土しており、バリエーションは乏しい。

接合資料は6例20点を確認した。

b. 出土石器

礫・礫片3点を含む73点の石器が出土した。石核・剥片類主体の石器群だが、局部磨製石斧1点が出土している。

局部磨製石斧(第315図6)

第315図6は、青灰色を呈した局部磨製石斧。刃部の研磨は丁寧だが、図示したほどには研磨は明瞭で

はない。破片資料だが10cmを超える石斧と推定されよう。珪質頁岩を用いたものだが、やや粗い印象を与える石材。見た目には、細粒凝灰岩に近い石材観を呈しており、石斧には適した石材と考えている。25号ブロック出土。

剥片(第316・317図1～5)

43点が出土している。小形・幅広剥片が主体を占めているようだが、ここでは比較的形が良好な剥片を選択的に図示した。

第316図1は、縦位破損した大形剥片。背面側に広い平坦剝離面を残していることから、原石を分割してえた石核から剝離した初期剥片と捉えている。23号ブロック出土。黒色安山岩。2は、先端の尖る小形・縦長剥片。背面に残る剝離面構成は90°打面転移を行い、剝離が進んだことを示している。23号ブロック出土。黒色安山岩。3～7は、大形の横長剥片。3は厚い板状石核から剝離したもの、4は剝離の衝撃で打面部が弾け飛んだもの、同じく5も剝離の衝撃で縦位破損したもの、6・7は剥片端部を部分破損したもの。以上5点は総て黒色安山岩を用いている。3はブロック外。4は25号ブロック、5・7は23号ブロック、6は26号ブロック出土。8は、剥片端部に広い平坦剝離面を有する小形剥片。背面に残る剝離面構成の在り方からみて上面の平坦打面から小形剥片を連続剝離している状況が見て取れる。25号ブロック出土。黒色安山岩。

第317図1・3・5は、小形・幅広剥片。剥片に残る剝離面構成からみて、剝離は頻繁な打面転移を繰り返した可能性が高い。1・5は26号ブロック、3は25号ブロック出土。3点とも黒色安山岩を用いる。2・4は、やや大形の幅広剥片。打面転移を繰り返す剝離の在り方は、剥片1・5と基本的には変わらない。2は24号、4は26号ブロック出土。黒色安山岩。

石核(第317図6～8)

第317図6～8は、厚い大形剥片を石核に用いて小形剥片を剝離したもの。6は大形剥片の裏面側を、8は背面側を、7は大形剥片の小口部分で剥片を剝

II 調査の成果

離している。6・7は25号、8は26号ブロック出土。黑色安山岩。

敲石？(第318図1・2)

2点(うち、1点は接合資料)が出土している。第318図1は、棒状礫を用いた敲石。上端の小口部分に弱い打痕が存在する程度で、礫重量も(1492gを測る)重過ぎる。この敲石は23号ブロックと25号ブロックに出土した2点の礫が接合(接-77)したもののだが、「熱割れ」した可能性が高く、検討の余地を残している。粗粒安山岩。2は、表裏両面とも石器下端に僅か礫面を残す以外、礫面が剥がれ落ちており、打痕等の有無を確認できない。敲石と捉えるには礫重量(1412gを測る)が重過ぎるため、分類は難しい。26号ブロック出土。石英閃緑岩。

接合資料

接合作業の結果、接合資料6例20点を確認した。剥片数枚が接合する程度で、剥離の部分的様相を呈していた。

接合資料-72(第328図)は、剥片2点が接合したものの。分割礫を石核に用い、剥片剥離したもののだが、剥離以前の打撃痕を随所に残しており、剥離の具体的様相については不明な点を残している。黑色安山岩。接合資料-76(第328図)は、縦位折断した剥片が接合したものの。背面に残る剥離面構成は90°打面転移を行う剥離実態を示している。黑色安山岩。

接合資料-73(第329図)は、石核1、剥片3が接合したものの。接合資料は、基本的には大形剥片2枚の接合例で、より大形の剥片を石核3に転用、小形剥片2を剥離したもの、と捉えることができよう。黑色安山岩。接合資料-66(第329図・330)は、6点からなる接合資料。剥片剥離は、まず正面左側で先端の尖る小形剥片1を剥離した後、打面を上面の平坦剥離面に移動して剥片2を剥離する。この後、少なくとも剥片2枚を打面転移して大形剥片を剥離、石核消費したのち、剥片3を剥離している。剥片4以下の剥離は打面を固定した上で、打点を左右に大きく振り小形剥片を連続剥離する、と理解している。黑色安山岩。

接合資料-75(第330図)は、剥片が2点接合したものの。原石を分割して得た大形剥片を石核に用い小形剥片を剥離している。石核消費の初期状態を示している。黑色安山岩。

c. 石器と礫の分布

73点の石器が4ヶ所のブロックを形成して分布した。各ブロックの石器分布は、概して散漫な状態を呈していた。

23号ブロック(第340図)

位置 丘陵性台地の東側斜面(FW-125G)

規模 長径3.5m・短径1.3m

分布状態 散漫に分布した。

出土層位 X II層

出土点数 11点

器種構成 敲石1、石核1、剥片7、礫2

石材構成 黑色安山岩8、粗粒安山岩3

その他 接合資料2例を確認した。

24号ブロック(第340図)

位置 丘陵性台地の東側斜面(FX-FY-124G)

規模 長径5.3m・短径1.8m

分布状態 散漫に分布した。

出土層位 X I層~X II層

出土点数 16点

器種構成 剥片9、砕片7

石材構成 黑色安山岩16

その他 接合資料2例を確認した。

25号ブロック(第340図)

位置 丘陵性台地の東側斜面(FX-122・123・124G)

規模 長径8.2m・短径2.5m

分布状態 散漫に分布した。

出土層位 X I層~X II層

出土点数 15点

器種構成 局部磨製石斧1、敲石1、石核2、剥片7、砕片4

石材構成 黑色安山岩13、珪質頁岩1、粗粒安山岩1

その他 接合資料2例を確認した。

26号ブロック (第340図)

位置 丘陵性台地の東側斜面 (GA-121・122 G)

規模 長径5.2m・短径3.0m

分布状態 散漫に分布した。

出土層位 X層～XII層

出土点数 23点

器種構成 敲石1、石核1、剥片17、碎片3、礫片1

石材構成 黒色安山岩21、粗粒安山岩1、石英閃緑岩1

その他 接合資料1例を確認した。

d. 接合資料の分布

接合作業の結果、接合資料6例を確認した。第318図1に図示した敲石(接-77、第340図を参照)の接合例を除いた5例が剥片類の接合資料で、内訳は1例がブロック内の、3例がブロック間の、1例が地点間の接合資料(接-73、第22地点出土の石器と接合)であった。ブロック間で接合関係を有すること、各ブロックとも複数の母岩が確実に存在すること、この地点から出土した母岩は5個体前後からなることなどが指摘できそうだが、出土量が少ないことからみて部分的に母岩消費したのではないかと考えている。

<第26地点>

丘陵の東側斜面に位置(付図1)する。73点の石器が出土した第25地点には、30mほど南に離れている。

石器はナイフ形石器1点(第318図3)が出土した。先端部を欠損した基部加工のナイフで、良質な黒曜石を用いている。

<第27地点>

丘陵東側斜面に位置(付図1)する。付近には南東側に約20m離れて黒曜石製剥片類が多量に出土し

た第29地点が位置する。

石器は剥片1、碎片4が出土しており、剥片1点を除いて攪乱土中の出土である。石器石材は剥片1、剥片1が黒色頁岩、残る3点の剥片はチャートを用いている。

<第28地点>

丘陵東側斜面に位置(第344図)する。出土した石器は剥片1、礫片2で、剥片1点が単独出土したと理解してよい。

石器は剥片端部を欠損した縦長剥片(第318図4)で、比較的良好な形状の剥片である。台形状の断面形状を呈している。黒色安山岩。

<第29地点>

a. 概要

調査区南側に近い丘陵東側斜面に位置している。石器群は径8m程の範囲に広がり、203点の石器が出土した。石器ブロックは2ヶ所で確認している。出土した石器は、石刃の集中剥離を示唆する特徴的な黒曜石製石器群である。大部分がX1層・XII層から出土したようだが、IX層にも16点が出土している。現在この16点の石器については、下層から混入した剥片と理解している。調査所見ではこの地点のX層は見られないということになっているようだが、攪拌して確認できないというのが実情だろう。

石器石材は黒曜石が圧倒的に多く199点が出土、チャート2、や黒色安山岩、黒色頁岩各1等の在地石材は極めて出土量が少ない。

接合資料については、9例77点を確認している。

b. 出土石器

ここでは、加工痕ある剥片2点、縦長剥片を含む剥片類14点を図示した。

加工痕ある剥片(第319図1・2)

2点を図示した。第319図1は、打面部、及び、基部側の左側縁を加工したもの。調整加工は背面側から施され、刃潰し加工に近い。剥片端部を欠いてい

II 調査の成果

るため不明だが、残存している剥片端部には「刃こぼれ」が生じている。小形・幅広剥片を用いる。台形椽石器に類する石器かもしれない。27号ブロック出土。黒曜石。2は、小形剥片の左側縁を加工したものの。調整加工は左側縁を切断するよう粗く剥離したのち、この剥離面を打撃して背面側に浅い剥離を加えている。右側縁・中央下半を欠いている。27号ブロック出土。黒曜石。

剥片類 (第319図3～13、第320図1～3)

14点を図示した。第319図3・4は、両側縁が並行した縦長剥片。2点とも広い平坦剥離面を打撃して剥片剥離している。3の打角は、より鈍角である。7・12は、便宜的に分類したもののだが、4に似た剥片形状を呈した可能性が高い。7は著しい打面調整を施す点で、12は点状打面を有する点で異なる。4点とも27号ブロックの出土。黒曜石。5・6は、剥離段階に打面が弾け飛んだ縦長の剥片。5は背面側に風化面を大きく残す剥離の初期剥片。28号ブロック出土。黒曜石。6の側縁には微細な使用痕が生じている。27号ブロック出土。黒曜石。8・10・11・13は、やや幅広の小形剥片。10・13は著しい打面調整を施しているのに対して、8・11の2点には打点幅も狭く、打面調整は見られない。10・11・13は27号ブロック出土。8はブロック外の出土。4点とも黒曜石を用いている。9は、幅広の小形剥片。比較的形状の良好な剥片だが、剥離が下まで抜けず縦長剥片の剥離に失敗したものと理解している。黒色頁岩。ブロック外。

第320図1・3は、幅広剥片。1は剥離が内側に入り込み過ぎたもの。3は剥離段階に縦位破損したものの。27号ブロック出土。黒曜石。2は、上下両端を破損したものの。比較的良好的な剥片形状を呈する。28号ブロック出土。黒曜石。

接合資料

接合資料は9例20点を確認した。この地点からえられた接合資料は、石刃剥離を示す典型例(接一79)の他、石刃石核の最終消費状況を示す接合例(接一80・84)が見られ、石核消費の段階に応じた剥離

実態を示す接合資料を確認した。

接合資料一80 (第330図)

8点からなる接合資料。小剥片1～4を石核正面で連続剥離したのち、打面転移して5を剥離、再び、打面を戻して幅広剥片を剥離している。剥離初期の小剥片は石核調整に伴う剥離とは異なるようだが、最終的判別は保留しておきたい。黒曜石。

1→○○→2→3→4⇒5⇒6→○○…7

接合資料一84 (第330図)

2点からなる接合資料。接合資料・正面の剥離面構成からみて、石刃剥離に伴い副次的に生じた石塊を用い剥離を試みたものである。剥片1の剥離に際して、顕著な打面調整を施している。黒曜石。

接合資料一79 (第331・332図)

38点からなる接合資料。現状で、高さ9.2cm、幅4.4cm、厚さ5.0cmを測る角礫を原石に用いたもの。ほとんど種の摩耗が見られないことから、原石は露頭からそれほど離れた地点で採集したものではない、と理解している。最初期の石刃剥離は、打面調整(石核・上面)を行い角礫の稜上を狙い加撃して石刃を5枚ほど剥離したようだが、最後に剥離した石刃がヒンジ状に剥離、この状況を解消するため剥片1を剥離して打面再生を試みている。剥片2・3の剥離は下まで届かず石刃剥離を失敗している。2・3に続いて剥離した小形剥片4～6も石刃とはいい難い剥片で、結果的に石核の側面調整に類する役割を果たした。同じく、打面転移して剥離した剥片7も突出した石核の作業面を修正するものだが、側面調整に先行した可能性も否定できない。剥片7はバルブが発達した分だけ作業面調整に失敗した剥離だが、再び打面転移して剥片8、剥片9～11は連続剥離している。11を剥離したのち、すくなくとも3度に及ぶ打面調整(剥片13・14)を繰り返している。剥片16～18の剥離に先立ち、剥片15を剥離して石核を調整している。以下、打面再生を繰り返して16～18、20・21を剥離している。21を剥離したのち、打面再生を2回ほど行い、再び小石刃(22～25)の剥離を試みている。剥片26以後の剥離では途中で打面再生を挟んで、

小形剥片を連続剥離、小形剥片の剥離にシフトしたようである。黒曜石。

○(打面調整)

⇒○…………○

⇒1(打面再生)

⇒2→3→4→5→6

⇒7(作業面調整、石核正面)

⇒○(打面再生)

⇒8→9→10→11→12

⇒○→13(打面再生)

⇒14(打面再生)

⇒○…○

⇒15(側面調整)

⇒16→17→18

⇒?(打面再生)

⇒19

⇒○(打面再生)

⇒20→21→22

⇒○○(打面再生)

⇒23→24→25

⇒26→27→28

⇒○○(打面再生)

⇒30→31→32→33→34→35・36・37→38

接合資料—83(第333図)

2点からなる接合資料。2点とも頭部調整を施し、幅広剥片を連続剥離する。打面幅は狭い。黒曜石。

接合資料—81(第333図)

3点からなる接合資料。打面調整を繰り返し連続剥離している。大形の破皿を含み、この部分で剥片は破損している。黒曜石。

接合資料—82(第333図)

4点からなる接合資料。大形剥片を剥離したのち、打面調整を行い砕片1を剥離、再び、打面調整を行い剥片類2～4を連続剥離する。剥片4は切断され、中央付近の折断剥片は「刃こぼれ」している。黒曜石。

1⇒○○⇒2・3→4

c. 石器と礫の分布

203点の石器が2ヶ所の石器ブロックを形成して分布した。石器は良く集中分布していた。

27号ブロック(第341図)

位置 調査区南側に近い丘陵南側斜面(FB・FC—114・115G)

規模 長径4.9m・短径4.2m

分布状態 集中分布する。

出土層位 IX層、X・X I層、X II層

出土点数 169点

器種構成 加工痕ある剥片3、石核2、剥片49、砕片115

石材構成 黒曜石167、チャート1、黒色安山岩1

その他 接合資料9例77点を確認した。

28号ブロック(第341図)

位置 調査区南側に近い丘陵南側斜面(FA・FB—114・115G)

規模 長径5.1m・短径2.1m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX層、X・X I層、X II層

出土点数 15点

器種構成 石核1、剥片7、砕片7

石材構成 黒曜石14、チャート1

その他 接合資料3例(3例とも隣接する27号ブロックと接合関係を有する)を確認した。

d. 接合資料の分布

接合作業の結果、接合資料9例77点を確認した。平均接合点数は8.5点だが、37点が接合した接—79を除けば、平均接合点数は4.1点と半減する。ブロック間の接合資料は3例と少なく、接合資料は少量出土した28号ブロックの剥片が27号ブロックの剥片に接合する傾向を示していた。

器種別に見た28号ブロック出土の接合資料は石核、小形石刃、砕片と多様だが、ブロックの北半に石核(接—80、第330図7)や小形石刃(接—79、2・11・12の剥片)が、南側に砕片類(接—79、32・34・37)が分布する傾向が指摘され、北側に石核、石刃